

富士吉田市史資料叢書14

池之元遺跡発掘調査研究報告書

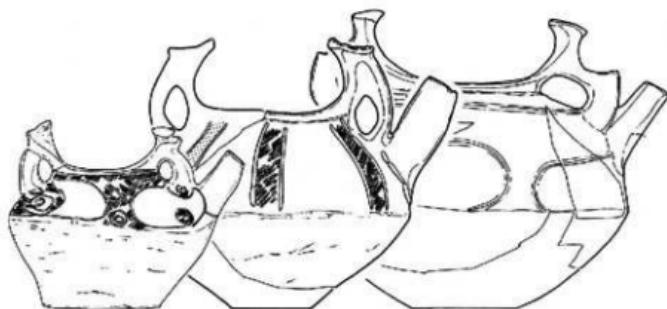
1997. 3

富士吉田市史編さん室

富士吉田市

池之元遺跡発掘調査研究報告書

—富士山北東麓地域における
縄文時代後期集落の研究—



1997. 3

富士吉田市史編さん室

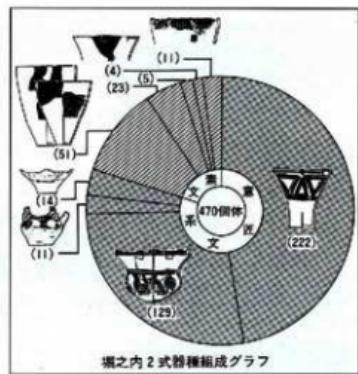


1 池之元遺跡出土の壙之内 2式土器



2 土器のサイズと形態の多様性

解説：縄文時代後期前葉以降、各地の土器は形態や装飾が多様化する。壙之内 2式土器は、それ以前の型式に比べて、注口土器や浅杯などの器種が増加する。また、深鉢の中には素文の深鉢が増加し、いわゆる「粗製土器」の成立につながる。注口土器以外の大半の器種には、煮沸痕が認められ、後期以降の土器群における器種の多様化は、煮沸の方法や加工対象物の複雑化・多工程化を示唆する現象として考えることができる。





1 第1号住居址検出状況

厚く堆積した火山性堆積物の下からは、良好な遺存状況の住居址が発見された。また住居の周囲には、環状の周堤礎が巡らされていた。



2 第1号住居址の復元模型（富士吉田市歴史民俗博物館）

周堤礎や住居内部の有段施設が復元された住居模型（側面より）

発刊にあたって

このたび、富士吉田市史編さん事業の一環としまして「池之元遺跡発掘調査研究報告書」が刊行の運びとなりました。

当市史編さん室では、昭和54年に「行政編」上下2巻を刊行いたしましたが、「史料編」「通史編」の刊行をめざし、「資料所在目録」「民俗調査報告書」「市史研究」等を刊行しております。

池之元遺跡は、昭和55年に行われました遺跡分布調査の結果、所在が明らかにされた遺跡の一つであり、市内では、古屋敷遺跡と並び歴史的に価値ある内容を持つ遺跡であることが予測されました。この遺跡の実態を把握し、また現在編さん事業が進んでいる富士吉田市史『自然・原始・古代・中世』の史料編の基礎資料とするため、昭和61・62年に発掘調査を実施し、その詳細をここに報告することができました。

本調査の团长をお願いした明治大学学長戸沢充則氏はじめ、明治大学の学生諸兄には懇身的なご努力をいただき、また、土地所有者等のご協力により十分な成果を上げることができましたことを、衷心より感謝申し上げます。

本書が、市民の皆様・関係者に広く活用されることを願っております。今後とも、市史編さん事業につきましてはご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成9年3月

富士吉田市長 東原雅智

例　　言

- 1 本書は山梨県富士吉田市旭四丁目に所在する池之元遺跡の発掘調査研究報告書である。
- 2 調査は富士吉田市史編纂事業の一環として池之元遺跡調査団が1986年8月19日～9月6日と1987年8月17日～9月12日の2ヶ年に亘り調査を実施した。
- 3 本書の編集は阿部芳郎がおこない、全体を戸沢光期が監修した。調査地点6・7・8区の成果を中心にまとめたものである。
- 4 執筆は調査団の討議を経て決定し、第Ⅰ章～第Ⅲ章は文末に、第Ⅳ章は文頭に執筆者名を明記した。また資料の整理から分析にいたるまでの作業には、明治大学大学院生および考古学専攻生の協力を得た。
- 5 本報告書の作成に関しては下記の諸氏、諸機関より多くの助言や指導を受けた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

黒沢 浩、佐藤 啓、白石 真理、鈴木 稔、中村 哲也、矢島 國雄、
山梨文化財研究所、明治大学考古学研究室

- 6 池之元遺跡の調査団の組織および参加者は以下の通りである。

調査団長 戸沢 光期(明治大学教授 富士吉田市史編纂専門委員)

調査担当者 末木 健(山梨県埋蔵文化財センター 当時、富士吉田市史編纂専門委員)

堀内 真(富士吉田市教育委員会)

調査主任 阿部 芳郎(明治大学大学院 当時、現 明治大学講師)

石川恵美子(明治大学大学院 当時)

調査員 小林 安典(都留市文化財審議委員)、宮沢 公雄(山梨文化財研究所)

小川 直裕、荻 幸二、恩田 勇、小林 努、川村 勝、佃 京子、

中山 紫野(以上 明治大学考古学専攻生 当時)

宇野 純子(奈良大学)、小保 昌万(東海大学)、鈴木 憲(日本大学)、柏木謙之助

整理調査員 鶴田 典昭、西沢 明

小口 達志、古坂健一郎、加藤 裕治、須賀 博子、田中 総、田中貴美子、

布施 光敏、前川 容子、横田 和美、田島 慎治、中村幸太郎、米 賢一

(以上 明治大学考古学専攻生 当時)

池之元遺跡調査研究報告書 目次

口 絵

発刊にあたって

富士吉田市長 栗原 雅智

例 言

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境	1
第1節 遺跡の景観と立地	1
第2節 富士吉田の郷土史と遺跡の発見	3
第Ⅱ章 調査の概要	5
第1節 発掘調査の経過と梗概	5
第2節 調査分析計画と成果の活用	7
第Ⅲ章 調査の成果と記録	11
第1節 繩文時代中・後期の遺構と遺物	11
第2節 古墳時代の遺構と遺物	93
第3節 平安時代の遺構と遺物	97
第Ⅳ章 調査成果の分析研究	107
第1節 富士吉田市池之元遺跡のテフラ	107
第2節 堀之内2式の器種構成と組成率	110
第3節 土器製作技術からみた堀之内2式土器の特性	126
第4節 土器底面と割代圧痕に関する基礎的な観察と編み方の地域性	141
第5節 池之元遺跡の堀之内2式土器の胎土分析	154
第6節 池之元遺跡第1号住居址の施設構造	169
総 括	186
卷末写真図版	189

図 版 目 次 (第 I ~ III 章)

第1図 池之元遺跡周辺地形図	2	第38図 第3号住居址出土遺物(10)	58
第2図 池之元遺跡出土遺物	3	第39図 第3号住居址出土遺物(11)	59
第3図 7区付近出土の石棒	4	第40図 第3号住居址出土遺物(12)	60
第4図 調査地点位置図	5	第41図 磁帶出土遺物(1)	61
第5図 池之元遺跡出土遺物の展示状況	9	第42図 第3号住居址出土遺物(13)	62
第6図 池之元遺跡第1号住居址の復元経過	10	第43図 第3号住居址出土遺物(14)	63
第7図 6区遺物出土状態と付帯遺物	11	第44図 第3号住居址上層遺物出土状況	65
第8図 6区土層堆積図	12	第45図 第3号住居址覆土中配石窓出土遺物(1)	65
第9図 7区土層堆積図	13	第46図 第3号住居址覆土中埋蔵検出状況	67
第10図 7区遺構配置図	15	第47図 第3号住居址覆土中埋蔵	68
第11図 第1号住居址実測図	17	第48図 配石遺構出土遺物(1)	69
第12図 第1号住居址B号炉址実測図	18	第49図 8区出土遺物(1)	71
第13図 第1号住居址出土遺物(1)	21	第50図 8区出土遺物(2)	72
第14図 第1号住居址出土遺物(2)	23	第51図 7区遺構外出土遺物(1)	74
第15図 第1号住居址出土遺物(3)	25	第52図 7区遺構外出土遺物(2)	76
第16図 第1号住居址出土遺物(4)	26	第53図 7区遺構外出土遺物(3)	77
第17図 第1号住居址出土遺物(5)	27	第54図 7区遺構外出土遺物(4)	78
第18図 第1号住居址出土遺物(6)	29	第55図 7区遺構外出土遺物(5)	79
第19図 第1号住居址出土遺物(7)	30	第56図 7区遺構外出土遺物(6)	80
第20図 第1号住居址出土遺物(8)	31	第57図 7区遺構外出土遺物(7)	81
第21図 第1号住居址出土遺物(9)	32	第58図 7区遺構外出土遺物(8)	83
第22図 第1号住居址出土遺物(10)	33	第59図 7区遺構外出土遺物(9)	84
第23図 第1号住居址出土遺物(11)	34	第60図 7区遺構外出土遺物(10)	86
第24図 第1号住居址出土遺物(12)	37	第61図 7区遺構外出土遺物(11)	87
第25図 第1号住居址出土遺物(13)	38	第62図 7区遺構外出土遺物(12)	89
第26図 第1号住居址出土遺物(14)	40	第63図 7区遺構外出土遺物(13)	90
第27図 第1号住居址出土遺物(15)	41	第64図 7区遺構外出土遺物(14)	91
第28図 第3号住居址実測図	44	第65図 7区遺構外出土遺物(15)	92
第29図 第3号住居址出土遺物(1)	45	第66図 第4号住居址実測図	95
第30図 第3号住居址出土遺物(2)	46	第67図 第4号住居址出土遺物(1)	96
第31図 第3号住居址出土遺物(3)	48	第68図 第2号住居址実測図	98
第32図 第3号住居址出土遺物(4)	50	第69図 第2号住居址出土遺物(1)	99
第33図 第3号住居址出土遺物(5)	51	第70図 第5号住居址実測図	102
第34図 第3号住居址出土遺物(6)	53	第71図 第5号住居址出土遺物(1)	103
第35図 第3号住居址出土遺物(7)	54	第72図 7区出土鉄製品	103
第36図 第3号住居址出土遺物(8)	55	第73図 古墳・平安時代の遺構分布	105
第37図 第3号住居址出土遺物(9)	56	第74図 高床遺構出土遺物(1)	106

図 版 目 次 (第IV章)

第1図 富士吉田市池之元遺跡、北壁柱状図	108	第1図 器種・類型別の網代底の割合	141
第2図 池之元遺跡 火山ガラス・軽鉱物・重 鉱物組成	108	第2図 網代の編み方模式図とその組成	143
第3図 池之元遺跡 正鉱物組成	108	第3図 後期前半の主体となる網代の編み方の 分布	146
第1図 堀之内2式の意匠文系土器と素文系土 器の構成	112	第4図 池之元遺跡の網代の種類	152
第2図 池之元遺跡における堀之内2式深鉢の 構成	113	第5図 底面の整形	153
第3図 山梨県諏訪神遺跡出土土器	114	第1図 胎土分析試料	155
第4図 長野県林川遺跡4号住居出土土器	115	第2図 池之元遺跡出土土器の岩石鉱物組成	157
第5図 関東地方東部における「縦線文系土器」 の生成過程	117	第3図 岩石組成折れ線グラフ	159
第6図 池之元遺跡出土の堀之内2式土器の器 種割成率	119	第4図 各遺跡出土土器との比較	161
第1図 壁口縁の形状	127	第5図 富士山北東麓河川砂と土器との比較	162
第2図 粘土組の積み上げと器面調整工程の順 位	128	第6図 甲府盆地河川砂と土器の比較	163
第3図 網代圧痕を持つ底部の破損状態	128	第1図 池之元遺跡第1号住居実測図	170
第4図 池之元遺跡の堀之内2式土器の器面調 整痕	129	第2図 入口部付近における積石の倒壊状態	171
第5図 池之元遺跡出土堀之内2式土器の断面 色調構造	130	第3図 遺物の出土状況と各施設の検出状況	172
第6図 堀之内2式土器の断面色調構造模式図	131	第4図 柱材と板材の検出状況	173
第7図 堀之内2式の器種組成と断面色調構造	134	第5図 調査区北壁における周堤部分セクショ ン	175
第8図 後期土器の意匠文系深鉢の底部形態変 遷	136	第6図 有段施設の構造模式	176
		第7図 後期前半における有段施設の諸例	177
		第8図 柱穴配置と有段部構造の諸類型	179
		第9図 静岡県修善寺大塚遺跡第9号住居	180
		第10図 池之元遺跡の「住居址」における石材利 用の施設と性格	181

写真図版目次

写真 1 池之元遺跡遠景	1	写真 7 第1号住居址床面における石器出土状況	39
写真 2 7区調査風景	6	写真 8 第1号住居址敷石上面の加工痕	42
写真 3 織文時代の文化層における遺物の検出状況	16	写真 9 第3号住居址完掘状況	43
写真 4 第1号住居址奥壁付近における注口土器の検出状況	19	写真10 第3号住居址周提縁検出状況	47
写真 5 第1号住居址貼床下に発見された炉址の検出状況	22	写真11 第3号住居址内覆土中配石検出状況	64
写真 6 第1号住居址内の凹地に堆積した大室スコリア層	28	写真12 第1号配石遺物出土状況	66
		写真13 古墳時代・平安時代住居址の完掘状況	93
		写真14 第2号住居址調査状況	97
		写真15 第2号住居址出土遺物	100
		写真16 第5号住居址・溝状遺構出土遺物	104

表 目 次 (第I~III章)

第1表 第1号住居址出土土製品計測表	35	第3表 7区遺構外出土土製品計測表	89
第2表 第3号住居址出土土製品計測表	60		

表 目 次 (第IV章)

第1表 計数試物	108	第1表 脂土分析試料表	154
第1表 網代の編み方と原体の幅	145	第2表 池之元遺跡出土土器の岩石試物	156
第2表 土器の器種・類型と網代原体の幅	145		

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の景観と立地

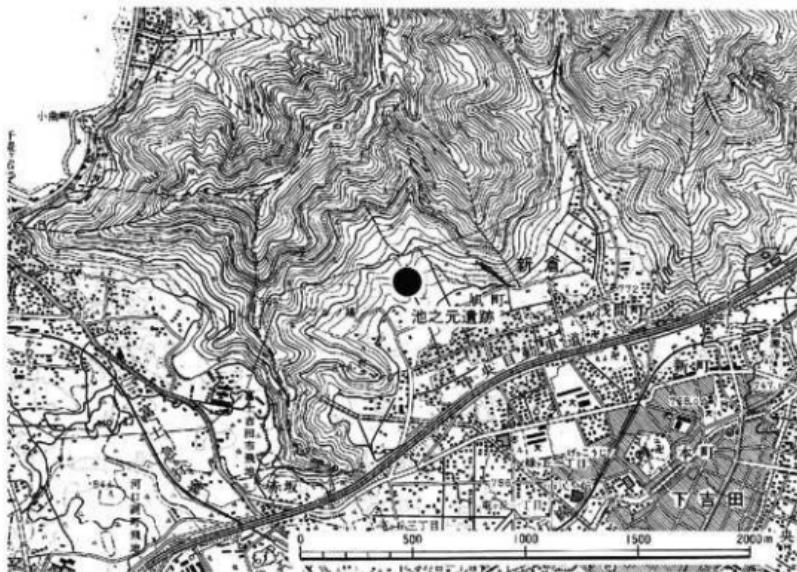
市域の遺跡の分布状況をみていくと、縄文時代から平安時代までの遺跡は、御坂・道志両山地の山麓部に集中的に立地する傾向がみうけられる。御坂山地の拠点的な遺跡には、池之元遺跡をはじめとして、干草場遺跡、日影遺跡等があげられ、いっぽう道志山地の遺跡には、古屋敷遺跡、長日向遺跡などが同様にあげられる。

池之元遺跡は、御坂山地の霜山からその東麓に派生する尾根先端部の南麓緩斜面に立地し、その南側に広がる水田面にまで及ぶものと考えられる。現状は背後の御坂山地を開削した板木沢から押出してきた土砂が堆積して形成されたきわめて小規模な扇状地状の地形を呈している。遺跡地を詳細にながめてみると、板木沢をはさんで尾根の先端からのびる舌状台地が平行して存在し、その両方の台地上から板木沢の形成した小扇状地に及ぶ範囲が遺跡の主体部と考えられる。西側の台地上には、通称「小溝の水」と呼ばれる湧水があり、台地下には字名のもとになった湿沼の痕跡が残



写真1 池之元遺跡遠景（北方丘陵上より遺跡を見下ろす）

遺跡は南方に向かい張り出す舌状の高地部の先端から、現状では水田となっている低地部にまで続く。高地部を刻む西側の小谷谷には湧水が存在する。



第1図 池之元遺跡周辺地形図

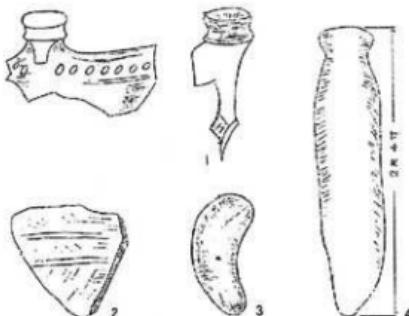
り、その周辺にはアシの繁茂がみられる。小溝の水は飲用とされてきたものであるが、湿沼の水はきわめて鉄分の多い水であって飲用には適さない。遺跡周辺の現状はかつての水田面がだいに宅地化されつつある。台地上は雑壇状に造成され、畑地・水田として耕作されている。

さて、富士山から噴出した熔岩や火砕流が桂川の谷を流下すると、各支流は出口を塞がれてしまう。そこで出口一帯には一時的に湖沼ができる。御坂山地の裾合では縄文時代草創期後半に桂熔岩が入山川の谷を堰き止めて流下し、都留市十日市場まで達したとされる。とすると、この池之元遺跡の前面には堰止めによる湖沼が広がっていたと考えられる。本遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡群はこれらの汀線近くに存在したものと推定され、池之元の沼澤にみられるように、おそらく水際には一面にアシが繁茂し、当時の縄文人たちはこうした環境に適応した生活を営んだものと推測される。この湖沼はやがて干上り、そこに軟弱な湖沼堆積物を残した。古墳時代五領期、平安時代の集落址も断続的に営まれることから、水田耕作等、古代の人々には住みやすい場所であったと考えられる。剣丸尾熔岩下の西丸尾遺跡の占地する場所は、この湖水の汀線に沿う場所と目される。湖は剣丸尾の流下によって埋没したと考えられる。

(堀内)

第2節 富士吉田の郷土史と遺跡の発見

富士吉田市域の遺跡が考古学的な研究の対象となったのは近代になってからのことである。それらを調査し、記述したもっとも古いものは、「富士文庫・第1卷」にのせられた吉田文俊の手になる「富士山及び其裾野に於ける有史以前日本人遺跡」である。吉田は明治41年以降、富士山周辺を実地踏査している。同書はまず富士山の生成や地質について述べ、つぎに行政区画・地域を区分して、



第2図 池之元遺跡出土遺物

時代別に遺跡地名とそこから出土する遺物について記述している。縄文時代遺跡は、「石器時代・アイヌ先住民」の遺跡とし、当市域にかかる部分についてつぎのように記述している。

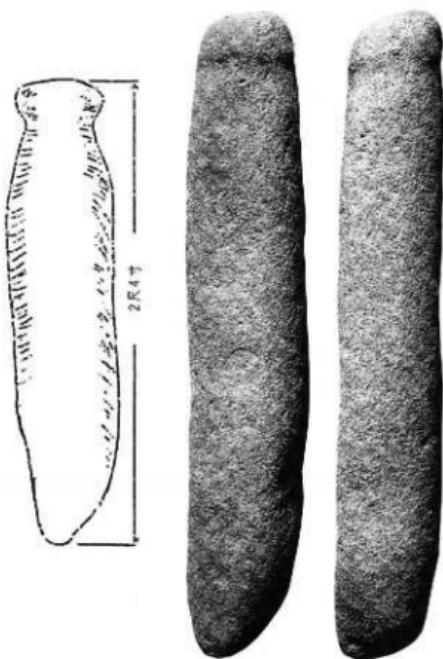
(江) 瑞穂村下吉田、月光寺畔の後山、瑞穂村大字新倉、字古屋、黒木澤、同村古屋の御船山付近、同村新倉字古屋如来寺門前、同村字新倉字大様(池ノ本)同村字新倉、日草場、大牛窪同村字古屋山ノ神等である。

とし、大字下吉田地内の月江寺(池)畔の後山、大字新倉地内古屋の黒木沢、御舟山周辺、如来寺門前、日草場、大牛窪、山ノ神の6地点とともに大様(池之元)が遺跡として挙げられている。また、明見方面の遺跡として、

明見村小字長日向、奥の澤、明見湖中、明見村字天都峰、小明見向原、小明見字向原、字畠、大明見字柳畠、大明見字向坂、その外大明見にては同村字新畠に於ける熔岩流下の遺跡があることに注意すべきである。

とし、大明見地内の長日向、奥の澤、柳畠、向坂、熔岩流下の新畠、小明見の明見湖中、天都峰、向原、向原畠の9か所を記している。同様に弥生時代の遺跡として、大明見の古屋敷・長日向、小明見向原、下吉田石谷沢・古屋弁天堂、新倉の深久保・日草場・如来寺門前熔岩流下、新屋、上吉田堰林を挙げている。これらは厳密な意味での弥生時代遺跡ばかりではなく、多くは古墳時代以降の土器を含んだ遺跡と考えられる。いずれにしろ、本市域の遺跡について、基本的には縄文、弥生、それ以降に分けた記述がなされ、時代別の整理をした最初の報告といってよい。

これに続く市域の遺跡について述べたものに、第二次世界大戦直後の昭和22年(1947)に当時の下吉田町連合青年会が刊行した『郷土調査集成』の中に「有史以前の新倉」として、遺跡周辺の古



第3図 7区付近出土の石棒

地形と環境について記し、「有史以前の新倉想像図」、「石器土器の図」を掲げ、さらに「石棒時代」として石棒の説明とその図を掲げている。池之元遺跡については縄文土器のスケッチ図、曲玉、打製石斧、磨製石斧の図を示している。石棒については、かつて小溝の水を利用しての浴場が存在したが、その工事に伴って出土したと伝えられ、その直下に今回の第3次調査7A区の第1号住居址があることから、聞き取り等から復元すれば、本住居址の入口部に立っていたものと考えられる。これ以降、戦後の食糧増産計画にもともなって、山麓の段々畑の水田化がはかられ、その工事中にも「炉のあと」の発見があり、また土器・石器類が多量に出土した。その後、昭和56年（1981）まで本格的な発掘調査はなされなかったが、この間遺跡からの出土遺物についての報告がなされた。第II章でも後述する

が、本遺跡の2区と地点名を付して調査を実施することになる頃である。そこで確認された遺物と、かつてそこから採集されていた石器類をあわせて報告した。同地点からの出土遺物は、富士黒土層を耕作土としている頃からの採集である。土器は早期前半の撚糸文期の遺物が主体をなし、表裏縄文、斜縄文、撚糸文、押型文、無文等の遺物について報告した。

表裏縄文期の遺跡はこの池之元を含め、河口湖町ゴンゲン森遺跡、西桂町城屋敷遺跡、上野原町仲大地遺跡などがあり、とりわけ桂川上流域の地に集中して存在することが明らかになった。このことは、富士黒土層と呼ばれる富士山の微細な噴出物がゆっくりと時間をかけて降下した時期が縄文時代早期の富士山の静穏期にあたり、富士山周辺の遺跡の増加傾向に対応している。（堀内）

引 用・参 考 文 獻

吉田文俊 1926 「富士山及び其裾野に於る有史以前日本人遺跡」『富士文庫・第一卷』富士文庫

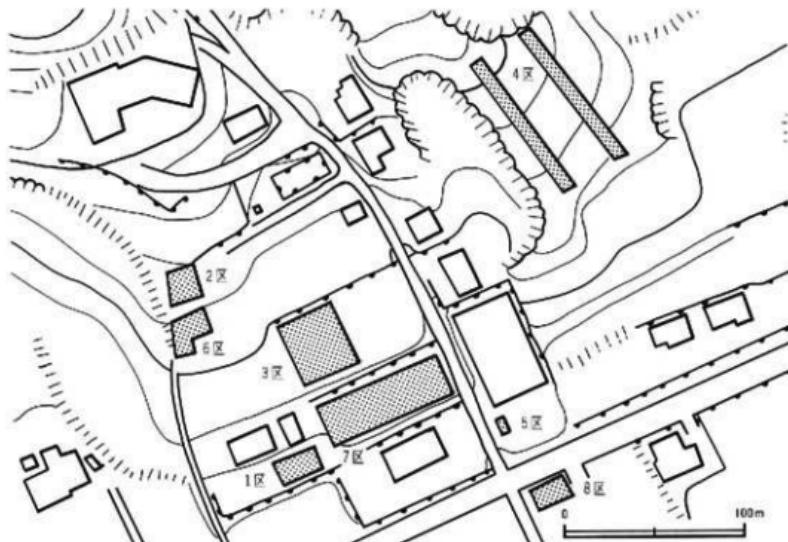
石原茂他 1947 『郷土調査集成』下吉田町連合青年会

堀内・宮下 1982 「富士山麓における表裏縄文土器・山梨・池ノ元遺跡の資料を中心として一」『信濃』34-10

第II章 調査の概要

第1節 発掘調査の経過と概要

昭和55年（1980）に字池之元地内で住宅建設がなされた。基礎工事の排土から土器や石器が出土しているとのことで、現地での確認を行った。第二次大戦後の畑地灌漑事業・水田化工事によって、すでに遺跡の主体部は削平されたものと考えられていたが、山麓緩斜面が雑壇状に造成された水田面の一部に包含層が残されていることが明らかとなった。そのため、この地点での遺構の有無と営まれた時代、およびその広がり等をおさえるために、住宅の西側と南側にトレンチを設定して小範囲の確認調査を実施した。西側トレンチでは縄文時代後期前葉塙之内期の遺物包含層が検出された。その下層は凹凸がはげしく、凹部には大粒の黒色スコリア（塙之内スコリアと仮称する）が充填していた。都留文科大学上杉陽教授のご教示によれば、この時期は地球規模の変動期にあたり、北半球では雨がはげしく大地をけずりこむ「洪水時代」であったという。そのような時期に、



第4図 調査地点位置図

大粒の黒色スコリアを降下させる新期富士山の活発な火山活動が重なっていたことが明らかとなつた。遺物としては、堀之内期が主体を占めた。南側トレントでは、堀之内期の包含層の上位に湯舟第1スコリアと大室スコリアが層位的に検出され、その大室スコリアを掘り込んで平安時代の住居址の一部が検出された。東壁には石組のカマドが設けられる。覆土中からは平安期土師器壊・甕の小片のほか、縄文時代堀之内期の遺物が多量に含まれる。そのほか、耕土からの出土遺物には、縄文中期加曾利E式期、後期加曾利B1式期に分類されるものがある。

昭和62年（1987）には、前回の遺構の発見をうけ、遺跡の時期や広がりを明らかにするために詳細分布調査を国庫補助金を得て実施した。具体的には縄文早期撫糸文期の遺構を明らかにすることと、中・後期の遺跡の主体部とその性格の把握、字板木沢地内の遺跡の有無を確認することを目的に行った。この調査では撫糸文期の遺物が表採される畑の南端部に発掘区を設定し、2区とし、市道北裏通り線から数えて三段目の畑に設けた調査区を3区とした。また、字板木沢の台地上に平行

するトレント2本を設け、4区とした。

2区では早期の住居址2軒と配石遺構1基、中世以降の建物址の角柱穴3基がそれぞれ検出された。3区では発掘区の北側部分が板木沢から押出してきた土石流によつて、縄文時代の文化層が削りとられており、該期の遺物包含層は南端部に部分的に残るのみであった。その残された部分には、平安時代の井戸址の一部と目される石組遺構の一部が検出された。付近からは「巾」の字を記した墨書き土器が出土した。4区からは、わずかに石鎌が1点出土したのみで遺構は全く認められなかった。4区の手前にある魚吉会館が、その後防火水槽を掘ったところ、そこからも縄文時代の遺物が出土した。そのため、その地点を5区とし、その遺物についても収録した。

さらに、1986・87年の2次にわたる発掘地点を6・7・8区とし、7区を中心に調査を実施した。
(堀内)



写真2 7区調査風景

厚い火山性堆積層の下に現れた後期前葉の敷石住居址

第2節 調査分析計画と成果の活用

本書は池之元遺跡の2次にわたる発掘調査の研究報告書である。調査は富士吉田市史の編纂事業によるもので、その目的は市内重要遺跡の性格の解明と現時点において、欠落している時代の史料収集とその研究にあった。調査によって得られた資料は市史編纂の史料としても今後に広く活用される予定である。しかし、発掘調査によって得られた調査所見や記録は、ある意味では個別的な歴史の断片にすぎないものであり、失われた部分の復元をも含めて、より体系的な分析を経て他地域との比較を試み、その時間的・地域的特性について検討を試みる必要があった。

発掘調査は2次にわたるもので、そのなかで調査の主体となったのは縄文時代後期の遺構と遺物であった。1次調査では第1号住居址と呼称した柄鏡形敷石住居のほぼ中心部分を確認し、2次調査ではその周囲を出来るかぎり広く調査して、この地点の性格を解明しようと考えた。その結果、ほぼ同じ時期の敷石住居址と配石遺構や埋甕などを検出し、池之元遺跡における後期前葉の集落形成に関する豊富な知見を得ることができた。こうした調査経過は、短期間での遺跡の全容の把握を困難にする一方で、調査目的の再確認と調査終了後に計画される遺構や遺物の分析手法の検討に、比較的自由な発想と時間的な余裕をわれわれに与えてくれた。

(1) 分析研究の体系と概要

発掘調査終了後の整理分析作業では、後期前葉の土器と同時期の柄鏡形敷石住居址の2つが主な分析研究の対象となった。そして分析研究として体系化を図ったのは、従来の考古学的手法に加え、たとえば土器の産地推定や使用痕跡、炭化材の樹種同定などという理化学的な分析を、それぞれの方法上の利点を組み合わせながら、全体としては個々の史料のもつ多様な側面について検討するという目的を意識したからである。

たとえばそれは土器の理化学的分析では、その目的や手法を検討するなかで、文様や形態といった型式学的な側面以外に、土器製作全般についての考古学的な検討の必要性を強く感じさせるものであったし、媒や炭化物の付着、器表面の成形や底部の製作と網代正痕の分析など、いくつかの成果をふまえて考古学的な観点から具体的な検討に及んだものもある。

以下に研究編において掲載した研究成果の概要を記し、調査と研究計画の関連性を理解する便を供したい。

(阿部)

- I 火山性堆積物の分析——
- 1) 土 壤 分 析 「富士吉田市池之元遺跡のテフラ」
 - 2) 担 当 者 河西 学
 - 3) キーワード : テフラ 大室スコリア
- II 坑穴住居址の分析——
- 1) 施設構造分析 「池之元遺跡第1号住居址の施設構造」
 - 2) 担 当 者 阿部 芳郎
 - 3) キーワード : 梗鏡形敷石住居 有段施設 住居型式
- III 後期土器の分析——
- 1) 型式学的分析 「堀之内2式の器種構成と組成率」
 - 2) 担 当 者 阿部 芳郎
 - 3) キーワード : 堀之内2式土器 素文化 精製土器
粗製土器 意匠文系土器 素文系土器
-
- 1) 材質・技法分析「土器製作技術からみた堀之内2式土器の特性」
 - 2) 担 当 者 阿部 芳郎
 - 3) キーワード : 堀之内2式土器 土器製作技術
断面色調構造 器体の薄手化
-
- 1) 材質・技法分析「土器底面の網代圧痕に関する基礎的な観察と編み方の地域性」
 - 2) 担 当 者 須賀 博子
 - 3) キーワード : 堀之内2式土器 土器製作技術 底部製作
網代圧痕
-
- 1) 理化学的分析 「池之元遺跡出土土器の産地推定」
 - 2) 担 当 者 河西 学
 - 3) キーワード : 堀之内2式土器 土器胎土分析 産地推定

(2) 調査成果の活用と普及

池之元遺跡の調査成果については、本報告書における個別分析的な成果の公表を基軸にして、市史においてその内容をさらに、広く活用できるように検討中である。

そしてまた、とくに調査の主体となった第1号住居址とした縄文時代後期前葉の柄鏡形敷石住居址と、それに伴って発見された土器や石器類を富士吉田市歴史民俗博物館の展示計画に積極的に利用する計画も、1993年に現実のものとなった。

1次調査で存在が確認された柄鏡形敷石住居址の諸施設の復元を目指した2次調査では、焼失家屋という条件も手伝って、施設の細部の構造が復元できるいくつかの異味深い記録と所見を得ることができた。第1号住居址の構造の復元は、広く東海、関東地方の事例との比較により、住居内部に有段施設と屋外に周堤礎を配し、さらに有段部の構造に「柱列一体型有段部」という特徴ある施設の構築方法をもつ点が明らかにされた。これらの成果は本住居址の復元模型製作の契機ともなった。

出土した後期前葉の土器群は、それが最もまとまって出土した7A区において、出土資料の口縁部の全点を対象にして器種組成率が分析され、多様な形態の土器の組み合わせや（巻頭カラー写真3、4）、消費率が明らかにできた点は、生活用具としての土器を考える時に重要であろう。しかしいくつかの事実とそれを基にした推測も、そのすべてが真実を伝えると言いつ切ることは難しい。そうした意味では現段階の展示活動も今後の研究成果の蓄積と、解明されるあたらしい事実から、より具体的に、また豊かな歴史の一場面を再現するための、改変や更新がなされるべきである。

（阿部）



池之元遺跡出土品展示状況

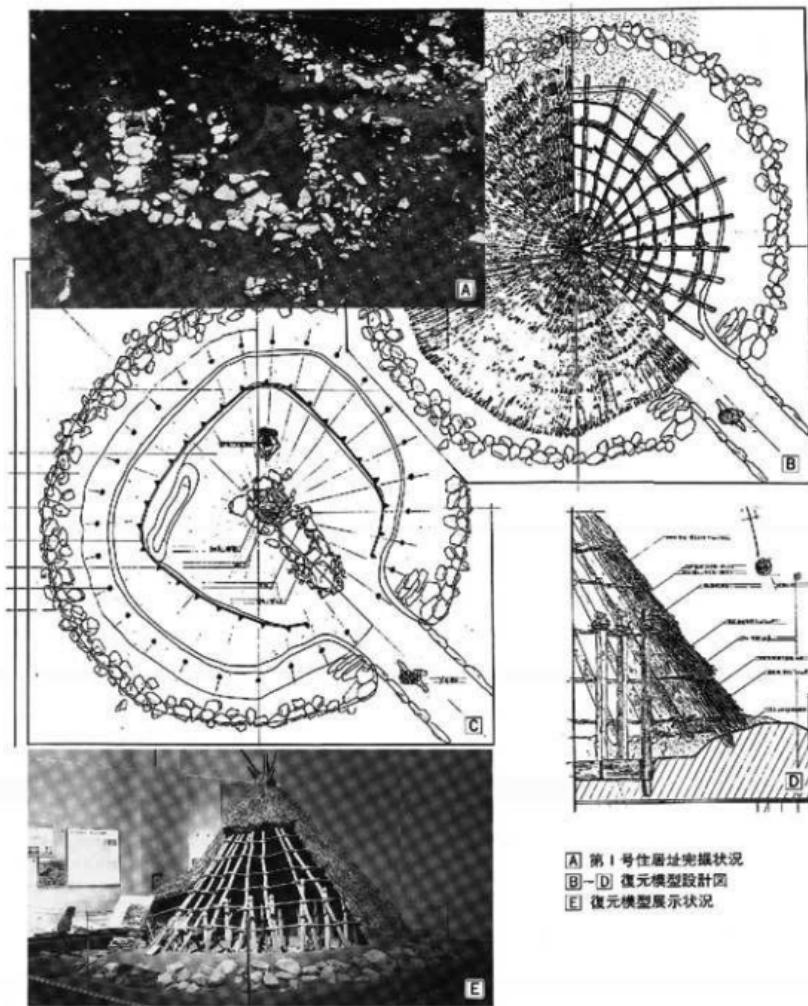
縄文文化の成立と地域性

富士吉田では池之元遺跡と古層敷遺跡で早期の土器が発見されており、堅穴住居や土器、石器などの生活用具が発見されています。また池之元遺跡では後期の敷石住居も発見されており、富士山麓周辺の山間部における縄文文化の地域性をしめす重要な資料といえます。



縄文時代後期の土器群／池之元遺跡

第5図 池之元遺跡出土遺物の展示状況（「富士吉田市歴史民俗博物館展示図録」より）



A 第1号住居址実掘状況
B-D 復元模型設計図
E 復元模型展示状況

第6図 池之元遺跡第1号住居址の復元経過

第III章 調査の成果と記録

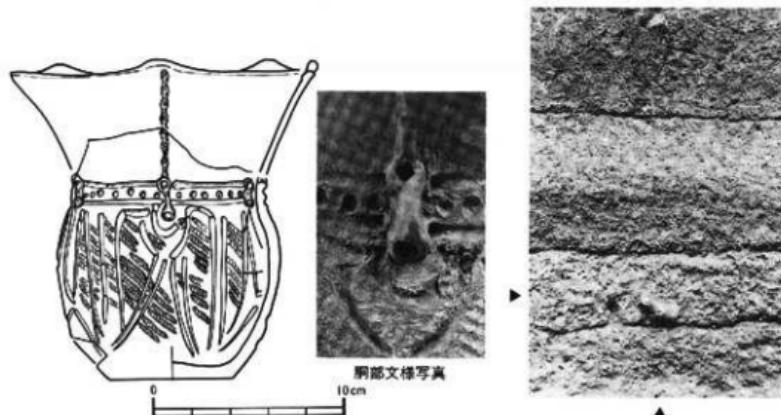
第1節 繩文時代中・後期の遺構と遺物

繩文時代の遺物は、集中の度合いの差はあれ池之元遺跡をのせる台地のほぼ全面から出土した。それらは、厚く堆積した火山性堆積物の層のなかで、基本的には層を越えて検出され、とくに縄文中期と後期の遺物は、4、5、6、7区といった台地低位部にその分布が顕著であった。こうした傾向は、早期の時期の遺構が尾根上の狭い台地の一角に生活の舞台を設けたのとは異なり、中・後期の人々は扇形に裾野をひろげるこの台地のなかでも、より広い空間へと生活の舞台を移動させ、集落を営んだことを想定させる現象である。

(1) 土層の堆積と遺物の出土状況

6区の土層堆積状況

6区は今回の調査地点のなかで最も標高が低い地点であり、この地点での遺物の出土は、現在水田として利用されている低地部にまで遺跡がひろがりをもつという事実を暗示するものであった。調査は現地表下3.7mまで掘り下げ、基盤とおもわれるローム層上面を確認したが、VI層下に青灰色を呈するほぼ純粋なスコリア層の堆積を確認し、その直下より口縁部を欠損した壺之内1式土器



第7図 6区遺物出土状態と出土遺物 (1/3)

が出土した。周辺からはやはり後期前葉の土器片が検出され、該期の包含層と考えられた。

ローム層上面には大型の礫が散在したが、明確な配列などは認められず、自然の転石と考えられた。また縄文土器の破片がこれらの礫の間から少量出土したが、多くが細片であり、図示できるものはなかった。

第7図はVII層中より横転した状態で出土した深鉢である。口縁部は欠損するが、胴部以下は原形を保っており遺存状況は良好である。口縁部は3単位の小突起が付けられ、ここから垂下すると思われる傾状の縦線がみられる。胴部は2本の並行沈線と円形刺突列により分帶され以下には地文縄文の上に垂下する文様が描かれている。

文様の中心は頸部から垂下する縦線部分に対応し、分帶部分には「8」字状の貼付文が付けられている。逆「V」字形の胴部主文様間に、垂下線が描かれるが、垂下線に対応する主文様は3単位である。これらの特徴から掘之内1式に比定されるであろう。

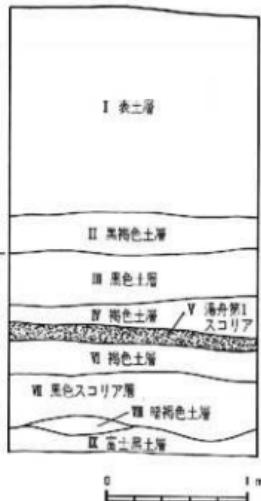
7区の土層堆積状況

本地区は6区に比較した場合、土層堆積は薄いが、とくに大室スコリア層以下の堆積が複雑である。また古墳時代や平安時代の遺構が発見されたが、それらは遺物も含めてすべてスコリア層より上の層に限定されている。

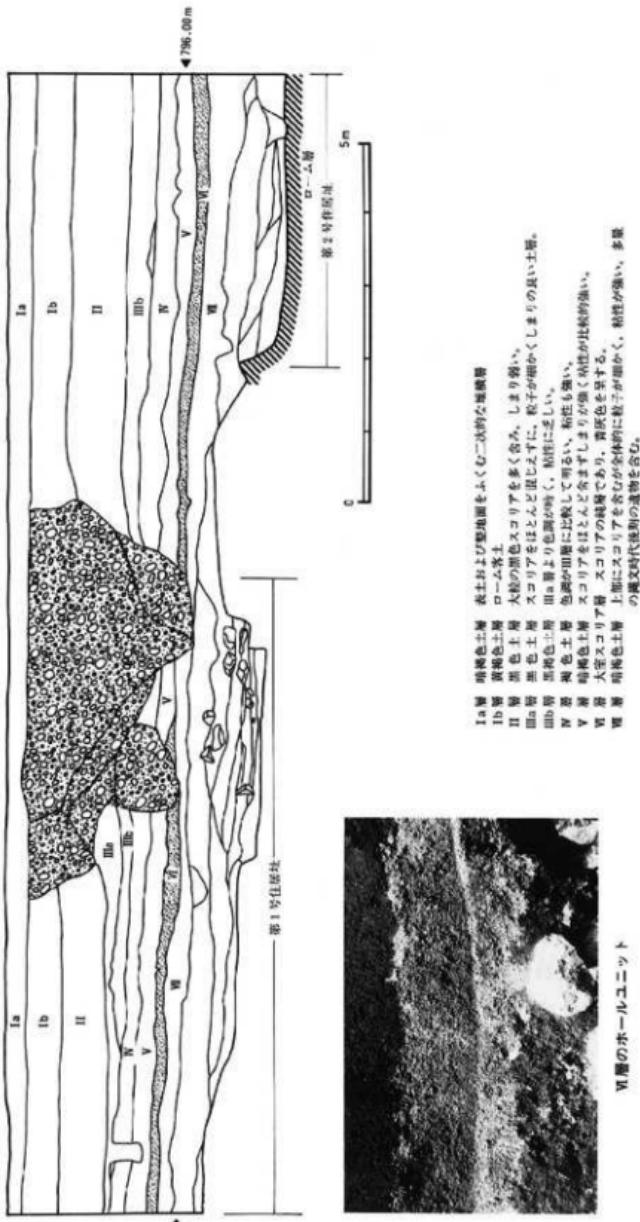
表土以下スコリア層までは6枚の堆積土が調査区の西半に安定して堆積していた。そして平安時代や古墳時代の遺物が出土するのはIII、IV層においてであった。この面では古墳時代前期と平安時代に住居各1軒を検出した。スコリア層はVII層に相当し、平均して10cm程度の堆積が全面に認められた。そのもっとも良好な部分は調査区北半であり、スコリア層内部に粒子の一定した薄層が互層構造を示す場所が観察され、いわゆるホールユニットが良好に残存していた(第9図写真)。

VII層以下是有機質の土層が堆積し、後期前葉～中葉の遺物が出土する。調査時点においてスコリア層またはそれ以上から出土した縄文土器は皆無であった。したがって遺物包含層はスコリア層によりほぼ完全にバックされた状態が保たれていたものと考えられる。

土層堆積が複雑な部分の多くは、第1号住居址と第3号住居址の位置する場所であり、とくに第1号住居址の一部がかかる調査区西側では人頭大的の礫を含む礫が集中する場所が認められ、とくにこの部位の土層は刺し身を並べたような堆積が顕著である。こうした土層堆積における局所的な状



第8図 6区土層堆積図



Ia層 布施色土層 土壌および地表面をくむ「二次的」な地被物
 Ib層 黄褐色土層 ローム谷上
 II層 黄褐色土層 大粒の黒色スコリアを多く含み、しまり弱く。
 IIIa層 黑色土層 大粒の黒色スコリアをほとんど含まず、粒子が細かくしまりの良い土層。
 IIIb層 黑色土層 スコリアをほとんどの土に混入する。
 IV層 黄褐色土層 IIIa層より色が暗く、粘性に乏しい。
 V層 黑色土層 色調がⅢ層に比較して明るい、粘性も強く。
 VI層 黑色土層 スコリアをほとんど含まず、しまりが強く、粘性が比較的強い。
 VI層 黄褐色土層 上部にスコリアを含むが全体的に粒子が細かく、粘性が強く、多量の腐葉質代謝物を含む。

第9図 7区土層地圖



VI層のホールユニット

況は、それが遺物包含層とわれわれが呼ぶように、堆積要因に人為性が高い点を考えて、より慎重な解釈が必要であろう。スコリア層以下は層厚約1mでローム層に達するが、それを確認したのは、第1号住居址と第3号住居址のみであった。それとは他の地点においても、非常に遺物の出土が多く、経験的な判断からしても、今回の遺構調査地点の周囲はかなり多くの遺構が存在することが予測され、今回の調査はそれらの中で最も新しいと判断された2軒の住居のみに調査を限定したからである。

第1号住居址や第3号住居址の上部にはとくに大粒のスコリア層が堆積しており、それは形状や粒径、色調などの諸点においてVII層のそれとは異なる特徴をもつ。この地域の縄文時代後期の遺跡で確認される大粒のスコリア層と対比される可能性が高い。この層が良好に堆積していた第1号住居址の上部の覆土には殆ど遺物が含まれていなかったことも遺跡形成を考える上では重要な所見であろう。

また調査の過程で山梨文化財研究所の河西 學氏によりスコリア層の観察と採取が行われ、分析結果を本報告第IV章1節に掲載してある。

(2) 検出された遺構と遺物

7区は2次にわたる調査が行われたが、縄文時代の遺物包含層はとくに西半分において良好な状態で検出され、東側は土石流による破壊や、平安時代の溝状遺構などにより破壊されている部分がある（第10図）。

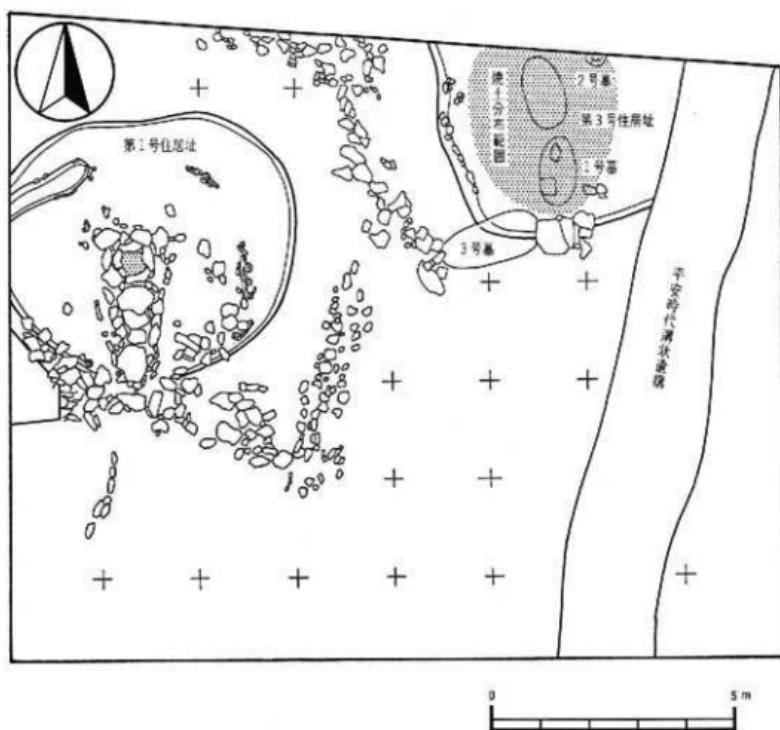
縄文時代の遺物は9層以上には、深い攪乱から掘り上げられた僅かなもの以外殆ど見られず、10層としたスコリア層の直下より、かなりの集中度をもって出土した。スコリア層は調査区の西側を中心とし、北から南側にむかひ緩やかに傾斜して堆積していた。これは旧地形をほぼ反映しており、おそらく6区で検出されたスコリア層へと続くのであろう。遺物も6区と同様にしてこのスコリア層直下より出土する点は、本遺跡の消長とこのスコリアの降下に象徴される火山活動が無関係ではないことを暗示する。

10層以下は後期の遺物を出土する包含層が堆積し、ローム層上面に後期の住居の床面が構築されていた。検出した遺構は、出土した遺物の中でもっとも多かった掘之内2式期の住居址2軒と住居の埋没過程で構築された配石墓2基、埋甕1基であった。また2軒の住居址の周囲には石列がそれに巡らされ、新旧の関係をもって切り合う状態が確認された。

2軒の住居址はそれぞれ重複がみられ、第1号住居址は入り口と炉を結ぶ線上に石敷がみられ、入り口部分の敷石に連結している。また貼床の直下に2基の炉跡が近接して発見された。またこの住居は火災に遇っており、床面の敷石や貼床が焼けている。また壁の周囲には柱材が樹立した状態で遺存しており、この時期の住居施設の構造を知る上で良好な資料を提供した。

第3号住居址は敷石下に炉跡が発見され、やはり重複住居であることが確認されたが、調査面積の関係から全体の調査はできなかった。これらの遺構群には多くの遺物が伴ったが、その主体は掘之内2式期のものであった。また住居の覆土中には焼骨の集中がみられ、周囲から黒曜石の剝片や石鏃が多く出土した。そしてこの直下より2基の配石墓と逆位の埋葬が検出された。こうした状況から、この地点が後期の池之元遺跡の集落の居住域であり、この周辺にはさらに多くの遺構群が広がるものと推察される。

(阿部)



第10図 7区遺構配置図

竪穴住居址

本調査区では2軒の縄文時代住居址が検出されたが、それらはいずれも8層としたスコリア層直下の土層を覆土としており、両住居址からは堀之内2式土器が出土した。遺構の確認以前にスコリア層の上位の層からは、縄文時代の遺物は全くといって良いほど出土せず、スコリア層を掘りあげた段階で大量の遺物が出土しはじめた（写真3）。また、住居の中央部分にあたる位置はこのスコリア層が落ち込む状況が確認されたので、本遺跡の縄文時代文化層の形成は、このスコリア層の降下により停止し、そのまま遺跡が埋没した状況を示す。縄文時代文化層の中から出土した土器のなかでは、加曾利B1式の古手のものが最も型式学的に新しいので、スコリアの降下時期は、考古学的には加曾利B1式土器のおこなわれた比較的初期の時期に求められるであろう。

調査は当初第1号住居址の床面の一部を明らかにした段階で終了し、翌年に追加調査として周囲を拡張し、第3号住居址の一部を確認した。また第1号住居址は後に述べるように重複住居であり、貼床下に古い炉と床を確認したが、遺構保存の必要性から調査は後に委ねる事として、埋めもどした。

調査は基本的に遺物の位置と層位を記録して取り上げ、調査区内は全面を層位的に掘り下げた。また焼失家屋であった第1号住居址では、炭化した木材をサンプリングして樹種の同定を委託した。

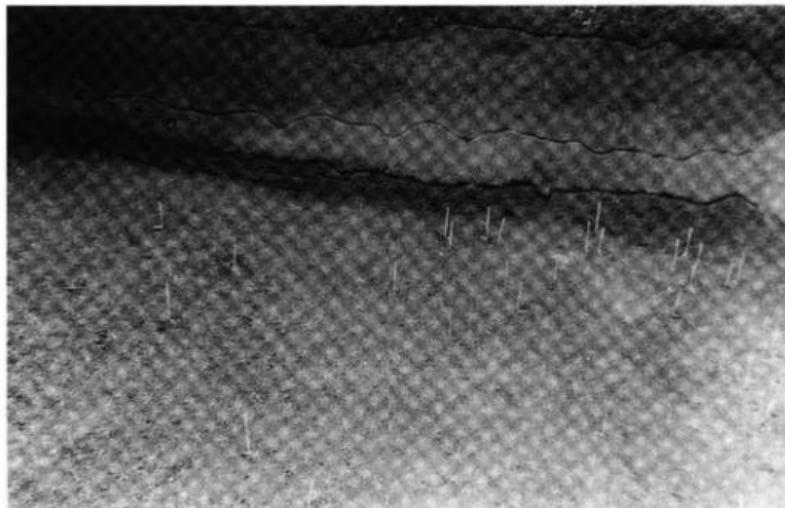
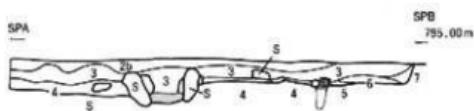
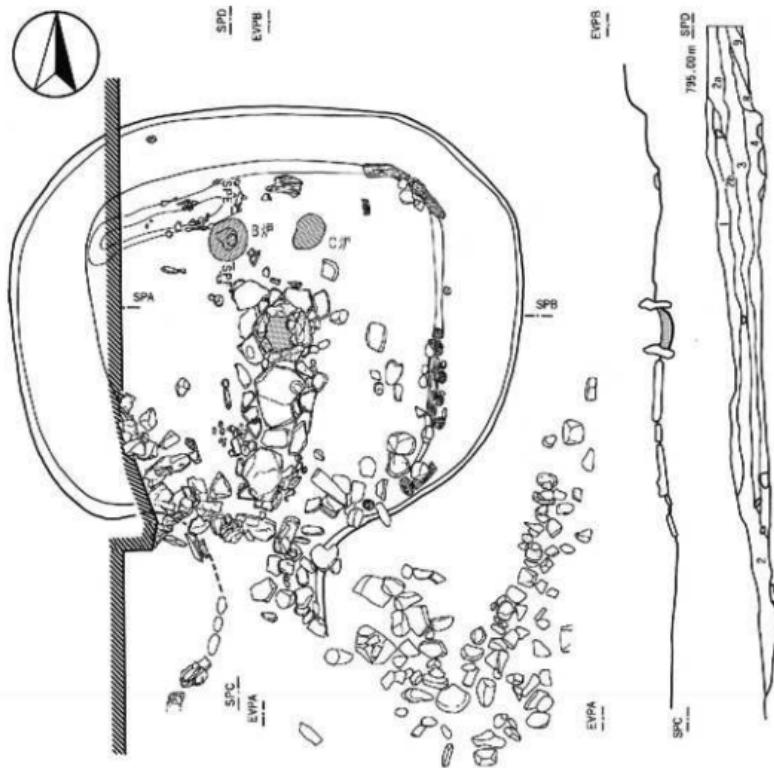


写真3 縄文時代の文化層における遺物の検出状況

人室スコリア層を除去すると多量の遺物を含む後期の文化層が現れる。写真中でタシの立つ部分は遺物位置を示す。



- 第1層 黄褐色土層
細かいスコリアを多く含み粘性。しまりともに弱い。
第2層 黄褐色土層
2~5mmの大スコリアを多く含みしまりが悪い。
第3層 灰色土層
スコリアを多く含み、炭化材、燃土粒子が顕著に含まれる。
第4層 黑褐色土層
粒子細かく粘性強い。木炭、炭化材、燃土ブロックを多く含む。
第5層 海色土層
粒子が粗かく粘性が強くしまり良い。
いわゆる宮上クロを基調としているが、二次的な堆積でしまり良い。
第6層 黄褐色土層
3mmの大スコリアと小礫を多く含みしまり悪い。
第8層 海色土層
粘性強く少量のスコリアとロームブロックを含む。
第9層 黄褐色土層
2~3mmのスコリアを多く含み、本炭片を少量含む。
第10層 海色土層
ローム質の土壌を基本にしてしまり悪い。

第11図 第1号住居址実測図

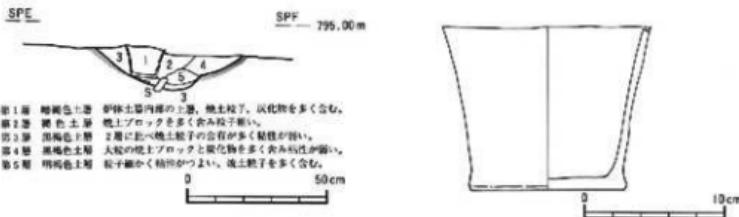
第1号住居址

入口部を南側に向けたいわゆる「柄鏡形」の住居である。本調査区は全体に緩やかに南に傾斜しており、床面はローム層を水平に削平した後に、ローム質の褐色土を敷いて床面としている。これは旧住居の炉や床を新しく作り替えた結果のものであり、入口部から炉にかけては、板石を敷詰めた床面が造られている。

床面にいたるまでは4枚の覆土の堆積が認められたが、相互に水平に堆積しており、埋没の過程で乱されることはなかったようである。遺物は3層上面から比較的多く出土し、1~2層は逆に非常に少なく、微妙に層内における遺物の包含状況は異なるようである。また1層は、直径5~10mm程度の大粒のスコリアを多く含んでおり、こうしたスコリアの堆積が遺物の疎密の原因として関係しそうである。

住居内部に堆積した土層のなかで、床面を覆う5層は多くの炭化物を含み、部分的に焼土ブロックを含むが、これは厳密にいえば床面上に張りつくといったほうが良く、焼土も焼失屋とした割りには予想外に量が少なく、また床面の焼け込みも顯著ではなかった。しかし主に北側の奥壁付近には、大型の木材が炭化したまま床面に検出されたりした。とくに注意されたのは、東側の床面上に炭化した柱材が5~10cm樹立して遺存していたことで、しかもそれらは約60cmの間隔で周間に巡る様に配置されていた。柱材は薪割りで樹皮は遺存せず、樹皮側を住居の内側に向けるという点で一致しており、一貫した木材の使用方法を彷彿とさせるものであった。この柱列の間には板材が巡らされており、この部分を境に床面には段が造りだされていた。板材と柱材の間には隙間を埋めるようにして、小礫や土器片が補強されていた。焼失による床面の焼け込みは、この段をもつ柱列の内側に認められ、床面の焼土はこの段の部分で立ち上がり、消えていた。

床面に設けられた施設にはこの他に奥壁付近の溝状の掘りこみがある。これは周間に小石が巡るもので、その在り方は補強材として有段部分に用いられた小砾と状況が酷似している。またこの溝の中には、3点の注口土器が配置されているので、本来は板で仕切られた施設であったものと考えられる(写真4・第11図)。注口土器は、大きさと文様の異なる3点であり、小形のものは完形で中



第12図 第1号住居址B号炉址実測図

形のものは半分のみが遺存し、大形の1個は細かい破片となっていたが、破片の一部には打ち割った様な加撃痕が認められた。中形の1個は調査区域外に残りが遺存するのかもしれない。

炉址は大形の溶岩4個を方形に囲んだもので、床面の敷石とは石材が異なる。この炉の南に接する大形の板石には石皿状の窪みが作り出されており、炉周辺での調理加工業の在り方を推測する上で興味深い（写真8）。また北側に接する板石上にも磨面が認められた。この炉の北側には貼り床下に2基の炉が発見され、西側の炉内より鍋之内2式の深鉢の胸部下半が埋め込まれた状態で検出された（第12図 写真5）。土器は水平に打ち欠かれており、被熱により全体が顯著に赤化している。

出入り口の周辺には板石が直線的に配され、板石の隙間や端には小砾を込めている。この敷石の西側には小さな掘込みがあり、内部からは黒曜石の原石2点と5点の磨石が発見された。板石の表面は熱を受けた痕跡が顯著で、一部では板状に剝離する面があった。この床の敷石と幾分の高低差をもち、入口部の檻際には大形の礫が散乱した状態で検出された。調査の時点での礫の下から住居の床面が検出されたので、礫は住居が焼失して埋没する過程で流入したものと考えられたが、よくに出入り口の連結部分に集中してこれらの礫が存在したことと、一部では大形の板状の石が将棋倒しの様に住居内になだれ込んでいる状況が観察できたので、これらも住居の付帯施設と考えることが出来よう。

出入口の部分では、こうした礫の集中部分に連結するかたちで、住居の周囲を取り巻く帶状の礫の配列が検出された。この礫帯ともいるべき礫群は住居の掘り込みを取り巻くように施され、レベ



写真4 第1号住居址奥壁付近における注口土器の検出状態

床面を浅く掘りくぼめた溝状の施設内に3点の注口土器が発見された。溝の周囲には小礫を列状に並べて床面との間を区画している。本来は板材などを用いた施設が存在し、小礫は補強材に用いられた可能性もある。

ルも床面よりかなり高い。礎帯は完全に調査された東側では周回し、一部で第3号住居址の同様の礎帯と切り合いをもつ。また西側は未調査であるが、おそらく連続するものと思われる。

第1号住居址出土の遺物 土器（第13～22図）

本住居址から出土した土器は後期前葉の堀之内2式を主体として、それに前後する型式が少量混入している。こうした事実は本地点における活動の連続性を示す現象として重要である。しかしながら住居の床面から出土したものは全て堀之内2式土器であったことから、この住居の施設時期が堀之内2式のおこなわれた時期にあったことも明確である。

以下に各資料の型式学的な特徴を説明していくが、掲載資料は、基本的に各類別土器の出土量を反映している。なお土体を占める堀之内2式の土器組成については後述する。

1～5は後期初頭の称名寺式か、あるいはそれに後続する下北原式と思われる。両型式は極めて連続性が強いため、小破片では区分が困難であるが、二本一組の沈線により単純的な文様を描く。1は朝顔形の深鉢の口縁部である。2～5は胴部に膨らみをもつ深鉢の胴部であろう。5は三本沈線で下から巻上がる渦巻きを描き末端部に縫の貼付がある。

7は深鉢の口縁部で貫通した穴をもち、この穴に巻きつくように太い沈線が描かれている。この沈線の末端には円形の刺突文が施されるのも特徴の一つである。

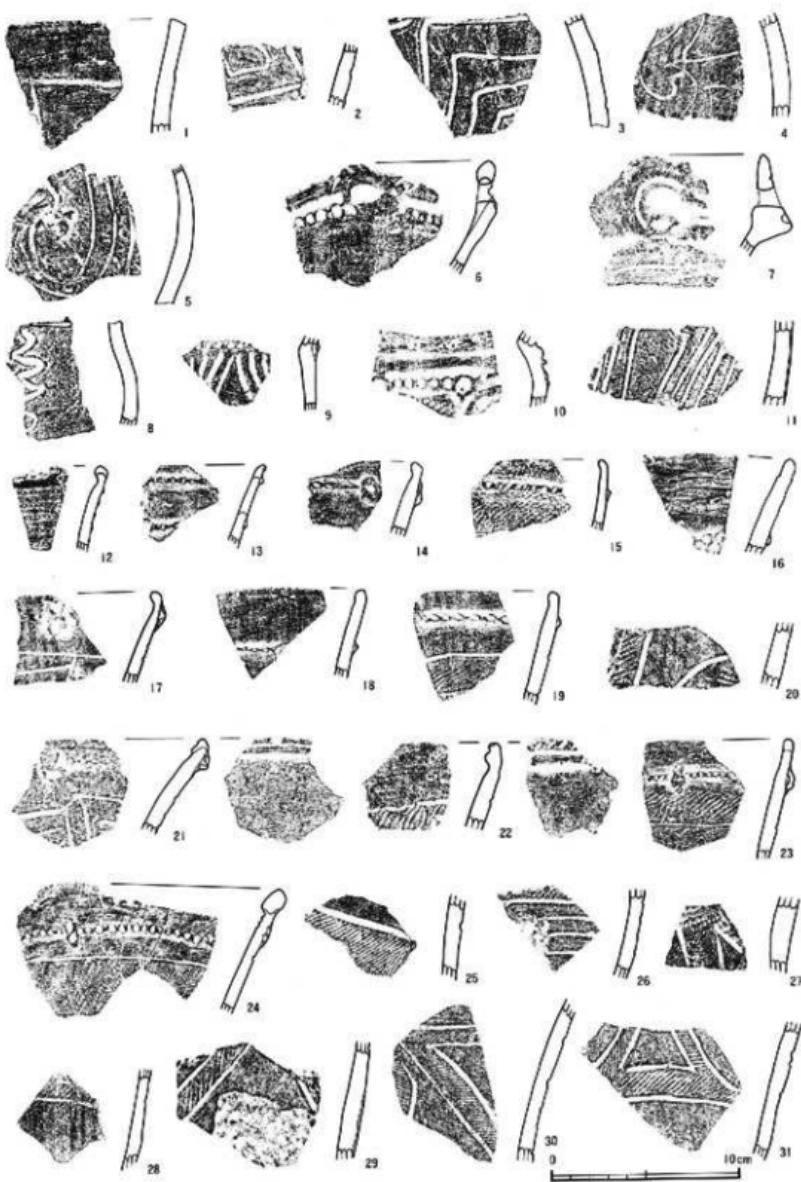
6、8～11は堀之内1式である。いずれも胴部の膨らむ鉢形土器の破片で、6は口縁部で小突起の部分に貫通した孔を穿ち、口縁部には太い一条の沈線が引かれている。この口縁部の特徴は、7の系譜をひくものと考えられ、口縁部の肥厚も薄くなり、より後出の特徴を良く示している。8～11は胴部である。10は無文の頸部との区分に刻みを施した紐線を用いる。8は地文に縄文を施し蛇行した垂下線を描くもので、堀之内1式のなかでも古い特徴をもつ。

12～31は堀之内2式の朝顔形の深鉢で、胴部には磨消繩文による幾何学的な文様が描かれる。これらの口縁部には12～19、21、23、24の様に刻みを施した紐線が貼付されている。紐線は14、17、23、24などのように、要所に「8」字の貼付をおこなうものが一般的で、24などのように口縁部の突起などと対応する。紐線は一条のものが多いが、12の様に4条に及ぶものや、22のように無いものもあり、紐線の有無や条数のみではこれらの新旧の序列を推することは困難であろう。

21、22は口縁部内面が肥厚して、その部分に沈線を周回させるものである。22は口唇に刻みを施し、加曾利B1式以降に発達する内文の萌芽的な要素をもつ。24は口縁部に細かな刻みを施す突起をもつ。

25～31は胴部破片で、三角文が磨消繩文により描かれるものを集めた。いずれも沈線文によるモチーフを描いた後に縄文を充填していく手順を踏んでいる。

32～44は胴部で幾何学的な文様が磨消繩文により描かれるものが多く、中には40、42の様に曲線



第13図 第1号住居址出土遺物(1) (1/3)

的な文様を描くものもある。これらの器種は総じて器厚が薄く、器面が良く研磨されている。

44は胴部下年に屈曲をもつ形態で、第59図117が同類の全形を知ることが出来る資料である。

45~65は口縁部が外反して胴部に膨らみをもつ深鉢の破片で、第57図113、114などが全体を知ることができる。図示した中でも45~53は口縁部である。口縁部は無文で、断面形態が「く」字に内折する特徴がある。外面は横方向に良く研磨されている。

54~60は胴部の屈曲部分で、胴部文様とは刻みを施す紐線により区分している。この紐線も一条のものが一般であるが、62のように2条のものもある。これは朝顔形の深鉢の口縁部と同様でありバラエティと考えた方がよい。また56~58は頸部の無文部分に紐線が垂下している。この垂下線との接点に「8」字貼付文を施すものが、58、60、62などである。56は垂下線が胴部文様にまで垂れ下がるが、同類に第57図113、114などがある。

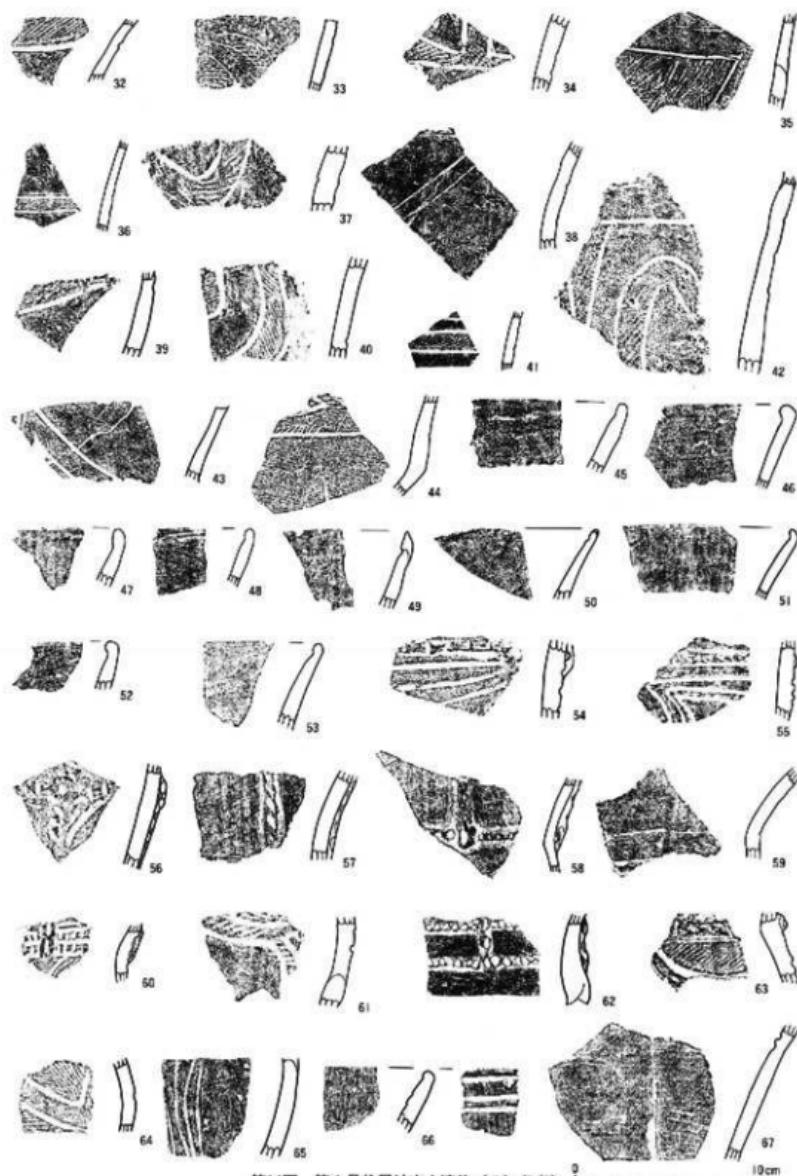
垂下する紐線は多くは第37図110や第57図114の様に一条ないし二条が、口縁部の突起から垂下するものと思われる。

66は浅鉢の口縁部である。内面に三条の沈線が引かれ、良く研磨されている。67も同様の口縁部付近の資料で、内面に三条の沈線がひかれている。



写真5 第1号住居跡貼床下に発見された炉址の検出状況

皿状に掘り廻めた「掘り方」の内部に燃之内2式の深鉢の下半部を埋設している。掘り方の肩部から底面にかけては赤化しているが、土器の内部には焼土が混入しない。



第14図 第1号住居址出土遺物（2）(1/3)

68は小型の鉢形土器で、口縁部に一条の沈線を引き、胴部には磨消繩文による文様を描く。69～77は注口土器の胴部である。堀之内2式の注口土器には、意匠文系深鉢と同様に磨消繩文による文様を描くもの他に、細い隆線により曲線的な文様を描くもの、全く無文のものなど、この器種独自の装飾構造がある。本住居の床面に掘り込まれた溝状の施設から出土した3点の注口土器の文様にその典型をみることができる。69、98は無文系、70は隆線文系、71、73～77は磨消繩文系で、72は沈線のみの渦巻文を描く。71は繩文施文部分が削り出されており、沈線がそれを縁取るやや特殊な例である。

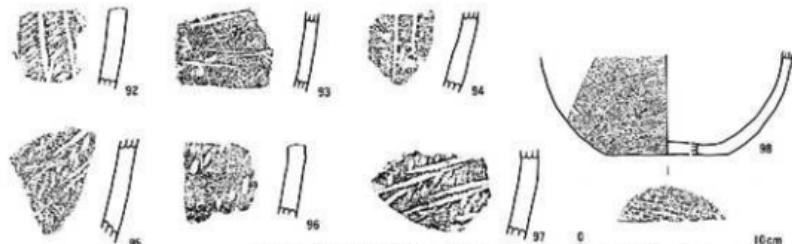
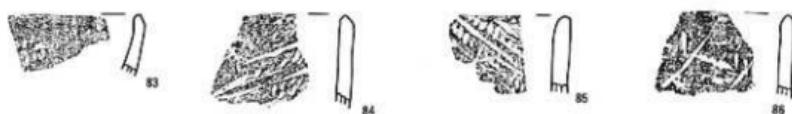
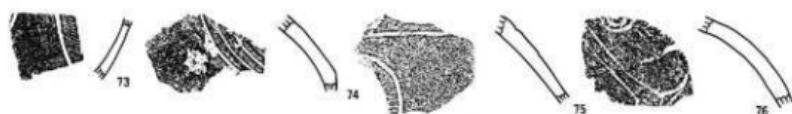
80～82は曲線的な沈線文を胴部に描く深鉢で、堀之内1式以降、関東西南部を中心に分布する器種である。この土器の分布上の特徴は、後期初頭の称名寺式の伝統を強く残した型式変化を行う地域の中に位置し、特に武藏野、相模野台地を中心に安定した分布圏を形成する。本遺跡における在り方はそうした観点から興味がもたれるが、資料的には少ない。

82はII縁部に太い一条の沈線が周回し、以下に縦位の沈線文が描かれている。胴部文様を描く沈線は細く、口縁下の沈線とは性質が異なる。II縁部の断面形が「く」字状を呈し、内折するのもこの土器の特徴で、堀之内1式段階は沈線の施文が一般的で、2式前半までその伝統は残る。本例は堀之内1式期のものであろう。80、81は同類の胴部である。

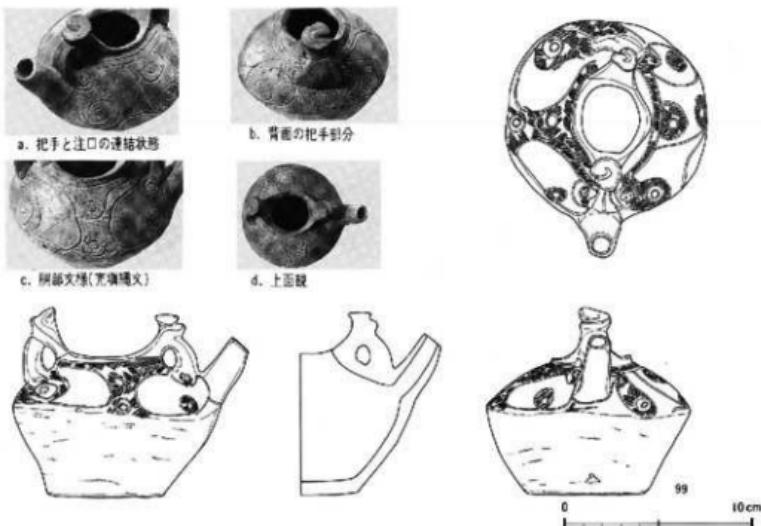
83は無文の深鉢の口縁部で、口唇部が「く」字状に内折する。84～97は太い原体を燃り合わせた附加条繩文を施文する深鉢で、胎土中にスコリア状の粒子を多量に含み、赤褐色を呈する特徴的な胎土である。この土器に施文される繩文原体や、胎土の特徴は池之元遺跡の他の土器には見ることができない。おそらく搬入品と考えられるが、本遺跡で主体的に出土しているのが堀之内2式である点から、この時期に搬入品としてもたらされたものと考えたい。

99、101、102は、本住居の奥壁に設けられた溝状施設から出土した注口土器である。99は片方の突起の先端を欠損する他は完形であり、他の2点とともにその出土状態が注目された。算盤形の形態に一対の把手が付けられ、一方は注口部の位置と一致している。注口部と把手は分離しており、堀之内2式の注口土器の典型的な形態を呈している。突起の頂部は上面觀が渦を巻く。体部文様は磨消繩文により渦巻文を描き、文様の施文は4単位となる。これは注口部と突起を結ぶ軸を中心として、これに直行する軸を設ける。渦巻文は各所ともに細かな表現が異なり、また繩文の充填部分も左と右半分で異なる。この注口部と突起を繋ぐ区分線の左右で、文様のネガとポジが反転する現象は、単なる作者の未熟な施文技術に原因するとは思われず、土器の機能とともに興味ある特徴のひとつである。文様を描く沈線と繩文は非常に細かい。器体の色調は暗褐色ないし黒褐色を呈しているが、火災時の被熱により変色している可能性がある。

第17図101は同一の形態であるが、体部の文様は99と異なる。全体の約半分が発見されたが、このことは未調査区域に存在する可能性がある。突起と注口の位置、突起の頂部の渦巻きなどは良く似て



第15図 第1号住居址出土遺物(3)(1/3)



第16図 第1号住居址出土遺物(4)(1/3)

いるが、渦巻部分に刻みを施すクセはこの個体の独自の特徴である。体部には縦位の帯状文が描かれ、内部に縄文が充填されている。この文様の単位は復元すると6単位となる。

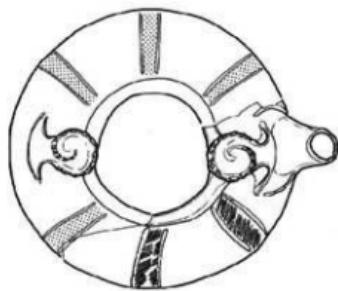
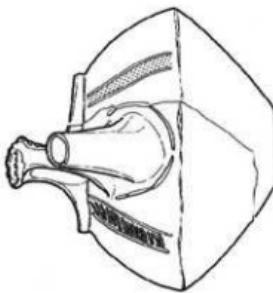
器面は良く研磨されており、色調は黒色を呈し器面は光沢がある。一方内面はこれとは異なり、粗い成形痕が残り胎土中に含まれる岩石鉱物の粒子も多く観察できる。外面の細かなきめの器面は、ケズリやナデなどの器面成形の工程を経て獲得されたものであることを物語るであろう。

なお、注口と体部の接合部には、筒状の注口端部が幾分突出して器内に観察された。こうした接合の跡から、注口部の作出は筒状の注口部を予め孔を開けた体部に差し込み、さらに外面に粘土を補強する方法によるものと考えられ、製作技術上の特徴として注意されよう。99にはこの様な痕跡は見られず、丁寧に成形したか、別の方法により接合したのであろう。

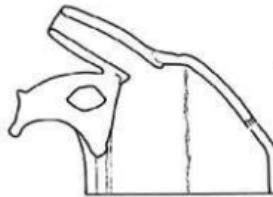
第17図100は住居東側の有段部の上に横転した状態で発見された純形の土器である。底部に網代痕が残り、器面には粗いケズリ痕が残る。

第18図102は最も大形の注口土器である。溝状遺構の内部に破片となり飛散していたが、接合の結果胴部下半から底部を欠損するが、胴部以上はほぼ完全に復元できた。他の2点と同様の形態であるが、やや丸みをもつ。一对の突起は「く」字状を呈し突起頂部は吸盤状を呈する。胴部上半には細い隆線により「S」字状の流線文が描かれ、突起と注口部分も「S」字文の中に取り込まれており「S」字文の下部のみが描かれている。そう考えると、この個体も文様の展開は4ということ

10cm



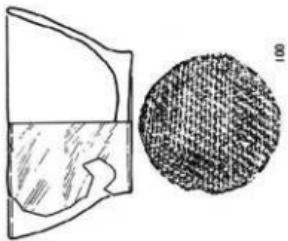
b. 主口部分正面図



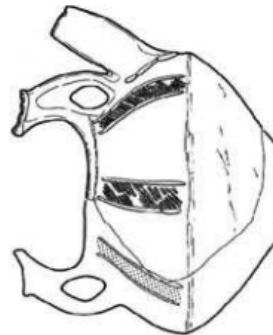
c. 手元と主口の連結部



a. 手元と主口の連結部



100



100

第17図 第1号居住址出土遺物(5) (1/3)

になる。口縁部は突起に統く口縁部の端部は梢円形で、巾着状を呈する。

注口部は第17図101と同様に筒状の注口部の差し込みによる方法である。器面は外面は良く研磨されているが、内面は粗い成形痕が残る。とくに横方向のケズリ痕が顕著であり、薄手の器体がこうしたケズリにより成形された結果であることを物語る。器面は二次的に被熱していて褐色を呈する部分があるが、これは出土した時点では、破片の外面が上を向いていたものに限られ、反対に下面を向いて出土したものは、いずれも黒色を呈し光沢が認められた。こうした事実から、本来は黒色に焼き上げられたものが火災の為にその一部が変色したものと考えて良いだろう。

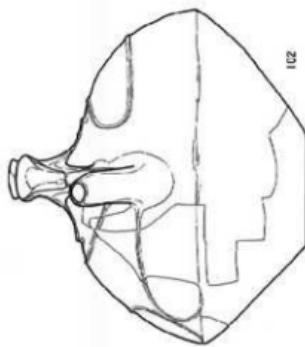
3点の注口土器はその出土状態から一括性が示されるが、それらは個体毎に大きさと文様が異なっていた。これらの差異は、堀之内2式という型式の範囲の中にありながらも、細かな器種を単位とした変化を追う場合、一系の型式学的な流れの上に置かれるものではなく、むしろ同時に存在する異なる文様系列とサイズ群の存在を示唆するものであろう。形態の相似以外に文様装飾やサイズの点で異なるこれらの注口土器の在り方は、液体を注ぐという機能の同一性を示しつつも、内容物や使用場面、作法などのことなる用途の違いを示す可能性がある。そうした意味ではこれらが本来は床に設けられた施設の中から、あたかも並べられていたかのような状態で発見されたことは興味深い。



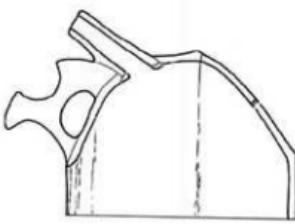
写真6 第1号住居址内の凹地に堆積した大室スコリア層（調査区東側より）

縄文後期の文化層は大室スコリア層の直下に相当し、第1号住居址は廃絶後の凹地化した段階でスコリア層が堆積していた。土層断面中において白色に見える部分がスコリアの純層で、ホールユニットが明瞭に観察できる。

112
19cm



第18圖 繩1号住居址出土遺物(6)(1/3)



絞印文盤口大口壺



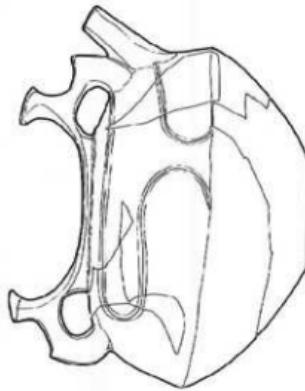
b. 主口部(正面觀)
c. 把手部(背面觀)

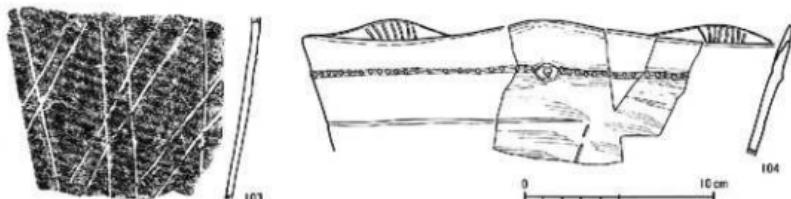


a. 主口部と把手の連続状況(斜め前方より)



d. 把手部(背面面觀)





第19図 第1号住居址出土遺物（7）(1/3)

本住居の覆土から出土した土器は小さな破片資料が多く、図示できるものも少ない。しかし図示をしない多くの資料を含めても、その主体が壙之内式であることに変わりないが、その中には壙之内式の中でもあきらかに後出のものも含まれている。

第20図105は朝顔形の深鉢で口縁部に小さな突起をもち、その頭部には細かな刻みや刺突を行なうクセがある。また内面には横位の沈線を三条引き沈線間に斜めの刻みを施す。このいわゆる内文は突起とともに繊細な作りで、良く研磨されている。外面は上半部に二段の横帯文が描かれるが、内部に繩文は施されず、無文でケズリ調整の成形痕のみが残る。

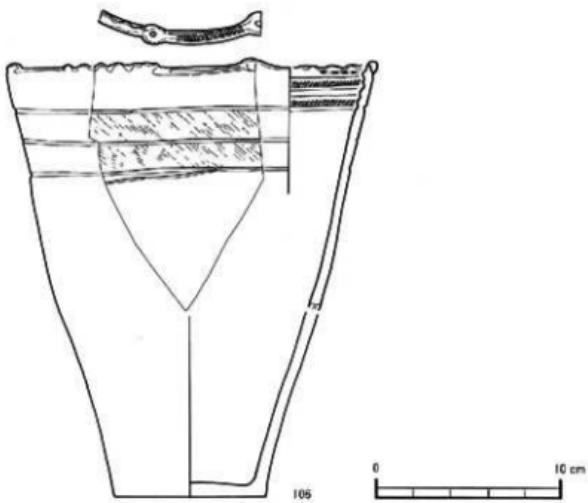
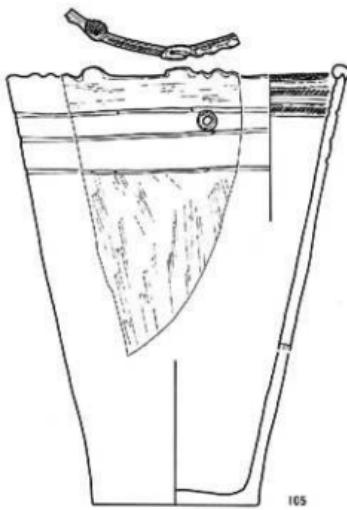
同図106は105と同様の装飾をもつが、内文の刻列は二段となる。外面の横帯文は内部に器面を調整した際の斜めのヘラケズリ痕がそのまま残されており、反対に横帯文以外の器面は良く研磨されている。こうした作業により横帯文内部は光沢のない荒れた器面によって強調されることになる。これは繩文施文部分と同一の効果をもつ技法として、南関東や北関東においても散見される表出技法である。

第21図107は朝顔形の深鉢の口縁部付近で、胴部上半に磨消繩文による三角文が描かれるものと思われる。口縁部付近には「8」字貼付文が付けられるが、組線は付けられない。口縁部は緩く盛り上がる部分があり、おそらくそれらはいくつかの単位を作るであろう。

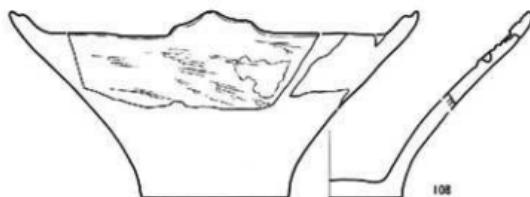
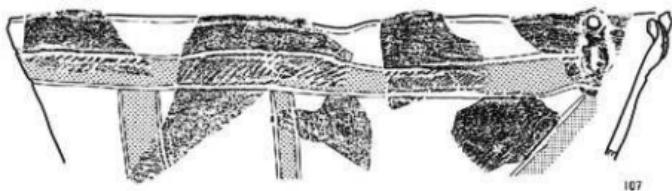
同図108は浅い鉢形を呈し、内面に発達した内文を描く特徴がある。口縁部は小波状を呈するが、その単位はおそらく4乃至3であろう。波状部内面は3個の同心円を中心にして弧線が描かれ、相互に三本の沈線で結ばれている。同心円は非常に細い沈線で描かれるが、他の沈線は内部が研磨され太く浅い特徴的な沈線である。外面は横位のケズリ痕が部分的に残されるが、全体に良く研磨されている。

第22図109、110は無文の朝顔形の深鉢で、110は斜めのヘラケズリ痕をそのままに残す。109の口縁内部には浅い一本の沈線が引かれ、意匠文系深鉢と同一のクセをもつ。これらの無文の土器の出土は比較的多く、南関東などに分布する素文系土器は意外に少ない特徴がある。

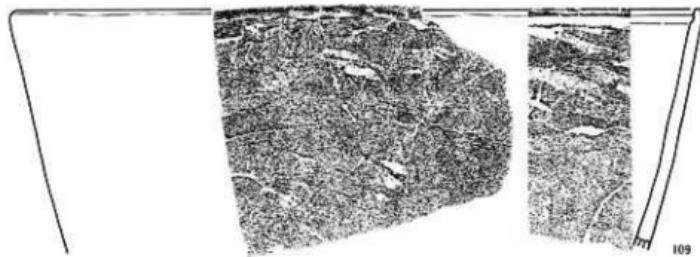
(阿部)



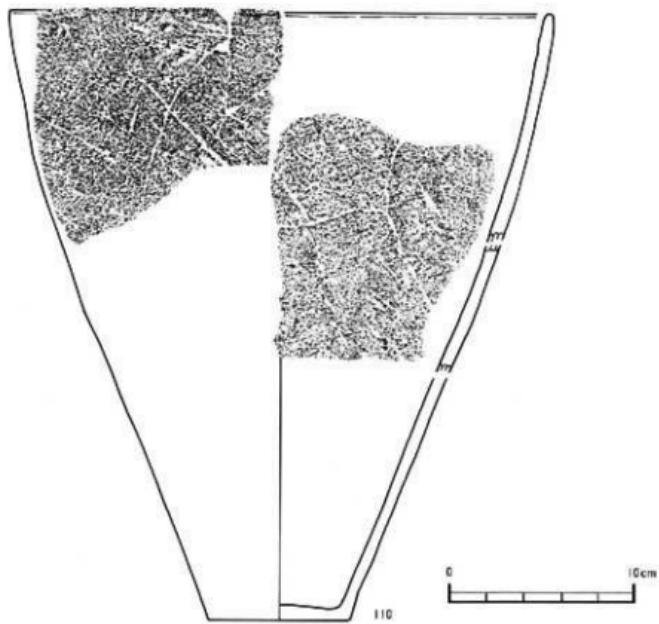
第20図 第1号住居址出土遺物（8）(1/3)



第21図 第1号住居址出土遺物 (9) (1/3)



109



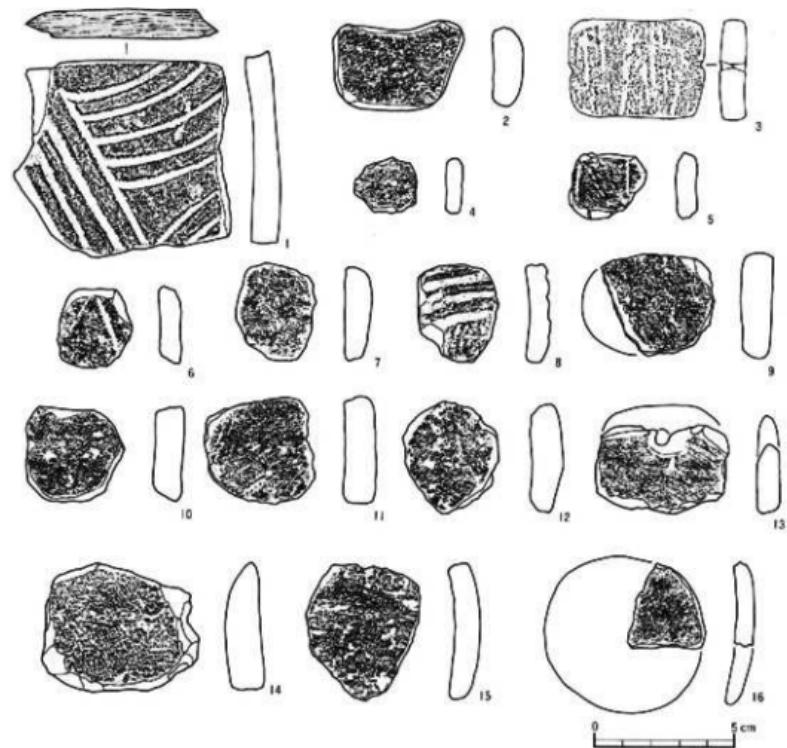
0 10cm

第22図 第1号住居址出土遺物 (10) (1/3)

土製品（第23図）

1, 2は土器片利用の研磨具である。1は瓶之内1式の深鉢の頸部近くの破片を利用している。土器の焼成は良好で、胎土に金色雲母片、石英などを含んでいる。砥面は土器片の割れ口に作り出されており、二次的に被熱している。これは、焼くことによって土器の物性を変化させ、土器片自体から砂粒などの研磨材を得ようとするためと思われる。断面形をみると、砥面の中央が少しへこむ凹形を呈している。このことは、対象物が平坦な面でなく、細長く、棒状であることを示し、また使用の際には砥面の長軸方向に対象物を動かしていたことを示す。

2は土器片の表面から割れ口にかけての部分を機能面としており、かつ使用による磨耗が著しいため、細かな時期を決めるることはできないが、おそらく縄文時代後期の土器の破片を利用している。



第23図 第1号住居址出土遺物 (11) (1/2)

土器の焼成は良好で、胎土には細かい長石粒を多く含んでいる。延面は、研磨材を得るための加熱は行なわれておらず、形態は平らで広い面を研磨するのに適していると思われる。従って、研磨するという機能の点では1・2は共通するが、細かな用途や使用の場面は異なる可能性がある。

3は土器片錠である。在地の土器ではない附加条縄文施文の素文系土器の破片を利用しておらず、胎土は軽鬆で色調は明褐色を呈する。糸かけは長軸方向に一対つくられているが、片側は欠損している。糸かけは浅く、胎土のせいもあるだろうが、かなり磨耗している。周縁部は、打ち欠いて形を整えた後、全体を研磨して仕上げている。

4~16は土製円盤である。5, 6, 8, 13, 14, 16は意匠文系土器、7, 9~12, 15は素文系土器の破片を利用しておらず、3は不明である。意匠文系土器の破片を利用した物のうち、土器片の時期のわかるものは8のみで、後期である。素文系土器の破片を利用したものはすべてケズリ、あるいはナデによって表面を平らに整えた無文土器の破片を使っている。このような土器は、組成率からみても本遺跡では主体をしめる素文系土器である。また、土製円盤の作り方をみると、まず全体に周縁を打ち欠いて形を整え、そのあと一部あるいは全周を研磨して成形している。(前川)

第1表 第1号住居址出土土製品計測表

() 内は推定復元の大きさ

No.	分類	遺存度	重量(g)	大きさ	タテ×ヨコ(mm)
1	研磨具	完形	76.6	68	× 73
2	研磨具	完形	17.3	31	× 46
3	土器片錠	完形	17.5	36	× 48
4	土製円盤	完形	3.5	20	× 23
5	土製円盤	完形	5.5	23	× 27
6	土製円盤	完形	6.6	30	× 25
7	土製円盤	完形	8.7	30	× 27
8	土製円盤	完形	8.2	35	× 28
9	土製円盤	2/3	16.5	34	× 39 (50)
10	土製円盤	完形	15.2	34	× 35
11	土製円盤	完形	20.8	39	× 38
12	土製円盤	完形	13.4	40	× 33
13	土製円盤	2/3	16.4	31 (38)	× 46
14	土製円盤	完形	41.9	45	× 55
15	土製円盤	完形	20.0	49	× 40
16	土製円盤	1/5	5.9	30 (35)	× 27 (57)

石器（第24～27図）

住居の床面と覆土からは28点と比較的多くの石器の出土があった。これらは土器の記載でも記した様に堀之内2式をほぼ単純に出土している事実から、これらの石器の帰属する時期についてもこれに準じて良いと考えられる。

剝片石器は石鎌と使用痕のある剝片に限られ、その他には石鎌を製作する際の石核、原石、製作に際して生じた剝片類などがあり、器種は単純である。

1～4は石鎌である。すべて黒縞石製である。1は抉りの無い三角形であるが、2～4は抉りが浅い。いずれも鎌身が短く小形である点が特徴のひとつである。5～8はそれらの未製品と考えられ、6～8は先端部の作りだしがみられるが、脚部は未完成のまま残されている。

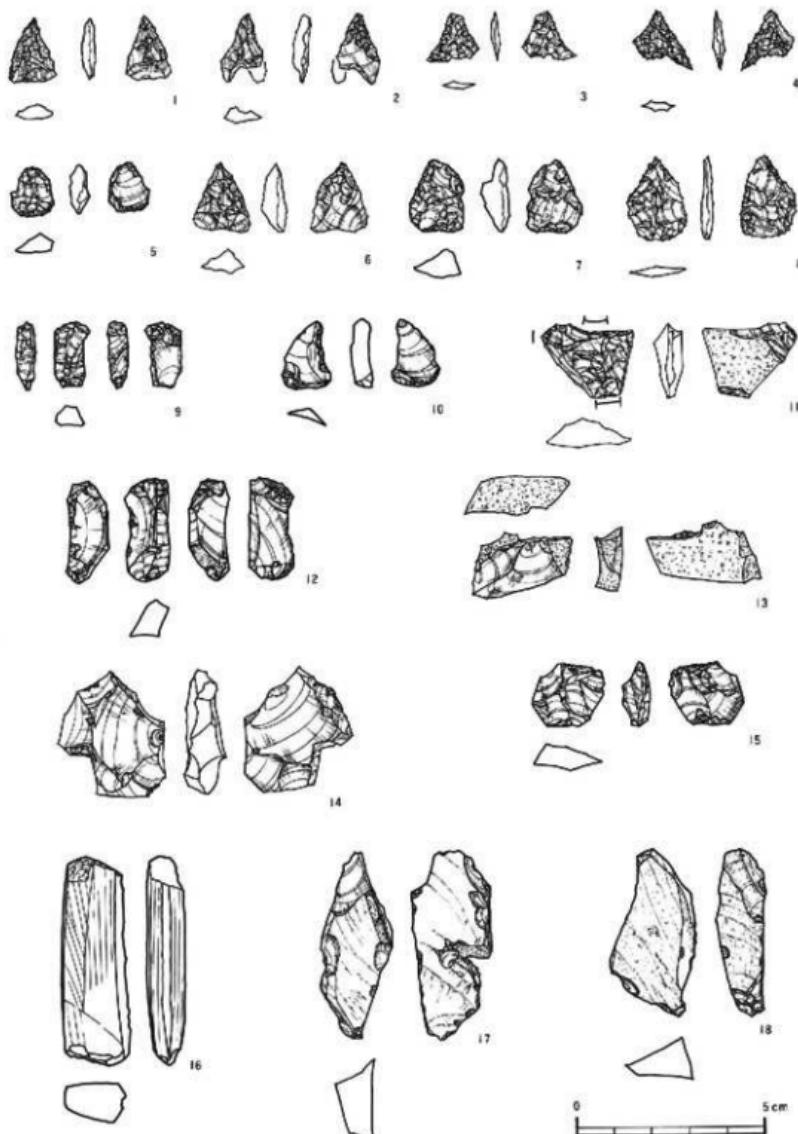
9は上下両端に細かな剝離痕が見られるビエスエスキューである。10は扇形の剝片の一端に使用痕を残すもの。12も同様に側線の一部に使用痕を残すが、本来は剝片石器の素材を提供する石核であったものが転用されたものと考えられる。裏面には縦面を残すもので、原石の形状は本来それほど大きくないものと思われる。

11～13も同様に剝片を打ち剥がした残核であろう。とくに13は三面に縦面を残している点で、原石の形状がやはり小型であることがわかる。こうした推測に加えて、17、18に見る様に住居床面から出土した2点の原石の形状は、そのことを裏付けている。これらの原石は床に設けられたピットの内部より磨石とともに発見された。本遺跡における剝片石器の主体が小形の石鎌である点は、これらの原石が決して石器作りに不適当なため使い残されたのではなく、むしろこうした規格の石鎌の生産の為にその原石の形状自体が有用な意味をもち、原産地で選択されたものが積極的に入手されたものと考えたほうが合理的である。

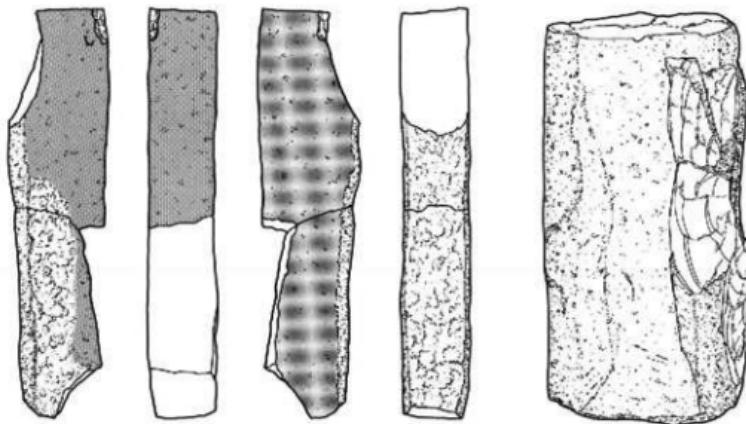
2点の原石と残核の縦面は風化した節理面を残すもので、いわゆる「ズリイ」と呼称される特徴をとどめているので、露頭近くの二次的な堆積層から産出したものと思われる。

16は磨製石斧である。左側面に擦り切り痕が残り、大形の偏平な素材から擦り切られたものと考えられる。刃部には細かなこぼれが見られる。

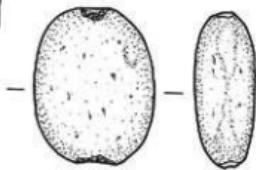
第25図19は板状の砂岩を素材とした砥石である。2点に割れて出土したものが接合している。表裏面と右側面に砥面が設けられている。また表面の色調が赤褐色を呈しており、被熱した痕跡と思われる。砂岩は受熱により劣化し、砂粒の剥落が顕著になる特性がある。一般に砥石の出土例は草創期に多く、以後少くなり、後～晩期に再び増加する傾向があるが砥石自体が被熱しているものが多い。これは池之元遺跡の例を含めて偶然ではなく、こうした熱による変成により素材の物性を変えている可能性が高い。研磨により砥面の砂粒が遊離することにより、研磨材として機能したであろうし、摩擦の大きな荒れた面を維持することが可能となったに違いない。



第24図 第1号住居址出土遺物(12)(2/3)



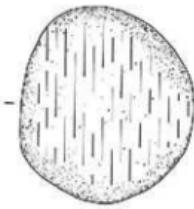
19



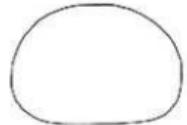
21



20



22



第25図 第1号住居址出土遺物 (13) (1/2~1/3)

20は石棒である。基部を残し上部を欠損する。側縁に剥離痕が残る。素材は角柱状の棒状礫であり、この稜上を敲打により潰して円柱状に仕上げている。同様の特徴は本地点付近からかつて採集された完全な石棒（第63図）についても言えることであり、共通の製作技法があったことを示すであろう。21は石鍤である。偏平な礫の両端部に敲打による紐掛けの抉りが作りだされている。22は磨石で表裏面に機能面が作りだされている。

第26図23～25、第27図26、27の5点の磨石は住居の敷石部脇に掘られたピットの内部とその付近から出土したものである（写真7）。これらは球状に近い形状の第26図23、第27図26と楕円形の第26図25、第26図27に区分される。楕円形のものは表裏面の偏平な部分を機能面としており、反対に球形のものは側面に顕著な使用痕を残さないものがある。

第27図28は下端部に敲打痕が残り敲石に使われた可能性がある。これらの石器は素材の相違や機能面の位置、形態の特徴などから、同一の用途の異なる種類と考えた方が良いであろう。こうした石器の保管場所としてその出土状態には興味深いものがある。第27図28は炉址の石甌に接して床面に据えられていた大形の磨石である。側縁と表裏面の平坦部に機能面をもつ。先の磨石とは大きさや形状が異なる点からも、これらの磨石には用途の違いが想定され、床面におけるそれらの出土場所の違いは、そうした事実を間接的に伝えるものかもしれない。

（阿部）

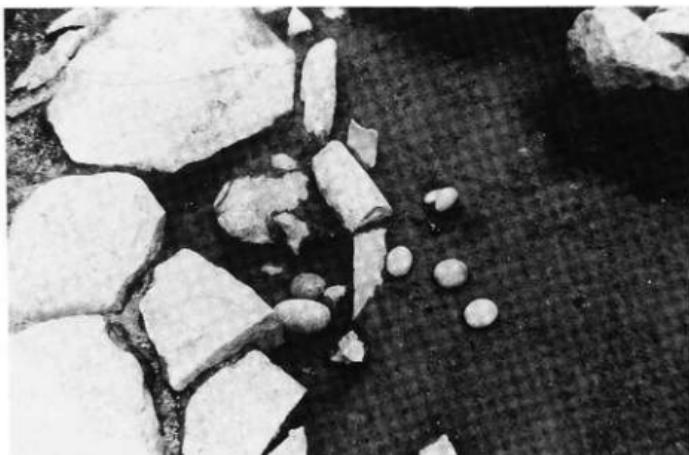
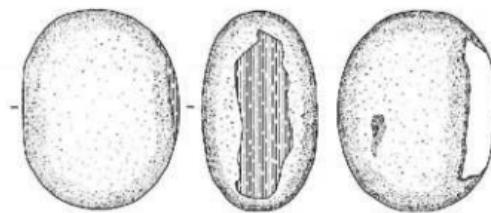
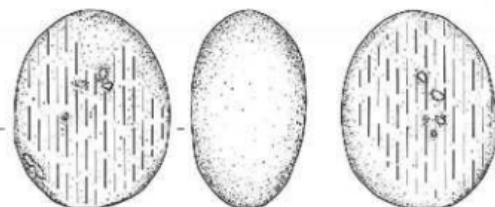


写真7 第1号住居址床面における石器出土状況

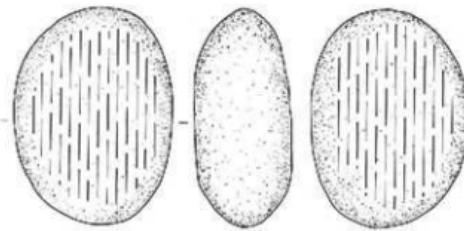
入口から炉址に続く石敷の傍らの床面を掘りくぼめて、掘り込みの内部に磨石や黒耀石の「ズリ石」を収納している。また周囲の床面上にも磨石が発見されており、これらは火災による被熱の痕跡をとどめている。



23



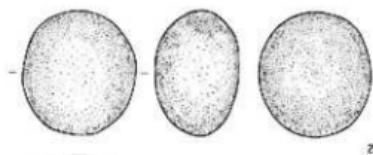
24



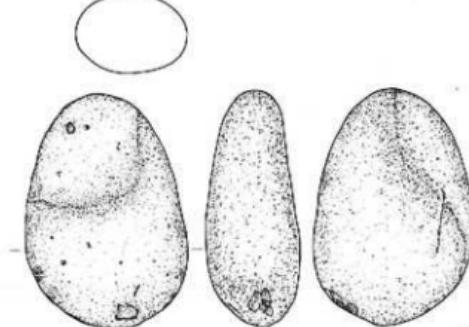
25



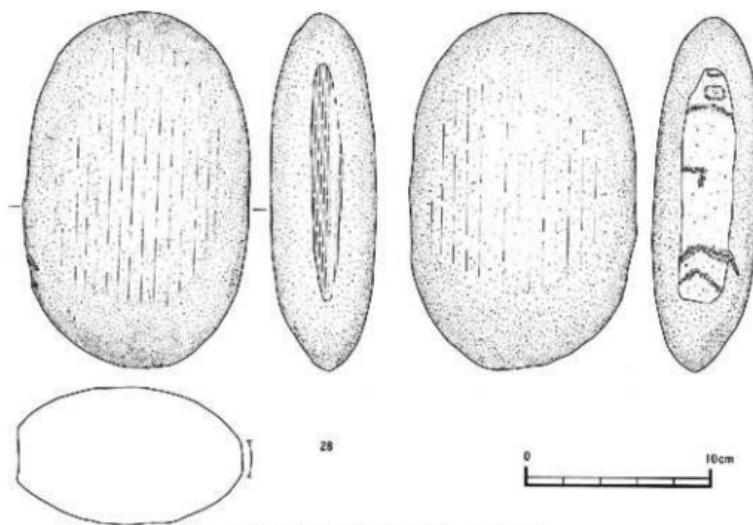
第26図 第1号住居址出土遺物 (14) (1/3)



26



27



28



第27図 第1号住居址出土遺物 (15) (1/3)

手に持つことのできる道具に対して、その大きさや用途から、多くは床に据え置かれる石器の中に石皿がある。本住居ではその出土はなかったが、それに替わるべき、または同じ機能を充分に果たす施設が発見された。

住居の入口から炉にかけて直線的に敷かれた石敷のなかで、一際大きく、また炉に近接した一枚の表面には、皿状の窪みが作りだされていた（写真8）。窪みの大きさは、長さ20cm・幅15cm余りで深さは約3cm程である。その形状や窪みについた機能面の状態は石皿に酷似している。いわば床面に据えつけられた石皿という表現に相応しいこの施設が炉の近くに設けられているのは恐らく偶然ではなく、住居内におけるこの場所が食物の日常的な調理加工空間に充てられていた事実を反映するものと考えられる。

先述した床面ピット内における磨石の保管状況や、炉に接して置かれたやや大形の磨石などの在り方と関係し、これらは住居内における一連の道具の使用・保管状況を良く示す一例と考えたい。

床面におけるこうした施設や道具の配置は、石皿の作り付けや奥壁付近における注口土器を保管する溝状の施設の在り方も含めて、住居の建築の当初から器具や施設の配置が計画的に行われたものと思われ、住居内における作業空間の性格や間取りが、かなり厳格に取り決められていた事実を暗示するであろう。



写真8 第1号住居址敷石上面の加工痕

炉址に近接する部分に敷かれた大形の平石の上面に石皿のような窪みが作りだされており、炉址付近での加工作業を推測させる状況が確認された。

第3号住居址

本住居は第1号住居址の東側約5mの地点に発見され、北側は調査区域外に延び、東側は後世の擾乱により壊されていた。住居の発見は砾穴の掘り込みよりも、その周囲を取り巻く礫帯が掘り込みの確認面よりも高いレヴェルで発見されたため、第1号住居址と同様の構造の住居の存在が予測できた。この礫帯は第1号住居址の礫帯の東側の一部でラインを共有するが、礫のレヴェルが第1号住居址のそれよりも高く、それらは比較的容易に区分できた。

礫帯は南側で掘り込み部分と接し、大形の礫が壁に沿うように配置されている。この部分が入口になるものと思われる。第1号住居址のような柄鏡形の出入口施設はもたないが、大形の礫を配する点は似ている。住居の西壁には小礫が配されており、壁体の補強の為のものと思われる。床面に敷石は観られず黒色土を床面としている。またこの床下には、ローム層に作られた床面と地床炉が検出された。そしてこの住居を第3号b住居址に、新しい方を第3号a住居址と仮称した。

この住居も第1号住居址と同様に重複住居と考えられる。しかし古い床面から出土した土器と、新しい住居に伴う土器は堀之内2式である点から、比較的短期間のうちに作り替えが行われたものと思われる。こうした状況は第1号住居址と同様であり、池之元遺跡での居住活動の特色を反映しているのかもしれない。

なおこの住居の覆土中には大小の礫が含まれ、また焼土や焼けた獸骨、黒耀石の剝片や石鏃が出土し、礫のうちの幾つかは覆土中に掘りこまれた土坑に配されたものと考えられた。

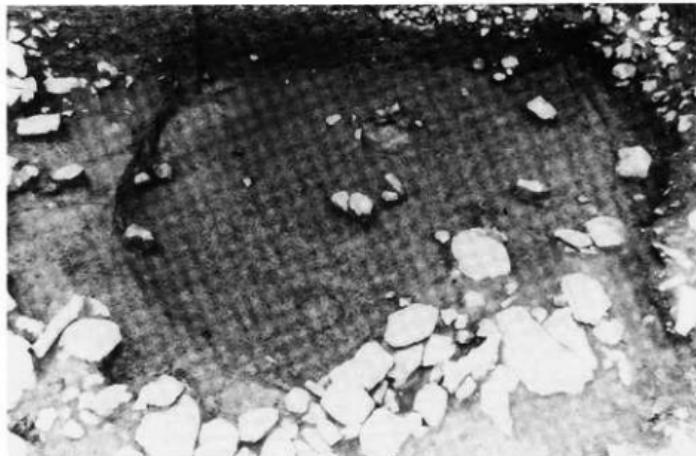
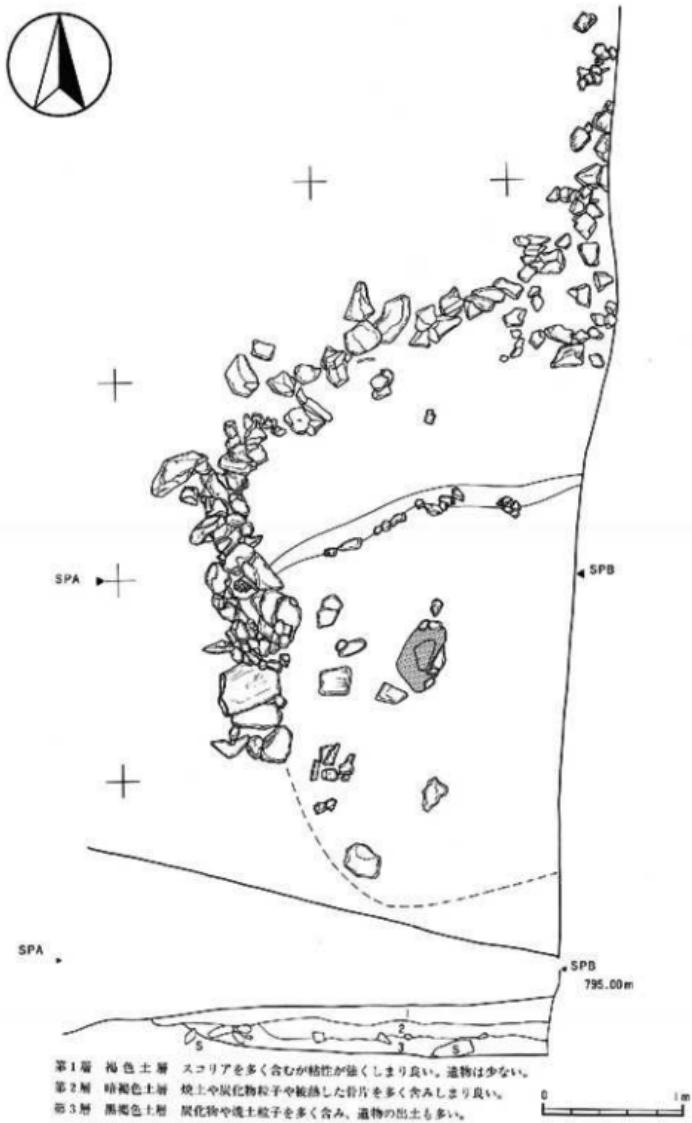


写真9 第3号住居址完掘状況(配石および敷石除去後)

掘り込みのプランは円形で中央付近に地床炉が設けられており、傍らに前岩境が設えられていた。



第28図 第3号住居址実測図

第3号b住居址出土の遺物 土器（第29図）

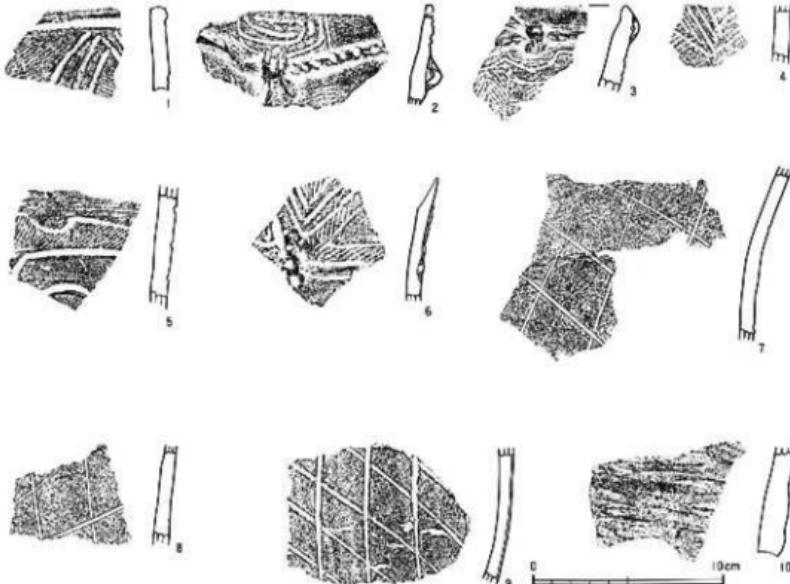
調査面積が狭いため古い住居に伴った遺物は少ない。第29図1～6はすべて堀之内2式に比定される土器でこの住居の時期を判定する手がかりとなる。

1は胴部の膨らむ深鉢の剥部で、沈線により頸部の無文帶と区分し、胴部に沈線による弧状の文様を描き、この文様間に筋の細かい繩文が施文される。

2～5は頸部形の深鉢で、2は口縁部付近の紐線と貼付部分である。「8」字貼付文が付けられるが、この上部に渦巻文が描かれる点が3などの他の同類と異なる。3は同類で「8」字貼付文の下部に弧線を引き胴部文様上端と区分する。4、5も同類の胴部であり、磨消繩文の表出が行われる。

6は剥部の膨らむ深鉢の頸部である。本来はこの器種の頸部は無文のものが一般的であるが、頸部に磨消繩文による文様を描く。この文様帶内部は縱位の細隆線が付けられ、下端に「8」字貼付文が付けられている。文様は三角形を組み合わせるものである。

7～9は無文地に細い沈線による格子目文を描くもので、口縁部が外反し胴部が緩く膨らむ深鉢であろう。10は指頭による横位の成形痕を残す深鉢である。内面は平滑に成形されている。こうした特徴をもつ素文系の土器は西南関東から北関東のこの時期にみられるが、少數が伴うのみでこの土器が主体をなす地域は管見にない。



第29図 第3号住居址出土遺物(1)(1/3)

石器（第30図）

本住居から出土した石器は5点と少ない。第30図1、2は黒縞石製の石核で、1は上下に細かな剝離痕が残る。2は側面にも剝離痕が残る。ともに小型で厚みをもつことから、やはり小型の小砾から剝片が剝離された工程を示しているものと思われる。

3は立方形に面取りをおこなった磨石で側面部には角柱状の棱が残り、素材からの製作工程がわかる。厚みがあり、他の磨石と特徴を異にする。また石材も多孔質の溶岩を素材としているためか、重量が軽く、また磨面などの明確な使用痕跡が見られない。あるいは、ものを擦り潰したり碎いたりするのとは異なる用途に用いられたものかもしれない。

4、5は卵形の磨石である。表裏面に広く磨耗した使用痕跡が見られる。4は側面端部に敲打痕を残す。敲石としての機能もあわせ持つものらしい。5は断面が略円形で、厚みがある。



第30図 第3号住居址出土遺物（2）(1/3)

第3号a住居址出土の遺物 土器（第31～39図）

ここでは覆土中に設けられた配石墓周辺の遺物は除き、おもにその下の住居覆土から出土したものについて説明をする。

第31図1は2本の沈線による渦巻文を描くもので、堀之内1式の古い部分に並行する下北原系の土器であろう。2は口縁部に一本の太い沈線を周回させる深鉢の口縁部であり、沈線の下端に刻列がある。堀之内1式であろう。

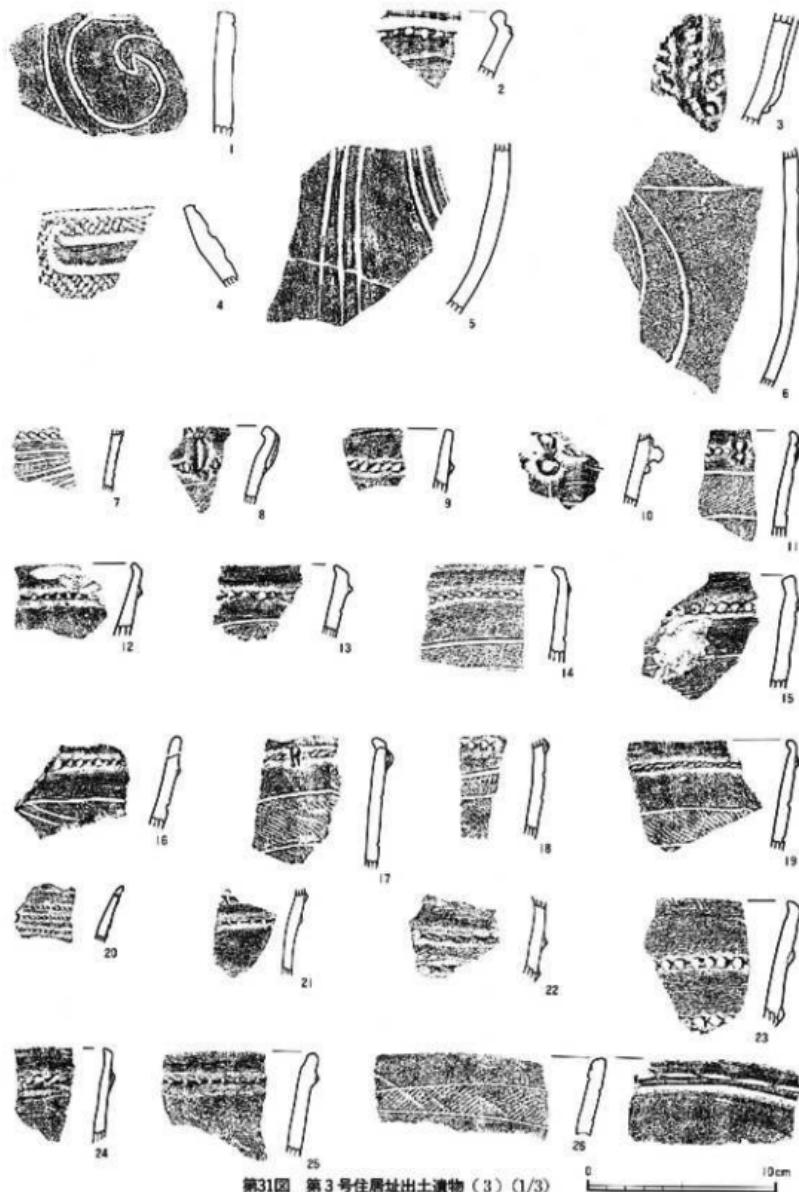
3は刻みを施す細線が二本縱位に付けられる深鉢の頸部である。4は同様な形態の胴部付近であり横位に区画が施され、縄文が施文されている。5、6は沈線のみによる縱位の弧線を描くもので、器面はよく研磨されている。堀之内1式に比定されるであろう。

7～26は堀之内2式の意匠文系深鉢の口縁部である。26以外はいずれも口縁部に紐線が巡り、以下に幾何学的な文様が描かれ、磨消繩文が用いられる。これらの口縁部はその断面形態が内側に「く」字に緩く折れ曲がる点が特徴で、共に良く研磨されている。

26～28は口唇部上端または内面に独立した装飾をもつもので、27は「く」字に内折した部分に渦巻文が描かれる。28は紐線文の上部に貫通孔をもち、口縁部の上端に「S」字状の文様が描かれる。また内面にも「U」字状の沈線文が描かれるものである。これらの文様は紐線文により区分された口縁部上端の無文部分に描かれるもので、その系譜には口唇部に沈線を周回させる堀之内1式の口



写真10 第3号住居址周辺検出状況（北側より）



第31図 第3号住居址出土遺物 (3) (1/3)

縁部文様を考えることができるかもしれない。

29~37, 39, 40は同類の胴部である。磨消繩文の多用により、幾何学文様や曲線的な渦巻文様などが描かれる。40は二本の沈線により渦巻文を描くが、文様内部に繩文の充填ではなく、粗いヘラケズリ痕が残る。繩文に見立てたこうした文様表出技法は、本遺跡では少ないが、関東西南部から北関東にかけて多く分布する。

38は二本の沈線が絡み合うモチーフを描くもので、この文様は注口土器や意匠文系や小形の鉢に特徴的に描かれる文様である。本例は鉢形にならうか。

41, 42は櫛齒状工具による矢線により幾何学的な文様を描く鉢である。43は底部である。底面には目の細かい網代痕が観察できる。

44~53は胴部の膨らむ鉢で44, 45は口縁部である。II縁部上端部が「く」の字状に内折するのは朝顔形の深鉢と同様であるが、堀之内2式では組線が付かない点が異なる。45は口縁部上端に小さな突起が付き、ここから組線が垂下する。46, 47も同様であろう。

48, 49は頸部である。組線により頸部の無文部分と胴部の文様帶が区分され、45は組線の上に円形貼付文が付けられる。

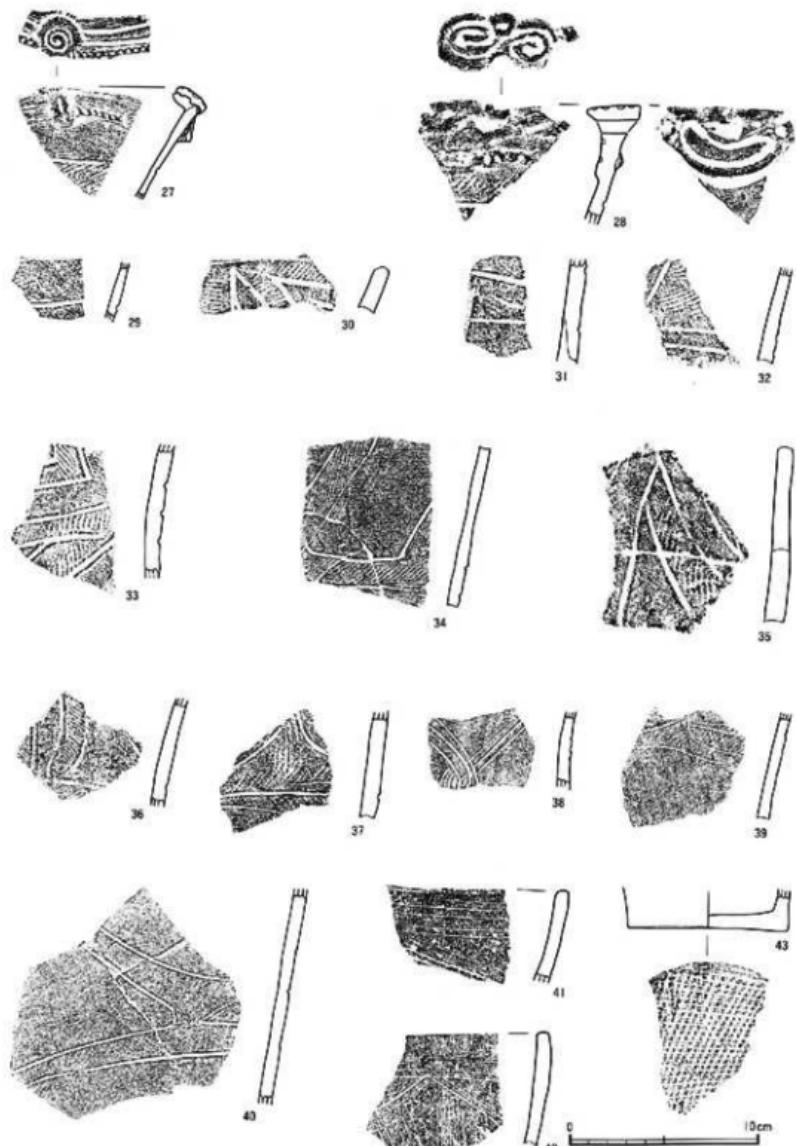
50~53は胴部である。50, 51, 53は沈線により区画された文様内に、繩文が充填される特徴が見られるが、52は沈線文の区画の外部に繩文が施文される。こうしたくせは堀之内1式の関東西南部に多く見られるもので、53は他よりも古くなる可能性がある。

54, 55は浅鉢の口縁部である。II形の突起が口縁部につくもので、貫通孔をもち内面に文様が描かれる。外面は粗い調整痕がそのままに残されている。おなじ浅鉢でも、55は内外面ともに良く研磨されている。55は内面に三本の太い沈線が巡る。

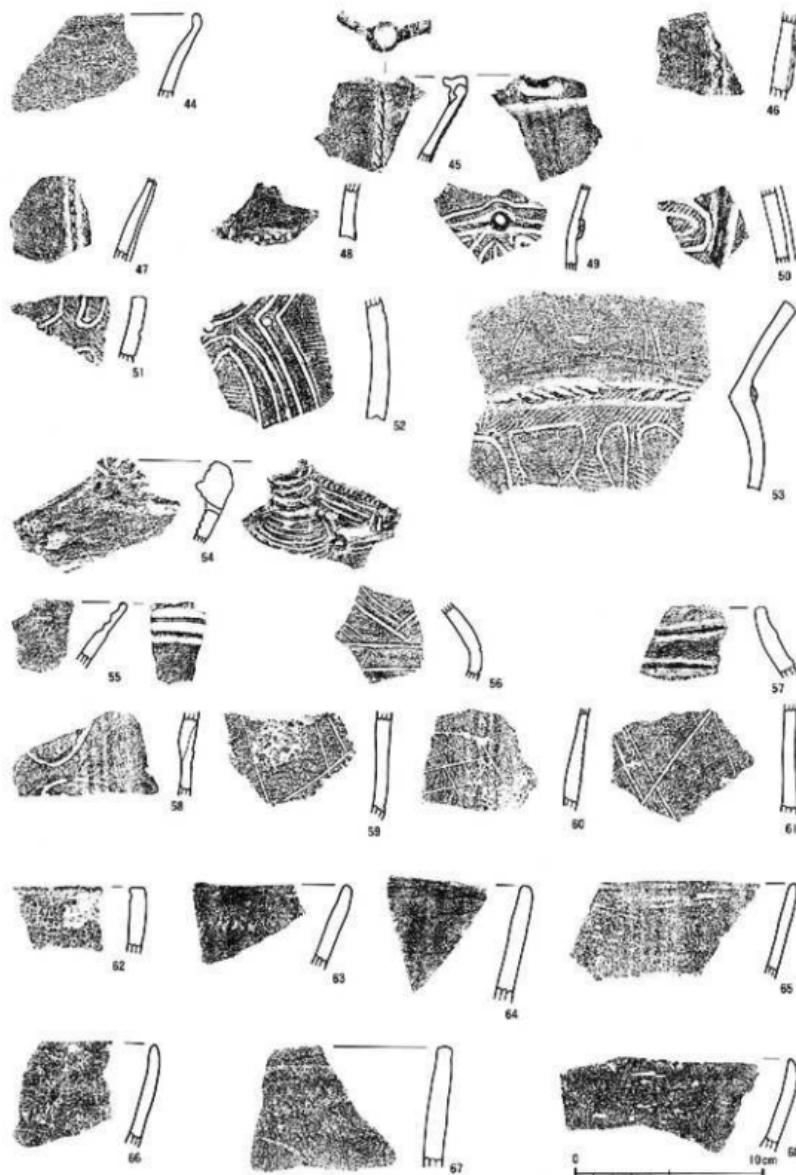
56, 57は注口土器の胴部である。56は胴部の屈曲部分で上半には幾何学的な文様が描かれる。57は口縁部下の部位に細縫起線が巡るもので、両者は異なる文様の系列にあることはすでに述べた。

58は曲線文を描く素文系土器である。本遺跡では少ない。59~61は細かい不規則な格子日文を描くもので、こうした文様は素文系土器と意匠文系の朝顔形の一部に採用されるが、59, 61は素文系で60は器面の調整などから、意匠文系の朝顔形の胴部の可能性もある。

62~68は無文で外面は粗いヘラケズリ痕が残される深鉢で、本遺跡の主体を占める素文系の深鉢である。口縁部の断面は丸頭状のものが主体であるが、まれに68の様に外削ぎ状を呈するものもある。池之元遺跡では、こうした無文の素文系土器が主体を占めるが、その割合は意匠文系土器よりも少ないので、またこれ以外の特徴をもつ素文系の深鉢も存在する。無文の土器は各時期に存在が知られるが、その割合は概して本遺跡よりも低い。池之元遺跡の無文土器はそうした前時期からの系譜を引くのか、あるいはまた、この時期にあらたな系譜をもって成立するのかという点は、後期以降に割合を高める素文系土器の動態と関係して重要である。器面が無文であることのほかに、形



第32圖 第3號住居址出土遺物(4)(1/3)



第33圖 第3號住居址出土遺物(5)(1/3)

態が朝顔形の意匠文系深鉢に通じる点はその系譜を考える点で重要であろう。69~73は同類の胴部である。

74~82は外面にナデ痕を残す深鉢で、ともに口縁部以下胴部付近までは横位に、その整形痕が一面に残される。一方内面は対象的に丁寧に整形されており、外面の特徴が他の素文系土器と異なるある種の際立つマークとしての効果をもつらしい。

こうした特徴をもつ素文系土器は、関東西南部から北関東にかけて分布するが、これのみが素文系土器の主体を示す地域には管見にはない。時期的には後期初頭の称名寺式以降に見られるものである。その系譜については明らかではないが、成形痕が横位を主体として、胴部に膨らみをもつ形態上の特徴から、あるいは東海地方以西の貝殻条痕調整の素文系深鉢との関係が述れるかもしれない。こうした特徴の土器が、後期初頭以降に顯著となる点にも今後注意を払う必要があろう。

83~102は附加条縄文を施文する深鉢の一群である。82~88は口縁部の破片である。大形の素文系的な深鉢ではあるが、口縁部の断面形態や成形手法は相互に良く似たくせがある。口唇部は良く撫でられ、内面は丁寧なナデ整形が施されている。この土器の型式学的な特徴は縄文原体である。太い撫り紐を素材とした附加条縄文であり、口縁部以下胴部付近までを施文域とするようである。89~102は胴部であるが、101は胴部でも下部で、底部までは無文部が残されていたことを示す。

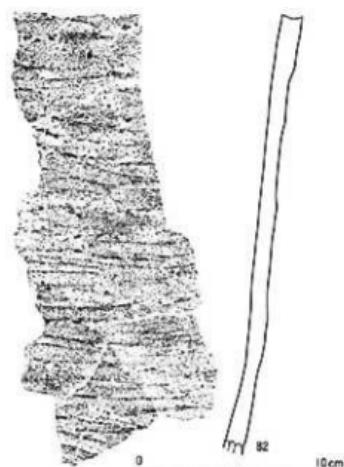
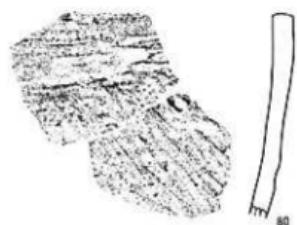
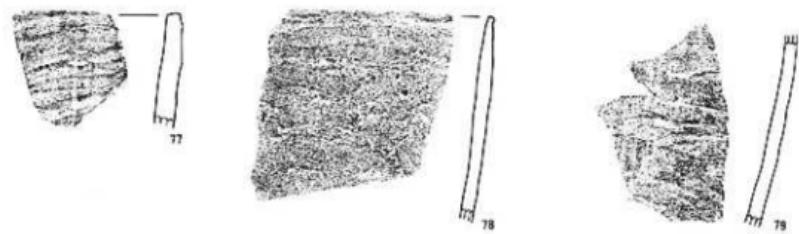
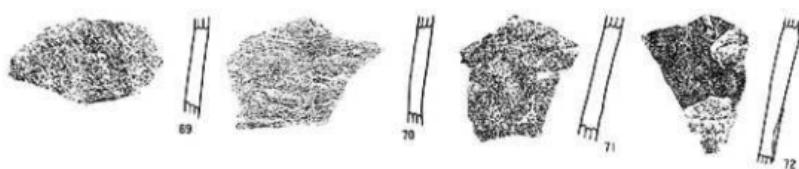
口縁部の曲率から径を推すと、相當に大きなサイズのものもある。これらの胎土は灰白色を呈するスコリア状の混入物を多く含み、明るい色調を呈する特徴がある。こうした外見上の特徴は、おそらく胎土自体の差異を反映するものと想像できるが、肉眼による鑑定には限界がある。これらの土器群を含めた後期土器の胎土の分析については研究編でその成果を示した。

またこれらはいずれも個性的な撫りの縄文のみを施文する点も、池之元遺跡の主体的な素文系土器群とは異なる点であり、その分布域については他の地域が推定されるべきである。本遺跡においては、おそらく搬入品としてもたらされた可能性が高い。大形の素文系土器の移動という現象が、胎土分析などの理化学的手法により明らかにされれば、意匠文系土器の広範な移動が主流となる、従来の土器の移動形態とは異なる背景が考慮されるべきであろう。

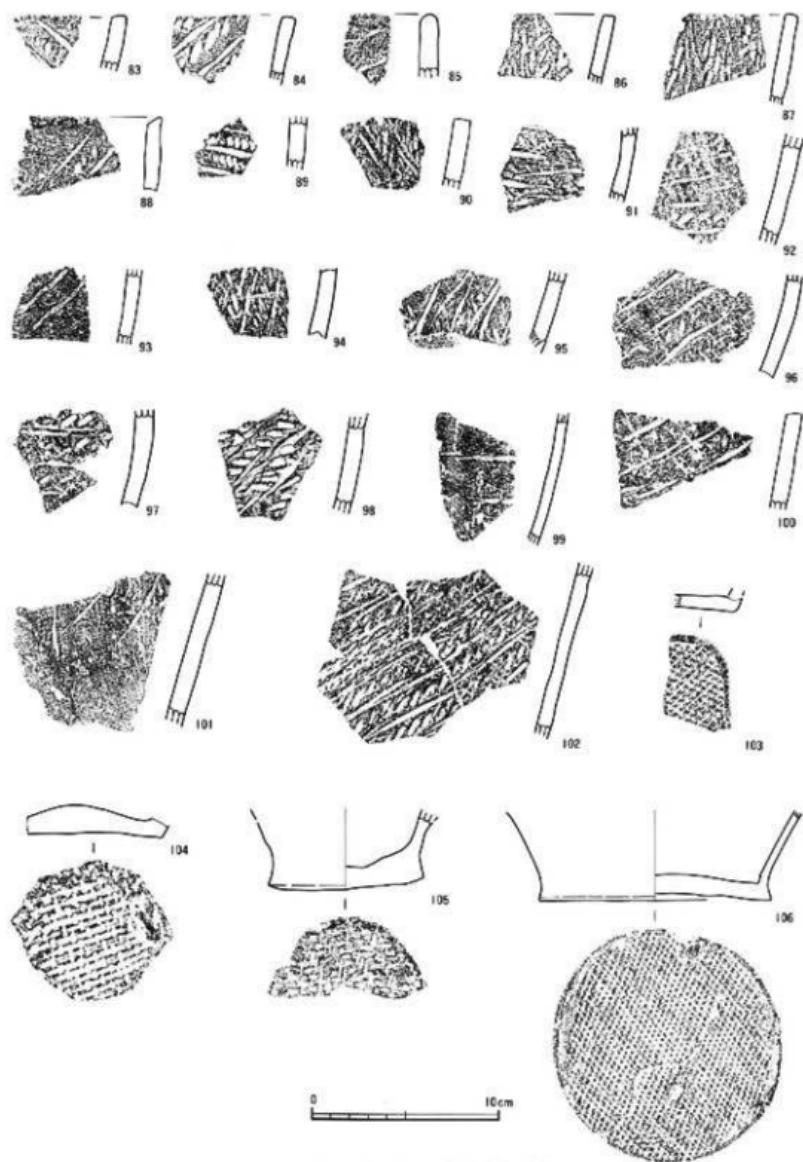
103~106は底部である。いずれも意匠文系土器のものらしく、底面には細かな編み目の網代痕が残されている。そのなかでも103は方形の底部になるらしい。

第36図107は堀之内2式の意匠文系の朝顔形深鉢である。口縁部には突起の付いた痕跡があり、この部分の内面には半円形に沈線文が重ね描かれる。内文はこの突起部分のみに見られ、他の部分には一条の沈線が周回する。堀之内2式の内文には、内面を装飾が全周する性格のものと、本例の様に突起に付着したものの二態があるようで、それぞれの系譜は相互に影響し合い複雑である。

文様は胴部上半に帯状に区画された縄文帶を配し、その内部に交差に縄文を施文する。また口縁部に巡る「8」字貼付文に対応して、この文様帶が縦位に区画されている。



第34図 第3号住居址出土遺物（6）(1/3)



第35図 第3号住居址出土遺物(7)(1/3)

縄文が無文部分をあいだに挟み交互に施文される点は、他の文様の系列と同様で、堀之内2式の磨消縄文の盛行とともに発達する交互縄文充填技法とも呼べる文様表出技法である。

第37図108もモチーフは異なるが、同様の文様表出技法をもつ深鉢である。口縁部の内面には一条の凹線がめぐり、外面には紐線を周回させる。胴部上半に幅の狭い文様帯を配するが、その内部は上下に向かい合う弧線と菱形のモチーフを配し、内部に縄文を充填する。

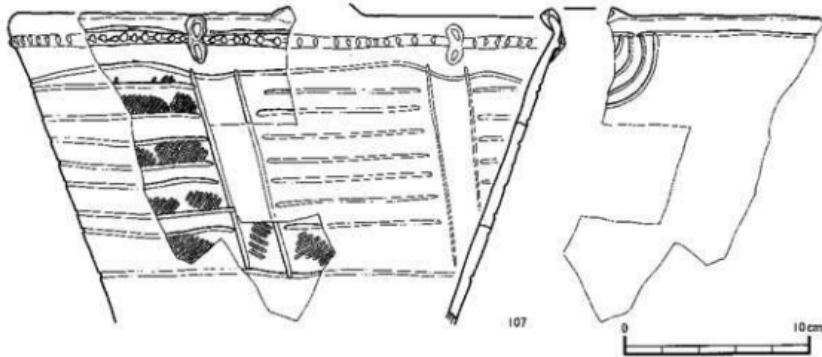
109は口縁部に紐線が付く無文の深鉢である。紐線自体の刻みは乱雜で意匠文系土器のそれとは多少異なるが、形態や紐線の配置などは、堀之内2式の朝顔形の意匠文系深鉢に似る。また、胴部の文様ではなく、器面には縦位のヘラケズリ痕とナデが施されているのみである。堀之内2式の無文深鉢のなかで、こうした意匠文系土器と共通する特徴を一部にもつものがある点は興味深い。

110は胴部が膨らみ器高の低い鉢である。口縁部は小波状を呈し、2個の突起が付き、ここから一本の紐線が垂下する。頸部は無文で、胴部以下には懸垂文が描かれる。胴部文様帯の上端の区画も紐線により行うもので、紐線は朝顔形の深鉢と良く似たくせをもつ。

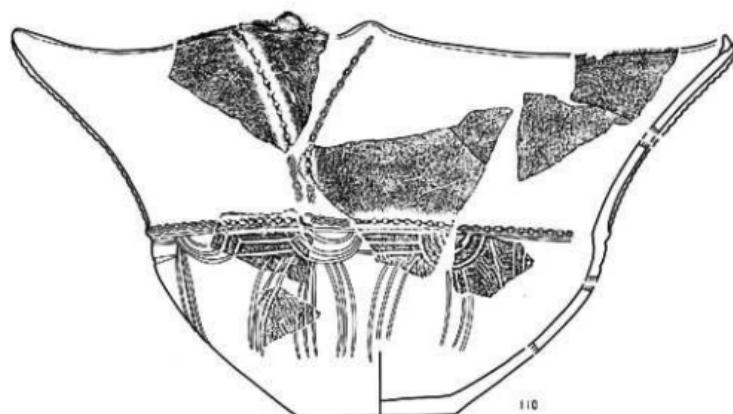
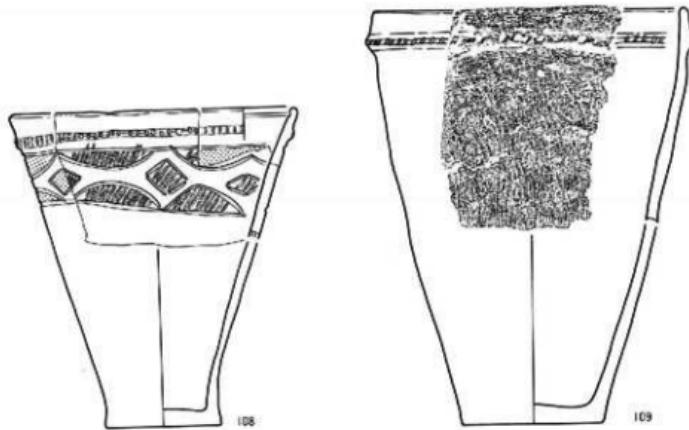
この形態の鉢は堀之内1式以来、朝顔形の深鉢とともに、この時期の意匠文系深鉢の主要な器種である。堀之内2式では頸部の区画を紐線で行うものが概ね2式の範疇に入るが、東関東では沈線区画が根強く残り、この観点からのみでは一線を画しがたい。紐線の刻みのくせなどは2式の朝顔形深鉢に近似するので、こうした細部の比較が有効かもしれない。

器形が本例のように浅くなる傾向が中部地方から関東西南部において認められる特徴のひとつである。本例は器面が良く研磨され黒色を呈し、意匠文系土器の座を保つが、同様の文様帯をもち素文化の進行する流れもある（第47図1）。

胴部の文様は沈線による懸垂文が頸部の垂下線の下に対応するように配され、沈線の間に磨消縄文が充填される。



第36図 第3号住居址出土遺物（8）(1/3)



第37図 第3号住居址出土遺物(9)(1/3)

第37図108、109は朝顔形の深鉢であり、108は口縁部に刻みを施す紐線を一条貼付し、以下に帯状の文様帯を構成する堀之内2式通有の意匠文系土器である。これに対して109は、口縁部下の紐線以下が全くの無文となっており、縦位のケズリ痕と研磨痕が残る。108と同様の形態となろうが、素文化が進行しており、深鉢A類から生成される素文系土器の特徴といえる。

108の胴部文様は上下に向かい合う弧線文を描き、さらにその空白部分に菱形のモチーフを配した構成が一帯化しており、内部に繩文が充填されている。

109は胴部が無文となり、108の素文化したものと説明できるかもしれないが、こうした土器は本遺跡においても少なく、また関東地方においては非常に少ない。無文という特徴を評価するならば、中部地方における当該期以降に顕在化する深鉢や鉢類を主体とした素文化の傾向の流れの上に捉えられるであろう。素文化の傾向は朝顔形の深鉢A類以外でも進行するが110の器高が低く、口縁部が外反する鉢などは胴部が緩く膨らみ、沈線と繩文による文様が描かれ、頸部は無文となるが、こうした状態の系列は、加曾利B1式への変遷の中で胴部の文様帯が退化して、さらに器高を低くして、直線的に外反する浅鉢へ変遷する。しかしながら、口縁内面に文様帯をもつなど、意匠文系の系列上の変化として捉えられる点が、深鉢A類とは異なる点であろう。

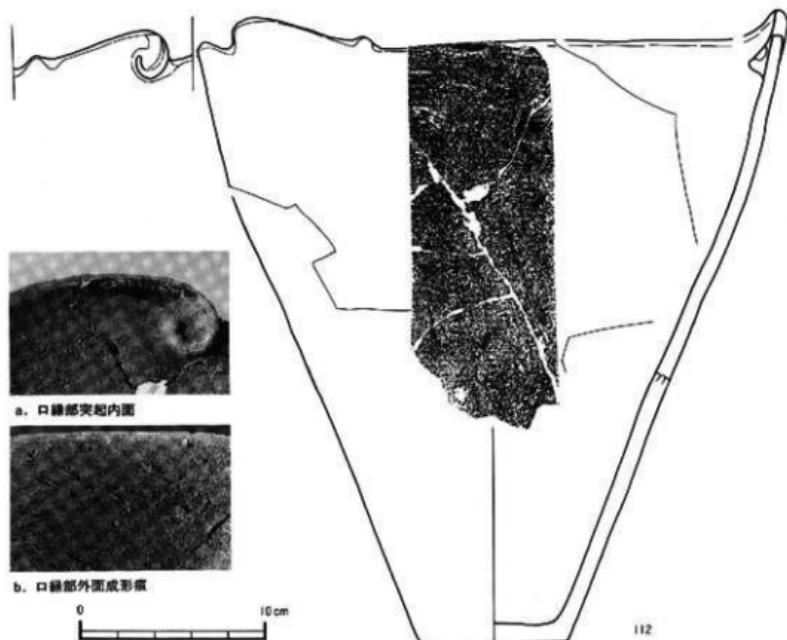
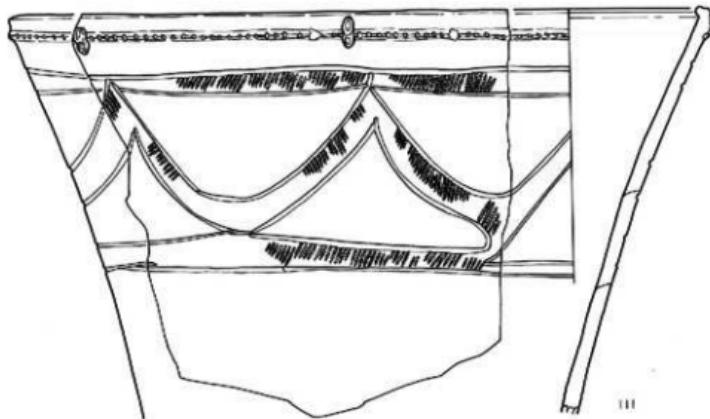
第38図111は朝顔形の深鉢である。第37図108と同一の器種でありながら、大きさにはかなりの違いがある。胴部以下を欠損するが器高は40cm近くに復元される大形の深鉢である。口縁部には刻みを施す紐線が巡り、要所に二個一対の刺突をともなう「8」字貼付文が付されている。胴部の文様帯は二本の沈線により連続する三角文が描かれており、内部に繩文が充填される。

112は緩く口縁部にむかって開く大形の深鉢である。器表面には削り痕が顕著に見られ、まったく文様が描かれない素文系の深鉢である。ただし口縁部には耳状の突起が付けられており、とくに内面には隆起線による横位の渦巻文が描かれている。こうした突起の特徴は朝顔形の深鉢に往々にして見られる装飾であり、この土器が素文化する以前の系列を伝える要素のひとつかもしれない。

第39図113は深鉢の胴上半部である。口縁周辺がやや肥厚し、口唇部は丸頭形か、角の取れた角頭形を呈する。外面は器面上にケズリ調整の後に左頬位の太い付加条繩文が施文されている。同様の土器は第1号住居址の覆土（第15図84～97）や第3号住居址の覆土（第35図83～102）と遺構外（第54図99～143）などからも破片が出土しており、堀之内2式の時期のものであることは間違いないであろう。またそれらはいずれも赤～黄褐色を呈し、胎土にスコリア様の粒子を含み、多孔質な胎土である。本資料を含め器形はいずれも単純な深鉢形であり、繩文原体の捺りや胎土などの諸点において、本遺跡の主体を占める土器とは胎土の調整や製作技術等が異なる土器であることが推測される。

114は無文の大形の深鉢である。外面にはナデとケズリ痕が見られる。

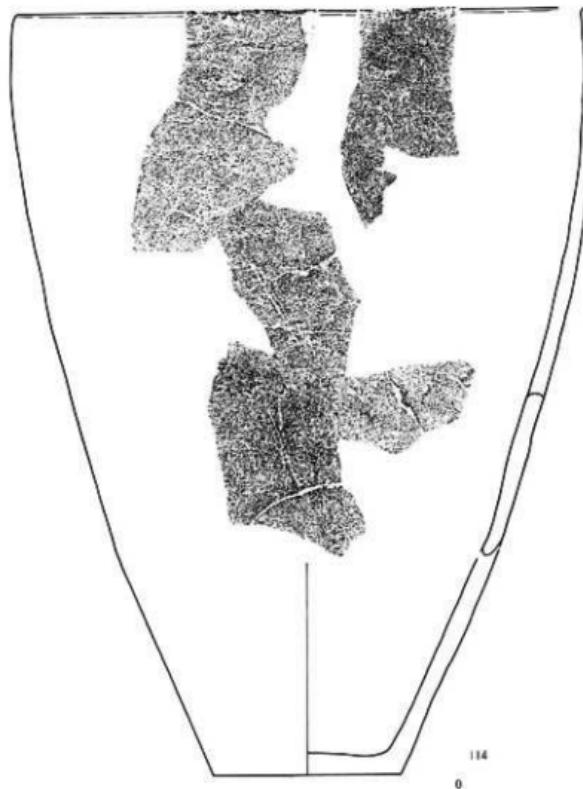
本住居址から出土した土器は比較的豊富であり、しかも第38図111、112をはじめ床面から出土し



第38図 第3号住居址出土遺物(10)(1/3)



113



114

0 10 cm

第39図 第3号住居址出土遺物 (11) (1/3)

た個体復元可能な資料もある。後述する覆土最上面に構築面をもつ配石造構から出土した土器は年代的に後出する要素が多くみられる。覆土下面ではごく僅かな異型式を除けば、堀之内2式が単純に出土しており、本遺構の時期を示唆する。

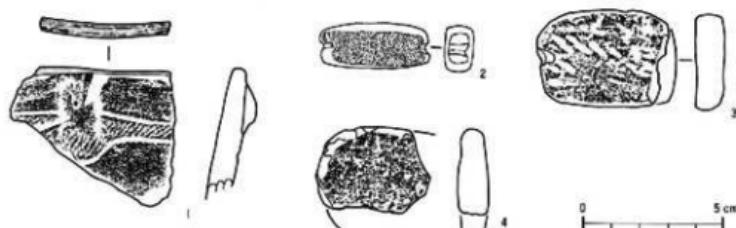
土製品（第40図）

1は土器片利用の研磨具である。堀之内2式の朝顔形深鉢の土器の口縁部破片を利用している。土器の焼成は良好で、黒色研磨の技法を用いており、胎土には金色雲母片や白色鉱物の、比較的大粒の大きな物を含んでいる。底面に加熱の痕跡は認められず、断面形をみると中央が高く凸形を呈している。このような底面のかたちは、細かい溝など被加工物の凹面を研磨するのに適していると思われる。

土器片利用の研磨具は、本遺跡では3点出土しているが、各々底面の形態を異にしており、用途の別をうかがわせる。本遺跡では砥石も3点出土しており、土器片利用の研磨具の性格を考える上で重要なと思う。

また、土器片利用の研磨具は、東京都延命院貝塚（種泉1990）、千葉県加曾利貝塚（阿部1991）でも出土している。

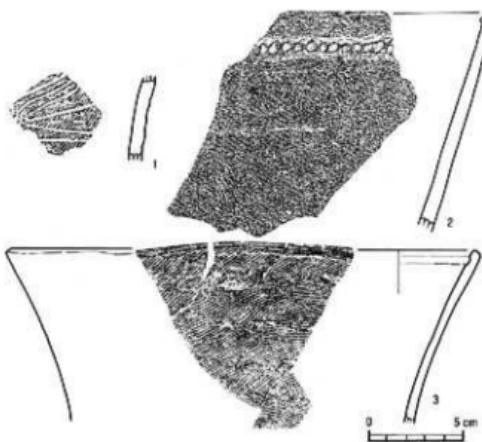
2、3は土器片鍤である。2は黒色研磨の意匠文系土器の無文部の破片を利用したもので、胎土は緻密である。形を整えた後に、周縁部を研磨して調整している。紐かけは長軸方向に一対作り出されており、鋭く、使用の痕跡はわずかにみられるが顯著ではない。



第40図 第3号住居址出土遺物(12)(1/2)

第2表 第3号住居址出土土製品計測表

No.	分類	遺存度	重量(g)	大きさ タテ×ヨコ(mm)
1	研磨具	完形	25.6	48 × 58
2	土器片鍤	完形	8.4	16 × 39
3	土器片鍤	9/10	15.7	34 × 47 (50)
4	土製円盤	1/3	15.4	31 (42) × 40 (55)



第41図 碓帯出土遺物（1）(1/3)



第3号住居址縄帯検出状況

3は在地の土器でない附加条縄文施文の素文系土器の破片を利用しており、胎土は軽鬆である。細かけは長軸方向に一对みられるが、かなり使用された痕跡がみられ、磨耗が激しい。

4は土製円盤である。ケズリによって表面を調整する無文の素文系土器の破片を利用している。裏側は剝落している。作り方をみると、周縁部を打ち欠いて形を整えてから、部分的に研磨して調整していることがわかる。全体に磨耗が激しい。

第41図は第3号住居址の外郭を巡る縄帯から出土した土器である。いずれも配石の内部に食い込むようにして出土したり、配石に接する状態で検出され型式学的な特徴を良く示すものである。

配石出土の土器（第41図）

1は朝顔形の深鉢で沈線による幾何学的な文様を描き、縄文を充積するが、磨消が不十分なものである。2は第37図109と同様の堀之内2式の朝顔形意匠文系深鉢の素文化したもので、口縁部に一条の連続押捺を施す紐線が巡る。胴部はナデと研磨が施される。3は口縁部が緩く外反する深鉢であり外面には節の細かい縄文が、横位方向に比較的小さな施文の単位で連続する状況が観察できる。施文方向は口縁部を上からみた場合、逆時計回りとなる。

以上に説明した様に第3号住居址内部と縄帯から出土した土器群とのあいだには型式学的な差異が認められない。すなわち、これらの土器を縄帯の時期を決定する根拠とするならば、住居址とのあいだに土器の型式学上の時期差は認められない。あるいは認められるとしてもその時間差はそれらの土器型式が行われた時間内に収束するということが指摘できる。

石器（第42、43図）

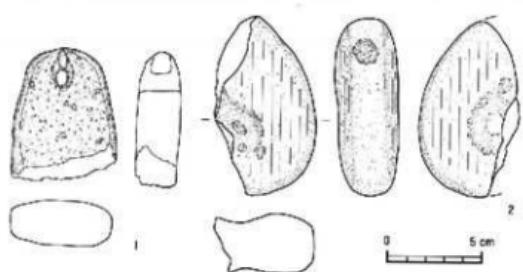
第3号住居址からはその上層に構築された配石や焼土層も含めて、比較的豊富な石器が出土した。ここではそれらを一括して説明する。上層の配石および焼土層から出土したものを仮に上層出土と便宜的に呼称し、本来の住居にともなう、またはその覆土から出土したものを下層出土石器群とする。

第43図3～10はいずれも上層出土の石器であり、いずれも黒耀石製である。そのなかで形態的には抉りのない3、4、7と細身の長身鐵の二者に区分できる。両者が完成品の形態上の差異か否かは難しい問題であるが、3、4は加工度が低く、さらに器体断面に部厚な部位が残存するなど、未製品の可能性も指摘できる。しかしいずれにせよ、掘之内2式期の石鐵がこのような小形のものから構成されている点は、後期後半以降に石鐵の量的増加と大形有茎化を控える当地域において、その前段階の様相として興味深い。

8～10は石核である。いずれも黒耀石製であり、8は角柱状を成し、上下から加撃された剝離痕が残る。こうした特徴はいわゆる楔形石器の特徴を通じる面もあるが、断面形が筋錐形やレンズ形を成すことが多いという楔形石器の一般的な特徴とは異なる。9は大形の剝片を素材として、裏面には主要剝離面が残る。表面には多方向からの剝離痕が残される。10は角柱状の剝片素材を用い8と近似するが、剝離面の形成が少ない。

これらの石核の一部には、かならず自然面が何らかの形で残存するものが多く、それらは例外なく、いわゆる「ズリ石」と呼ばれる転石の風化面である。同様の風化面をもつ黒耀石として第1号住居址の床面出土の原石2点がある（第24図17、18）。第2号住居址でも石鐵の出土が見られる点やそれらの石材がことごとく黒耀石を素材としている点などから、池之元遺跡では石鐵製作のために「ズリ石」を搬入したものと考えられる。その形状は扁平柱状を成すものであり、これらを石核にして素材を生産したのであろう。「ズリ石」自体のサイズが小さい点などからも、当初からこうした形状とサイズの素材が原産地において選択的に採集されて、広域に搬出されたのであろう。

11は下層出土の小形磨製石斧である。刃部にこまかなこぼれが認められる。蛇紋岩製である。



第42図 第3号住居址出土遺物（13）（1/3）

12、13は石鍤である。横長の形態で短軸に組掛けの抉りが作出されている。12は板状の素材を擦り切って形状を整え、組掛けの溝を設ける。粘板岩製である。

13は梢円形の自然礫を素材として短軸部分に小剝離を繰り返して抉りを作りだしている。



第43図 第3号住居址出土遺物 (14) (2/3)

る。本遺跡ではこのほかに土器片を利用した土器片鍵も出土している（第23図3・第40図2）。

第42図1は軽石製の浮子である。長辯円形を成し、上端に穿孔が施されている。下端部は欠損している。穿孔部上端には紐ぞれ状の溝が見られる。

2は磨石である。約半分を欠損しているが、中央部分には敲打痕が顕著に観察され、くぼみが形成されている。

配石遺構と埋甃

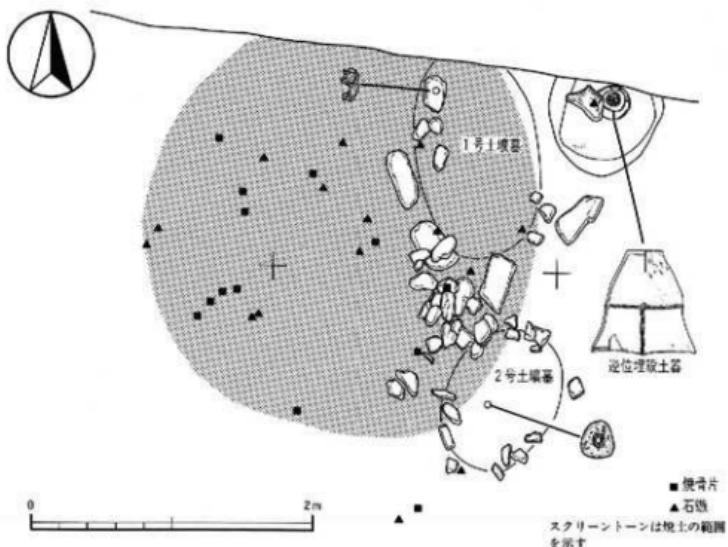
第3号住居址の覆土上面には大小の礫を配した、いわゆる配石遺構が検出された。さらにこの遺構の上面には、焼土と焼骨を含む薄い層が広がり、この周囲からは石鏃や黒耀石の剝片などが比較的集中して発見された。そのあたりは第1号住居址覆土とはかなり異なる様相を示し、単に廃絶住居の庭地に遺物包含層が形成されたものとは相当に異なる要因が推測できた。焼土層は極めて薄く、この場で燃焼した結果か否かは判断できなかったが、その広がりが埋甃や配石を覆うようなあり方を示すことから、下部の遺構を意識した何らかの行為の結果と考えられる。

配石はこの焼土層の下部においてその最上面が検出され、礫の配列と土層の僅かな違いによってそのプランが確認できた。配石のプランは幅の狭い方形のプランで規模の小さいものと、略円形のプランの2種類がある。方形のものは住居のプランを南北に切るように列状に続く列石の一部に構築されており（第28図・写真11）、内部からの出土遺物はなかった。また円形のものは比較的大形の



写真11 第3号住居址内覆土中配石検出状況（西側より）

第3号住居址の覆土上層には、焼土の薄層や焼骨片などを含む層が堆積しており、この直下に配石が検出された。その配置やプランなどから配石甃と考えられる。



第44図 第3号住居址上層遺物出土状態 (1/40)

角礫が円形に配されており、底面は第3号住居址の床面に設けられていた。そして2号土塙墓の底面からは第45図2に示したような、安山岩の小玉が、ねぼ土坑底面に密着して発見された。出土状態からみて被葬者の副葬品と考えられる(写真12)。

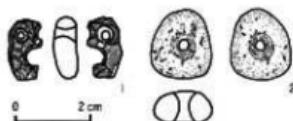
またさらに1号土塙墓の配石下から滑石製の「C」字形のいわゆる勾玉が1点出土した(第45図1)。これは明確な造構に伴う状態ではなかったが、いずれにせよ、配石などの特殊な造構と同じ地點から出土したことは、同様にして副葬品の可能性を示唆するであろう。とくに縄文時代の勾玉は、晩期になってから増加する傾向が指摘されているが、本資料の帰属時期は確実に堀之内2式～加曾利B1式期と確定できるため、その比較的初源期の一例として注目される。

副葬品を伴う配石墓は意外にその類例が少ないが、本造構などはその数少ない一例になるかもしれない。また造構上部を覆う焼土層と焼骨粉や黒曜石製石器群の集中部分などが、いかなる要因で

形成されたのか、すぐに判断できる材料は調査記録のなかに求め得ないが、やはり配石墓の葬送にかかる儀礼的な要因を考える必要があるかもしれない。

第3号住居址に重複して設けられた土坑墓

とともに、調査区の北西側において逆位の深



第45図 第3号住居址覆土中配石墓出土遺物 (1)(2/3)

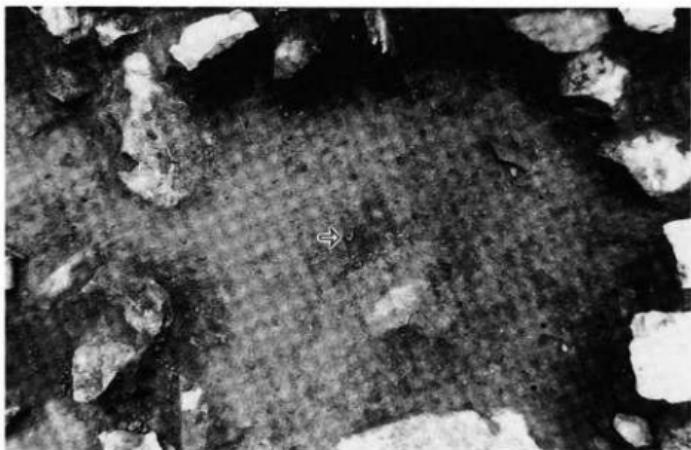


写真12 第1号配石遺物出土状況

配石のプランは円形で坑底面は第3号住居址の床面を掘り抜くことはない。底面直上の
は径中央部（矢印部分）で丸玉が一点検出されている。

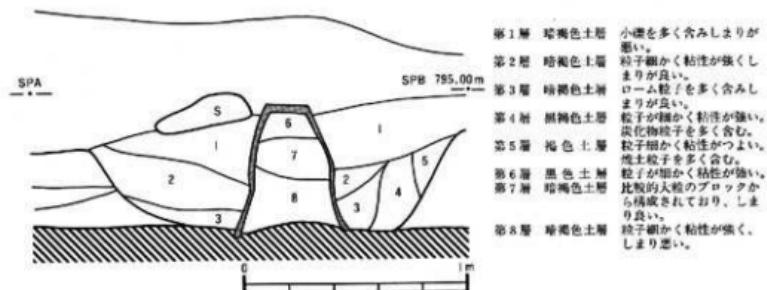
鉢が検出された。いわゆる埋甕と考えられるこの土器は底面をほぼ配石遺構の構築面の下部にもつものであり、配石遺構上面に底部が露出することはない。さらに土器の胴部横に接する様にして大形の自然石が置かれていた（第46図）。

埋甕の埋置された掘り込みは不整形で、土器よりもかなり大形の土坑が掘り込まれており、内部に5枚の覆土が堆積していた。土器は土圧により若干亀裂が入り、破損しているが完形に復元された（第47図）。深鉢の内部は土壤が充満しており、それは水平に堆積する粒子の細かい3枚の土層から成り、精査中に1片の微小な骨片を発見したが同定には至っていない。

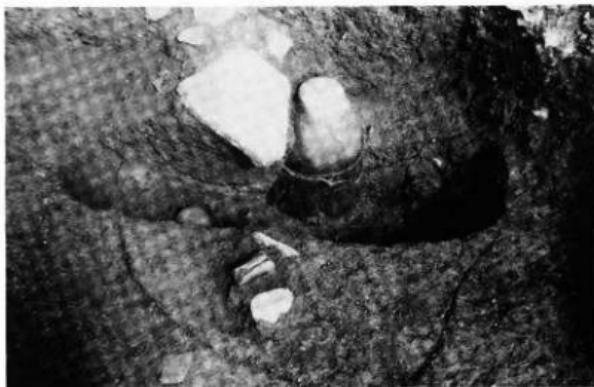
埋甕の土器は胴部の中ごろに緩い括れをもつもので、口縁部は緩い4単位の波状口縁となる。そしてこの波頂部から刻みを施した細い紐線が垂下し、胴部の括れ部を区画する紐線と繋がる。この繋ぎ部分に「8」字貼付文が施される。以上の特徴は、甕之内2式の深鉢に通有の要素であるが、本来は胴部がより強く膨らみ器高も低いものが多い。さらに胴部に文様が全く見られない点も異なる。器体表面の色調は胴部以上が暗褐色～黒色を呈し、下半部は赤褐色を呈し、煮沸作業に用いられた場合の特徴的な使用痕を止める。おそらく日常的な煮沸用具の埋甕への転用であろう。

配石墓とはば同様の構築面をもつ点や、両者の遺構から出土した土器の型式に大きな時間差は認められない。これらの遺構は第3号住居址の埋没がほぼ終了する時点で構築されたものと考えられる。

配石墓と埋甕の上面を覆うようにして確認された礫や遺物の広がりは、おそらくこれらの遺構群



逆位埋甕のセクション図 (1/20)



◀逆位埋甕検出状況

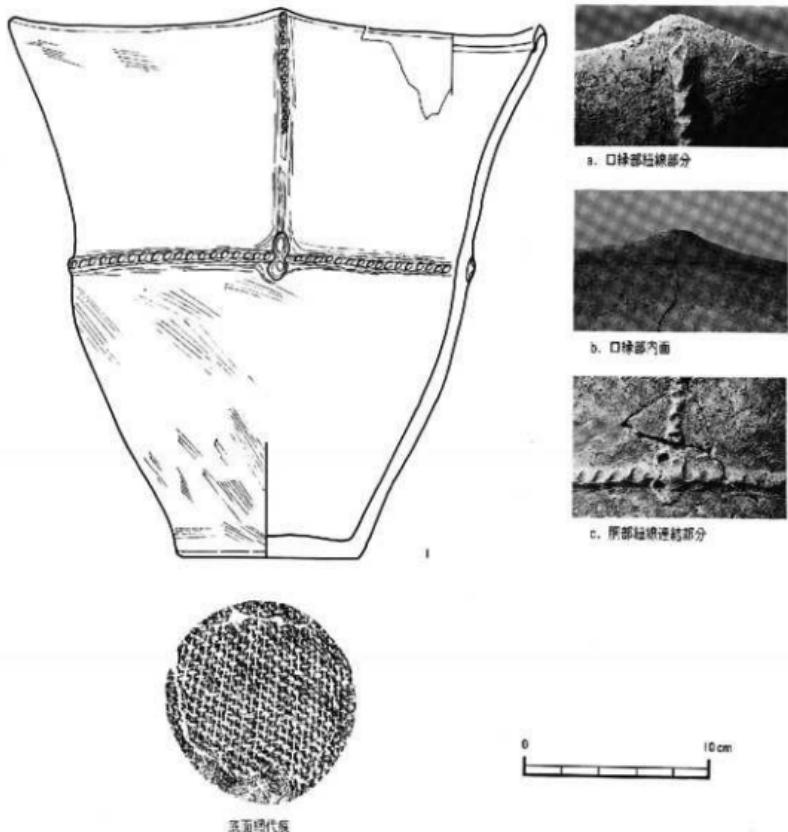
不整形の掘り込みの内部に湖之内2式の深鉢を逆位に埋設している。また埋甕の傍らに人頭大の自然石が使用された。

配石墓上面の遺物出土► 状況

配石墓上面には坑上の薄層が広がり、周囲より石器や焼骨・土器片などが集中して発見された。



第46図 第3号住居址覆土中埋甕検出状況

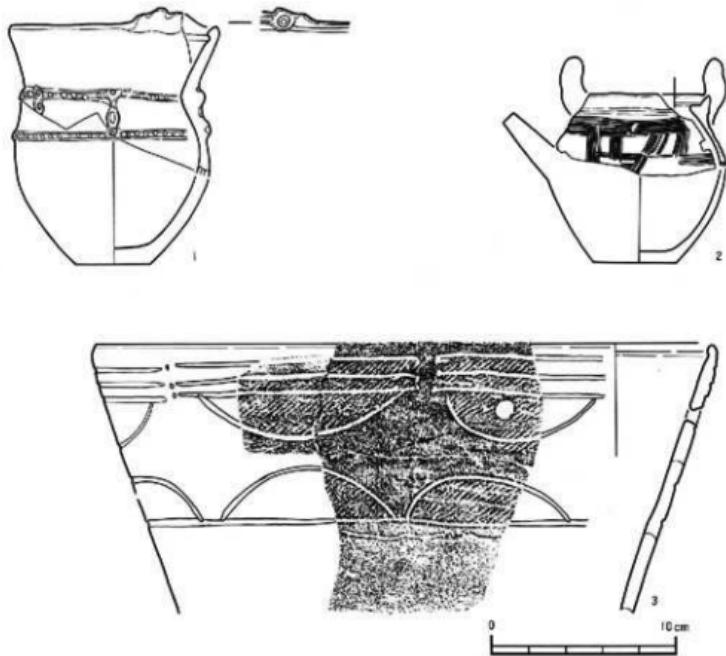


第47図 第3号住居址覆土中埋甕 (1/3)

に後出して形成されたものであり、その性格をただちに判断することは難しいが、土器や石器と焼土や焼骨片が集中して発見されている。

この面から出土した土器は大半が破片であるが、とくに数点の小形土器が含まれており注意された。第48図1は胴部の緩く膨らむ深鉢である。胴部には二本の紐線が巡り、要所に「8」字貼付文が施されている。口縁部には小突起が付くものである。暗褐色を呈する。

2は注口土器で注口と把手および胴部下半を欠損する。四本単位の櫛齒状工具による沈線によって幾何学的な文様を描く。これらの沈線には縁取り沈線が認められない点は加曾利B1式の古い部分の特徴であろう。口縁部内面は蓋受状の鈎が作りだされている。注口土器としては小形の部類に



第48図 配石造構出土遺物（1）(1/3)

入るであろう。黒色を呈しており焼成は良好である。

3は朝顔形の深鉢である。副部上半に文様帶が設けられ上部には三本の平行沈線による帯状区画があり、その内部に繩文が充填される。以下には対弧文が描かれ、繩文が充填される。これらの文様構成は堀之内2式や加曾利B1式土器には一般的ではない。とくに口縁部付近に配される帯繩文は良く見ると、要所に沈線が途切れる部分があり、また沈線内部に刺突が施されている。対弧文もこの帯繩文が接着している点も異なる。その年代的な位置づけについては加曾利B1式と想定されるが、系譜については今後の課題とせねばなるまい。帯繩文の沈線と途切れやその部分の刺突の在り方は東海地方の併行型式に近似する要素とみることができるかもしれない。

配石墓の埋甕の上面を覆うようにして検出された砾の集中や焼土の広がりに伴うこれらの遺物は、加曾利B1式の初頭を中心とした短期間にはば納まるであろう。またこれらの遺構の構築順位と遺物の年代は整合的である。

こうした配石の反復的な構築は第3号住居址の廃絶される過程や、集落内部におけるその位置などに構築場所が特定化される要因が内在するものと推測できる。上部配石の在り方は明確なプラン

が確認できなかった。しかし明らかに他の地点とは異なる形状の礫がまとまりをもって、狭い範囲に存在したことは事実であるし、これらにともなって小形土器や焼土、そして骨片が発見された。骨片の大半は白色に変色し、さらに硬化しているもので、被熱による石灰化が進行したものである。またこれらのなかには鹿角片が比較的多く認められたのも注意をひいた。

さらに焼難石製の石錐や残核と剝片類も集中して発見された。こうした遺物の出土状況は、例えば第1号住居址覆土や造構外の包含層においても、さらに配石面においても全く認められない在り方であり、本造構の性格を反映すると考えられる。配石墓の上部にそれを覆うようにして別種の配石が構築される例は、たとえば長野県北村遺跡などにも好例がある。配石構築部が旧住居の覆土に相当する場合が多い点も共通するかもしれない。

池之元遺跡のこうした配石遺構の重層がいかなる要因と背景に因ったかは俄に判断できないが、焼骨や石錐や剝片類などの在り方から、狩猟対象動物と狩猟具の何らかの関係化した行為がその背景に係わると考えておきたい。なお焼骨については、その性格に具体的な考証を伴わない祭祀性を指摘する意見が一般であるが、筆者は一概にその意見には従えない点も明記して今後の課題としている。

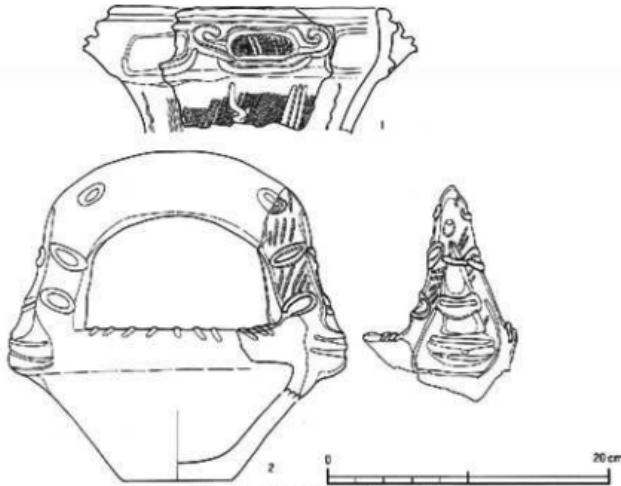
(阿部)

遺構外出土の遺物 土器（第49図～61図）

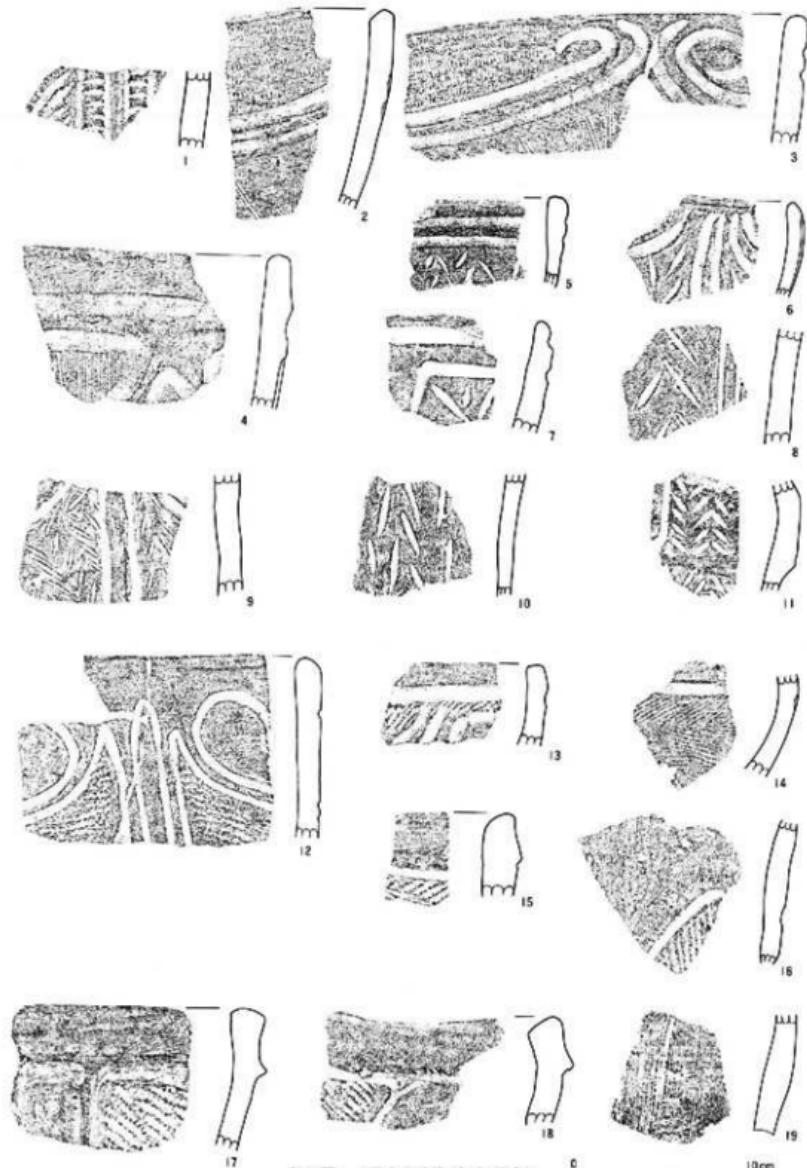
遺構外からは比較的豊富な量の土器片が出土した。縄文時代中期後半～後期の土器がみられるが、後期の壺之内式が主体的である。第49図1は、加曾利E1式の深鉢である。2は釣手土器の釣手部分で粘土紐の貼付を行い、繩文を施文する。

第50図1は勝坂III式の胴部破片である。隆線に平行して結節沈線文が施されている。また、LRの繩文が施文されている。第50図2～11は曾利式に比定される。2・3は同一個体と思われる口縁部破片である。口縁部には2本一単位の幅広い沈線で端部を溝状にした下向きの弧状文を数単位描き、その下には文様構成は不明だが縦位や斜位の細い沈線文が描かれている。4は幅広の沈線で描いた幾何学的なモチーフ内に、櫛齒状工具による縦位の条線が施されている。1は胎土が少しあらく、4は指ナデ整形の後に横位のミガキが施されている。5～11は地文に綾杉状沈線文（連続「ヘ」字状文）を施しているもので、曾利IV～V式に比定される。11を除いて全体的に屈曲の少ない深鉢で直線的に外反する器形が多い。第50図12は曾利式の文様モチーフを用いながらも繩文が施文されており、加曾利E式の影響を受けた折衷形の土器で、縦位にLRの繩文を施文している。13は地文に繩文を施している。14は胴部破片で張り出しの強い屈曲した器形で、鉢であろうか。細い原体を使用した繩文が施されている。

第50図15～18は加曾利EIV式に比定される。微隆起線で口唇部直下の無文帯を横位に区画したのち、沈線や微隆起線によりモチーフを描き、内部に繩文が充填されている。



第49図 8区出土遺物（1）(1/4)



第50図 8区出土遺物 (2) (1/3)

19は櫛歯状工具による縦位の細い条線が施されており、中期末から後期にかけてのものと考えられる。

第51図20～27は称名寺式に比定される。20～23は沈線で区画されたモチーフ内に縄文が充填されていることから称名寺I式に位置づけられる。20は4単位からなる波状の口縁部で、波頂部から垂下する刻みのある隆線が付されている。胎土には石英等の混入物が非常に多い。21～23は他に比べて胎土が緻密である。

24～27は20～23のような充填縄文が消失した、沈線によるモチーフ描出のみのものと27のように刺突文を施すもので、大半が称名寺II式に比定されるが、称名寺II式の列点が下北原式の古い段階まで残ることから、27についてはその特徴のみでは分類できない。

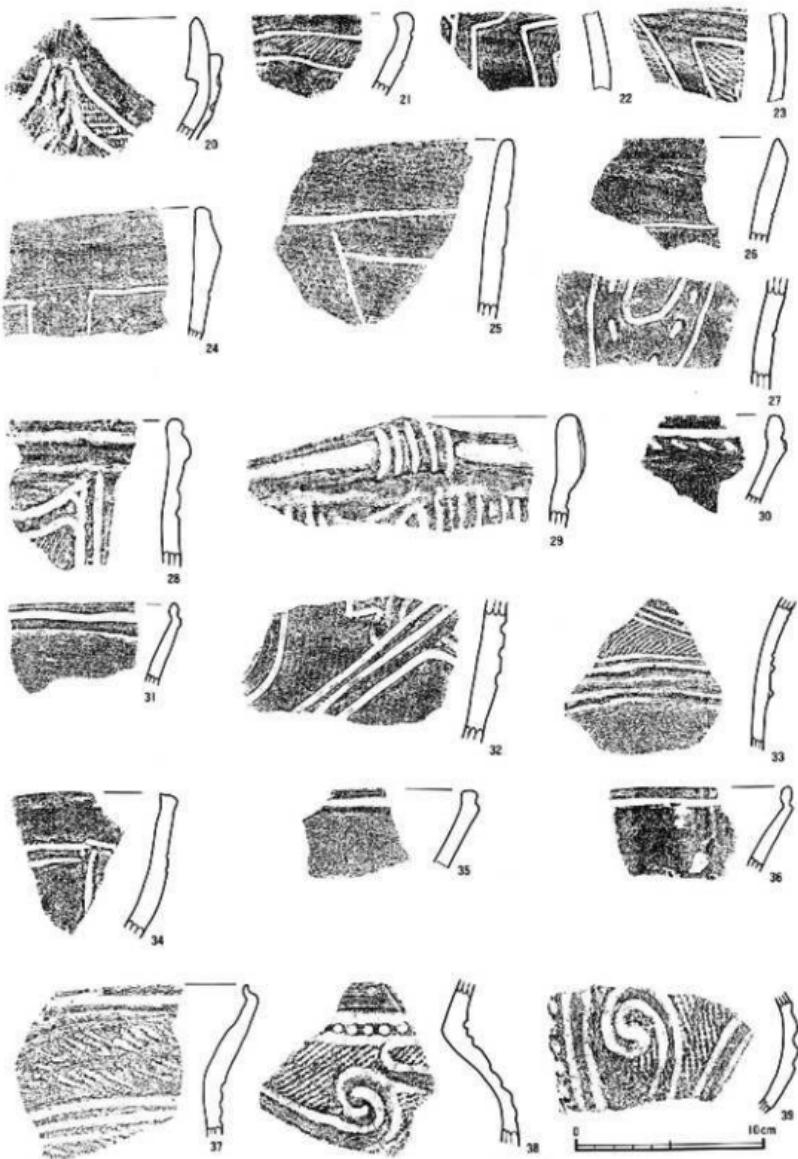
第51図28・29は堀之内1式の朝顔形の深鉢である。口唇部文様帶には太い沈線を巡らせ、胴部は二～五本一単位の太めの沈線を文様描線とし、縦位や斜位の沈線を組み合わせて文様を構成している。

第51図30～第52図45は堀之内1式の口縁部が外反し頸部が屈曲する鉢型土器である。30・31・34～37は口縁部で、30・31・35・36・37は口唇部文様帶に一条の沈線が引かれ、30はさらにその下に刺突文が巡っている。頸部は横位に磨かれている。34は他と比べ小形で、口縁部を無文帶として胴部文様帶を沈線で区画し、胴部に垂下文様を描いている。37は沈線文の地文に縄文が施されたもので、関東東部に類例が多い。

32・33・38～45は胴部で、32は三本一単位の沈線を文様描線とし、斜位や曲線的な文様を組み合っている。33は数本一単位の沈線で幾何学的に区画した中に縄文を充填している。横位に巡る刻みのない隆線は堀之内1式に特徴的である。38は頸部に2条の沈線を巡らせ、その中に円形の刺突文を施して文様帶を分帶している。胴部には横位に展開する渦巻文が描かれ、モチーフ間に縄文が充填されている。39は胴部に刻みのある隆線を垂下させ胴部文様帶内を縦に分割して、内部に渦巻状のモチーフが描かれ、モチーフ間には縄文が充填されている。両者とも堀之内1式でも新しい時期に位置づけられる。40は横位の沈線で口縁部と胴部文様帶を分帶し、数本一単位の沈線で区画した間に縄文を充填している。42は屈曲部の下の平行沈線の間に長椭円形の刺突文が3列配されている。43～45は多条の沈線で対弧状のモチーフが描かれ、その中央部には縄文が充填される。43は刺突を施した2本の垂下する沈線を文様の中心に配している。45は沈線が細く、他よりやや新しい時期のものと考えられる。

第52図46～52は堀之内2式の素文系深鉢である。46～50は櫛歯状工具による条線で横位、縦位、斜位、弧状、またはそれらを組み合わせた文様を描いている。51、52は下北原式の系統を引く深鉢と推測される。非常に浅く細い沈線で文様を描いている。

第52図53～第53図63は堀之内2式の朝顔形の深鉢である。53～59、61は口縁部で、53～57は縦線



第51図 7区造構外出土遺物(1) (1/3)

文が配される。56は縦線文の位置が他に比べ口縁部からやや下の位置にある点が異なる。これらの文様は三角形を基調としたモチーフを沈線で描き、55は帯状に、57は無文部と交互になるように繩文が充填されている。58～61は「8」字状の貼付文だけで、縦線文はない。59・60は縦線文をもつものと同様に三角形を基調としたモチーフを沈線で描き、無文部を間に挟み繩文が充填されている。58は「8」字状の貼付文への刺突が円形である点や、その下に一条の沈線が巡らされる点で他に比べて古い特徴を持つ。文様は三角形を基調としたモチーフを描き、空白部には多条の沈線を充填しており、繩文は施文されない。61は口縁部の貼付文の直下に横位の沈線を巡らしている。58と同様に古い時期の特徴である。

第53図62・63は胴部破片で、幾何学的なモチーフに繩文を充填している。

第53図64～75は堀之内1式の口縁部が外反し頸部が括れる深鉢である。64～66は口縁部で、66は口唇部文様帶に沈線が巡らされておらず、この特徴を重視するならば堀之内2式に比定されよう。67は口縁部文様帶に繩文が施文されており、他とは異なる。

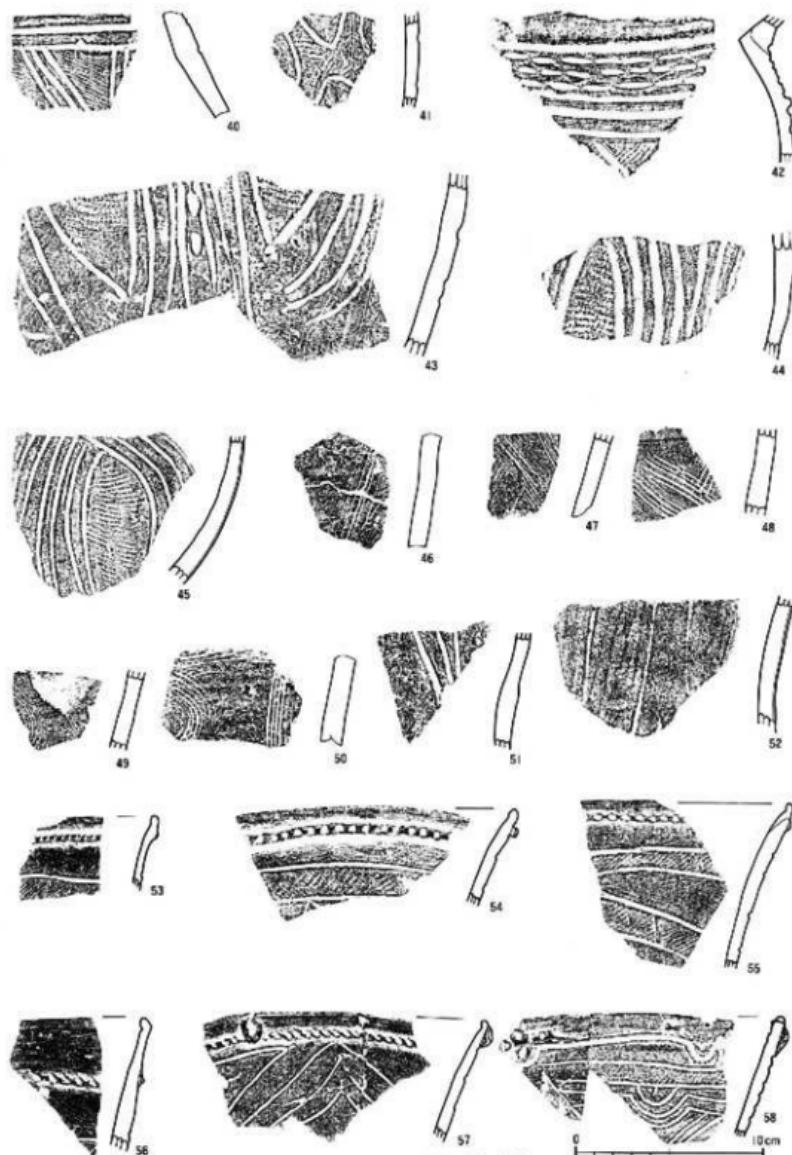
68～75は頸部から胸部にかけての破片で、69・70は刻みのある隆線で文様帶を分帯している。69は二本一単位の沈線で対弧状のモチーフを描いている。沈線区画内には刺突がみられる。72は沈線と刺突文で文様帶を区分している。73は対弧状の沈線を垂下させ、その中央部に繩文を充填している。74は三本一単位の沈線で文様を描き、空白部に繩文を充填している。75は5本前後を1単位とした異方向の多条沈線が組み合わされている。

第54図76は堀之内2式の注口土器の胸部破片である。細目の多条沈線が縦帯状に施文されている。

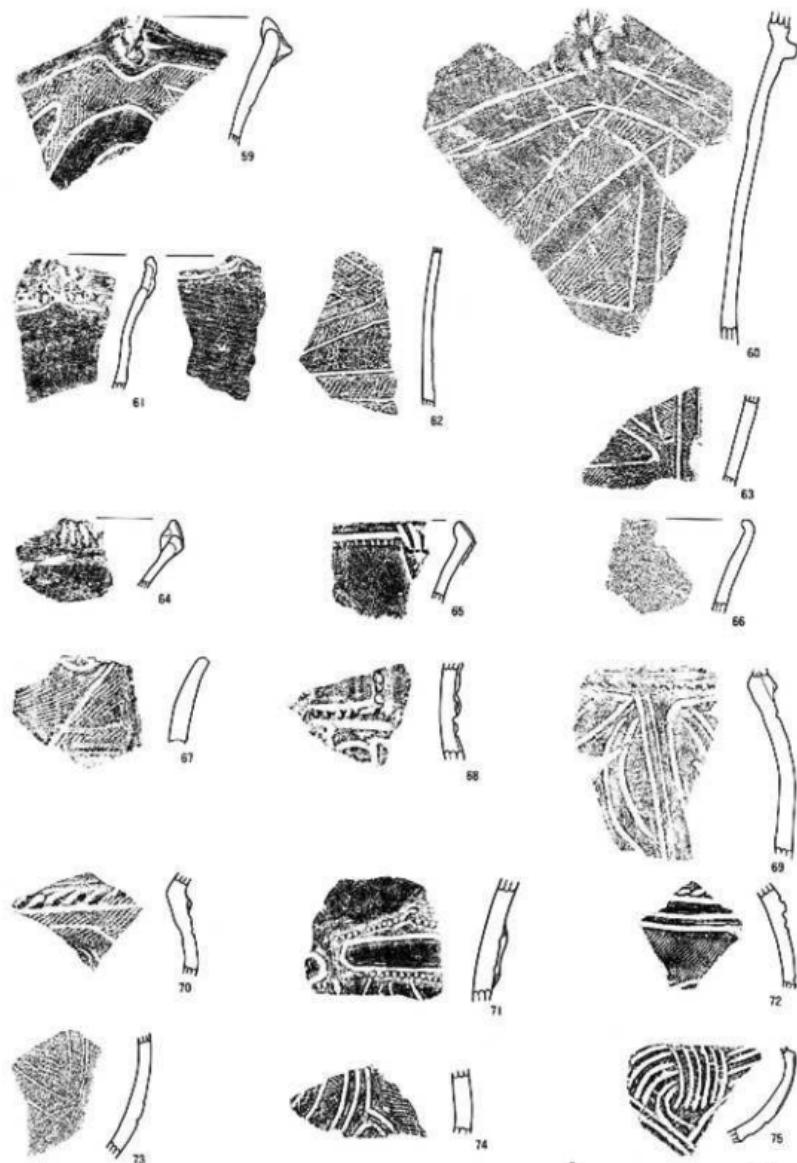
第54図77～82は堀之内2式の浅鉢である。77～81は外面が無文で内面に文様を施すものである。79の内文は他と比べ沈線が太く、本数が少ない。82は底部で底面には網代痕が残っている。

第54図83～91は外面にヘラケズリ整形を加えただけの無文の素文系深鉢である。内面は外面とは対象的に、ケズリ整形の後によく磨かれているものが多い。第55図92～97は指ナデ状の痕跡が明瞭に残された素文系深鉢である。

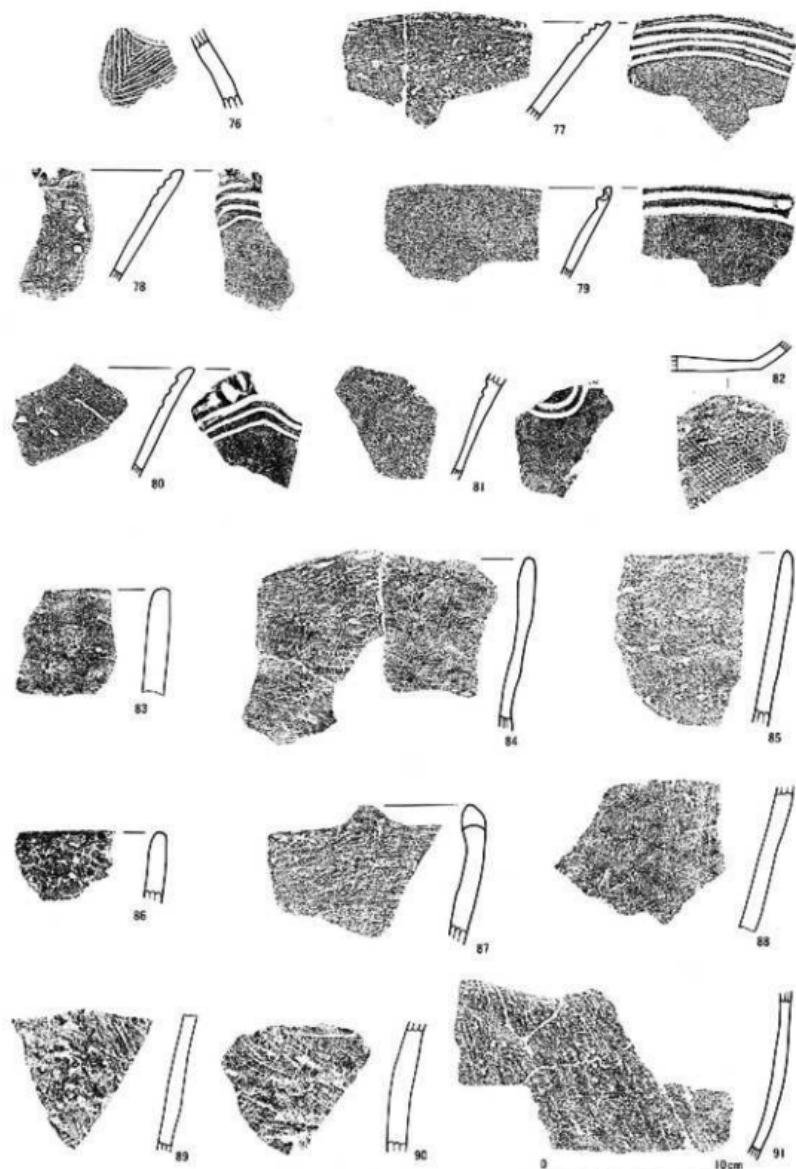
第55図99～108は附加条繩文を施した素文系深鉢で、口縁部と内面にはよくナデ整形が加えられている。胎土は軽燧で、他とは異なることからも搬入品と類推できる。出土状態からも堀之内2式に伴うと考えられる。



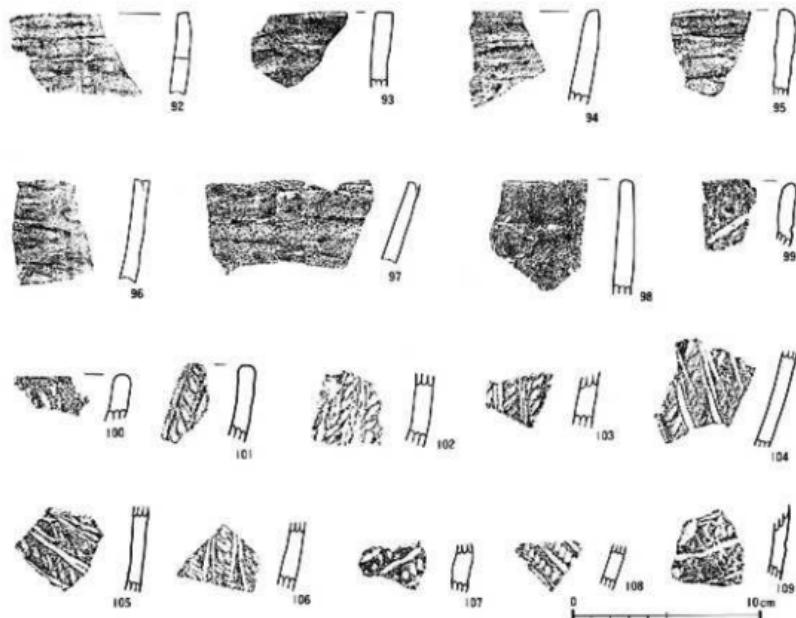
第52図 7区遺構外出土遺物(2)(1/3)



第53図 7区造構外出土遺物（3）(1/3)



第54図 7区遺構外出土遺物 (4) (1/3)



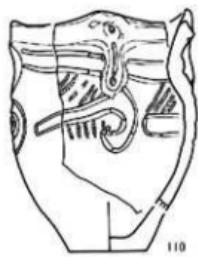
第55図 7区造構外出土遺物(5)(1/3)

110は胴部に継やかな膨らみをもつ小形の深鉢である。頸部は二本の沈線で区画され口唇部には突起が付く。この突起から胴部に連結される隆帯が付けられる。胴部には横位の連結する渦巻文が描かれる。渦巻文の内部は無文部として残され、モチーフ間には縄文が充填される。堀之内1式の時期でも称名寺式の系統をひく下北原式土器であろう。

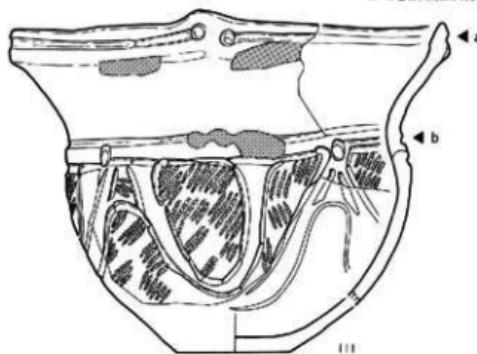
111は器高の低い深鉢であり胴部に継い膨らみをもつ。口唇部には太い一条の沈線が周回し、小突起部分の刺突に接続している。頸部は良く研磨され胴部文様帶との分帶は二本の沈線によるもので胴部文様の波頂部に対応して刺突が施される。胴部には波状のモチーフが二本単位の沈線により描かれ、モチーフの内部に縄文が充填されている。胴部上半以上は黒色～暗褐色を呈し、反対に底部附近は赤褐色～褐色を呈している。こうした器表面の色調の在り方は煮沸に用いられる場合に形成される特徴的な使用痕跡である。沈線や文様の書き方などから堀之内1式に比定できる。

112は胴部の膨らむ大形の深鉢である。口唇部は肥厚し胴部とのあいだに括れをもつ。胴部には大柄の渦巻文が二～三本の沈線により描かれる。文様帶構成は110と共通するものと思われるが、文様の表出に縄文を用いないという違いもある。

113は胴部が大きく膨らむ深鉢で、頸部の屈曲がきつい。また頸部の幅は114に比べると、著しく



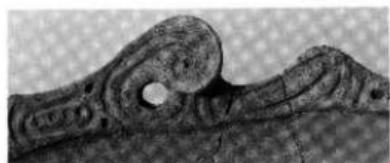
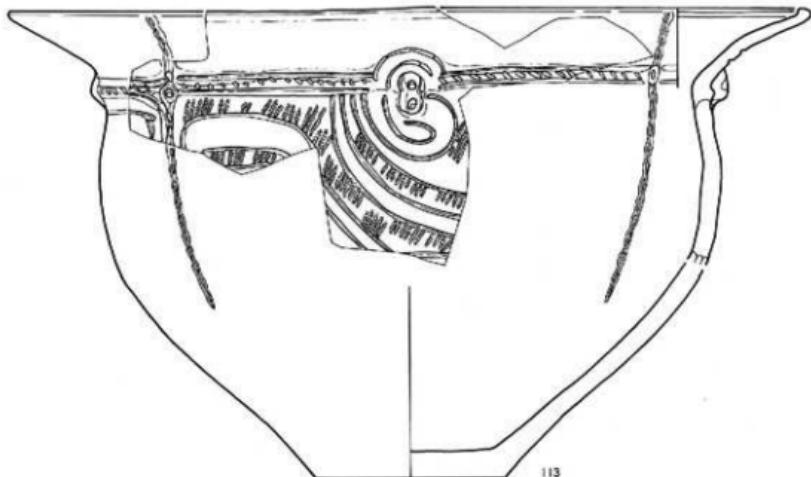
a. □唇部文様拡大(剥落部分)



b. 唇部上半部拡大



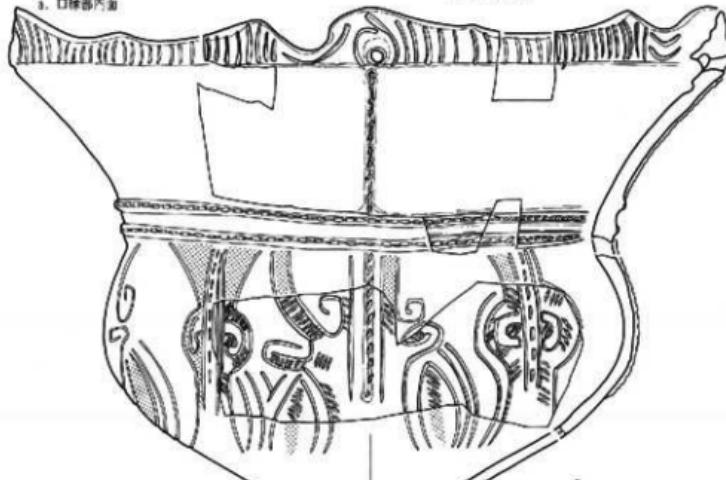
第56図 7区造構外出土遺物(6)(1/3)



a. 口縁部内面



b. 口縁部内面



第57図 7区造構外出土遺物(7)(1/3)

短い。口唇部は先端内面が丸みを帯びて肥厚し、内面に稜をもつ。頸部には紐線が垂下し、それは胴部文様帶に貫通し、文様構成を縦位に区画する。さらに胴部文様帶上部を水平に区画する刻みをもつ紐線が施され、要所に「8」字状貼付文が付けられる。

胴部文様は二本単位の沈線により大柄な渦巻文が描かれており、区画された内部に交互に縄文が充填される。胴部下半は欠損しているために文様帶下半の構成が不明である。

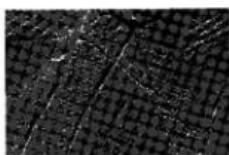
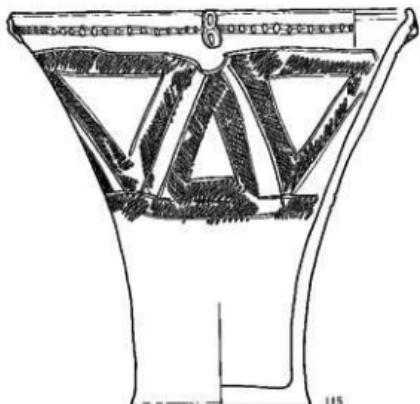
114は113と基本的な構成が近似するが、頸部の幅が広く、さらに口縁部文様帶が発達するなど細部に違いが認められる。口縁部は幾分幅を広くもち、頸部との間に明瞭な肩曲をもって区画される文様帶が設けられ、縦位の弧線が連続して描かれる。また要所に中心に貫通孔をもつ山切り状の突起が作り出されており、ここから頸部に細かい刻みを施した紐線が垂下する。

さらにこの紐線は頸部の分帶部を跨ぎ、胴部文様帶にも繋がる。したがって口縁部の突起と胴部文様が連動した縦位の分割構成となる。同じ構成は113においても確認され、本器類の文様構成として特徴的である。頸部は二本の紐線による分割が行われる。胴部文様は基本的に縦位分割された内部が沈線と刺穴による擬似降線ともいべき表現による垂下線を中心軸にして曲線文様が描かれる。構成が不明確ではあるが、紐線部分も同様に線対称の曲線文が描かれるらしい。これらのモチーフ内部には、縄文が充填されている。また文様の下端は紐線が途中で途切れる点などから開放されたままで、とくに区画されることはないと推測される。堀之内2式に比定される。

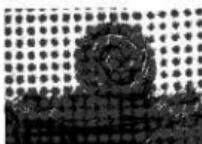
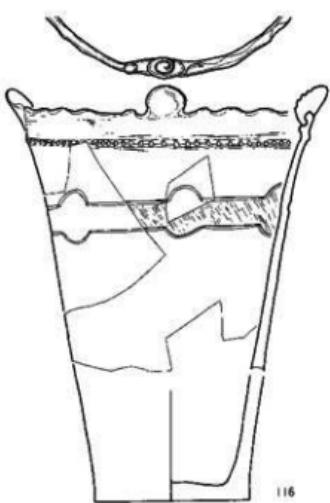
115、116は朝顔形の深鉢である。115は口唇部が「く」字状に内折しており、この部位の外面には刻みを施す紐線文が周回する。そしてこの紐線文の4箇所に「8」字貼付文が付けられている。胴部文様は二本単位の沈線により連続三角文を描き、内部に縄文が充填される。さらにこの文様帶の下端には一条の区画沈線が引かれ、この部位のみに三本の沈線が描かれ、結果として充填縄文内部に沈線が挟み込まれる結果となっている。堀之内2式を特徴づける流麗な磨消縄文は、二本沈線によって区画された内部に施されるものが通例であり、115の下端沈線のような状況は少ない。同様の例は池之元遺跡では第60図118にも観られる。

こうした状況が文様の特定の部位によってなぜ起こるのかという点は、堀之内2式の文様構成と磨消縄文の発生を考える時に興味深い。すなわち堀之内1式後半以降、胴部文様帶の下端を明確に区画する傾向がかなり強くなり、下端の沈線はその軌道を示唆する。そして内部に一本沈線による三角文を描いた場合、下端の区画に一本の沈線と二本の沈線によって区画される部位が形成されてしまう。つまり一本沈線では充填区画にはならない為に、さらに全体を水平に区画する最下端の沈線を巻き足したとみるべきであろう。したがってこうした軌道を伝える本個体は堀之内2式でも比較的古い部分に対比される可能性がある。

116は胴部文様が帯状化し、口縁部には球頭状の突起が付く。口唇部はこまかに小波状縁を成し、器体は薄手である。胴部文様内には通常、縄文が充填されるが本個体は器面整形時点で行われたへ



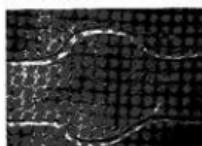
115
唇部文様拡大



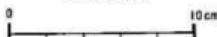
a. 口縁部突起内面



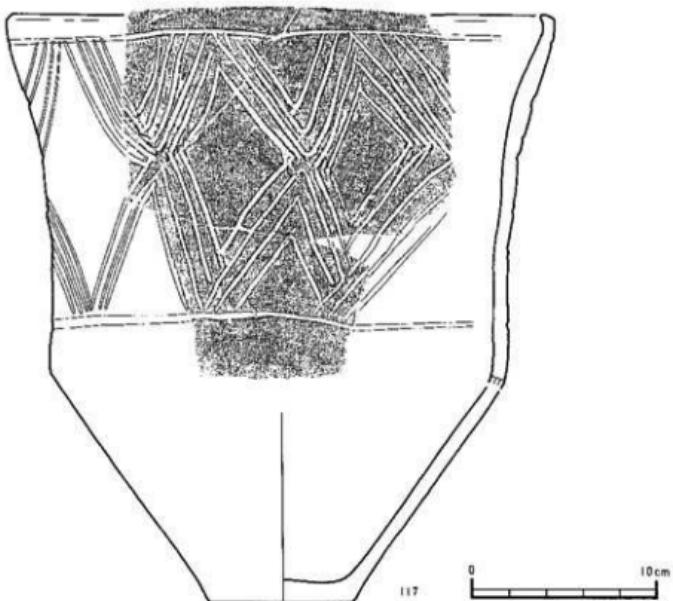
b. 口縁部突起外面



c. 沈部文様拡大



第58図 7区造模外出土遺物(8)(1/3)



第59図 7区造様外出土遺物（9）(1/3)

ラケズリ痕がそのまま繩文に見立てて残されている。器体表面は研磨が施され滑沢に富み、黒色の焼成色を呈する。115と比較すると口縁部から口唇部にかけての刻みや突起などの装飾が発達している点などから、加曾利B1式における口縁部内面の装飾に系譜が繋がる点が多い。こうした推測から本個体は壺之内2式の終末部分に対比されると考えられる。

第59図117は胴下部に屈曲をもつ深鉢である。胴部以下は欠損しているが、文様帶下端は屈曲部以上に位置するために、全体の構成がほぼ把握できる。口縁部は内削ぎ状に内折しており、朝顔形深鉢と同様の特徴をもつ。胴部文様は上下を一本の沈線で区画し、内部に菱形と三角形を組み合わせた幾何学的な文様を描く。内部文様は四本一組の沈線によっており、繩文の充満はない。

こうした形態は広くその分布が認められ、また文様は本例のような幾何学的な文様が主体となり渦巻文などの曲線的なモチーフは一般的ではない。この様な器形の深鉢が主体的に存在する遺跡はなく、壺之内2式土器の器種網成のなかで、ある一定量が牛産されたのであろう。

第60図118~123は5区出土の土器である。118は朝顔形の深鉢であり、口唇部内面には凹線が巡り、口縁部断面形は「く」字状に内折する。文様は胴部上半に横帯化して一本描きの沈線で描かれている。内部は横位に連結する渦巻文が描かれるが、残存部位をみると限り、渦は上部から下部か

ら描かれるものがあるらしい。渦と渦のあいだには長方形の空白部が形成されるが、一部に縄文の光沢などが観られ、施文原理に一貫性がない。このような特徴から先述した115例と同様に磨消縄文の完成初期の文様と考えられ、堀之内2式の古い部分に対比されるだろう。

119は壺形土器である。短い立ち上がりの口縁部が「く」形に開き下彫れの胴部に移行する。口縁部のみが無文となり括れ部に一条の沈線が引かれる。また口縁部には焼成前の穿孔が施されている。後期前葉については類例を知らないが、出土状態から共伴が想定されるのは堀之内2式～加曾利B1式であり、一応当該期の一例と考えたいと思う。

120、121は無文の深鉢である。口縁部のみであるが、いずれも口唇部の内面に浅い凹線が施されのために口唇部は内折する。外面はヘラケズリによる擦痕が顕著であり、その方向は横位逆時計回りを示す。薄手であり、胴部下半は123のように緩く膨らみ底部に移行する形態が本遺跡では主流となるようである。

122は深鉢の胴部下半であり、5本単位の櫛歯状工具による条線を描くが、残存部のみではその意匠を説明することは難しい。本遺跡では櫛歯状工具による文様表出は非常に少ない。器面にはヘラケズリ痕が一面に認められる。下半部は赤化しており、煮沸に用いられたものと思われる。

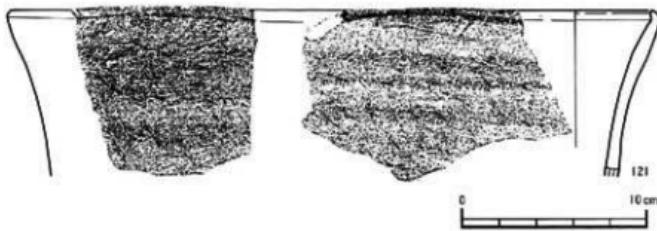
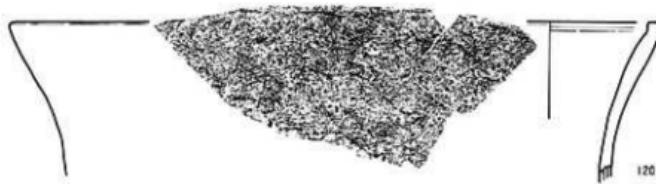
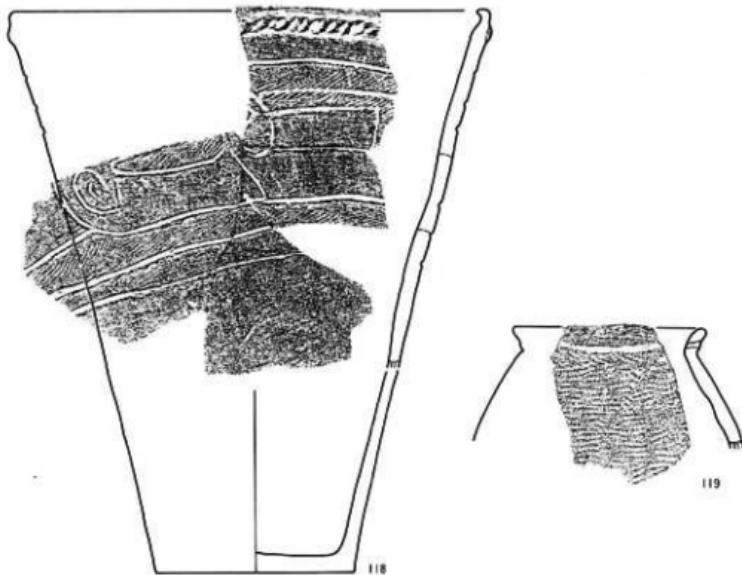
123は口縁部の外反の度合いが120、121に比べて緩い。比較的厚手の器体で外面はヘラケズリ痕とナデ痕が認められる。

今回の池之元遺跡出土の土器は堀之内2式が圧倒的に多く、その内容も豊富な類型から構成されることが明らかにできたが、とくに現段階の堀之内2式の細別に従うならば、中段階が主体を成し、第1号住居址覆土の一部と第3号住居址の上部配石遺構や、6区において加曾利B1式に連続する要素を持ちあわせた土器があるが、量的には少ない。

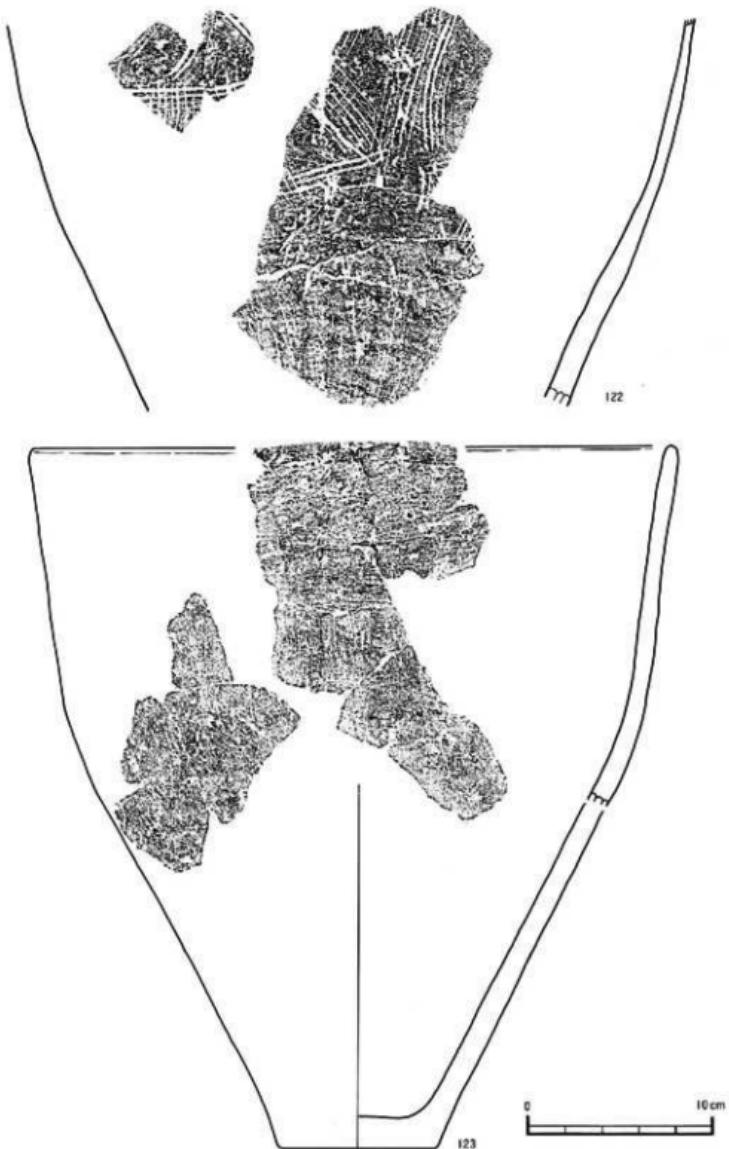
中部地方の堀之内2式の構成については、関東地方とは異なる部分が指摘でき、具体的な資料の説明において、それらの個々の特徴について記してきたが、とくに近接する神奈川方面との比較において顕著な相違点は無文の素文系土器の豊富な在り方である。またこれと対照に、神奈川、東京方面で主体をしめる下北原系の沈線文土器が非常に低調である点は器種構成を考える上でも示唆的である。

また遺跡の連続性を考える上で加曾利B1式初頭の出土をもって、それに後続する型式は1片も認められなかった。包含層直上を覆う厚いスコリア層がその背景に関係するとするならば、加曾利B1式で遺跡の形成が急激に衰退する関東西南部地域とのあいだに、環境変化と遺跡形成という観点での運動した関係を推測することは、それほど無謀なことではあるまい。

(阿部)



第60図 7区造構外出土遺物 (10) (1/3)



第61図 7区遺構外出土遺物(11) (1/3)

土製品（第62図）

1、2は土器片錐である。1は黒色研磨の意匠文系土器の無文部を利用している。胎土は緻密で、鉱物粒子はあまり大きくなりが量が多い。紐かけは長軸方向に一对、浅くはいっており、使用的痕跡が顕著にみられる。周縁部は、打ち欠いた後によく研磨して仕上げている。

2は堀之内1式の土器の口縁部破片を利用してしたもので、口唇部をめぐる沈線もみられる。色調は明褐色を呈し、胎土には長石を多く含んでいる。紐かけは長軸方向に一对、深くはいっており、使用の痕跡は顕著ではない。正面鏡の下側は研磨して調整している。

本遺跡では、以上の2点と遺構の覆土中から出土した3点をあわせ計5点の土器片錐が出土している。石錐も3点出土しており、遺跡のはんの一部の調査ではあるが、網漁を行なっていた可能性を指摘できる。本遺跡は半島状に突出した台地上に立地しているが、縄文時代後期においては、その南側にひろがる低地は、火山の噴火によってできた堰止湖であった。従って、内湾性漁業に適する網を用いた漁業活動が行なわれていたとすれば、その堰止湖において利用されていたことが考えられよう。しかし、その漁業活動が本遺跡における経済活動全般の中でどのような位置を占めていたかを考えるには、調査面積も狭く、情報が不十分である。

3～16は土製円盤である。意匠文系土器の破片を利用しているものは3、4、6、10で、残りは8、12を除いてすべて素文系土器の破片を利用している。分類しないもののうち8は表面が剥落して不明であり、12は剥離痕を有する底部破片であるので細かな時期比定は難しい。

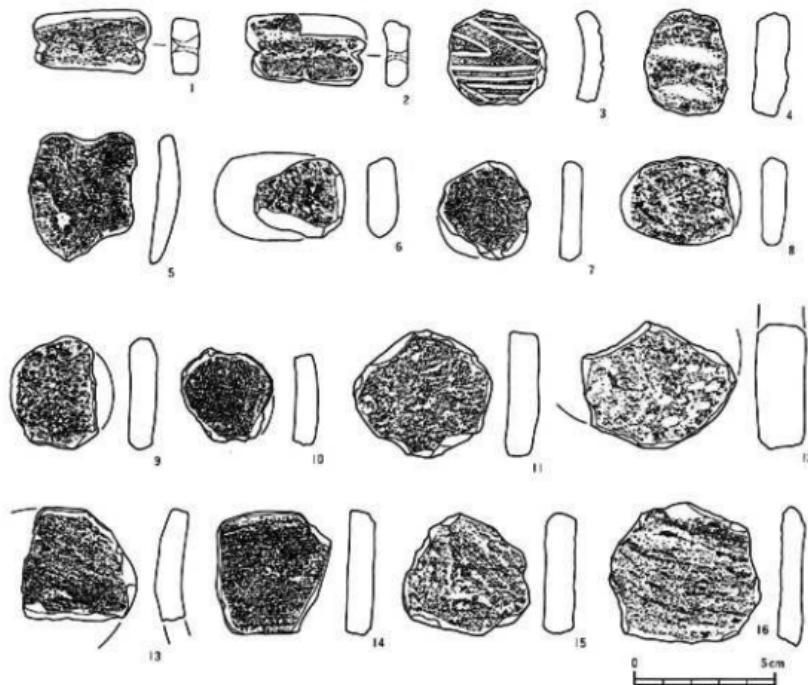
意匠文系土器の破片を利用したもののうち、その土器片の所属時期がわかるものは3、4である。3は堀之内2式の注口土器の胴上半部の破片で、肩曲の度合いから、割合小さい土器であったことがわかる。

素文系土器の破片を利用したものは、16をのぞいてすべてナデやケズリによって表面を平らに調整する無文の土器で、第1号住居址や、第3号住居址出土のものと同様に、本遺跡で主流を占める素文系土器の破片を利用している。16は指によるナデの跡を明瞭に残すタイプの素文系土器の破片を利用している。

本遺跡の土製円盤の素材の選択をみると、特に意識して素材の選択をしたとは思われず、部位や土器片の種類に関係なく、手ごろな破片を利用したものと考えられる。

次に土製円盤の作り方を観察すると、遺構外出土のものも、第1号住居址、第3号住居址出土のものと同じく、打ち欠きによって形を整えた後、一部あるいは全周を研磨して調整している。資料によっては打ち欠いただけのものもあるが、数は少ない。また、特に変わった作り方をするものもない。

土製円盤については、その用途は不明である。本遺跡においても、特にこれといった出土状況はなく、機能や用途の推定は不明なままであった。重量をみても、特に集中するような重さの段階はみられない。5g～30gの間ならば、十分に使用できうるような使い方をされていたのであろう。（前川）



第62図 7区造機外出土遺物 (12) (1/2)

第3表 7区造機外出土土製品計測表

No.	分類	遺存度	重量(g)	大きさ タテ×ヨコ(cm)
1	土器片	錐形	10.2	22 × 41
2	土器片	3/4	7.6	24 × 43
3	土製円盤	完形	9.2	33 × 34
4	土製円盤	完形	14.7	35 × 29
5	土製円盤	9/10	15.7	45 × 38 (51)
6	土製円盤	1/2	9.7	32 (47) × 27 (35)
7	土製円盤	9/10	10.2	35 × 32
8	土製円盤	9/10	11.8	30 × 40 (42)
9	土製円盤	4/5	12.6	39 × 30 (38)
10	土製円盤	9/10	9.1	32 × 32
11	土製円盤	完形	26.4	43 × 48
12	土製円盤	1/3	37.4	44 (65) × 55 (86)
13	土製円盤	1/4	19.0	40 (57) × 40 (75)
14	土製円盤	完形	20.2	44 × 40
15	土製円盤	完形	21.6	41 × 44
16	土製円盤	完形	27.0	49 × 53

石器および石製品（第63～65図）

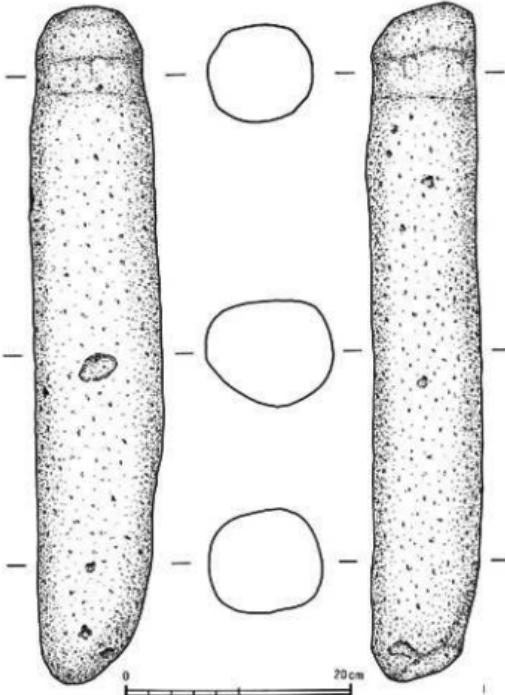
遺構外からは多種多様な石器が出土した。その多くはやはり出土土器の主体を占める後期前葉のものと考えられる。

かつて調査区の付近から採集されたものに第63図に示した石棒がある。有頭形のもので根元は未加工のまま残されている。頭部は敲打によって括れを作りだしている。全面に研磨が施されるが粗く多孔質な石材の粗面が各所に観られる。断面形は正円形ではなく、部分的に棱が残る。その原材の形状にかかる問題であるが、加工前の素材は角柱状の産状が推測される。敲打によって素材の角を除去して形状を整形したものと考えると、本資料の特徴はこうした推測とうまく合致する。

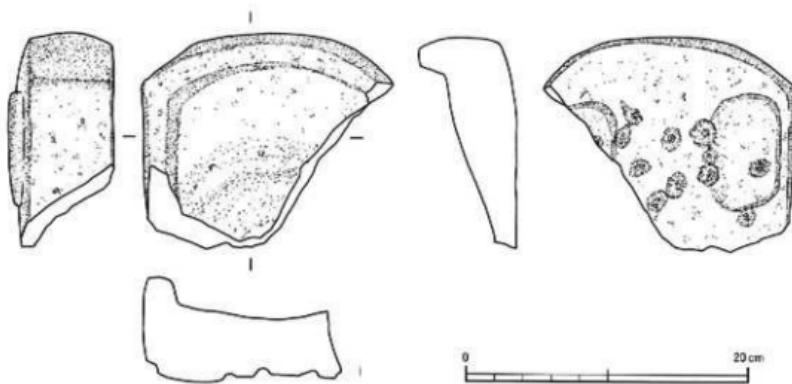
本資料は7区に以前存在した建物の建築工事の際に発見されたものであり、出土時は直立していたという証言がある。したがって、石棒を樹立する何らかの施設がそこに存在したことを示唆するのであろう。今回の調査で周囲に敷石住居址や配石遺構が存在することが確認できたこととも併せて、7区の性格を示唆する発見といえよう。

このほかに6区からは有脚の石皿が発見されている。多孔質安山岩を素材としており、全体の約半分程度が残存する。全体に胴張の方形を成し、四隅の脚部は方形に近い形状で作り出されている。

残存部は機能面の周囲に棱が作り出されている。おそらく欠損部の短軸側に張き出し部が設けられていたと考えられる。石皿の中央部は顕著に窪み使用頻度の高さを推測させる。また裏面には敲打による窪みが12箇所確認できる。脚部や底面など、とくに場所を特定することもなく観られるこうした窪みは、石皿の破損後に凹石として転用されたことを示唆する。



第63図 7区遺構外出土遺物 (13) (1/5)



第64図 7区造構外出土遺物 (14) (1/4)

7区造構外出土石器（第65図）

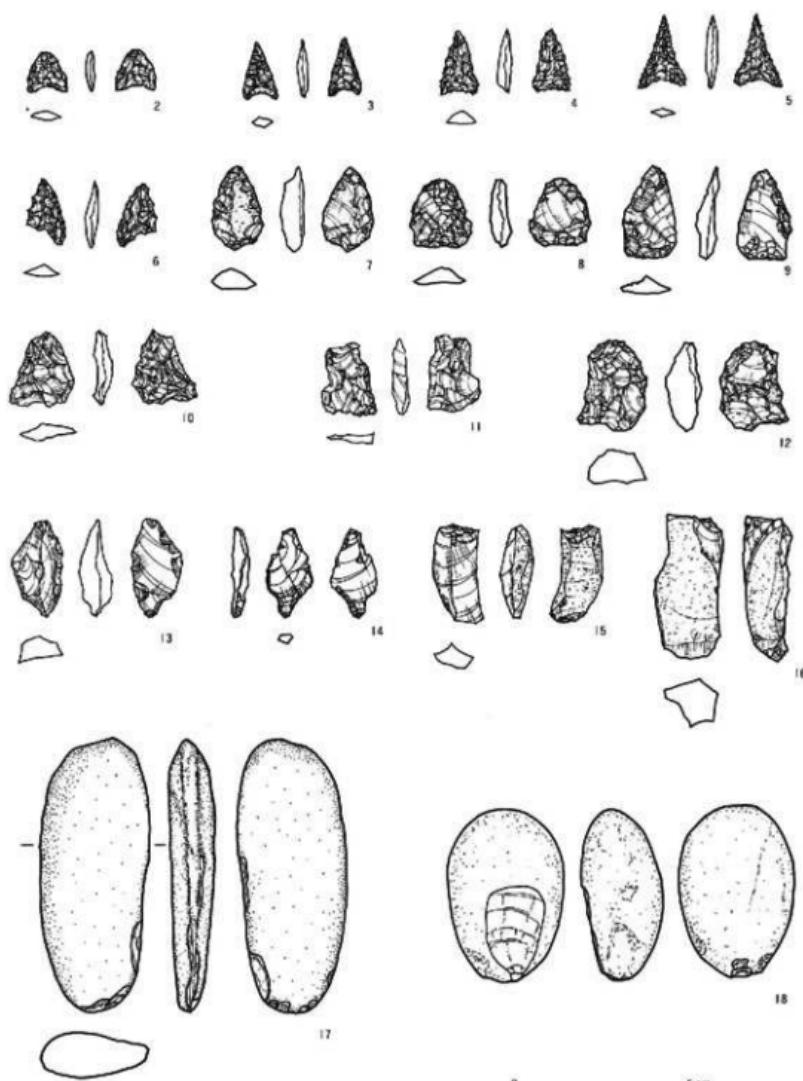
出土した石器のすべてがスコリア層以下の包含層からのものであり、とくに剝片石器が多い。第65図2～7は石鏃である。いずれも基部の抉りが浅く、鏃身が短いという形態的な特徴が指摘できる。8～14は剝片素材の周縁部を中心にして加工が施される。素材の礫面や主剝離面などを残して周縁加工を施したものに8～11がある。その中でも8、10は先端部の形状を意識して加工が行われている。他方素材の厚みや撓りなどに加工を加えたものに11～13があり、これらは先端部の作り出しが明確ではない。

以上はすべて黒曜石製であり、8～13は石鏃の未製品であると考えた。これらのなかに認められた2つの形態は加工の度合いや部位から分類したものであるが、それらは石鏃の製作工程の作業上直列的に位置づけられるのではなく、素材の形状に応じた加工作業の展開を物語るものであろう。

14、15は石錐である。黒曜石の剝片を素材にして先端を作出する。16は礫面をもつ剝片、17は一部に剝離痕があるが、全面に礫面を残す角柱状の「メリ石」である。第1号住居址床面出土のものと同様の形状をもつものであり、黒曜石原材の池之元遺跡への搬入状態を考える場合、興味深い。

18は橢円形の礫の一端に敲打痕をとどめるハンマーストーンである。19は卵形の自然礫の一端にやはり敲打痕を残すものであり、18と同様の機能を考えることができる。出土した石器の大半が剝片石器であり、しかもそれらが黒曜石製である点など、当地における後期前葉の石器群の構成を考えうえで興味深い資料である。

(阿部)



第65圖 7區遺構外出土遺物 (15) (2/3)

第2節 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、第IV層とした土層の上面の精査において、古墳時代の住居址が一軒発見された。本層は平安時代の遺構の確認面である。本来ならば両者は層位差をもって検出されるはずであるが、木層を含む周辺の土層が黒色を呈する点などから、検出は困難をきわめ、覆土の上部を取り除いた段階で両者が重複して存在することが判明した経過がある。

また遺構確認面以外から古墳時代の遺物は全く出土せず、周囲に当該期の遺構が存在する可能性は少ない。

第4号住居址（第66図） 発見された住居は椭円形のプランをもつ堅穴住居址であり、その一部を土石流の下底面が破壊し、さらに南側に平安時代の住居が重複するが、プランの全形は推測することができる。床面はほぼ平坦であるが、硬化した部分はとくに認められなかった。これは火山灰層自身を床面としているためかもしれない。

調査は床面付近において、柱穴や他の施設の痕跡を発見するために慎重に進めたが、炉址や柱穴等は検出できなかった。炉址は平安時代の住居址に破壊された可能性が高く、また柱穴は黒色土を床面にするために確認が困難であった可能性が高い。しかし床面よりやや浮いた位置に焼土や炭化物の集中があり、焼失家屋らしい状況も観察され、さらに壁際付近には、同じレベルで数個体の土



写真13 古墳時代・平安時代住居址の実掘状況（南より）

厚い火山性堆積物層に覆われて検出された住居址は、いざれも火災によって消失している。遺物の大半は住居址内の覆土やカマドの周囲から出土したもので、屋外などからは殆ど検出できなかった。

器が廃棄されていた（第66図）。

遺構の検出が極めて困難な状況であり、施設の痕跡も不明確な点は否めないが、本遺構のプランは焼土や炭化物の広がりや、わずかな上層の色調の違いから判断したものではあるが、ほぼその形態的な特徴は捉えているものと判断できる。

覆土は5枚に分層されたが、それらの堆積状況は自然堆積の状態を示すものであった。床面およびやや浮いた位置から検出された焼土面には炭化物が多く認められ、さらに焼土付近には焼け込みの痕跡が確認できた点からも、住居のプラン内で木材などの有機物が燃焼したことはほぼ確実と考えられる。ただし柱材など大形の炭化材等は発見されておらず、上屋をもつ建築物がそのままの状態で焼失したとするには疑問が残る。

何らかの形での片付けに伴う火入れ行為などを想定したほうが、土器などの出土状況からも妥当性が高いのではないだろうか。

出土遺物（第67図） 床面よりやや浮いた位置から5個体の土器が発見され、それらは住居址の壁際に幾つかのまとまりをもっていたが、接合の結果、台付壺の壺、台部各1点と高杯脚部1点および壺1点に復元された。大半の破片がこれらの個体に接合し、さらに平安時代の住居覆土からも接合破片が出士している。

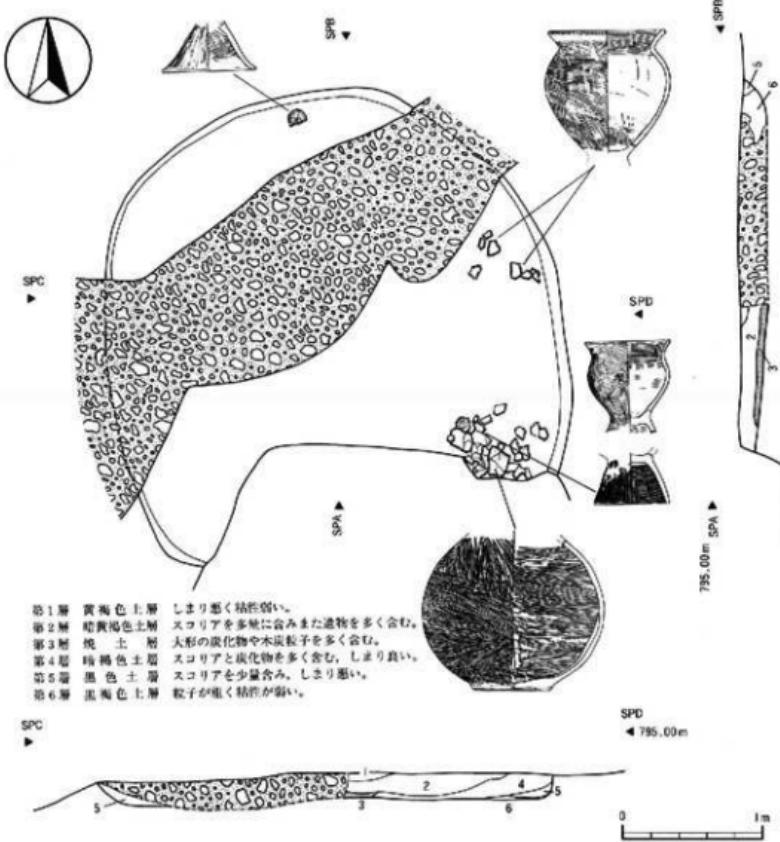
台付壺（1, 2）は刷毛目調整を残し、薄手の作りで、口縁部が「く」字に屈曲外反するもので、さらに2は口唇部には刻みが施される。内面にも刷毛目調整が施されている。2は中形であるのに対して1は小形で、サイズの違いが顕著である。

台部（4）も同様の器面調整痕を残す。高杯の脚部はやや厚手の器体厚をもち、外面は刷毛目痕がナデと研磨によって調整されている。内面にその痕跡の一部を見ることができる。壺（5）は口縁部を欠損する。内面には胴部以下と以上の部分に接合痕が認められる。内外面ともに良くナデとミガキが施されており、底部は若干上げ底状を呈している。

これらは廃棄の状態から活性が高く、さらに壺の口縁部に刻みを施す点などから、古墳時代前期の五領式土器の比較的古い段階に相当すると考えることができる。

池之元遺跡ではいまのところ、古墳時代前期の遺物や遺構は本地点で発見されたものが唯一のものである。しかも本遺構の周囲と同じ面で比較的広く精査したにも係わらず、遺物は皆無であり、さらに遺構の存在さえなかった。

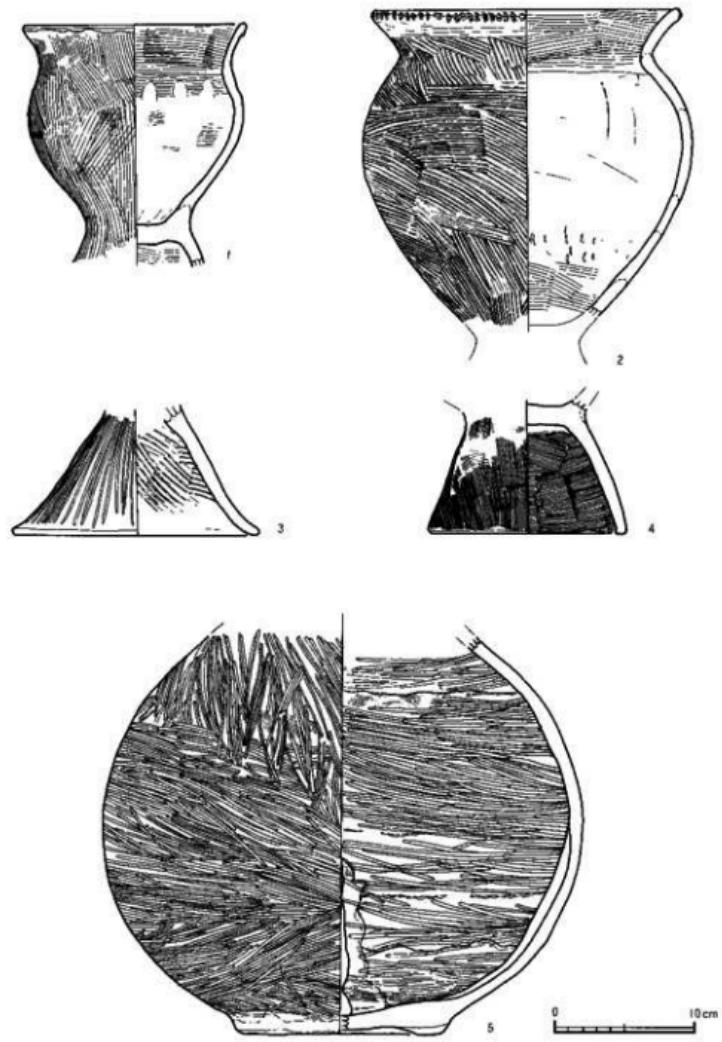
こうした状況から考えると、むしろ規模の大きな集落が存在したと考えるよりも、短期的な生活が何らかの経過のなかで残されたと考えた方が良いかもしれない。古墳時代前期という時期にありながら、こうした単独に近い施設とわずかな遺物を残す形態の生活址が、富士山麓周辺の古墳時代遺跡群のなかで、いかなる意義をもつものであるのか、富士山の火山活動とのかかわりや、標高



第66図 第4号住居址実測図 (1/40)

800mを越える高地での生業活動の対象やそれらの組織計画の諸点などを含めて、興味が持たれる問題が提出できた。

(阿部)



第67図 第4号住居址出土遺物（1）(1/4)

第3節 平安時代の遺構と遺物

池之元遺跡は、歴史時代の遺跡としても市域では拠点的な遺跡といえよう。3次にわたる調査の中で、限定された範囲の調査ではあるが、第1地点で平安期住居址の一部が検出され、第5地点では石組状の井戸址の一部と考えられる遺構が見つかり、そこからは「巾」の字が書かれた墨書き土器が集中的に出土した。また、今回報告の第7地点においては、平安期住居址2軒と該期の溝状遺構が検出された。本遺跡は前述のように富士山の火山活動による火山性の降下物が厚く堆積しているために、広範囲にわたる遺跡の調査は困難であるが、限られた範囲内の調査でも、全体で3軒の住居址と、井戸状遺構および溝状遺構の一部が検出されているので、今後さらに調査を進めれば該期の遺跡の実態がより明らかにならう。

つぎに、本遺跡第7地点における平安期の住居址とそのほかの遺構およびそこからの出土遺物の概略について記述していくが、その中で住居址の帰属時期については、これまでに確立している本県の土師器編年を使用した。

参考文献

- 坂本・末木他 1983 「奈良・平安時代土器の諸問題——甲斐地域」「神奈川考古」第14号
三好美穂 1990 「6 平城京左京二条四坊十一坪の調査 第180次III出土遺物 3土器類」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』奈良市教育委員会
平野・山下他 1992 「甲斐型土器——その編年と年代——」山梨県考古学協会(甲斐型土器研究グループ)

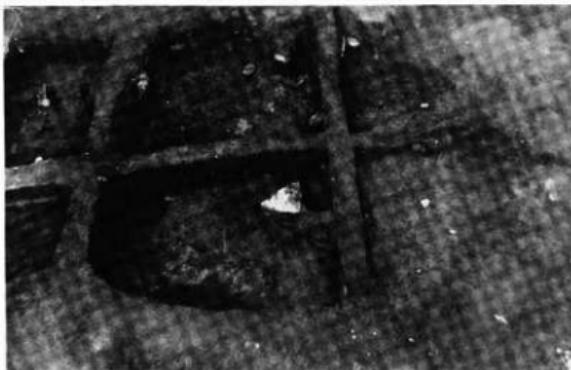


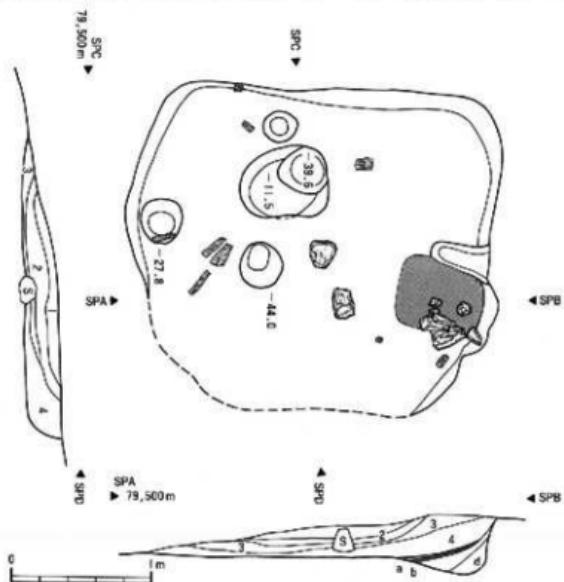
写真14 第2号住居址調査状況（西より）

平安時代の住居址は概九方形のプランを基し東側にカマドを作り付ける。縦斜面に立地しているが底面はほぼ水平に調えられている。床面には炭化材や焼土が多く検出され火災に遇ったものと推測される。

第2号住居址（第68・69図・写真15）

7A区において古墳時代五領期の住居址と重複して検出された。住居址の北西部分は五領期の遺構を破壊して造成されている。平面形は隅丸の方形を呈し、南壁は残存しておらず、その部分の遺構検出は住居の床面を追う形で行った。規模は東西5.2m、南北は現状で4.5mを測る。壁はわずかに外傾し、確認された壁高は北壁で48cm、東壁60cm、西壁10.5cmを測る。カマドは東壁の中央部やや南寄りに設置されている。焼土はカマドの全面にわたって検出された。床は平坦に仕上げられている。ピットが4ヶ所確認されたが、そのうちの1基は皿状の掘り込みと重複している。規則的なものではなく、壁際のもの以外は柱穴とは考えられない。また、床面に密着して炭化材が検出され、ピット中に残存する材もあり、焼失家屋と考えられる。

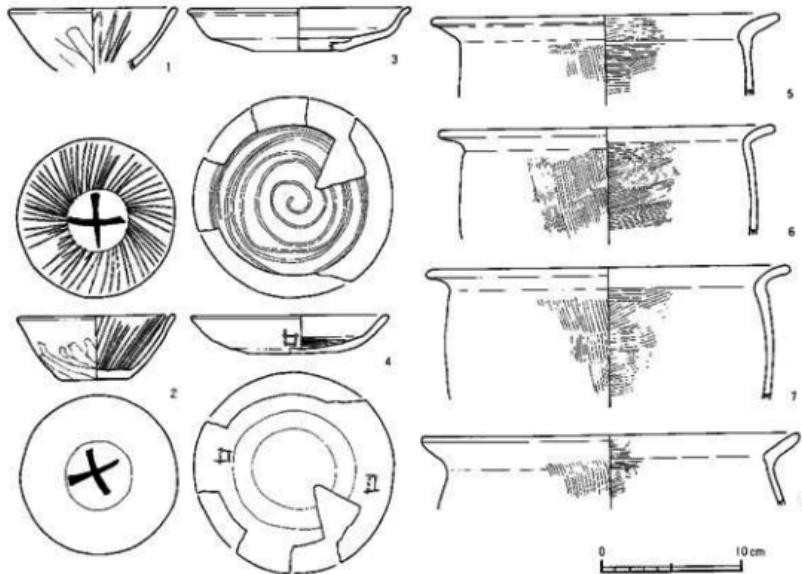
遺物はカマドとその前面あたりに集中しており、土師器坏、皿、甕などがみられる。甕はおもにカマドから出土している。第69図の1は覆土内から出土した土師器坏で、口径は12.0cmで底部を欠く。色調は茶褐色、焼成は良好である。整形は外面が横ナデ後に口縁部方向に斜めヘラ削りを加え



- 第1層 明褐色土層 赤色スコリアを多く含み、しまり悪く粘性弱い。
 - 第2層 黒色土層 炭化物粒子と焼土粒子を多く含みしまり悪く粘性乏しい。
 - 第3層 明褐色土層 粒子細かくしまり良い。下位に焼土、炭化物粒子を多く含む。
 - 第4層 暗褐色土層 スコリアと炭化物を多く含む、しまり良い。
- a層 焼土層 若干の炭化物粒子を含みしまり良い。
 b層 黒色土層 多量の木炭粒を含み濃密でしまりが良い。
 c層 明褐色土層 粒子が細かく粘性が強い。
 d層 暗褐色土層 しまりが悪く粘性に乏しい。

第68図 第2号住居址実測図（1/40）

ている。内面は横ナデのうえに花弁状暗文を施している。2も覆土内から出土している。身込みの深い土師器皿で、口径は11.2cm、底径4.8cm、器高4.5cmを測る。色調は暗褐色で、緻密な胎土を有し、焼成は良好である。整形は外面が横ナデのうえに斜めヘラ削りを施し、底面はヘラ削りである。内面は横ナデ後に放射状の暗文を施している。内面底部および外面底部に「+」の字が墨書きされる。3は覆土内からの出土である。口径は15.8cm、器高は3.1cmを測り、側部の中ほどに一段の稜をもつ土師器皿で、やや大ぶりである。内外面とも横ナデされ、外面の側部下半は回転によるヘラ削り整形である。色調は茶褐色であり、少々の焼きむらが観察される。胎土は比較的緻密で、焼成は良好である。4は住居東側の覆土内出土の土師器皿である。側部の中ほどにゆるい稜を有する。口径は14.2cm、器高は2.7cmを測る。器面は横ナデされ、内面にはうず巻き状の暗文がある。外面底部は回転状ヘラ整形がなされ、その側部には2ヶ所に刻畫がみられる。5はカマド内出土の土師器皿である。口径は24.8cm、口縁部外面は横ナデ整形で、内面は粗雑にハケ日調整される。胴部は内外面ともハケによる整形がなされる。色調は茶褐色、やや粗い胎土で、焼成は良好である。6はカマド内からの検出である。口径は24.0cm、口縁部の内外面は横ナデされる。胴部は外面は継位に、内面は横位にハケ日整形が施される。色調は茶褐色、やや粗い胎土をもち、焼成は良好である。7はカマド付近から出土の甕である。口径は26.0cm、口縁部の内外面は横ナデされる。胴部は同様にハケ日



第69図 第2号住居址出土遺物 (1)(1/4)

整形がなされる。色調は茶褐色、やや粗い胎土をもち、焼成は良好である。8はピット内出土の土師器甕で、口径は27.0cm、口縁部はくの字状に外反し、色調は茶褐色で、やや粗い胎土を有する。外面には継ぎの、内面は横位のハケによる整形がなされる。

以上の遺物から、甲斐型土器編年でいうⅧ期に相当するものと考えられる。従来の編年による曆年代では9世紀の第4四半世紀にあたるが、甲斐型土器研究グループによる曆年代では、蘿崎市宮ノ前第2遺跡7号住居址出土資料に対応し、820～840年頃に比定される。

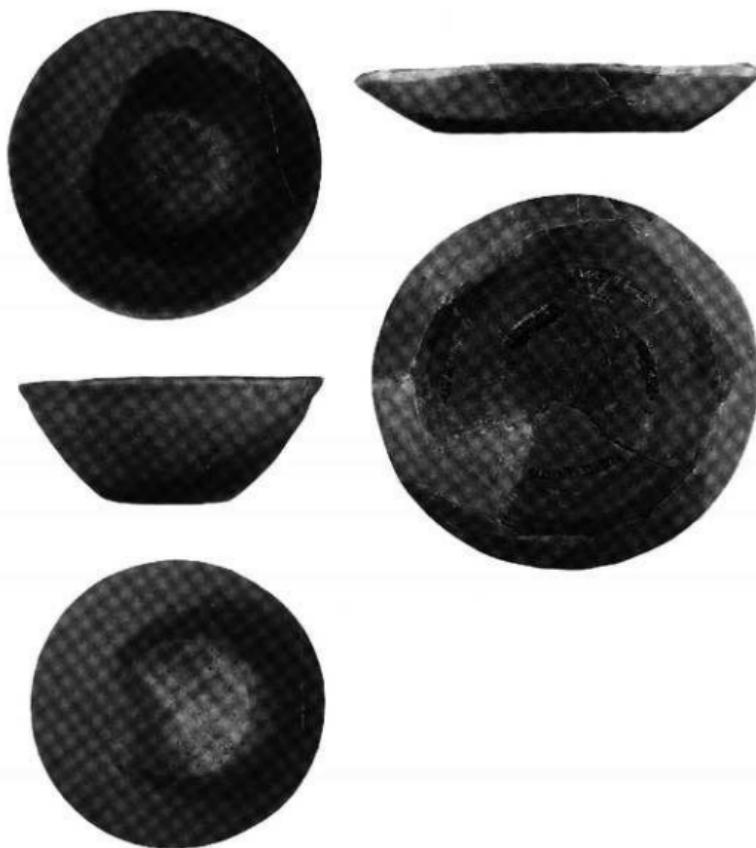


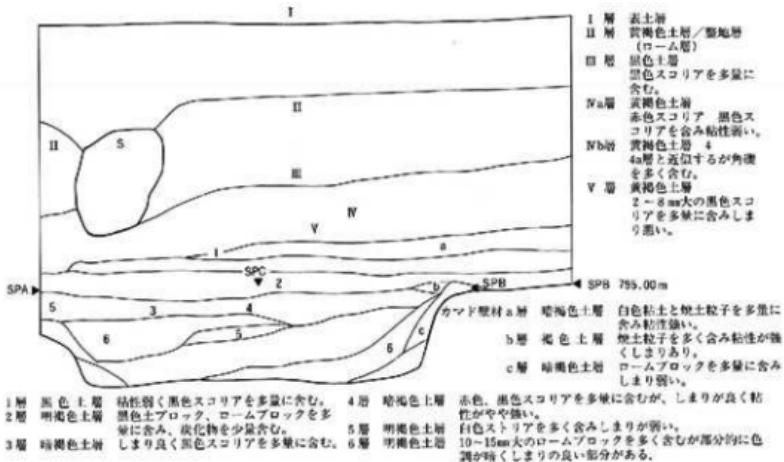
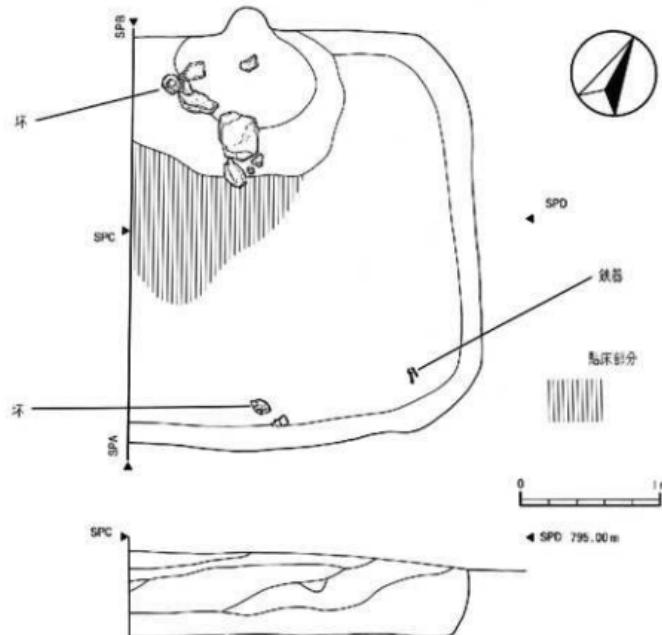
写真15 第2号住居址出土遺物（1/2）

第5号住居址（第70～72図・写真16）

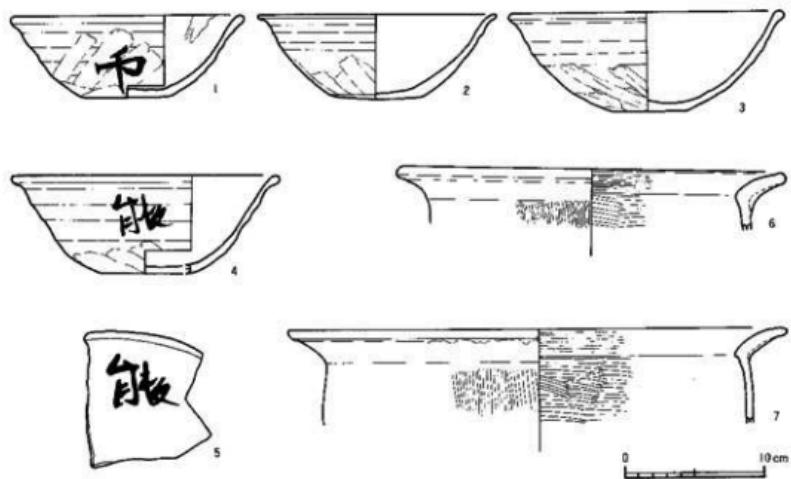
この住居址は調査の当初において、数ヶ所に設けた試掘坑のひとつで、5m×5mにグリッド坑を設定し、7B区と呼称することにし、土層、遺物の包含状況、遺構の存在状況を確認した際に検出された住居址である。そのため、グリッド外となった西側の一部は未発掘である。平面形は隅丸方形を呈する。規模は南北の主軸方向で5.5mを測る。壁は東側がやや内側に湾曲して立ちあがり、北・南壁はわずかに外傾する。確認された壁高は北壁で80.5cm、東壁89.0cm、南壁80.0cmを測る。カマドは北壁中央部に設置される。石組はカマドの西側と手前にまとめて埋めこまれており、西側のものは袖石として用いられたものであろう。カマドの東側には石組は認められず、第4号住居址のカマドと同様に總石組のカマドではなく、粘土併用のカマドと考えられる。焼土はカマドから掘き出されて、床の中央部付近まで広がった状態で検出された。床は平坦に仕上げられ、調査範囲の中ではピットは確認されなかった。

遺物は、カマドや壁際から土師器壺、甕が出土した。第71図1は壺で口径12.4cm、底径4.5cm、器高4.4cmを測る。色調は褐色、胎土は緻密で赤色粒子を含有し、焼成は良好である。整形は外側が横ナデ後に斜めヘラ削りし、「巾」の字を墨書きしている。2は覆土中出土の壺で、口径12.0cm、底径3.8cm、器高4.5cmを測る。色調は茶褐色、胎土は緻密で、焼成は良好である。内外面ともいねいにナデ整形され、外側部下半と底部はヘラ削り整形がなされている。3は口径15.0cm、底径4.2cm、器高4.3cmを測る大ぶりの壺である。色調は茶褐色、胎土は砂粒を含有する比較的緻密なもので、焼成は良好である。整形は内外面とも横ナデを施し、外側部下半と底部はヘラ削りにより整形している。4も口径14.0cmを測るやや大ぶりの壺であり、底部を欠く。色調は茶褐色、胎土は緻密で、焼成は良好である。内外面とも横ナデ調整し、側部下半はヘラ削り整形である。「能」の字が墨書きされる。5は壺の破片である。色調は茶褐色、胎土は緻密、焼成は良好である。4と同様に「能」の字が墨書きされる。6は甕の口縁部破片である。口径21.0cmを測る。色調は茶褐色、やや粗い胎土で、焼成は良好である。くの字状に外反する口縁部の外側に粘土をはりつけている。口縁部外面は横ナデ、内面はハケ調整の上を横ナデしている。胴部は外面を縦位に、内面を横位にハケ調整している。7は6に比べて大きい甕で、口径は27.0cmを測る。色調は茶褐色、胎土はやや粗く、焼成は良好である。整形はくの字状に外反する口縁部の外側にはりつけがみられる。色調は茶褐色、胎土はやや粗く、焼成は良好である。整形は口縁部外面は横ナデ、内面はハケ目のうえを横ナデする。体部外面は縦位に、内面は横位にハケによる調整を施すが、内面と外表面ではハケの幅や単位に違いがみられ、2種類の工具を用いているようである。

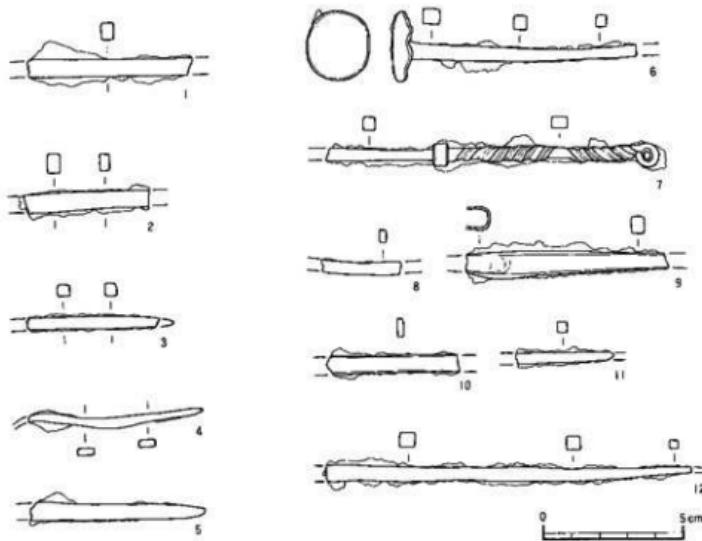
なお、第72図の6と8をのぞいて、そのほかの鉄製品は本住居址とその周辺から出土している。本住居の時期は甲斐編年でいうXI期に相当するものと考えられ、從来の曆年代では、10世紀の第3四半世紀にあたり、甲斐型土器研究グループによる曆年代では、880～920年頃に比定される。



第70図 第5号住居址実測図(1/40)



第71図 第5号住居址出土遺物(1)(1/4)



第72図 7区出土鉄製品(1/2)

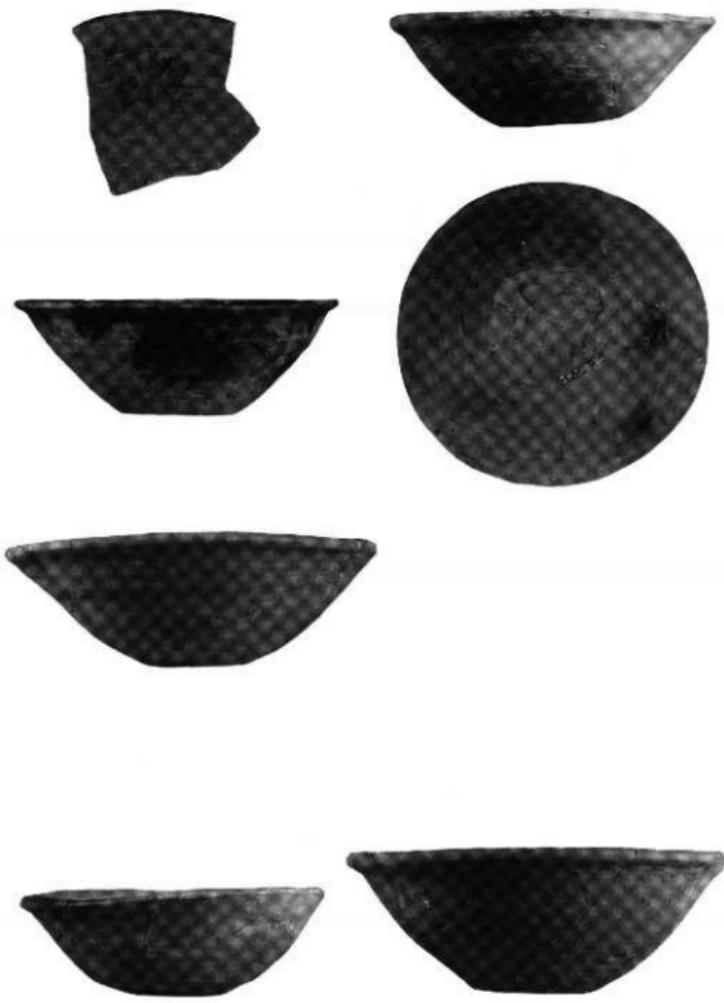
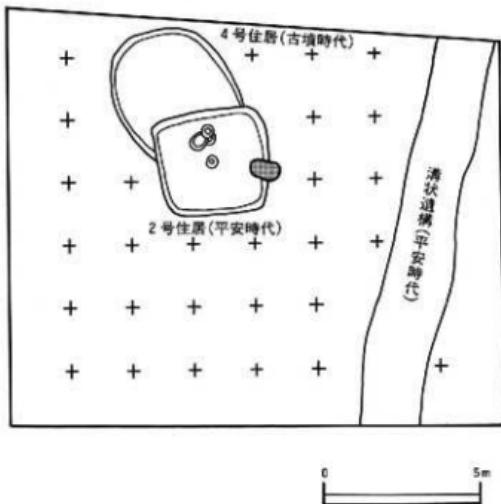


写真16 第5号住居址・溝状遺構出土遺物 (1/2)

溝状遺構（第73・74図）

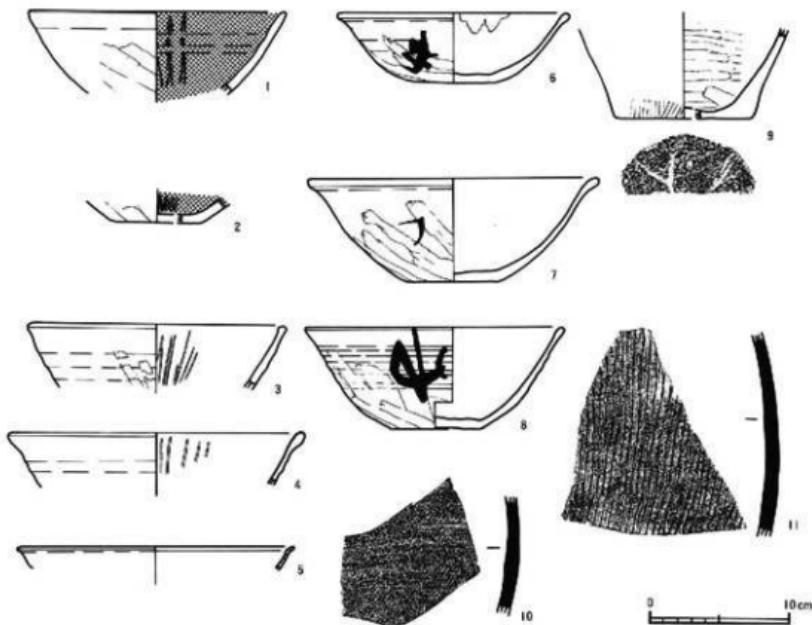
7 A区の東辺にほぼ南北方向に溝が検出された。北限壁では1.6mを、南限壁では1.8mを測る。溝の断面はV字状を呈するが、底面は凹凸がはげしい。黒色の覆土中には握り拳の礫が多量に混入される。この溝の中からは、多くの遺物が検出された。

第74図1は内黒の土師器壺である。口径は14.0cmを測り、底部を欠く。色調は外面茶褐色、内面は黒色で、焼成は非常に良好である。口縁部外面は横ナデされ、側部はヘラにより整形され、内面は横ナデのうえに暗文を施す。2は内黒土器壺の底部破片である。側部外面、底部外面はヘラ削りによる整形である。色調は外面茶褐色、内面は黒色で、緻密な胎土をもち、焼成は良好である。内面は横ナデ調整後に放射状の暗文を施している。3は土師器の壺破片で、推定口径は14.0cmである。色調は褐色、胎土は緻密で、焼成は良好である。外面側部下半はヘラ整形される。内面は横ナデのうえに暗文を施す。4は土師器壺破片で、口径は16.0cmを測り、底部を欠く。色調は茶褐色、胎土は緻密、焼成は良好である。内外面とも横ナデされ、内面に暗文がみられる。5はロクロ整形の灰陶器の口縁部破片である。口径15.0cmで、底部を欠く。焼成は良好である。内面にのみ灰釉が認められる。6は土師器壺で、口径12.6cm、底径4.0cm、器高3.7cmを測る。色調は茶褐色、胎土は緻密で、焼成は良好である。内外面とも横ナデされ、外面の側部と底部はヘラ削り整形である。口縁



第73図 古墳・平安時代の遺構分布

部内面にはタールが付着する。側部に判読不明な文字が墨書きされる。7は口径15.6cm、底径5.0cm、器高5.5cmを測る大ぶりな土師器杯である。色調は茶褐色、胎土はやや緻密で砂粒が含まれ、焼成は良好である。内外面とも横ナデされ、外面の側部と底部はヘラ削り整形が加えられる。側部にはかたかな「フ」の文字が墨書きされる。8は土師器杯である。口径14.0cm、底径5.0cm、器高5.5cmを測る。色調は茶褐色で、胎土は緻密、焼成は良好である。内外面とも横ナデされ、外面の側部、底部はヘラ整形である。側部には「巾」の文字が墨書きされる。9は須恵器の底部破片で、底径は16.0cmを測る。色調は青灰色、焼成は良好である。外面は叩き目による調整がなされる。10と11も溝内から出土した須恵器の側部破片であり、11には叩き目が認められる。なお、第72図7、8の鉄製品はこの溝中からの出土である。



第74図 満状遺構出土遺物 (1)(1/4)

第IV章 調査成果の分析研究

第1節 富士吉田市池之元遺跡のテフラ

河西 学

池之元遺跡は富士火山の北北東約16kmで、御坂山地の箱山（1301.7m）から南西にのびる尾根の南斜面下部に位置する。本遺跡の発掘調査時の地質断面において、カワゴ平軽石、大室スコリア、および古墳時代～平安時代に降灰した黒色スコリアの3枚のテフラが観察された。第1図に北壁での模式柱状図を示す。以下に各テフラについて述べる。

カワゴ平軽石（KgP）

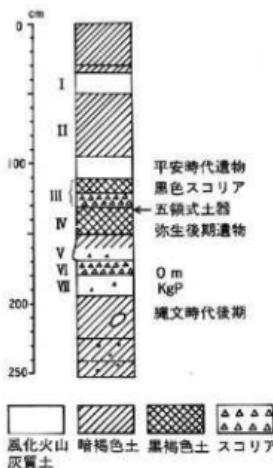
大室スコリア直下の褐色～暗褐色土中に細粒白色粒子として点在する。カワゴ平軽石は、1mm以下の細粒に発泡した多孔質無色火山ガラスから成りして構成される軽石質テフラである。軽石中にはときとに新鮮な緑色角閃石・斜方輝石・斜長石の柱状自形結晶が含有される。軽石の火山ガラスの屈折率は、1.500-1.504（測定：都立大学町田洋教授）の値が得られた。

本遺跡西壁断面の大室スコリア直下のⅦ・Ⅷ層において各層上下で試料を採取した。1/4-1/16mm粒径粒子の鉱物分析の結果を第1表・第2・3図に示す。鉱物組成における火山ガラスは、Ⅷ層上部からⅦ層上部にかけて、風化物やスコリア片を除外した鉱物粒子全体の20%を占めている。カワゴ平軽石を特徴づける火成ガラスは、繊維状のE型や多孔質のF型が多く塊状のB型をわずかに含む。また第3図の重鉱物組成図では、角閃石が数%以下の低率で検出されているが、これらの角閃石はカワゴ平軽石にともなう一次鉱物である。しかし大部分を占めるカンラン石・斜方輝石・单斜輝石・不透明鉱物は富士火山からもたらされたテフラに由来するものである。富士火山北東麓地域では、大室スコリア直下においてカワゴ平軽石が厚さ1cm前後の純層としてみられる場合もある。しかし多くの場合カワゴ平軽石は火山灰土層中に土壤化して存在している。本遺跡でのカワゴ平軽石も土壤化作用によってテフラ粒子が上に分散した可能性が考えられる。

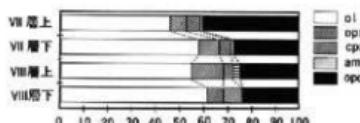
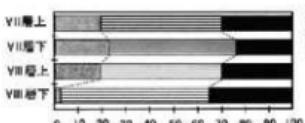
本遺跡のカワゴ平軽石は層として肉眼で識別されなかったため、縄文時代後期の加曾利B1式・場之内式遺物との直接的な層位関係は明確にされなかつた。しかし本層直上の大室スコリアは後述のようにこれらの遺物を覆うことが確認されている。したがって本テフラ降灰期が縄文後期～晩期とする見解（町田ほか、1984；増島、1979）と調和的である。カワゴ平軽石に関する¹⁴C年代は、

第1表 計数鉱物 (A ~ F' は火山ガラス)

試料番号	VII層上	VII層下	VIII層上	VIII層下
A 無色			1	1
A' 無色	3	3		1
B 無色	6	6	7	2
C 無色	1	6	3	1
D 無色		2	1	
E 無色	18	23	12	2
F 無色	29	36	38	3
F' 緑褐色		1		
F' 無色	5	1	1	
F' 緑褐色	4			
石英+長石	170	178	166	234
カソラン石	47	47	54	82
斜方輝石	6	7	13	9
両輝石平行斑晶	1			
單斜輝石	6	4	4	10
角閃石	1	1	3	1
不透明鉱物	41	22	24	31
黒雲母	1			1
その他	393	482	475	622
合 計	732	819	802	1000



第1図 富士吉田市池之元遺跡、北壁柱状図

第2図 池之元遺跡 火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成
gl: 火山ガラス LM: 軽鉱物 HM: 重鉱物

ol: カソラン石 opx: 斜方輝石 cpx: 単斜輝石
am: 角閃石 opq: 不透明鉱物

$2,830 \pm 120$ y. B. P. (GaK-253), $3,250 \pm 70$ y. B. P. (葉室, 1977) が測定されており、直下から $2,900 \pm 100$ y. B. P. (大木・筧田, 1975) が得られていることなどから、その噴出年代は、2900~2800年前と推定されている (町田, 1980; 町田ほか, 1984)。

大室スコリア (Om)

層厚は最大24cm、普通10~17cm。細かい葉理の発達する分級良好な青灰色スコリア層。粒径は最大15mm、平均1~5mm、発泡は良好。丸~引長された細かい泡から構成される。スコリアは新鮮で角ばっている。スコリア層は細かくみると2~30mmの薄層が重なりあっており、最下部の3cm程に褐鉄鉱の沈着がみられる部分が存在する。岩片の含有は、ほとんどみられない。

本遺跡での大室スコリアは縄文時代後期の堀之内式・加曾利B 1式の包含層を覆っている。大室

スコリアの直上のV層は無遺物層であり、さらに上位のIV層では弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が含まれている。

大空スコリアは、カワゴ平軽石より上位であり砂沢スコリア (Zu) の直下であるというテフラの層位関係から3000~2500年前 (町田, 1980), 2800~2500年前 (町田ほか, 1984), 3000~2800年前 (宮地, 1988) の隕灰年代が推定されている。

III層スコリア

最大層厚10cmでIII層最下部にレンズ状に分布する。粒径は1~3mmの粒子が多く、最大粒径10mm、分級は中~不良・黒色スコリアが主体だが、風化により表面が黒褐色~褐色を示すものも少なくない。粒子は粒状が多いが角ばったスコリアもみられる。全体に新鮮、発泡は良好で泡壁の厚さは0.1~やや薄く、気泡は球~引長された形をしめす。斑晶鉱物として斜長石が含まれるあまり目立たない。そのほか赤色スコリアがわずかに含まれる。岩片・単粒斑晶鉱物はほとんどみられない。このテフラは本遺跡において、古墳時代の五領式土器包含層を覆い、平安時代遺物包含層におおわれる。富士火山は弥生時代から平安時代にかけて活発な火山活動をしている (町田ほか, 1984, 宮地, 1988)。本テフラもおそらくこれらの火山活動とともに噴出した降下テフラの内の一ひとつと考えられるが、どのテフラであるか特定に至っていない。今後の試料の蓄積によって検討したい。

池之元遺跡は、富士テフラの堆積と厚い遺物包含層とが重なりあっていて、縄文後期住居址の保存状態も良好である。テフラや遺物包含層を覆う地層は、スコリアのほかしばしば角礫を含む無層理で分級不良な暗褐色土層である。これらの角礫は、本遺跡の立地する御坂山地の構成している緑色変質した第三紀火山岩類である。本遺跡での暗褐色土層の厚い堆積は、これらの角礫を含む斜面上部で形成された堆積物が斜面に沿って下方移動したことによって形成された可能性が推測される。

なお、屈折率の測定は、都立大学町田洋教授にしていただきました。記して感謝いたします。

(1989年5月脱稿)

引用・参考文献

- 葉室 和輔 (1977) 伊豆大室山天城側火山群地久保中央火口丘跡ドスコリア、カワゴ平火碎流の¹⁴C年代。火山, 第2集, 22, 277~298。
- 町田 洋 (1980) 富士テフラと古代遺跡。考古学ジャーナル, 178, 2~11。
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重太 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ。渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, 865~928。
- 宮地 直道 (1988) 新富士火山の活動史。地質学雑誌, 94, 433~452。
- 大木靖道・袴田和夫 (1975) 箱根芦ノ湖誕生のなぞをさぐる。国土と教育, 30, 2~9。
- 増島 浩 (1979) 上白岩遺跡に堆積する火山起源粒子と遺物の関係。「上白岩遺跡発掘調査報告書」, 125~129。

第2節 堀之内2式の器種構成と組成率

—池之元遺跡における堀之内2式土器の構成と
いわゆる「精製」「粗製」土器の認識に関する型式学的問題—

阿部 芳郎

はじめに

われわれが縄文土器の型式学的な分類や器形に着目する場合、遺跡から出土した土器群は、全体を構成するいくつかの現象や属性に分解され、その一部を有意な対象として分析することが一般である。つまり遺跡において、ある因果関係のもとに集積した土器群の構成背景の総体を扱うという視点は、型式学的な研究の延長上に意識されることはあっても具体的な検討の方法は未開拓である。

こうした現状の認識から、池之元遺跡出土の後期土器の分析の実際において、より問題を具体化させるならば、池之元遺跡から出土した土器群の主体が堀之内2式であるという認識は、「単位土器群」^(註1)の中の、いわゆる「精製土器」の分類体系に依拠した判断によっている。後期以降の時期に出土量のうえでは「精製土器」を上回るという「粗製土器」の成立背景や、その歴史的な意義が充分な検討の場を作り得ないで今日を迎えたのは、こうした研究事情の反映である、と回顧することもできる。

こうした事態の回避に、精製土器に共伴する粗製土器の型式分類を充実させるとする方法があるが、本論では系統的な流れについて概観するに止めここでは深くは触れない。敢えてそうした方法をとらない理由は、そもそも学史的な継承を前提として汎用されているはずの「精製」「粗製」という概念自体が極めて恣意的なものであり、筆者自身の生活用具としての土器の認識方法とのあいだに、かなりの距離を感じさせるものであることを認めざるえないし、そうした観点から単位土器群の構成背景を出土資料そのものから読み解くには、今日的な「精製」「粗製」という分類枠とは次元を異にした分類概念の設定をおこない、系統的変化や器種間の関係を把握して単位土器群の構成を明らかにすることが有効であると考えるからである。言い方を変えれば「精製土器」「粗製土器」の成立といった現象は器種構成上の変化としてまず型式学的な手法によって合理的に説明されるべきであり、さらに土器製作技術や土器の機能の変化として理解すべき現象と考える立場に筆者は立つ、ということである。

小論では堀之内2式期の関東・中部地方の土器型式が、従来からいわゆる「精製土器」と「粗製土器」^(註2)という認識で区別される二者から構成され、さらに粗製土器の分布は精製土器の分布よりも

狭域である点に着目しつつ、その両者の関係について器種組成や器種を単位とした土器の変遷や分布という、単位土器群を構成する属性の相互関係から、その意味について池之元遺跡出土土器を中心にして考察する。なお、こうした問題の検討を踏まえて現段階において一般に「精製土器」と呼称される土器を「意匠文系土器」、さらに「粗製土器」を「素文系土器」と呼称するが、同義語ではないこれらの概念とその用法・意味については後述する。

1 「単位土器群」から「個体資料群」へ

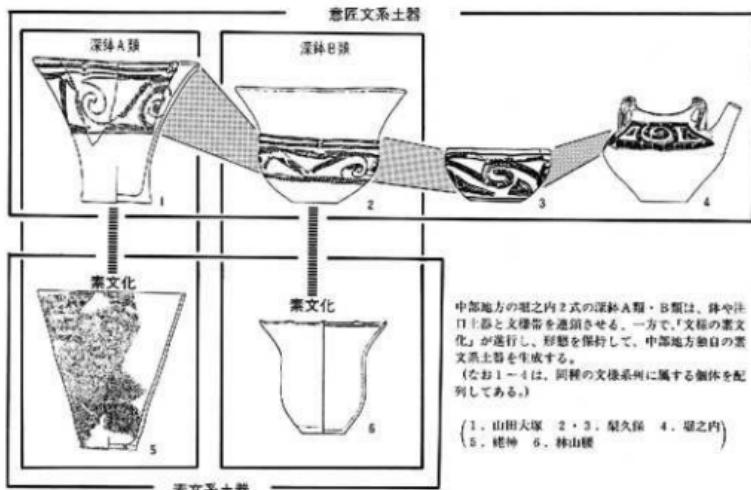
遺跡から出土する土器の大半が破片となっていることは通例であり、その多くが個体に復元され得ないもの普通である。なぜそうなったかという現象面についてはここでは扱わないが、小論での検討対象となる器種の構成や組成率の理解、さらに土器製作における各種技術の運用頻度や、そうした現象の成り立ちを説明する際には、個体識別された破片資料を資料操作の概念上において「個体資料」と考える視点が必要である。そしてそのためには、(1)個体間における型式学的要素の共有形態(2)資料の型式学的な分類を前提とした土器製作技術の分析、(3)個体資料における使用痕跡の観察など、ことなる方法を組み合わせた一連の分析過程を通過させなければならない。

小論では池之元遺跡7A・B区出土の堀之内2式土器について、主に(1)を主体とした分析を実施し、単位土器群の構成背景について検討する。こうした作業は当然ながら後期土器に特徴的な器種分化と粗製、精製土器の成立などいくつかの先史の指摘について検討を及ぼすことになるが、もっとも深くかかわると思われる精製・粗製土器の理解については、土器の単なる見かけや、量的な傾向から導かれる実態を得ない抽象的な理解ではなく、土器製作技術と、分化や統廃合を伴う器種間関係および土器の機能との関係化の実態を明確にする必要がある。

(註4)
結論的なことを先に述べるならば「粗製土器」は「精製土器」よりも「粗雑」な作りであると説明し、理解することはできないこと。さらに漠然とした「精製」・「粗製土器」の印象や憶測を容易に土器の数量やサイズの集計で説明したかに見せかける実態をはなれた研究現状から解放してやる意図が必要でもある。そして型式学的属性と土器製作技術の2点から説明されるいわゆる「粗製土器」とは「精製土器」(意匠文系土器)と比較した場合「素文系土器」とも表現される独自の製作体系と機能を予測させる土器であり、「精製」と「粗製」という概念はこうした土器製作技術と製作工程、さらに機能的類推から相対化された二項対立的な区分の表層的な現象の一部と表現し得る。この認識を基点にして後期前半の個体群構成を扱う技術、そして運用の具体的な行為の復元から池之元遺跡の単位土器群構成の意義をさぐってみよう。

(1) 堀之内2式の個体間における型式学的属性と連鎖関係

堀之内2式土器を構成する個体群において、いわゆる「精製土器」とされる一群の器種には、深鉢や注口土器・鉢・浅鉢などがある。これらの器種の主な型式学的属性である文様帶構成と文様に



第1図 堀之内2式の意匠文系土器と素文系土器の構成

注目すると、そこには3つの特徴が指摘できる。

- 1) 各々の文様帶には複数の異なる文様が描かれる場合が多い。
- 2) 同じ文様は一定の原則のもとに形態や器種の差異を越えて描かれる場合がある。
- 3) ひとつの文様は年代的な変化を遂げる場合が多く、時としてそれに伴って文様の書き方も変化する。

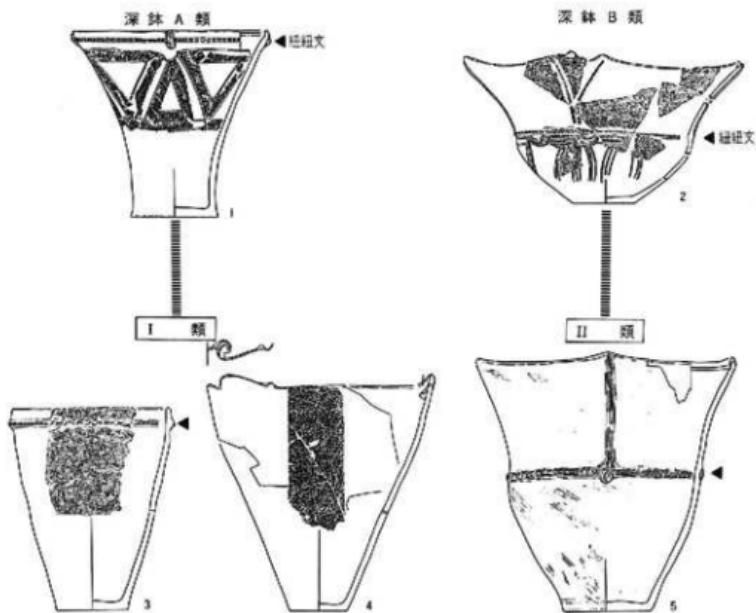
以上の特徴は、個々の器種相互に共有される関係を示唆することが多く、単位土器群を型式学的な側面（共時性、系統性）から裏付ける現象として重要である。池之元遺跡を含む中部地方における堀之内2式土器の器種と形態および文様の関係は、第1図のように整理される。

またこうした現象と共に注目すべき点は、精製土器相互の「文様帶や文様の共有関係」とともに、いわゆる粗製土器と精製土器において「形態レベルでの相同の関係」が成立している点であろう。具体的に指摘するならば池之元遺跡においても確認される、意匠文系深鉢A類と無文の深鉢、さらに深鉢B類と相同形態の無文の深鉢の在り方である（第1図）。

(2) いわゆる「粗製土器」の成立にかかる型式変化

池之元遺跡から出土した「粗製土器」には無文ヘラ削りの深鉢がある。その形態には口縁部が緩く外反する朝顔形のもの（I類）（第2図3・4）と、口縁部が外反し、胸部が緩く膨らむもの（II類）（第2図5）の二者がある。

両者は中部地方における後期以降の素文系深鉢の主体を成すものであり、これらの土器群の型式

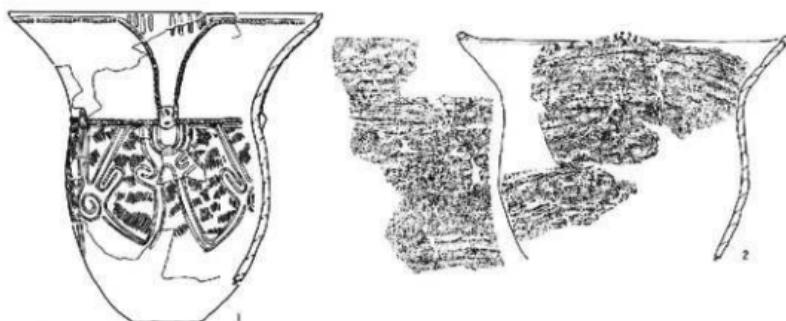


池之元遺跡の深鉢は、意匠文系深鉢のA・B類と共に、素文化の著しい器種が共存している。それらは、例えは細網の利用や形態など相互に関連し、併他のではない。一方で素文化したこれらの形態は、丈高化の傾向が顕著である。

第2図 池之元遺跡における堀之内2式深鉢の構成

学的な側面からみた成立動向に関しては、いままでに充分に検討されたことがない。池之元遺跡の資料に注目してみると、4は口縁部に耳状の突起が付され、その内面に隆線による渦巻文が配されるなど、堀之内2式の朝顔形の土器（深鉢A類）に見られる装飾をもつ。さらに3は同様に深鉢A類に通有の細線文を添付する。これらは「精製土器」（意匠文系）の深鉢A類と同一または関係する形態や装飾をもつ類似した系列であることが予測できる。

またII類とした口縁部の外反する形態の深鉢には、池之元遺跡では逆位埋甕に用いられた完形の深鉢がある。意匠文系の深鉢B類では器高がより低く、頸部の外反の度合いも強いものが主体であるが、そうした特徴よりもむしろ「丈高化」の傾向が強い。山梨県能神遺跡では堀之内1式終末の時期で意匠文系の深鉢B類とともに、同形態の無文深鉢が共存している（第3図2）。さらにこの深鉢の頸部には雜描の沈線文が描かれるなど、意匠文系深鉢B類の文様帶が素文化した経過を見て取ることができる。また長野県林山腰遺跡4号住居址（第4図）では口縁部の突起や形態に深鉢B類



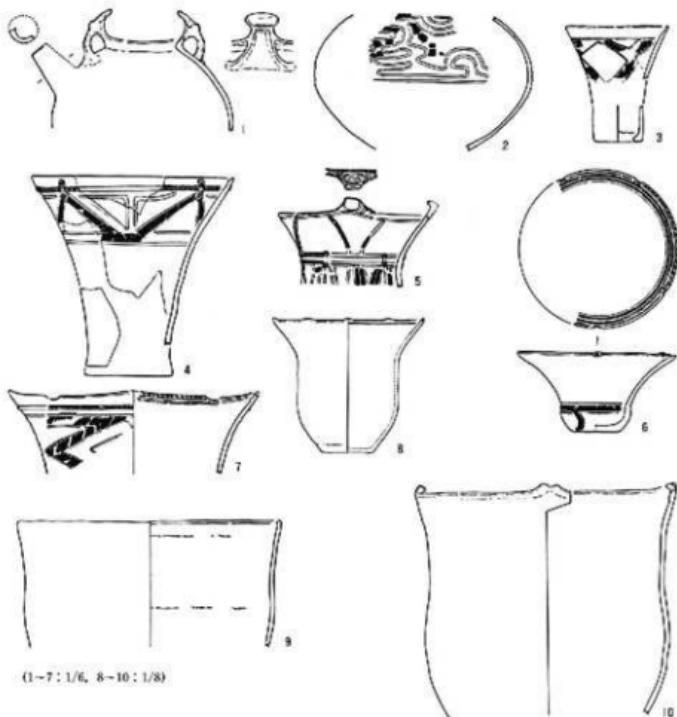
第3図 山梨県總神遺跡出土土器（1=1/4, 2=1/8）

と共に残す特徴を残す無文深鉢が共存している（第4図）。こうした素文系深鉢B類と意匠文系深鉢B類との間に意匠文系深鉢A類と素文系深鉢A類土器との間に指摘できたのと同様な素文化の関係が指摘できる。

これらの4種類の深鉢は、それぞれが独立した系譜のもとに共存しているのではなく、精製土器や粗製土器と区別されてきたように、装飾上の原理からいわゆる「精製土器」の素文化が進行する状況が指摘され、また一方で形態上で相同的な関係が確認できる。つまり中部地方の掘之内2式の「粗製深鉢」は「精製深鉢」の素文化の道筋の上に、その系譜を辿ることができるのである。

ところで「無文土器」という用語は、文字通り文様の無い土器の単純な名称であり、上述の経過で生成された中部地方の「無文土器」あるいは「無文粗製土器」という用語は「モノ」としての呼称としては正しいが、反面その成立背景についての含意は認められない。中部地方の「無文土器」の成立の背景と同様にして、この時期の関東地方の各地において、いわゆる「粗製土器」の成立と指摘されるような現象が認められる。これには併行して各地で成立した「粗製土器」は必ずしも無文土器ばかりではないが、意匠文様のモチーフの条線化や施文原体、文様表出技法の変化等々が顕著に認められるという点において、これらが同様の変遷過程をたどり生成された器種として認識できる。この様な土器装飾法にみられる諸現象を、「掘之内2式期における土器文様の素文化」と呼称したい。^(註5)そしてこれらの変遷により生成された素文土器は、相互器種間で連鎖的な関係を保ちながらも、以後に連続する独自の系列的な変化を遂げている。こうした時空間における特性をもつ土器を小論では「素文系土器」と呼称したい。

素文土器は用語の原義に従えばひろい地域と時期のなかにおいて認めることができる。たとえば近接した時期では中期の加曾利E式や後期の掘之内1式においても各地に認められる縄文のみの深鉢や無文土器などが該当する。これらが掘之内2式以降の素文土器と異なるのは、各型式の意匠文系深鉢と形態的に相同的な関係を保持し、その関係が連続する型式において断続的である点であ



第4図 長野県林山腰遺跡4号住居出土土器 (1~7=1/6, 8~10=1/8)

り、堀之内2式期に生成され加曾利B1式以降も連続した型式変化を地域的に遂げる在り方と大きく異なる点である。こうした状況を大きく見るならば、素文系土器の在り方は堀之内2式の意匠文系土器の変容・分化を契機としており、その構成と系譜が異なる点が了解されるであろう。小論での理解に基づくならば関東地方のいわゆる「組線文土器」はこうした系譜上に位置付く「素文系土器群」と認識できる。

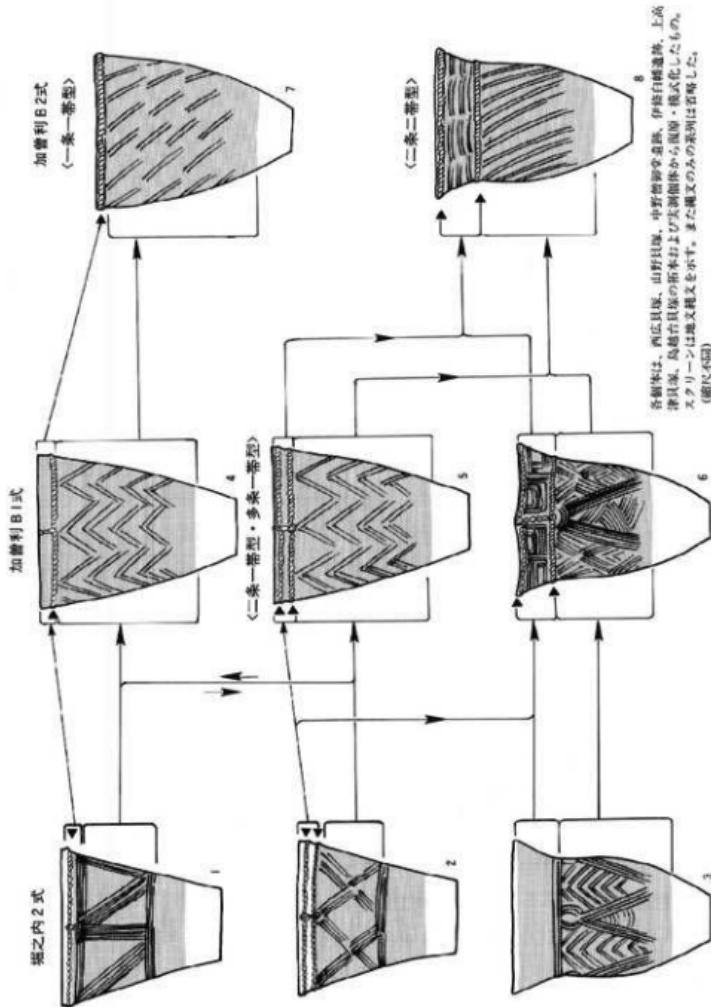
中部地方ではこうした傾向が加曾利B1式の段階ではさらに進行して、土器組成の面においても素文系深鉢の組成率が意匠文系土器を凌駕するという。しかしこれと同様の変化は中部地方に限られる地域的な現象ではなく、実のところ幾つかの地域的特色を内在させつつも、関東地方の各地域

においてほぼ同時に進行している。たとえば東関東では堀之内2式の意匠文系の深鉢A類とB類は関東西南部や北部とは文様表出技法や文様などにかなり異なる特徴をもつものが多いが、このような差異を越えて、やはりそこから同様にして2系列の紐線文土器が成立している。それらの文様や形態の細部を比較するならば実に多様で、多くの差異を指摘することができるが、その要因には堀之内2式における地域性が深く関わり、地縄文や半截竹管文などを多用した意匠文系土器群の分布が東関東地方での素文系土器の成立に強い地域性を生み出す要因となっている。
(註6)

関東地方の素文系土器群を広域に見渡す際に、東関東において興味深いのは堀之内2式の意匠文系深鉢にみられる分化した紐線文の一系列表から、形態変化を連動させて素文系土器に分類される、いわゆる「紐線文土器」の一条一帯型と多条一帯型、さらに二条二帯型とに分化する動向が見て取れること。そしてさらに粗大化した紐線文に描線化の傾向が認められ、一方でまた胴部文様の「条線化」が顕在化する点である(第5図)。関東西南部では堀之内2式の時期に深鉢B類の系譜上の素文系土器が極めて低調になり、その点では中部地方とは異なる変遷を示す。さらに意匠文系の深鉢A類の紐線文は素文系土器において継続するが、それは東関東地方とは異なり、意匠文系深鉢B類の系譜を引く素文系深鉢の存在が不明確であることや、直胴形深鉢の口縁部に施文が限定される一条一帯型と多条一帯型という組合せを主流として、胴部文様が意匠文系土器の深鉢A類に開拓するものが多いという点で、東部地域との間に差異を認めることができる。

関東東部地域における二条二帯型の存在は、堀之内2式期における丈高の深鉢B類の系譜上にその構成が説明できるであろうし、二条一帯型の紐線間の有文化も関係し、やや複雑な成り立ちの説明を必要とするであろう。さらに東関東では縄文施文—紐線貼付という順序が西関東で逆転を主流とするなどの差異が指摘されている(安孫子1971・小川1977)。主要因は東部関東における堀之内2式意匠文系土器の文様表出技法が地縄文を主体とする点にあろうが、これらの器種には紐線文を施文するもののが少ない。したがって紐線の技法を堀之内2式意匠文系土器群に求め得るとしても、用法や施文器種と同じく一元的に考えるのは少なくとも器種構成や「粗製土器」の実態を考察する場合短絡であろう。また北関東地域では紐線文とは異なり、口縁部に連続押捺文を配する堀之内1式以降のI群部文様を発達させた土器が、東関東地域の一条一帯型、多条一帯型、二条二帯型に対応する素文系深鉢として分布する特性が指摘できる。

いわゆる堀之内2式土器の分布圏内部においても、素文系土器群の成立動向は型式学的に見た場合、複雑な地域性を示すことがわかるが、池之元遺跡の資料によっても指摘した様に中部地方における変化は突きつめれば、意匠文系土器の深鉢A類とB類の素文化によって成り立っていると考えられる。このような変化により直行口縁部の素文系深鉢I類と頸部の外反する素文系深鉢II類の両者の成立が説明されるが、当地方においても同様にして素文系深鉢に向形態が存在する点は、広域な意匠文系深鉢の素文化の実態を詳細に検討する際に中部地方の特性として重要である。



第5図 関東地方東部における「細縞文系土器」の生成過程

ただし中部地方の素文系深鉢の形態組成に注目するならば、長野県中・南信地方を中心にII類の形態が凌駕する傾向にあり、この点において指摘できる地域性はより広域的な視点からは中部・東海地方以西の煮沸用深鉢の形態組成からみた動静と脈絡すると考えられる。「素文化」にともなう各地域の詳細な変化についてはなお多くの分析を必要とするであろう。^(註7)

いわゆる「粗製土器」の特徴のひとつとして器種組成の増加が指摘されているが、從来から粗製土器として認識されてきたこれら素文系土器の在り方を含めて、池之元遺跡の堀之内2式土器はどのような器種組成を示すのであろうか。

2 池之元遺跡出土の堀之内2式土器の器種組成

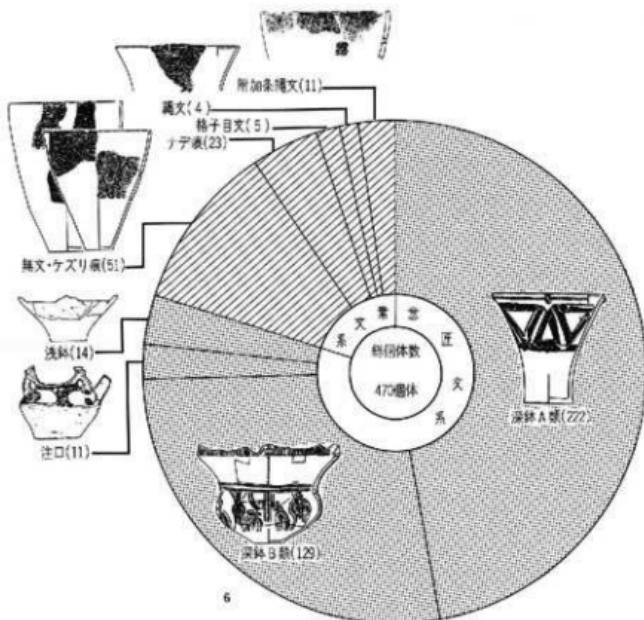
7区から出土した堀之内2式土器の口縁部の全資料を対象にして器種の同定を行い、その組成比率を算出した(第6図)。分類できた器種は9種類であり、極めて例外的な個体を除いて、II縁部資料から判定した。

器種組成率の計算に用いた資料は470個体であり、数値の上では比較的豊富な個体量といえる。それによるならば、主体を占めるのは意匠文系土器の各種であり、しかも深鉢A類とB類が中核を形成する。注口土器もおそらく堀之内1式以前の時期に比較すると組成率は高い部類に属するであろう。ただし第1号住居址床面出土の3点の注口土器に見られるように、文様系列やサイズにはいくつかの類型が存在するようであり、注口土器という器種内での構成は単純ではない。堀之内1式からの変遷の趨勢を管見するならば、小形の注II土器の増加がこの時期に指摘できるかもしれない。

さらに同様の問題は各器種においても存在している。たとえば意匠文系深鉢A類やB類においても、サイズの違う個体群から成り立っている事実は指摘できる。文様と形態から区分された各器種において、サイズ(土器容積)の問題を運動させるには、単純な個体識別を基にした組成率の計算だけでは解明できない問題がありそうである。

しかし、ひとまずこうした問題を含み置くとしても、素文系深鉢は総じて人形のものが多いという傾向は他の遺跡においても指摘し得る特徴であり、さらに加曾利B1式において系譜が連続し、組成率の上で意匠文系土器を凌駕すると考えられる素文系土器のサイズが、広域な地域において大型のサイズグループを主体とするという点は、この段階の素文系土器の機能的特性を推察する上で重要である。器種組成の上で注目される2つ目の特性は、堀之内2式期における意匠文系深鉢B類の組成率の高さである深鉢B類の形態は胴部が膨らみ口縁部が外反する形態であり、その多くは煮沸の痕跡を残す。関東地方東部の堀之内2式との比較において顕著なのは、中部地方から関西南部の深鉢B類が、かなり組成率の上で安定的であるということと、器高が東部のものに比べて低い。^(註8) ものが多いという点である。

この傾向は堀之内2式の時期に顕著となるが、より広域な範囲を観察の対象とするならば、堀之



第6図 池之元遺跡出土の堀之内2式土器の器種組成率（カッコ内数値は実個体数）

内2式の分布範囲における器種の地域性は、東西日本の煮沸用器種の形態の地域性の境界域とも映る。つまり堀之内2式以降、西日本における深鉢や鉢の多くが深鉢B類と同様に、胴部に膨らみをもつ形態で組成されている事実と連動した東西日本を範囲とした、いわば境界域としての様相（註9）である。しかし、加曾利B1式の時期の器種群は東西の地域差としての指標のひとつであった深鉢B類が関東西南部の意匠文系土器の中で消滅し、ほぼ時期を入れ換える様にして型式学的には素文系と分類できる新たな煮沸容器群が生成される。加曾利B1式を構成する器種の成立をめぐる動向は、堀之内2式の器種構成のもつ地域性の組み替えやそれに伴う器種の統廃合を伴う、複雑な現象（註10）の組み合わせから成り立つものと予測できる。

3 堀之内2式土器における意匠文系土器と素文系土器

——「精製土器」「粗製土器」再考——

後期土器の特徴とされる「精製土器」と「粗製土器」の成立は、今までに指摘したように深鉢A類とB類における文様とサイズの対応関係の多様化として説明することができる。つまり意匠文系深鉢A類と深鉢B類の文様の素文化が、中部地方の堀之内2式土器における、いわゆる「粗製土

器」の生成に關係していると考察した。

両器種の変化は互いに文様の素文化が進行するが、文様帶構成と組線文などの基本的な要素は、ある種の変形を遂げながらも残存している。そしてこの時期の「粗製土器」の生成の動向を広域に見渡した場合に重要なのは、例えば関東東部や西南部の堀之内2式土器においても、ほぼ同様にして深鉢A類とB類の系列から、その後に主導的となる粗製土器の系列が生成されるという器種分化の共通性である。例えばそこに関東東部地域のように、縄文と意匠的な沈線文の組み合わせを維持しつつも、沈線文が「条線化」した文様が生成されたり、または縄文のみに変容したりと、意匠文様の素文化が顕著である（第5図）。

中部地方でもこうした状況には対応するかたちで素文化の傾向が指摘されるが、基本的な文様帶の構成や組線文などの分帯文様などは残存する。現状において、「粗製化」や「無文化」という表現は、土器自体の認識区分に客観的な根拠を欠き、さらに小論で指摘した一部の現象にしか説明がおよばず、この時期の土器群の動態を見極める用語としては相応しくない。ここではこうした一連の運動した広域的な変化と、土器自体の特徴の詳細から指摘できる型式学的諸現象を「素文化」と表現し、こうした生成背景のもとに説明される土器を「素文系土器」と呼称し、これと反対の用法で精製土器という用語も、同様にしてその根拠は不鮮明であるので「意匠文系土器」と別称したい。

つまり、堀之内2式土器は深鉢の意匠文系土器から素文系土器が型式学的に分岐する時期に該当するのである。こうした指摘が正しいとするならば、堀之内2式土器の分布圈内部には、意匠文系土器群の分布によって形成された地域内において、素文系土器とのあいだに相同的な関係を基層にもち、さらによく意匠文系土器を外殻として、その内部に小地域性をもつ素文系土器が入れ子状の構造を形成するという堀之内2式土器の構成上の特質が透察できる。^(註11)しかし器種組成においてすでに触れたように、素文系土器の組成率は全体の約20%にしか満たない。こうした状態は後期卜葉の加曾利B式期におけるそれとは、かなり異なるようである。加曾利B1式以降の器種構成を瞥見してみると、池之元遺跡の堀之内2式の器種構成でとくに大きく異なるのは、深鉢B類の安定的な存在である。池之元遺跡では深鉢B類が30%あまりを占めており、こうした傾向は算出データではないが、資料化された他の遺跡の報告書などの図版などから、より多くの遺跡において近似した組成率が想定され得る。

型式学的観点から指摘したように、深鉢B類は加曾利B1式において素文系土器に分化した一群が残存し、意匠文系土器の系列は次第に淘汰されてゆくことが推測される。同様の変化は丈高の深鉢B類が分布する東関東においても指摘でき、深鉢B類から生成された素文系土器がこの地域の組線文土器の一系列に連続するのである（第5図3-6-8）。

中部地方と関東地方といったように、かなり遠隔の地域との間に認められるこうした現象には、おそらく文様や形態といった型式学的な側面とは異なり、器種の機能や用途に関連する変化がその

背景として関係するものと考えられる。関東西南部や中部地方ではおそらく堀之内1式期の深鉢B類土器の機能的変化が素文系土器とした朝顔形主体の大形煮沸容器群を成立させる主要因のひとつと考え。さらに朝顔形の深鉢A類においても確認できる器形の「丈高化」や文様の「素文化」が進行して、実際のところは従来の文様や形態の比較に終始したいわゆる「粗製土器」の概念では説明できない複雑な素文系土器群の器種構成が実在することに視野が拡張されることになる。しかも、中部地方では意匠文系土器の深鉢B類の素文化を主体としているのに対して、関東東部地域では、深鉢A類の素文化から二条一帯型・多条一帯型の縦線文土器が生成され、また二条二帯型が深鉢B類と深鉢A類の相互関係により生成されたり、西南部では深鉢A類の素文化と深鉢B類の激減など、各地域の素文系土器の生成の母胎となる器種に差異が認められる点が重要であり、器種を単位とした型式学的な分析によるならば「粗製土器」も、单一の器種からの枝分れという共通した単純な現象としては説明できない複雑な変化の実態をもつてゐる。この認識の上に立ち、いわゆる「精製土器」と「粗製土器」の、器種の機能と用途についての具体的な検討が可能となる。

素文系土器のサイズは単位土器群を組成する器種群のなかでは総じて大形であることが通例であり、意匠文系土器は総体的に、むしろ小形のサイズグループが主体であるという土器容量の問題や、素文系土器の成立自体が複数の意匠文系土器の分化に系譜を辿りうる状況で、はたして具体的な分析の伴わない「ハレ」と「ケ」による一元的な土器の使い分け論や、「精製」「粗製」土器の問題がこうした複雑な変化を伴う型式構造の成立背景を説明する有効な方法かといふと、池之元遺跡の堀之内2式において指摘した器種構成に係わる土器の機能と技術論的な問題など、実際のところ生活用具としての土器の理解に、いくつかの看過しえない深刻な問題が浮上することになる。^(註12)

現時点の後期土器の研究において汎用される「精製土器」・「粗製土器」という概念と区分方法に認められる問題点を検討し、具体的に池之元遺跡の堀之内2式土器を「意匠文系土器」・「素文系土器」という分類概念で分析し、相互の関連性そして相違点を検討すると以下の説明が可能になった。

- i) 堀之内2式土器の分布圏内において土器装飾の「素文化」をキーワードに意匠文系土器と素文系土器の関係を分析した結果、複数の意匠文系土器を母胎とした器種分化から各地に独自の素文系土器（「粗製土器」）が生成されるという共通性が明らかにできた。
- ii) 文様の「素文化」を器種単位で検討すると、各地の「粗製土器」の母胎となる器種に差異が指摘でき、個々に生成される素文系土器を「粗製土器」の地域性として説明することができる。
- iii) 堀之内2式の素文系土器は、堀之内2式の意匠文系土器の分布圏内において生成され、またそれがもつ地域性も基本的には意匠文系土器の分布圏内部において収束している。
- iv) 池之元遺跡の堀之内2式土器は意匠文系土器の器種構成において関東西南部地域とのあいだに共通性が指摘され、素文系深鉢における「素文化」の在り方は中部地方独自の特徴を保持し

ている。

これらの成果とともに、型式学的観点から指摘した土器文様の「素文化」とは、中部地方における深鉢A類・B類の胸部文様の消失、東関東の深鉢文様の「条線化」、一条一帯、多条一帯、二条二帶構成の「紐縞文」土器の生成等の広域な地域において確認できる個体資料上での具体的な現象を包括的に示唆する概念であるが、それに加えて、さらにサイズの大形化（丈高化）が認められ、加曾利B1式期においても素文系土器は器種組成率を大きく増加させる特徴が予測できる。しかし、この点においても各地域の状況は、単に粗製土器における地域性の顕現という単純な説明では実態の把握にはなお多くの問題を隠すことになるであろう。^(註13)

「粗製」「精製」という用語は字句上の原義に従えば、土器の作りの問題であり、そこにサイズや機能的特徴を含意させ、さらに形容的な用い方をするならば、個々の実在する土器を技術と機能という観点からその意義について考究することは不可能であろう。精製・粗製の用語は型式分類の神組内において、あくまでも型式分類上での枠組みの表現として用いるべきであり、それとも慣用的であることはすでに述べた通りである。問題は「粗製土器」をも含めた器種構成を対象とした型式学的な分類体系の構築であり、不用意な解釈を含意した意味の肥大化は、生活用具としての土器研究には生産的ではない。その点を視野にいれた具体的な単位土器群の分析は今後の課題としたい。

(1992年11月23日)

補 遣

小論において特に論点の中心としてきた、いわゆる「粗製土器」の問題については、脱稿後に関連するいくつかの資料分析と見解の発表の機会をもち今日に至っている。具体的には神奈川県上土棚遺跡において堀之内2式から加曾利B1式にかけての「粗製土器」の成立過程に見られる型式学的な地域性と土器サイズの関係を検討する機会をもち（阿部1993），さらに同様の観点から中部瀬戸内の併行型式を分析し、検討の具体的な地域を拡張した（阿部1994）。またいわゆる縞文土器の「ハレ」と「ケ」の問題については、食物加工工程と遺跡連鎖の観点からその概略を示す機会をもった（阿部1996）。いずれも現時点では部分的・説明的であるという説りを免れないと、型式学的観察、意匠文系土器群との関係と地域性を視野に入れて、今後に具体的かつ詳細な分析の機会を設け実態を明確化したいと考えている。

註

- 註1 遺跡内において、考古学的方法によって認識できる早期に残された土器の集積、またはまとまりを、型式学的・組成論的・技術論的・機能論的・社会論的な分析体系において「単位土器群」と呼称する。筆者は同様の概念を縄文時代早期の石器群の分析に用い、早期の生活地点に残された石器群を「単位石器群」と呼称し分析の最小単位として認定し、個々の生活地点間の関係の比較に適用した。さらに同一の集団による異地占拠や、同一の生態系における生産活動の同質性を明らかにするために、複数の単位石器群の組成を「複合単位組成」という概念で捉えた。また複数の遺跡群を取り込む地域における性格については「複合単位組成群」として石器組成の地域性を同質の史料群に基づいた階層的な認識方法により分析を行い、石器群の構成からみた生産活動の構成と遺跡形況について論じたことがある（阿部1987, 1992）。分析概念としては同様であり、小論では土器の分析において援用したが、今回は分析の最小単位である単位土器群の構成に論点を絞った検討に終始する。
- 註2 筆者はいわゆる生活道具としての縄文土器の認識方法を考えるにあたり、土器そのものの材質、製作技術、使用痕跡、単位土器群内における消費量といった直接的な現象の認識に基点をおきつつも、想定の対象は土器をもちいた行為の体系自体に焦点をもつ。つまり食事加工工程に関与する施設、器具、装置といったモノとコトの相互関係において土器の担うる工程や技術の特性を明らかにしようとする立場をとるのである。
- 民俗、民族学的、あるいは実験考古学的な比較はこの作業の延長上において幾らかの類比的効力をもつものの、前掲的な考古史料の詳細な検討を差し置いて、解釈を先行させるのは、坪井の「ハレとケの使い分け論」の負の効用を増大させるに他ならない。この方面的の生産的な論議展開の前提は、各地の縄文土器のこうした観点からの分析研究の推進において他にない。
- 註3 小論で引用する精製土器と粗製土器の概念は山内消男（1930）に従う。また山内消男の用語のなかには「半精製」という概念も存在する。こうした用語法には、精製土器の文様と文様帶から年代的序列、系統的関係の解明を配慮した意図が読み取れ、土器自体の用途や機能といった観点から、こうした分類体系 자체が必ずしも総合的ではないことは、山内自身がすでに認識していたのかもしれない。そうであるならば、問題はこの概念を土器の機能や用途論に安易に持ち込んだその後の研究方針のなかに求められる可能性がある。学史的背景については後回に解説したい。
- 註4 土器製作技術の検討から、土器の精緻を判断する場合、一般的なのは胎土中の岩石粒子の粒度や器表面の成形・整形・文様の意匠の総体的な度合いに基準を置く場合が多い。しかし例えば縄文土器を型式学的に分類し認識する場合、「粗雑」や「粗い」とは一体いかなる科学的根拠に基づくのか、型式学的検討と製作技術論的検討を連絡させつつ問題を検討する準備を進めてきた筆者の理解の範囲を越えている。
- 胎土中の岩石粒子の粒度にしてみても、粒径の大きい胎土が「粗い」と表現することは、現象の一面向を説明する意味での妥当性を認めるが、それが、土器作りの精良の度合いと直接的に関係すると考えることは短絡に過ぎるのではないか。土器製作技術の観点からは、土器の製作時点あるいは焼成後の機能的特性との関連で検討すべき事項であって、この分析過程を絶対的な認識論は理化学的分析方法を援用していくのも何ら科学的ではない。
- 註5 意匠文様の多くは充填模文や磨消繩文など、通常複数の作業工程によっている。素文化の過程はこうした工程の変形や、意匠文様自体の構成の変形に因っている。この時期の土器群の変遷において確認される素文化は、概ね2式の器種でも広域な地域で多くの共通した属性から構成されている精製土器を以胎としている点と、装飾レベルでの素文化とともに、「丈高化」「大形化」といった現象と連動することが重要で

であろう。

註6 堀之内2式の意匠文系土器の地域性については、とくに東関東の下総台地、常磐台地における型式設定の問題を含めて、意匠文系土器における地域性を認める必要があろうかと考える。この地域における堀之内2式との間に成立段階での地域性の問題についてはかつて触れたことがあるが（阿部1988）、堀之内2式の意匠文系土器が流麗な磨消繩文を主体とするという点が強調されるあまり、同様の形態と構成をもつ上器群に対する配慮に欠けていた点を認めざるをえない。やはりこうした問題の根底には精製・粗製という文様を第一義とした認識方法が深く関係している。

註7 東海地方以西の素文系土器は腹部の膨らむ深鉢が主流を成しており、それは縄文時代終末まで連続する強固な伝統である。他方で東日本では丈高の削頭形深鉢が主体となる対照的な関係が存在する。堀之内2式土器の分布図は、こうした列島規模での東西地域性の境界域に相当しており、状況は複雑である。

具体的に状況を判断すれば、堀之内2式期における関東西南部の深鉢B類の卓越は、おそらく西日本の伝統の東端的な状況であり、加曾利B1式における深鉢B類の激減は東日本側の地域性の発現に他ならないと考える。同様の観点からは中部地方の堀之内2式の素文系土器が深鉢B類の素文化を主体としているのは西日本的な地域性として考えている。長野県西南部などでの東海系土器群の動態も関係が深いであろう。

註8 同様の現象はすでに堀之内式の設定の段階での下総と武藏、相模方面とのあいだの地域性として川内清男により指摘されていること（川内1964）と一致するであろう。

註9 こうした東西の動向における境界域の様相は、堀之内1式の時期における東西の地域性を遠因としており、称名寺II式の変容により成立する下北原（古）式と東北南部からの網取1b式の影響下に成立する堀之内1a式（阿部1987）の地域的・系統的差異とも関係すると考えている。

註10 深鉢B類の消失は他方で加曾利B1式の無文浅鉢の成立と関係していると考えられ、いまのところこの関係を型式学的に示す個体資料は関東西南部から中部地方には限定されており、他方で関東東部においては非常に零細である。加曾利B1式の器種組成の成立については、素文系土器の地域差をも含めて今後に検討する用意がある。

註11 東日本の後期前葉の型式において、意匠文系土器と素文系土器の関係は、意匠文系土器の分布図が素文系土器の地域性を取り込むような関係が指摘できるが、東海地方以西の状況はこれとはかなり異なる。素文系土器の器種の中には意匠文系土器の分布を過ぎて複数の土器型式に共有されるものがあり、器種構成によって示される地域構成原理が異なる状況が示唆される。この問題については現在、中瀬戸内地域において具体的な資料を検討しているので近い将来専論を公表したい。

註12 後期以降の単位土器群を審見してみると、たとえば土器塚の形成など特定地点における土器の集積やその背景を担う特定器種車両型を主要因とした最適体制などが窺える。また意匠文系土器の小形化や素文系土器の人形化といったこの時期の運動した現象が「ハレ」や「ケ」といかに結びつくのかという具体的な検討が見られないのは、いったいどうしたことであろうか。各種概説書物においても一般化されている「定説」には、粗製=ケ：精製=ハレという図式が蔓延している、縄文社会の呪術的側面が肥大化した社会概念の産物であり、筆者はあまり災厄とは関係しない「定説」と考えている。

註13 現時点において広く指摘される粗製土器（素文系土器）の土着化、または地域化という現象は、あくまでも精製土器（意匠文系土器）との対照的な比較において説明されてきたものであり、素文系土器自体の型式学的な検討はなお未了の部分が多い。とくに堀之内2式から加曾利B1式の時期においてそうした状況が成立するとされるが、筆者が指摘したように素文系土器が意匠文系土器を母体として生成される説明が可

能である以上、それは意匠文系土器が広域な範囲で同質性を獲得し得た地域間の関係さえ素文系土器が内在させているとみる。また次のところ掘之内2式期における関東西南部と東部地域など意匠文系土器にみられる地域差も素文系土器のもつ型式学的属性に強力に反映している点など、素文系土器の成立には複雑な器種間関係や意匠文系土器の地域的個性が関係しているものと考えている。

なお、本論文中で繰り返し述べた掘之内2式の意匠文系土器の地域性については、とくに関東東部地域において掘之内2式初期から地文編文の意匠文系土器と磨削織文土器が主体であったという現在の掘之内2式土器論とは異なる状況を想定しており、加曾利B1式における「縦線文」土器の器種群も単純には掘之内2式のそれから一元的に派生しないと考えている。詳細は後日別論を用意する予定である。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1971 「平尾遺跡発掘調査報告書」
- 阿部 芳郎 1988 「掘之内2式型式基礎論考(1)」「貝塚博物館紀要」15 加曾利貝塚博物館
- 阿部 芳郎 1989 「縦文時代早期における石器群の構成と生産活動」「駿台史学」77巻
- 阿部 芳郎 1993 「上土棚遺跡出土の掘之内2式土器の器種とサイズ」「綾瀬市埋蔵文化財報告3 吉岡堀ノ内横穴墓群 上土棚遺跡 上・柳南遺跡」綾瀬市教育委員会
- 阿部 芳郎 1994 「後期第IV群土器の製作技術と機能」「津島岡大遺跡」5 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 阿部 芳郎 1996 「食物加工技術と縦文土器」「季刊考古学」第55号 雄山閣出版
- 石川 寛 1984 「掘之内2式土器の研究(予案)」「調査研究収録」5
- 市川考古博物館 1982 「掘之内式土器シンポジウム資料」
- 大塚 達朗 1983 「縦文時代後期加曾利B式土器の研究(1)」「東京大学文学部考古学研究室研究紀要」2
- 小川 和博 1977 「加曾利B式粗製土器に関する覚書(1)」「成田史談」22
- 岡本 孝之 1983 「機能・用途論」「縦文文化の研究」縦文土器III 雄山閣出版
- 樋原 功一 1987 「嵯神遺跡」大泉村教育委員会
- 齊木 勝 1977 「千葉市中野新御堂遺跡」千葉県埋蔵文化財センター
- 庄司 克 1981 「掘之内2式土器小考」「貝塚博物館紀要」7
- 鈴木 正博 1980 「加曾利B式粗製土器様式」「太田区史 資料編」考古II
- 西田 泰史 1984 「精製土器と粗製土器」「東京大学文学部考古学研究室研究紀要」3
- 宮城 孝之 1986 「伊藤白幡遺跡」千葉県埋蔵文化財センター
- 川内 清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縦紋式土器の終末」「考古学」1-3
- 山内 清男 1964 「日本先史土器図譜」先史考古学会
- 松本市教育委員会 1988 「林山腰遺跡」

第3節 土器製作技術からみた堀之内2式土器の特性

—土器の形態と器面成形および焼成技術からみた

池之元遺跡の堀之内2式土器—

阿部 芳郎

はじめに

小論では池之元遺跡出土の堀之内2式土器の土器製作技術に関する観察をおこない、とくに後期以降の土器群に共通してみとめられる「器体の薄手化」と、それに関係するとと思われる技術的特徴について検討する。

池之元遺跡の堀之内2式土器は大半が破片資料であるが、それらの口縁部の器種分類をおこない当該期の器種組成率が明らかにされた(第IV章2節)。ここではそうした成果を踏まえて、とくに器種単位および器種を越えて認められる技術的な側面に注目し、堀之内2式土器の型式学的な特徴との関わりについて触れることにする。

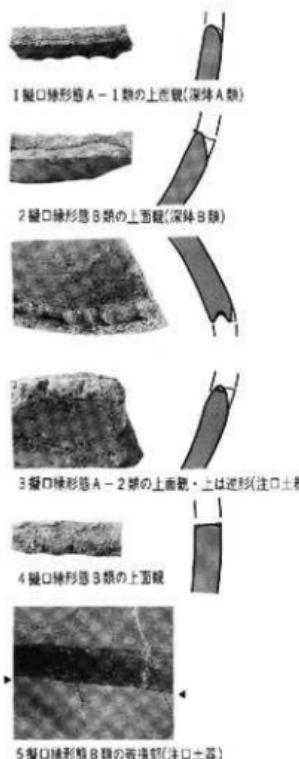
1 土器製作技術からみた器種間関係

文様・文様帶構成・そして形態という型式学的な属性を視点とした場合、器種間相互に一定の対応した関係が指摘できるが、それらは土器製作の技術や工程といかなる関わりをもつのであろうか。ここでは土器製作の各工程における技術的特徴を観察するなかで、ふたたび器種間の関係について問題としてみよう。

(1) 粘土紐の積み上げ

繩文土器の製作は粘土を紐状に延ばし、それを積み上げる方法によっている。そのような破片には擦ぎ日の跡(擦口縁)が残される場合が多い。ところが本遺跡の堀之内2式土器を観察したところ、これらの資料には予想外に擦口縁を残す資料が少なかった。しかし一方でわずかながらも擦口縁を残すものがあるから、これらの土器群が輪削法によっていることは間違いないだろう。こうした土器の割れ方の観察から、池之元遺跡の堀之内2式土器は粘土紐の接合がすこぶる良好な土器であったと考えなくてはなるまい。まずは少ない資料ながらも、一定量が発見された擦口縁の観察からはじめよう。

a 擦口縁の形態 観察できた擦口縁にはいくつかの形態があった。A類としたものは粘土紐の接合部がきわめて明瞭に剝離しており、凸形の擦口縁を呈するものである。このなかで擦口縁が素



第1図 擬口縁の形状

さて出土した資料からはこのような擬口縁の形態が復元できたが、これらの形態がすぐに粘土紐の積み上げの状態をそのままに残すものとするには、なお慎重でなければならない。仮に観察資料の擬口縁が製作工程の痕跡をそのままに伝えるものであるならば、器面には粘土紐の接合部や指頭による押捺痕がそのままに残されていないくてはならない。しかし数ある縄文土器のなかでも、そうした積み上げ痕を残す型式は稀である。B類としたものの器面には粘土紐の積み上げによる痕跡はきれいに消されているし、また素文系土器にはヘラ削りの痕跡が明瞭である。

とくに薄手の意匠文系土器は文様を描く以前の成形段階でヘラ削りを盛んにおこなった形跡^(註2)がある。したがってB類の平坦な擬口縁の形態はヘラ削りなどの器面の成形作業によって、覆いかぶさった粘土が削り取られたり、変形を受けているものと考えなくてはならない。とくに内傾した断面形態をもつ「結果としての擬口縁形態」は、そうした作業によって表面付近が変形を受けたものと考えられる。

頭のものをA-1類に、そして粘土紐上に刻みを加えたものをA-2類とする。A-2類は粘土紐を相互に密着させる工夫と思われるが、通常の土器の製作に行われる数段から十数段におよぶ粘土紐の積み上げの各段に、こうした刻みを施したもののは認められなかった。したがってこうした工夫は堀之内2式の時期においては、使用時点での土器の強度を保つためか、製作作業途上で一時的な中断（偶然か意図的かは別として）があり、再開時に乾燥・硬化した擬口縁部分の剥離を防止するためのものと考えられる。このことについては後述する。

擬口縁の剥離がほぼ水平な形態を示すものをB類とする。この例の多くは粘土紐どうしの剥離がA類ほど明確ではなく、不規則な凹凸が残されている（第1図-4）。この凹凸の多くは擬口縁と粘土紐とを接合するときに指でつまみあげる圧着の痕跡と思われる。しかし通常こうした作業をおこなった場合は粘土紐が擬口縁の「きわ」に被さるのが普通であるが、出土した資料にはそうした痕跡がむしろ少ない。また、いくつかある擬口縁の断面形態はやや内傾したものが多い。

さて出土した資料からはこのような擬口縁の形態が復元できたが、これらの形態がすぐに粘土紐の積み上げの状態をそのままに残すものとするには、なお慎重でなく

ではない。仮に観察資料の擬口縁が製作工程の痕跡をそのままに伝えるものであるならば、器面には粘土紐の接合部や指頭による押捺痕がそのままに残されていないくてはならない。

しかし数ある縄文土器のなかでも、そうした積み上げ痕を残す型式は稀である。B類としたものの器面には粘

土紐の積み上げによる痕跡はきれいに消されているし、また素文系土器にはヘラ削りの痕跡が明瞭

である。

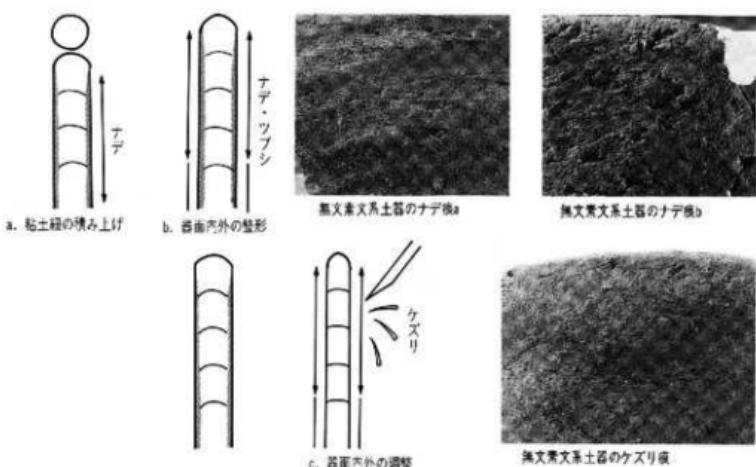
とくに薄手の意匠文系土器は文様を描く以前の成形段階でヘラ削りを盛んにおこなった形跡

^(註2)がある。したがってB類の平坦な擬口縁の形態はヘラ削りなどの器面の成形作業によって、覆いか

ぶさった粘土が削り取られたり、変形を受けているものと考えなくてはならない。とくに内傾した

断面形態をもつ「結果としての擬口縁形態」は、そうした作業によって表面付近が変形を受けたも

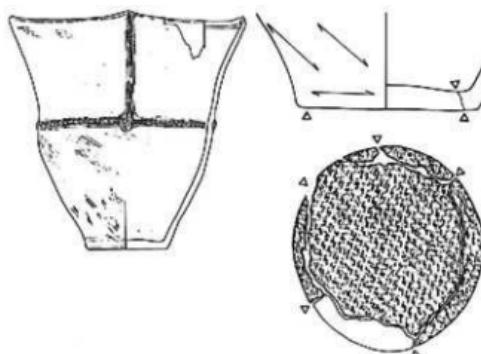
のと考えられる。



第2図 粘土紐の積み上げと器面調整工程の順位

b 摺口縁の部位 大別して2類に分類した摺口縁のうちで、とくに土器の形態と関係をもつと考えられるものは、外反する部位における内傾した摺口縁と、これと反対に外反する部位の外傾する摺口縁の形態である。

また前者よりも類例は少ないもののA-2類とした刻みを施す摺口縁は、特徴的に注口土器の大径部付近の資料に観察され、このほかには深鉢B類の胴部下半部に少量存在する。また意匠文系土器の深鉢A類や素文系土器と分類したものには認められなかった。注口土器の胴部には摺口縁A類も認められるので、あくまでも傾向としてではあるが、こうした粘土紐の積み上げの技術と器種



第3図 網代圧痕を持つ底部の破損状態

がある程度対応するということは充分に指摘できる。また注口土器のこうした摺口縁の位置は外反する胴部下半部の乾燥（器体の硬化）を待ってから、上半部の製作に取りかかった可能性が考えられる。こうした事例は他の型式の織文土器にも認められるようである（佐藤1991）。

(2) 底部の製作とその特徴

網之内2式土器は深鉢A類と

B類に象徴されるように、主体となる器種が、特徴ある二つの形態から構成されている。したがって、この時期の底部の作りは土器の形態と関係が深いと考えられる。

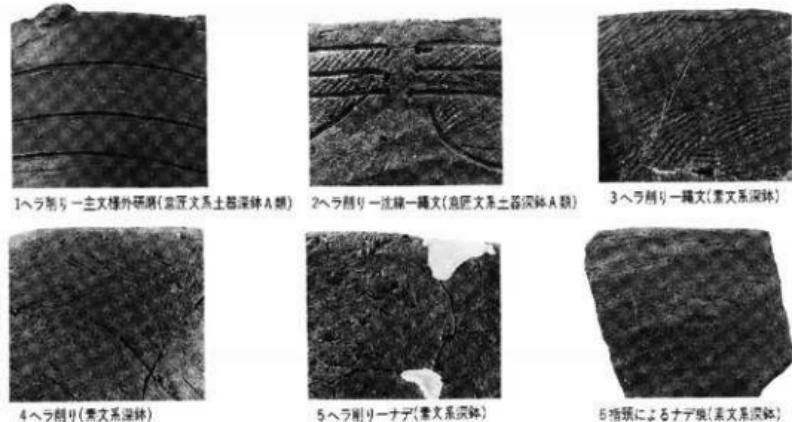
深鉢A類や素文系土器などの底部から直線的に立ち上がる土器の底部形態は、縁辺部が張り出した形態のものが特徴的で安定の良いものが多い。深鉢B類は比較的小形で器体の外反角度が大きく、A類のような張出をもつ底部形態は見られない。

深鉢B類の底部は接合面から剝がれたものが少なく、また乾燥時点に亀裂の入ったものなども認められなかつた。これと際立つ違いをもつものは、深鉢A類の底部であり、円板状の底部から器体そのものが外れた例や、底部自体が乾燥時あるいは焼成時に生じた角裂によって割れているものなどが目に付く。またそうしたアクシデントを防ぐために底部に補強の粘土紐を加えたものもある。^(註3)

こうしたいくつかの底部の作りは東京都平尾遺跡などでも指摘され、また堀之内2式から加曾利B1式の時期に、粘土の円板の周囲に粘土紐を巻き付けて、立ち上がりの部分の破損を防ぐ工夫をした独特な技法も復元されている(秋田1990)。こうした底部の製作方法のバラエティーは堀之内2式から加曾利B1式の時期にとくに顕著に見受けられるもので、しかもそれらが意匠文系深鉢A類や、それに似た形態の素文系土器であることは注意される。

(3) 器面の調整技術

通常、「精製土器」とよばれる「飾られた土器」(意匠文系土器)には、こうした調整痕がきれいに調べられているものが普通である。したがって、こうした段階の作業の内容は土器の表面のみの観察では知ることができない。そこで先に検討した粘土紐の積み上げ工程で指摘した「結果としての擬口縁形態」が器面調整の作業との関わりを考える手掛かりとなる。意匠文系土器の擬口縁は大



第4図 池之元遺跡の堀之内2式土器の器面調整痕

半の斜面断面がほぼ水平か内傾したB類である。この傾向は意匠文系土器と良く一致していた。すでに指摘したように、池之元遺跡の主体的な素文系土器は装飾をもたない素文土器であり、これらの器面には一面にヘラ削り痕が残されている。

両者の縁口縁の形態が良く一致しているのは意匠文系土器も同様にして「成形」の段階の後に素文系土器と同様にヘラ削りの調整段階があったことを暗示している。実際につぶさに観察するとヘラ削りの段階で生じた砂粒の移動が観察できるし、深鉢A類のなかにはそうした削りを網文に見立てたものもある。

こうした事実から、この時期の土器製作には器面の調整段階でヘラ削りが盛んに行われたことがわかる。もちろん、薄手の土器を作るためには成形の段階で薄く器面をのばす作業が欠かせないが、大形の土器を作るにはこの技法だけでは対処できない。むしろ一見外傾するかのように見える「結果としての縁口縁形態」は通常の凸状の縁口縁の外側（器面側）が器面のヘラ削りによって削り取られたものと考えた方が自然である。薄手のつくりを特徴とするこの時期の土器群には、器面



第5図 池之元遺跡出土壙之内2式土器の断面色調構造

調整の工程でこうした器体の割りが器體を越えて、かなり画一的に取り入れられたという製作技法上の特徴が指摘できるであろう。

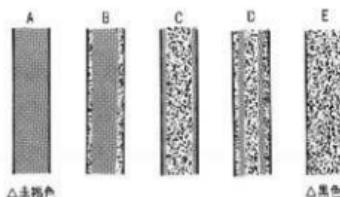
2 焼成技術の復元

(1) 土器断面と焼成方法の関係

一般に露天で焼かれた縄文土器は酸化炎で焼かれたものと考えられている。そのために土器の焼き上がりは胎土の特徴に左右され、褐色を基調としながらもバラエティーある色調を呈している。事実、縄文土器のなかにはこうした胎土自体の性質を利用して焼成時の発色により装飾を行うものもある。また後期以降の土器のなかには明らかに焼成の段階で黒色に焼き上げられた土器が存在する。本遺跡でも堀之内2式の深鉢A類や注口土器、皿型土器などのなかに明らかに黒色に仕上げられたと考えられるものがある。

縄文土器の焼成技術に関する知見は露天で焼いたという事以外に、あまり具体的な焼き方について検討されたことはない。それは焼成構造の構造が不明確であることや、土器自体に外面の色調などを除いてあまり焼き方を伝える資料が少ない、と考えられてきたことに原因がありそうである。

ここでは肉眼観察で土器の断面にそれぞれに顕著な色調の差異をもつ堀之内2式土器3点について器壁に直行する薄片を作成し、偏光顯微鏡下での断面の観察をおこなった。観察事項は色調と鉱物の分布を主としておこなった。堀之内2式のなかでもとくに肉眼による観察で明らかに異なる断面の色調をもつものは顯微鏡下でも基本的にその特徴が変わることはないが、資料1は肉眼ではわらのない赤褐色を呈していたが、中心部分がやや暗い色調を呈することが観察できた。さて、各資料の共通点として指摘できることは、岩石鉱物、繊維、植物珪酸体などの粒子は明色帶、暗色帶の区別なく分布していること、土器断面の部位によって砂粒以上の鉱物粒子に変質は認められないことであった。したがって土器の断面に観察できた色調構成の差異は、砂粒子よりも細粒の粘土やシルト粒子からなるマトリックス部分の色調の違いによるものと推定できる。いまのところ、こうした土器断面における色調の暗さは胎土中の炭素含有量と関係が強く、また内外表面の明色帶は土器



第6図 堀之内2式土器の断面色調構造模式図

の焼成時あるいはその後の加熱、風化作用などによる酸化が関係しているものと考えられる。

こうした推測は東日本各地の早前期の特徴的に観られる繊維土器の断面が黒い事実とも符号し、胎土中における炭素の含有量に係わる繊維などの有機質の混入物の量と調和的な関係にあるものといえるだろう。

(2) 堀之内2式土器の器種構成と焼成技術の関係

a 土器の断面構造と焼成技術 ここでは本遺跡の堀之内2式土器の口縁部資料のすべてについて、こうした断面の観察をおこなった結果、5つの異なる断面色調構造の存在が明らかになった。口縁部を資料としたのは、型式と器種に判別が容易であることと、焼成後の使用によって受ける熱履歴が少ないからである。池之元遺跡で確認された特徴的な土器断面の色調構造を第6図に模式化した。こうしたことなる断面構造がいかなる焼成方法の違いを示すのか、またそうした違いが単なる偶然のばらつきであるのか否か、といった点について次に考えてみよう。

まず、図示した断面構造から推測できる焼成方法について、先の土器断面の顕微鏡観察の結果に基づいて推測してみよう。断面Aは赤褐色を基調として土器表面と内部の色調が肉眼では殆ど区別できず、層状の構造が観察できないものである。ただし顕微鏡下では他の類ほど明確ではないが、層状構造が観られる。こうした断面構造は内部まで充分に酸化焼成されたもので鉱物以外のマトリックス中の有機質がほとんど、または完全に分解したものと考えられる。^(註5)

断面Bは内部の芯が赤化しており表面が黒い土器である。この類のなかには少數はあるが、断面Aのものが明らかに煮沸などに使用されたことによって煤の付着したものが混入していたが、これらはA類に含めた。残りの資料は内外表面が一様に漆黒色を呈し、丁寧な研磨を施す個体が集合する結果となった。A類と同様の焼成方法をとった後に燻しにより黒色処理をおこなったものと推測される。

断面C・D・EはA・Bとは逆に内部が黒色を呈するものである。肉眼では漆黒色を呈するものが殆どで、細かく観察すると新鮮な破損断面にはこの部分に炭化粒子が観察できるものもある。断面Cは表面のみが赤化した段階で焼成を終了したものである。

断面DはCと同様に焼成された後に燻しなどにより、表面に炭素が吸着したものが、あるいはCが煮沸等の使用により結果として燻されたものと考えられる。これらの資料中で黒色部分が顕になっているもの、充分な黒化の見られないものについては、使用時点での変色と考え、C類に含めた。なおこの移動をおこなった資料を差し引いても全体の傾向に大きな変化はなかった。

断面E類は表面と内部が一様に漆黒色を呈し、層状構造が見られないもので、これらの土器は表面が丁寧に研磨されたものが普通である。

これらの土器断面は先に検討したように、薄片の顕微鏡観察においても基本的にその特徴に変わることはなく、かつ、こうした色調の変化は土器焼成によって生じた鉱物の化学変化でもないことから、この色調の変化の原因は本来の粘土マトリックスの差異によるものと考えられることになるが、それが器種ごとに胎土を使い分けた結果によるものとは思われない。したがって、土器断面の黒色と赤色の色調の差異は、焼成段階の酸化（赤化）と考えて良いであろう。そうであるならば、内部の黒色部分は酸化の充分に及ばなかった部分（部位）ということになる。

また、本遺跡で出土したほぼ全体が復元できた個体の縦位破片断面を観察すると、深鉢B類の胸部下半部には煮沸による赤化痕が顕著に認められるものがあり、この部位の断面は赤化層が他の部位よりも厚く形成されている状況が観察できる。このことは上器表面の赤化と赤化層の形成は、土器の使用（煮沸）によって生じた熱履歴の痕跡であることを暗示しているものと思われる。断面C・D・Eを特徴づける内部の黒色層は、酸化されていないマトリックスの微細な有機質が炭化した状態で土器内部に残存しているものと推測できる。^(註6)

こうした観察結果をもとにすると、断面A・BとC・D・Eの両群はともに酸化炎で焼成されているとはいえる、その焼き方は相互に異なっていたことがわかる。

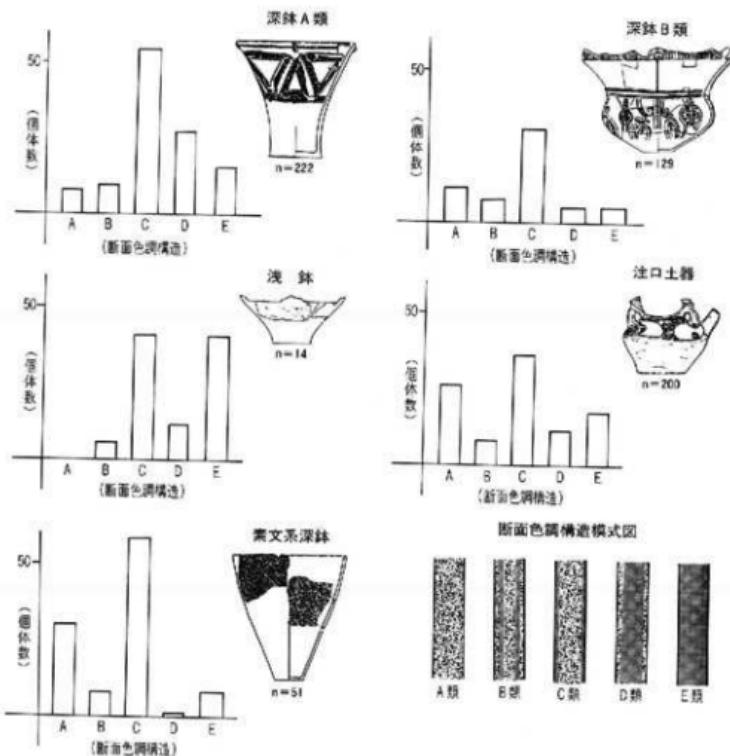
b 器種構成と焼成技術の関係 池之元遺跡の堀之内2式の器種構成は器種の識別できた470個体の口縁部資料をもとに数量比率を算出した。それによると、深鉢A・B類を中心とする意匠文系土器群が全体の約80%を占めており、残りの約20%が素文系土器によって占められる。この組成率が当該期の平均的な組成であるのか否かは調査範囲が遺跡の一部分に限定されていることからも、資料的な制約があるものと推測されるが、意匠文系土器が半数以上を占めるという組成傾向は、この時期の特徴をほぼ捉えているものと考えられる。

意匠文系土器の主体を占めるものは深鉢A・B類であり、両者で全体の約7割を占め、とくにA類は全体の約半数の47.2%と他の器種に比較して高い組成率を示している。堀之内2式の主体を占める深鉢A類とB類はそれぞれ222個体と129個体と多量であるので、これらの資料の断面構造の比率は両器種の焼成技術の特徴をある程度反映しているものと期待できる。

深鉢A類は深鉢B類の両者に共通しているのは断面構造Cの優位性であり、この傾向は浅鉢、注口土器や本遺跡の主体を占める素文系土器にも共通した傾向である（第6図C）。一方、両器種間の差異の示すものは深鉢A類に断面構造D・Eの比率が高い点であり、こうした状況は深鉢A類が相対的に黒色のものが多い反面、深鉢B類は褐色を呈するものが多いといった、大まかな表面上のイメージとも符号する。

また浅鉢ではC類に加えてE類が等しい比率を示すが、資料の少なさからくるばらつきか否か、判断に苦しむ。しかしこの時期の浅鉢が一般に黒色処理されたものが多い点を判断に含めるならば、やはり断面構造Eの卓越はその特徴の一端を示しているのかもしれない。

注口土器は口縁部資料が少ないので、胸部の資料を含めた全個体別資料を分析対象とした。200点の個体別資料は断面構造C類を主体としながら、A類とE類がこれに次ぐといった、特徴ある組成を示す。他の器種と比較して際立つ特徴はC類に次ぐA類の優位性である。一般に火にかけられることのない注口土器は、断面構造が焼成時点での特徴をそのまま残すものと考えられるから、断面構造Aの優位性は土器焼成の方法のばらつきのあった（内部が赤化するまで焼くものと、黒化層の残る段階で比較的短期間で焼成したものがあった）ことを示しているものと考えられよう。因み



第7図 堀之内2式の器種組成と断面色調構造

に第1号住居址の床面より一括で出土した3個体の注口土器は部分的に火災による二次的な焼成痕を残すが断面構造はすべてE類であった。

一方、素文系土器は本遺跡で主体を占める無文土器を観察した(第7図)。C類の優位性は他と共通するがD類は極めて低率である。D類は一度赤化した表面を黒色に仕上げる技術と推測できるので、そうした技術が素文系土器には広く行われなかつたこと、そして煮沸による二次焼成では断面構造D類は出来にくことを示すのかもしれない。その一方で断面構造A類が多い点は注口土器と共に通する傾向である。形態やサイズに規格化が顕著な素文系の深鉢に注口土器と同様に個体毎の焼きむらがあったとは考えがたいので、意図的な焼き分けか、煮沸による二次的な変化によるものかのいずれかの要因が考えられるが、実態は両者が関係して単純ではあるまい。池之元遺跡の堀之内

2式土器の焼成技術は以上に観察したように各器種を越えて器体の内部に黒化層を挟む層状構造を形成するものが主体を占めている。そして意匠文系土器の深鉢A類、浅鉢などの器種に土器表面を黒色に仕上げる断面構造D・E類が他の器種に比較して卓越するということが指摘できる。こうした事実は器種によって土器焼成の方法と技術が異なるという実態を示しているものと考えられる。

3 堀之内2式の土器製作技術の展開とその特性

(1) 器体の薄手化をめぐる技術的特性

池之元遺跡の堀之内2式土器は、今まで述べてきたように成形や焼成といった各段階の技術が、器種と強い相関関係をもつことが明らかにできた。とくに薄手化のすんだ池之元遺跡の堀之内2式土器はヘラ状工具による削り痕が特徴的である。この地域に特徴的な素文系の無文深鉢にはその痕跡が明瞭に観察された。振口縁の断面形がすでに述べたように凹凸形を呈さず水平で、不明瞭である特性は、上下の粘土紐の「かぶり」の部分がヘラ削りによって削り取られたためと考えられた。また振口縁が不明瞭な事実は、逆に粘土紐同士が良く密着していた事実を暗示するが、これらは粘土の水分の多さと、ヘラ削りやナデによる器面の粘土の移動が充分な密着を可能なものとしたのであろう。堀之内2式土器には器形の歪みや凹凸を調整する他に、指頭押圧による粘土帯の薄手化と共に器面のケズリが顕著に行われたことが考えられる。しかし堀之内2式の深鉢形土器は乾燥段階や焼成段階での底部の剝落や亀裂のはいったものが多く、底部付近の破損率が高い土器であったらしい。

(2) 器体の製作と底部形態

堀之内2式土器の器種組成の主体を占める深鉢A類は、底部の安定性を指向して、大きくまた幾分張り出し気味に作られたものが多い。その底部の半数以上には網代の圧痕が認められた。こうした特徴は、深鉢B類とは大きく異なり、網代に底部を密着させ、成形段階での回転性を意図したひとつの大工夫ともみられる。しかし池之元遺跡や他の遺跡の堀之内2式にも広く認められるように、深鉢B類と比較しても深鉢A類の底部には円板状の底部が器体から剝落してしまったものや、底部自体に亀裂が入ったものが多く存在する。とくに後者は上器の乾燥時か焼成段階で生じたものらしい。こうした資料は後続の加曾利B1～2式にも認められるが、次第にその数は減るようである。こうした亀裂の原因はおそらく厚く大きな底部に薄手化の進んだ器体が成形されたために、乾燥の段階でこの部分の収縮のひずみが大きくなつたためと考えるのが自然であろう。

中期初頭など網代の底面圧痕がある型式の底部は、その多くが安定の良い張り出し形の形態である。堀之内2式の深鉢A類と素文系深鉢にも同様にして主流を占めるこうした底部形態の破損率の直接的な原因是、器体乾燥時の収縮に求められるとしても、それはあくまでも物理的な現象の指摘にすぎないであろう。なぜこうした深鉢A類や素文系深鉢にはば固定された形態の底部破損率と底部形態および網代圧痕が関係するのであろうか。収縮率の歪みを解消する方法は理論的には3つ想

定される。

一つは当初から底部円板を薄手の器体にあわせて偏平に形作ることである。そして二つ目は、当初は厚手の円板であっても成形の段階を経て結果として薄手に仕上げる方法である。しかし網代圧痕の増加という現象は、底面への成形が殆どおこなわれなかった事実を示唆するだろうし、底部に圧痕が比較的鮮明に、しかも網代面への置き直しを行わない單一の圧痕が認められることの方が圧倒的に多い事実は、土器製作のかなり後半段階の、おそらく器面のミガキ直前まで、その多くが網代を底部に付着させていた可能性が高いと考えられる。したがって、器体が乾燥硬化した状況での底部の削りなどは、かなり困難な状況が想定される。第三は底部自体を小形化することにより底部円板の収縮の歪みを小さくする方法である。

池之元遺跡の資料にはまた網代を擦り消したもののが散見されるが、削りによって底部円板の厚みそのものを調整した資料が見られない現段階では、掘之内1式以降の土器の器体の薄手化がその当初においては体部において進行し、次第に底部の薄手化や小形化により底部破損率の低下を達成したと仮定できる。

池之元遺跡の資料において指摘される朝顔形深鉢における網代圧痕の多さは、器体乾燥時点までその多くの底面に網代が付着していた事実を示唆するが、網代に乗せたまでの土器製作作業の経過に利点があるとすれば、作業途上での製作個体の移動時における正位の状態での可動性が考えられる。こうした観点から朝顔形の深鉢や意外に網代圧痕の多い素文系深鉢を観るならば、その多くがヘラ削りの痕跡を残すものであり、接合体（粘土紐等）の押捺と共に器体の薄手化が顕著に認められることは注意を要するであろう。器体の削りは胴部下半では縦位に、上半では斜位や横位が主流であるが、その行為は向きの縦横に係わらず連続的であり、横帯文様の描出と共に掘之内2式特有の円筒形の形態の獲得には回転性を必要とする。後期以降の土器群における底面圧痕の動向は、以上の諸現象の相互の関連性から、器体の薄手化と関係する作業の回転性に関係するものとここで考えておきたい。
(註7)

掘之内1式から加曾利B1式の頃には多様な底部の製作方法があり、そのことはすでに安孫子昭二氏によっても指摘されている（安孫子1970）。単純ではないこの時期の底部の製作方法は、器体と



関東地方の後期の型式群の底部形態は型式の推移とともに小形化の傾向が顕著であり、その中で掘之内2式～加曾利B1式は大形平底の傾向が並進される。こうした状況とともに底面圧痕（網代、木葉印）の増加。器体の薄手化という現象がほぼ対応して個体上に観察できる。

第8図 後期土器の意匠文系深鉢の底部形態変遷

底部の接合の強化といった点に技術が集約されているように見える。堀之内2式の深鉢A類は加曾利B1式へと連続的な変遷を示し、意匠文系土器の中核の座を維持してゆくが、人形で張り出しなども特徴的な形態の底部は加曾利B2式以後次第に減少し、他の器種とともに小形薄手化した底部へと変化する。こうした変化は「素文系」土器とも連動しており、加曾利B式から安行式にかけて、極めて薄手で時には底尖状のものさえある小形の底部をもつ「素文系」深鉢を作りだす技術的な母胎を用意するのであろう。

(3) 機種の分化と土器焼成技術

器体の薄手化をともなう器種の分化は、従来の型式学的な観点と共に堀之内2式土器の特徴でもある。そして各器種の器体には成形技術や形態といった観点とともに、焼成技術における差異が指摘できた。

土器断面の色調構造は、個々の土器の器体表面に見える色調が、いかなる焼成過程を経て残されたものかを示唆する。池之元遺跡の土器断面の色調構造の特徴は器体の中心部に炭素が残存する黒化層が残存するものが主体を成すという点であり、その点では各器種間において共通していた。しかし器表面の黒化層との間に薄い赤化層を挟む類（D類）や全く赤化層を挟まない類（E類）が浅鉢や注口土器などの特定の器種に偏りをもって存在することは、これらの器種の器表面が滑沢に富んだ研磨法を駆使し、さらに炭素の吸着により漆黒色を呈することと関係し、意図的な焼成処理が行われたと推測される根拠ともなろう。いわゆる「黒色研磨土器」の製作における二者が、堀之内2式の特定器種において認識されることは以後の土器製作技術を検討する際に重要であろう。この伝統は加曾利B1式に継承され、さらに以後に連続するが、その在り方は器種構成の問題とともに個別器種の機能的側面を象徴する点でも今後に注意する必要があろう。

また黒化層を残す土器焼成方法は、焼成時間を比較的短い時間で終了させている可能性と、作業者が肉眼で土器表面の色調変化を観察できる環境が準備されていたことを推測させる。おそらく断面色調構造の異なる器種群はそれぞれに焼成工程が異なりさらに、焼き分けが行われたことの証拠でもある。繩文土器は酸化炎により焼成されたという点のみの解説では、堀之内2式土器の焼成方法を説明したことにはならない。土器の断面色調構造の示す差異が単に見かけや、焼成環境と製作工程上での問題だけでなく、具体的な器種と機能との関係を含めた視点で、今後に検討の範囲を広げる必要もある。

池之元遺跡の堀之内2式土器の構成背景を推測する時、個体間に共通する属性と、いくつかのまとまりが個有にもつ相互の差異について考察する場合、それらは型式学的観点に止まらず、土器製作段階においても極めて構造的な成り立ちを示すことが明らかにできた。いわゆる器体の薄手化という現象や器種の分化、さらに「粗製土器」（素文系土器）の生成など、当該期の土器型式の特徴としてすでに多くの先学の指摘や、今日的な認識の底辺を構成する諸現象が、実のところまだ表層

的な認識に終始していることに気づく。

遺跡に集積する単位土器群の構成背景について、型式学的な分析を基軸として、関連するいくつかの視点を提示しつつその特性について述べてきた。後期土器については今日的な「粗製」・「精製」の観念的認識論からの脱却が必要であろうし、単位土器群の構成背景については、土器製作に関する技術基盤や個別器種の機能の推定など、残された問題は数多い。近い将来にそうした問題を踏まえて、ふたたび当該土器群について再論の機会をもちたいと思う。 (1992年11月3日)

追記

小論をまとめてから、刊行の年度をむかえるまでに幾らかの時間を経過した。その後の筆者の縄文土器の製作技術や機能に関する分析視点に大きな変更はないものの、事例分析的な報告や関連する論文のいくつかを発表してきた経緯があるので筆者の分析研究の視点や、個別的な現象の認識の関連について述べておく。

具体的には神奈川県綾瀬市において堀之内2式の単位土器群のサイズと組成の分析を行い、池之元遺跡とは幾分ことなる同一器種(深鉢A類)内におけるサイズグループの形成の問題を次期の加曾利B1式期における「粗製土器」の成立と関連させて検討した(阿部1993)。ここでは深鉢A類の煮沸痕跡の観察を行い、これを解釈の前提として文様や形態から分類されることの多い縄文土器の「器種」について、各個体の容積を反映する口縁径を基準に土器のサイズという観点から検討を及ぼし、型式学的には同一に分類される器種が利用される場合において、なお複雑な尖端をもつ後期土器群の煮沸用器種の特質の一部について触れた。

さらに岡山県津島岡大遺跡では中瀬戸内地域の堀之内2式～加曾利B1式併行期の二つの単位土器群を対象にして器種組成と口縁サイズの関係と土器製作技術の検討をおこなった(阿部1994)。ここでは浅鉢や鉢の多くに煮沸痕の存在する事実に注目し、さらにいわゆる「精製・粗製深鉢群」の多様な器種の組合せから、それらが複数の工程を分担する一連の食物加工工程上に位置づけられる可能性を指摘した。

これらと関係して土器焼成技術の観察成果について、とくに焼成温度と器体構造の関係を土器の断面色調構造の観察と再現実験から検討し、遺跡出土資料の基本的な認識視点を提示し(阿部1995)、さらに本論で指摘した土器の断面色調構造の顕微鏡観察を計画し、亀裂の度合いなどの器体の基本的構造に関する所見を公表した(河西1995)。また深鉢形土器の機能的特性にみられる変遷の筋道を中期以降より概観し、「精製土器」と「粗製土器」が食物加工工程といかなる関わりをもつかという点について私見(阿部1996)を述べた経緯がある。これらの諸論が各所において池之元遺跡の分析成果と関係あるいは連動していることは一瞥すれば明解であるが、とくに後期以降の時期で問題とされるいわゆる「精製土器」と「粗製土器」の問題については、具体的な資料分析を実

施した初期の遺跡として池之元遺跡のデータがひとつの検討材料となってきたことは事実である。

しかし、器種としてのまとまりにおいて、かなり口径サイズのことなるピークをもつ複数のグループを含ませた結果は、かならずしも後期以降の土器の変化を追跡する場合に具体的ではなかった点が問題点として浮上した。つまり器種組成グラフには見えない、また表現できない食物加工工程の一部に加担する機能態としての単位土器群の尖端があることが加曾利B1式の「粗製深鉢」の成立背景を考察する際に強く意識される結果となった（阿部1995, 1996）。その実相の解明が今後の課題として確認できたわけである。

（1997年2月24日）

註

註1 東京都平尾遺跡では中期後半の加曾利E式土器には連続する粘土帯上において刻みの見られるものが存在するという（安孫子1970）。なお粘土帯上における縦列は相互の粘土を密着させることが目的であると考えられるが、後期以降では製作時点の結合の強化と利用時点でのそれに大きく区分されるようで、とくに深鉢の胴部下半にみられる刻列付近が被熱による赤化破損部位に相当する事実は、使用時点における強化が目的とされたものと考えられる。

註2 この時期の「無文」土器の表面には削りによる氷物粒子の移動が顯著に認められるし、そうしたケズリ痕を縦に見立てた竪匠文系土器の文様も存在する。

註3 安孫子1970、堀之内1式ではとくに外反角度の大きい鉢や深鉢と、底部から器体が直行する朝顔形の深鉢では底部の製作方法が異なる。とくに前者は底面の二次的な成形が行われるものが多い。さらに底部円板と器体の厚みに差異の少ないものが多く、胴部上半に向かい緩やかに器体厚を減じていくものが主流である。また破損の度合いが朝顔形深鉢とは異なる。反対に朝顔形深鉢の底面の成形は高い比率で存在する網代土痕が示すように、底部円板自体の変形は内面を除いては殆ど行われなかつたことが示唆される。堀之内2式で主体を成す二つの深鉢は、こうして見ると、形態的な差異とともに器体製作技術の差異が対応している。より具体的に推測するならば、朝顔形深鉢は底部に削除などの痕跡を密着させた状態で多くの製作工程を経過しているのに対して、外反角度の大きな深鉢や鉢類は器体乾燥時点依然に底部が製作台や氷物から離脱していた可能性が指摘できる。その特徴は筆者が現在分析中の中部鹿戸内の後期中巣土器と基本的な関係が一致しており、広域に見渡せば西日本の鉢や深鉢類と共通していると考えている。

註4 試料の作成と観察の実際は土器の胎土分析とともに帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏にお願いした。記して感謝の意を表したい。

註5 土器断面の色調構造の違いが、炭素などの残存量や粘土の酸化や還元状態の度合いを示す指標的な目印とするだけでなく、実際の土器の使用場面における特性を推測の範囲にいたる多角的な観察が必要である。たとえば器体内におけるクラックなどは透水性に関係するし、煮沸時における熱伝導に影響するであろう。今後に実験試料との比較を併用した観察を行いたい。

註6 池之元遺跡の土器において器体中の黒化層を観察すると内部に炭化粒子や時には数ミリの炭化物の混入が認められる試料が存在しており、やはり黒色の色調形成の要因は炭素が関係していると考えられる。

註7 各地、各時期の縦文土器に観られる底面圧痕の要因は一元的ではないだろう。しかしその背景に具体的な考証を伴わない「流行」を指摘することは不毛である。底面圧痕の意味を考察する場合、底面における成形の有無や器体外面との作業の重複関係を観察することは、その行為の順序や意義を考察する場合、基本

である。筆者が池之元遺跡の資料において注意するのは、土器製作全体の工程における「底面圧痕の行為化」の復元と、他の技術・工程との関係にある。

そうして見た場合、やはり堀之内2式以降の型式の特定の器種に網代窓や木葉窓がみられる伝統性と、器種の関係が重要である。そのなかで加曾利B式や安行式素文系深鉢、さらに製瓶土器においてその系譜が長期にわたり連続する事実に注目している。後期中葉以降に底径が小形化する動向のなかで網代窓を残すものと過時間的な意義までを見出される場合、やはり製作途上における可動性を前提とした「ケズリ」や「のばし」の工程が関係するものと考えている。その場合、全体の成形の完了以前の部分的な器体成形作業を想定する必要もあるかもしれない。

引用・参考文献

- 秋田かな子 1990 「土器底部の輪積み技法」『東海大学構内遺跡調査報告』1
- 安孫子昭二 1971 「半尾遺跡発掘調査報告書」
- 安孫子昭二 1990 「縄文土器の付着物」『東京考古』8
- 阿部 芳郎 1988 「堀之内2式型式基礎論考(1)」『貝塚博物館紀要』15 加曾利貝塚博物館
- 阿部 芳郎 1993 「ト土器遺跡出土の堀之内2式土器の器種とサイズ」『綾瀬市埋蔵文化財報告3 吉岡堀ノ内横穴墓群 上土器遺跡 上土器南遺跡』綾瀬市教育委員会
- 阿部 芳郎 1994 「後期第IV群土器の製作技術と機能」『津島周人遺跡』5 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 阿部 芳郎 1995 「土器焼きの火・料理の火」『考古学研究』第42巻第3号
- 阿部 芳郎 1996 「食物加工技術と縄文土器」『季刊考古学』第55号 雄山閣出版
- 新井 司郎 1973 「縄文土器の技術」中央公論美術出版
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予案)」『調査研究収録』5
- 伊藤 普祐 1983 「製作実験II」『縄文文化の研究』III 雄山閣山版
- 市川考古博物館 1982 「堀之内式土器シンポジウム資料」
- 今村 桂衛 1983 「文様の割りつけと文様帶」『縄文文化の研究』5 雄山閣出版
- 江藤 盛治 1963 「縄文土器の焼成温度の推定」『人類学雑誌』71
- 大沢 真澄 1983 「胎土の焼成と焼成温度」『縄文文化の研究』III 雄山閣出版
- 大塚 達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(1)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2
- 岡本 孝之 1983 「機能・用途論」『縄文文化の研究』III 雄山閣出版
- 河西 学 1995 「市兵衛谷遺跡第II群土器の断面観察」『市兵衛谷遺跡・新道遺跡』
- 久保田正寿 1989 「土器の焼成I」私家本
- 後藤 和民 1979 「縄文土器をつくる!」中央公論社
- 後藤 和民 1983 「製作実験I」『縄文文化の研究』III 雄山閣出版
- 佐藤 重一 1991 「縄文成形技法の一端を示す資料」『貝塚博物館紀要』第18号
- 庄司 克 1981 「堀之内2式土器小考」『貝塚博物館紀要』7
- 鈴木 正博 1980 「加曾利B式粗製土器様式」『大田区史 資料編』考古II
- 西田 泰民 1984 「粗製土器と粗製土器」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』3
- 山内 清男 1929 「関東北における縄文土器」『史前学雑誌』1-2
- 山内 清男 1958 「縄文土器の技法」『世界陶磁全集』1 河出書房

第4節 土器底面の網代圧痕に関する基礎的な観察と 編み方の地域性

——池之元遺跡より出土した堀之内2式土器の分析から——

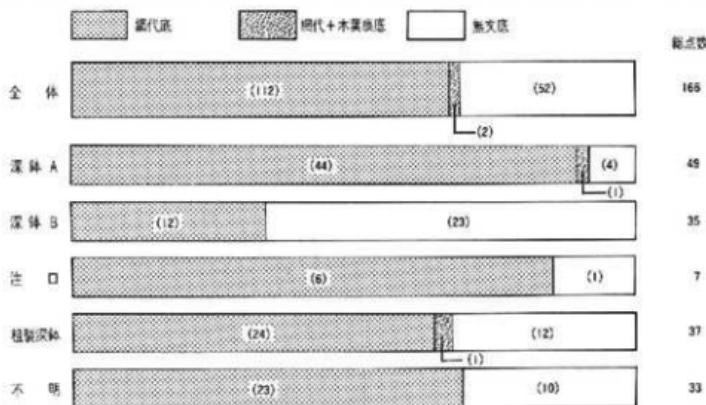
須賀博子

はじめに

従来の網代痕研究の視点は「編物自体の研究」と「土器製作に関連づけた研究」の大きく2つに分けられる。しかし、現時点でも底面に対する観察データの不足、また時間幅の狭い質的に良好な資料のデータ不足が指摘できる。将来的にはデータの蓄積による従来の研究成果のより緻密な検討が必要である。一方、編み方や原体からみた地域性の把握や網代の使用法の推定などにとどまらず、研究の目的をどのように展開していくかという、今後の研究の視点や見通しが必要とされよう。今回の調査で出土した土器は、ほぼ単純な一型式であり、質的に良好なデータが得られよう。ここでは全資料における網代底の比率とともに、編み方の種類と池之元遺跡のもつ地域性、また土器製作における網代の役割を考えるために若干の製作の痕跡の観察と、土器の器種・類型と網代底や網代の内容との対応関係を検討した。

1. 池之元遺跡の底部圧痕

分析の対象は、7A・B区から主体的に出土した堀之内2式土器である。底部総数は166点、網代痕が残る底部（以下網代底と呼称）が112点（67.5%）、網代痕の後に木葉痕が付着した底部が2点



第1図 器種・類型別の網代底の割合

(1.2%), 無文の底部（以下無文底と呼称）が52点（31.3%）である（第1図）。

(1) 網代痕より復元した編み物の種類と比率

網代底112点のうち、網代の編み方が判別できるものは66点である。他は小破片や器面整形のため編み方は不明である。編み方を経の条に対する縫の条の越えと潜り、そして縫の条の送りによって分類すると、網代の編み方には次の7種類が認められた。第2図に模式図を示す。

1類 「2本越え、1本潜り、1本送り」66点中、56点（84.9%）を占める。当遺跡の主要な編み方である。

2類 「2本越え、2本潜り、1本送り」66点中、2点（3.0%）を占める。

3類 「3本越え、3本潜り、1本送り」66点中、1点（1.5%）を占める。

4類 「3本越え、2本潜り、1本送り」66点中、3点（4.5%）を占める。

5類 「3本越え、3本潜り、2本送り」66点中、2点（3.0%）を占める。

6類 「1本越え、1本潜り、1本送り」66点中、1点（1.5%）を占める。

7類 本類は1～6類とは異なり、経と縫、越えと潜りと送りなどに規則性はみられない。原体をいくつかの方向より広く隙間をあけながら、交差させている。66点中、1点（1.5%）を占める。

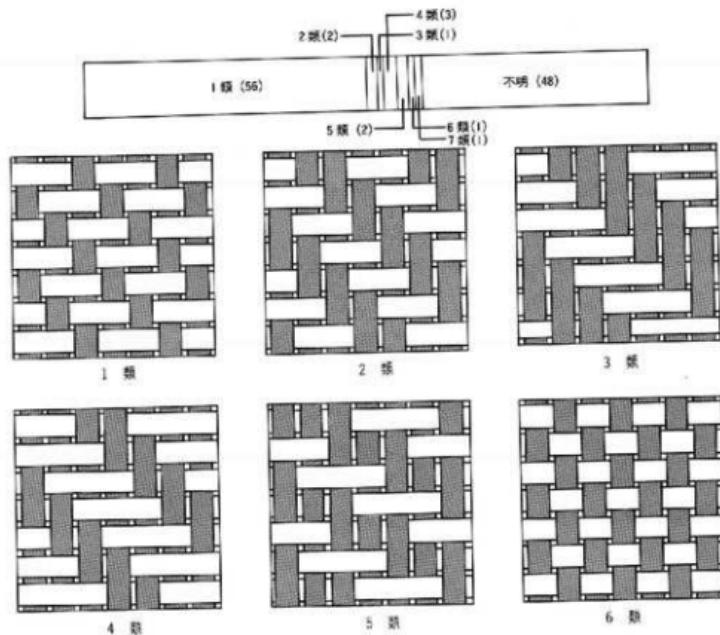
網代の原体の幅は0.5～4.3mmのものまであるが、主体は1mm以上3mm未満のものである。縫と縫の幅はほぼ同じものが多いが、異なるものもある。編み方の1類は2mm未満のものが多く、2～5mmが中心の2～5類に比べ、より細目の原体を用いる傾向を指摘できるかもしれない（第1表）。しかし、2～5類の点数が少なく、原体幅の差もそれほど大きくないため確実ではない。1類と5類においてはそれぞれ幅の広い原体と細い原体を使った両者がある（第4図1・2、6・7）。

(2) 製作の痕跡からみた網代の役割

当遺跡には網代底と無文底があるが、土器製作の過程における網代を使用する段階や期間と網代の役割、また無文底の網代を用いた製作の可能性を検討するため、底部付近の製作方法やその手順を示す痕跡の若干の観察と推察を行う。

網代底には、網代痕の付着後にはほとんど器面調整が加えられず、深く明瞭な網代痕が観察できるものがある。実験などによる検証が必要な推論であるが、成形から施文、整形までの製作終了後、乾燥などのために網代の上に上器を置いただけでは深く明瞭な痕跡は付かないのではないだろうか。土器の自重でつく可能性もあるが、底部の円盤部分の作成時に、粘土を網代の上で押し伸ばしたためや成形時の加圧のために残された痕跡ではなかろうか。

また、網代底には網代を底面から分離した後、網代痕の残る底面にナデなどを加えたり、側面の器壁の調整ではみ出した粘土を底面になでつけたものがある（第5図a）。その底面のナデなどの面、なでつけた粘土の面に網代痕が観察される例は殆どないので、その後に再び網代の上に乗せる



第2図 網代の編み方模式図とその組成

ことは殆どなかったと推測される。たとえ置かれたとしても圧痕が明瞭に付着しない状態であり、深く明瞭な圧痕の付着原因は別にあったことがわかる。粘土のなでつけや底面のナデなどは、粘土が比較的柔らかい段階で行わなくては不可能であり、網代を分離するタイミングが、土器の胴下半部の粘土がまだ比較的柔らかい段階であったことを示している。

以上のことより、それが全てかどうかは別として、網代は成形から施文、整形までの間に利用された可能性が高い。

無文底には何の器面調整の痕跡もみられないものと、ナデやミガキなどの調整が加えられているもの（第5図c・d）がある。網代底で調整が加えられているものには、その調整が一部分に限られるものと、ほぼ全面に加えられているものがあることから、全面に調整が加えられている無文底^(註4)も、もとは網代痕が付着していた可能性も考えられる。そのような場合、網代の使用率は先に示した数値より高くなる。

(3) 土器の器種・類型と底面の状態

次ぎに、土器の器種や類型と網代底や網代の性質との対応関係を検討することにより、土器の形

態や装飾と、網代の使用の有無や底面の器面調整を中心とした土器製作のあり方の関係、また装飾としての網代の可能性を検討する。

a) 土器の器種・類型と網代底

土器の器種・類型と網代底の比率との対応関係をみるために、底部を断面形態と器面調整から器種・類型の分類を行った。土器の分類は第IV章第2節の考察における分類に準じている。口縁部資料から求めた土器組成と比べると、「粗製深鉢」の比率がやや高く、深鉢A類（「精製」の朝顔形深鉢）の比率がやや低い。底部の形態が類似していることから、「粗製深鉢」と深鉢A類の間で分類に多少混乱をきたした可能性もあるが、組成の概要はほぼ一致しており、当時の傾向を窺うのに十分な資料であると考える（第1図）。

分類した底部と網代底の比率をみると、深鉢A類と注口土器は85%以上、「粗製深鉢」も65%と高率であるが、それに対し深鉢B類（「精製」の頸部でくびれ、口縁部が開く深鉢）は34%と低く、網代底の比率が異なる。深鉢B類とした底部に他の時期や他の類型の資料が混在していないとすれば、底部の形態や土器の類型などに応じた網代の使用的頻度か、底面の調整法など製作方法の違いが大きかった可能性もある。今回はその違いを明らかにする観察が不十分であったが、より詳細な製作技法の観察や、同時期の類例との比較が必要となる。

ところで関東を中心とした地域で網代底の比率が上昇する後期は、深鉢がサイズや装飾や組成率の点で分化し、精製・粗製深鉢が確立する時期である。当遺跡の堀之内2式土器は、その点における筆者自身の分析が不十分であるが、深鉢A類に比べて「粗製深鉢」としたもの比率が関東南部の加曾利B式土器のようには高くないことなどから、精製・粗製深鉢が確立した時期の土器が多数を占めるわけではないと推測される。深鉢A類・深鉢B類と「粗製深鉢」を比較すると、網代底の比率においては、両者に対応した明瞭な差としては捉えられない。当遺跡のデータにおいて一つ可能性が指摘できることは、精製・粗製深鉢が明確に確立する時期よりやや前の段階から、すでに高率の網代底という現象が生じていたということである。また当遺跡では深鉢A類と「粗製深鉢」は、それぞれの製作の体制といった問題は別にして、土器製作における網代の使用という点においては、両者の違いよりも、むしろ製作の仕方においてある程度の共通性が指摘できるかもしれない。

b) 器種・類型と網代原体の太さ

網代は、原体が細い方が素材の調達や網代の製作に労力や時間・熟練が必要と思われることなどから、工芸品としての価値が高いと推測することもできる。そこで土器の器種や類型と網代原体の太さの対応関係を検討し、特定の器種や類型への装飾性の高い網代の偏用があるかどうかを検討することと、装飾としての網代の可能性を検討した（第2表）。

深鉢A類、注口土器は他に比べ2mm未満の原体の使用頻度が高いことで特徴的と指摘できようか。しかし同時にそれより太い原体も使用していること、他の類型でも2mm未満の原体も使用している

第1表 網代の編み方と原体の幅

	1未	1~2	2~3	3~4	4~5	不明	計
1類	1	22	27	4	0	2	56
2類	0	0	1	1	0	0	2
3類	0	0	0	1	0	0	1
4類	0	0	0	3	0	0	3
5類	0	0	1	0	1	0	2
6類	1	0	0	0	0	0	1
7類	0	0	1	0	0	0	1
計	2	22	30	9	1	2	66

第2表 土器の器種・類型と網代原体の幅

	1未	1~2	2~3	3~4	4~5	不明	計
深A	2	14	12	6	1	10	45
深B	0	2	7	1	0	2	12
粗製	0	3	11	2	1	8	25
注口	1	3	0	0	0	2	6
皿	0	0	0	0	0	1	1
浅鉢	0	1	0	0	0	0	1
碗	0	1	0	0	0	0	1
不明	0	2	11	6	0	4	23
計	3	26	41	15	2	27	114

・第1表、第2表とも横軸は原体の幅を示す。単位はmm。1~2は1mm以上2mm未満を示す。

・第1表、第2表とも縦、縦で大きさが違う場合は大きい方を計測した。

・第1表の横軸は編み方の種類を、第2表の横軸は土器の器種と類型を表す。

ことなどから明確な差としては捉えられない。また、「粗製土器」も網代底の比率が高いことから、^(註8)「精製土器」に限った装飾という可能性は少ないと考えられる。

なお、器種・類型と編み方の対応関係においては、編み方の点数が偏っていることもあり、器種や類型間での異なる編み方との対応関係は認められなかった。

2. 編み物からみた池之元遺跡の地域性

網代の編み方の地域性については、坪井(坪井1899)、小林(小林1964)の見解を経て、荒木ヨシ^(註9)は縄文時代後晩期では一遺跡の主体を占める編み方に地域性があることを示し(荒木1970)、東日本では2本越え1本潜り1本送りが、西日本では2本越え2本潜り1本送りが主体をなすという認識が形成された。その後の類例の蓄積から、さらに1本越え1本潜り1本送りが主体となる地域が東北北部や、九州南部に存在することが明らかにされている(高橋1988、荒木1995、岡元1986他)。

ここでは従来の主要なデータから、地域性のあり方の概要を再確認し、その中の池之元遺跡の位置づけを行う。対象とした資料は、時期は後期前半(後期初頭~中葉)のものを中心とし、また地域は本州、四国、九州としたが、そのうち底面に圧痕が一定量残されている土器群が分布する範囲内に限られる。^(註10)

主体となる編み方とその地理的な分布のまとめからみると、従来指摘されてきたように、以下に示す4つの大きな地域的なまとまりが窺える(第3図)。^(註11)

A. 1本越え1本潜り1本送りが主体となる地域。地理的な分布のまとめから次の2地域に区別できる。

A-1. 東北北部を中心とする地域。 A-2. 九州南部を中心とする地域

B. 2本越え1本潜り1本送りが主体となる地域。東北中部から南部、関東、北陸に広がる。

- ・黒丸は6類主体
- ・黒四角は1類主体
- ・黒星は2類主体
- ・白抜き三角は網代底が少ない遺跡



1 青森県田面木平遺跡	12 福島県三買地貝塚	23 新潟県舟生遺跡
2 青森県蓋産遺跡	13 福島県荒小路遺跡	24 新潟県真駒瀬遺跡層
3 岩手県馬立II遺跡	14 福島県寺脇貝塚	25 福井県船場手島遺跡
4 岩手県外久保I遺跡	15 宮城県中麥貝塚	26 京都府桑原下遺跡
5 岩手県崎山弁天遺跡	16 千葉県吉見台遺跡	27 舞岡沖帆標道跡
6 岩手県弁天島遺跡	17 埼玉県秀能遺跡	28 岡山県津島岡大遺跡
7 岩手県貝貝塚	18 東京都平局No.9遺跡	29 愛媛県江口貝塚
8 秋田県片符沢I遺跡	19 神奈川県下北原遺跡	30 福岡県下吉田遺跡
9 山形県神矢田遺跡	20 神奈川県東正院遺跡	31 長崎県伊木力遺跡
10 宮城県山口遺跡	21 山梨県治之元遺跡	32 鹿児島県楳富之泊遺跡
11 福島県小川貝塚	22 山梨県清水塚遺跡	33 鹿児島県十文字遺跡
		34 宮崎県崩野遺跡

第3図 後期前半の主体となる網代の編み方の分布

C. 2本越え2本潜り1本送りが主体となる地域。東海や北陸、近畿北部に認められる。

なお、2番目に多い編み方の比率の高低や種類に視点を置けば、さらに細かな地域性を認めることもできる。

池之元遺跡は関東を中心とした堀之内2式の分布図の(1)でも西寄りに位置するが、西方に多い2本越え2本潜り1本送りの点数は大変少なく、2本越え1本潜り1本送りの比率が圧倒的に高い。この時期の東北南半～関東にかけての網代のあり方と合致する。

なお東北北半の網代痕をみると、絹か綿どちらかの糸の圧痕が丸みを帯び、かつ密接しているものが多いようだ。この原体の特徴や、編み方の特徴はすでに(江坂1955)や(鈴木1974)によって指摘され、その分布が東北北部や日本海側の積雪量の多い地域すなわち植生との関係が類推されている(植松1981)。池之元遺跡の原体は幅も細く、絹、綿ともに隙間があき、圧痕の形状も丸みを帯びていない点などで異なっている(第4図8)。

おわりに

以上、堀之内2式期の単期間の土器群の底部圧痕について検討を加えたが、その概要は次のようである。網代底率は67.5%と高く、編み方は2本越え1本潜り1本送りが主体と、関東を中心とした後期前葉後半から中葉の一般的な傾向と合致する。製作痕跡の観察から網代は土器成形の最初の段階から用いられ、施文や整形の製作終了後の敷物としての利用は少なかったことが予測された。網代底の比率は当遺跡に限って言えば、ある程度の器種・類型との対応関係とともに、底部形態が類似した類型間の共通性が指摘できる。なお器種、類型と装飾としての網代との対応関係は認められなかった。

最後に、はじめにも述べたような、今後の網代痕、底部圧痕研究の見通しを、土器製作の視点を中心に考えてみたい。

従来の網代痕の研究は土器製作にも視点が向けられていたものの、それは網代の使用法の推測や、網代痕から読みとれる土器製作技術でも、底部付近の輪籠み技法の一部の復元など、底部付近の土器製作技術に限ってもなお部分的なものに限られていた。今後は、あるまとまりの土器群の具体的な観察・分析による、土器製作技術の一連の過程と、その全体的な構成を復原し、さらにその変遷を明らかにして、その変遷の要因が何に求められるか(例えば土器の機能や、生産性の向上、製作技法における嗜好の変化などが考えられようか)、といった検討が必要とされよう。その様な視点の中で、後期の網代底の増加の背景をも検討していくべきであろう。

まずは、各型式単位の分析を行い、その地域での変遷や遺跡間の比較、併行型式間の比較という基礎的な分析が必要とされる。

今回は、土器製作の部分的な観察にとどまり、製作痕跡の観察と記録や対応関係を検討するべき

属性の観察（底径など）に不十分な所があった。今後は、前述の見通しを考慮し、製作痕跡の十分な観察と分析、諸属性との対応関係の検討から、全般的な土器製作技術の復元と縄代の役割の検討を行い、縄代底率においては関東のなかで一つの画期と想定される、堀之内1式～堀之内2式にかけての変化の内容を近い将来に具体的に検討する機会を持ちたいと思う。

なお、本論の作成に当たっては、前川容子氏に土器の観察などの点で大きなご協力を頂いた。記して感謝を申し上げます。

註

- 註1 (坪井1899)にならない、原体の数を多く越えるほうを律とした。また送りの左右の違いは一括して扱った。
- 註2 越えと潜りが何個の「隙間のできない縫み方」には幅の広い原体を、越えと潜りの数が異なる「隙間のできる縫み方」には幅の狭い原体を用いるという指摘がある(可見1970)。
- 註3 縄代底が深く明瞭な土底であることから、成形時に用いられたものであるという考えは(岡元1986)他においても示されている。
- 註4 無文底に対する同様の見方は(安孫子1971)等でも提示されている。
- 註5 筆者の分析では(須賀1996),「丁寧な」施文の深鉢が小形中心になり、「粗雑な」施文の深鉢が大形主体となって、さらに組成率において前者が低く後者が高いといふ、装飾の分化とサイズの分化、そして組成率の3者の関係が対応する構造的な変化を遂げた段階をもって、精製深鉢と粗製深鉢の成立と捉えている。関東南部においてその時期はほぼ堀之内2式でも新しい、加曾利B式土器に近い時期と考えている。
- 註6 本論のもととなる原稿を作成した時点(1991年)と、手を加えた時点(1997年)では、「精製土器」、「粗製土器」の用い方に違いがあり、本論中不統一な部分がある。本論で「精製」「粗製」としたものには、精製・粗製深鉢が成立(須賀1996)した段階以前の時期のものも含む可能性があり、本文中では、「」をつけて示してある。また、第IV章第2節で提示された「精製」「粗製」土器の問題については、機会を改めて考えをまとめてみたい。
- 註7 加曾利B式土器を主体とする山梨県清水端遺跡では粗製より精製土器の方が幅の狭い原体を用いているようであると指摘されている(宮沢1986)。
- 註8 (坪井1899)では、縄代底の付着している位置や、縄代底をナデ消したものがあることから、装飾の可能性を否定している。
- 註9 この間の縫縫については(安孫子1971)に詳しい。
- 註10 以下本文で述べるように、関東の後期前半には2本越え1本潜り1本送りが主体となるが、中期初頭には東京都神谷原遺跡や木曾中学校遺跡のように2本越え2本潜り1本送りが主体となる場合が存在し、主体となる縫み方に同地域内でも時間差がある可能性が(比武1988)により指摘されている。
- 註11 縄代底や底部圧痕をもつ土器の比率は、後期前半のどの時期、どの地域でも一様に高いといふわけではない。以下部分的だか報告書から確認できた幾つかの事例からそのことを指摘する。
- 関東や山梨県、福井県には後期前葉後半から中葉(堀之内2式～加曾利B式期)にかけて、縄代底の比率が60～80%と特に高い遺跡がある(東京都平尾No.9遺跡・62%, 山梨県清水端遺跡・68%/65%, 福井県船鹿手島遺跡・約8割, 当遺跡・69%/68%, 等)。比率の前者は底部圧痕の比率、後者は縄代底の比率、一つの場合は縄代底の比率。これらには大形の平底の制御形の深鉢やその系統を引く土器群が多い。

東北北部から中部では、後期前半を通じ、底部圧痕の比率は50%前後である。ただし、この地域は他地域と比べ、木葉底の比率がやや高い点が特徴的である。平底が主体である（岩手県崎山舟天遺跡II①層・55%/9%，同II層・66%/41%，宮城県六戸田遺跡9層・46%/38%，同川口遺跡8層・54%/39%，岩手県外久保I遺跡・52%/27%，等）。

後期前葉～中葉の北陸、石川県真駒遺跡では（真駒山層・50%/38%，真駒II層4・32%/27%）である。東海や近畿北部のほぼ同時期では20%程度（愛知県形原遺跡・17%/9%，京都府桑原下遺跡・19%/19%）と、平底ではあるが、やや底部圧痕の比率が低い。近畿の後期前葉～中葉の和歌山県下尾井遺跡では平底と上げ底がほぼ2対1位の比率だが、遺物集中区の内容を比較すると後半に上げ底が多くなるようで、各部式単位で網代底の比率を求めるべきであるが、参考に一括した単位での網代底の比率をみると19%/16%である。

一方、瀬戸内や四国、中部以北の九州では後期前半を過ぎてほとんど網代底がない（岡山県津島岡大遺跡、同福田貝塚、愛媛県江口貝塚、長崎県伊木力遺跡、福岡県下吉田遺跡、等）。底部形態は上げ底を主体とするほかに、平底が加わるものがある。ただし、九州の後期初頭では從来から指摘されているようにクジラの椎骨の圧痕が底部に認められるものがある（長崎県伊木力遺跡第9群土器・20%）。

またこの網代底の殆ど存在しない地域を除く、南部九州では後期初頭～前葉位にかけて一定量の網代底が作っている（宮崎県丸野第2遺跡・53%/52%，宮崎県崩野第2遺跡、他）。やはり平底である。

以上部分的な資料に限ってみても、網代底や底部圧痕をもつ土器の比率は、後期前半のどの時期、地域でも一様なわけではない、ということが理解できる。後期前葉後半以降は非常に高い網代底の比率を示す関東でも荒木などが指摘するとおり（荒木1968），後期初頭～前葉前半（称名寺式～堀之内式の時期）にかけては網代底の比率は低く、また後期後半以降は、底部が小型化し、網代底の比率は低下するようである。

網代底の比率の高低はある程度（阿部1994）が指摘するように、底部のサイズの大小と形態（平底・上げ底、球形・丸高の朝顔形）とに対応し、西日本の上げ底には殆ど網代底がみられないことが指摘できる。さらに網代底の（残存する）比率においては比較的大形の平底のグループの中にも、高低の格差が存在するようである。

池之元遺跡の網代底のあり方は、以上のように単純ではない時間的、地域的状況の中で、高率の網代底の分布図に合致する。

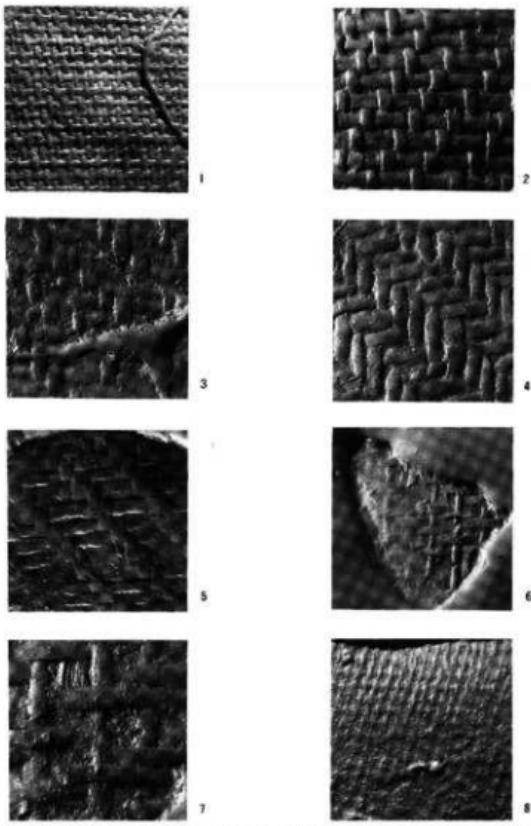
註2 第3回の基本的なデータは、2, 6, 7, 9, 11, 12, 14, 23, 32, 33は（荒木1970, 1975）記載のデータから、他のものは参考文献にあげた報告書から作成した。

引用・参考文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター 1984 「茎窓遺跡発掘調査報告書」
- 秋山かな子 1990 「土器底部の輪積み技法」[東海大学校地内遺跡調査団報告] I 東海大学校地内遺跡調査委員会
- 秋田県教育委員会 1980 「片符沢遺跡I発掘調査報告書」
- 安孫子昭仁 1971 「網代底について」[平尾遺跡調査報告書] I 平尾遺跡調査会
- 阿部芳郎 1994 「後期前葉V群土器の製作技術と機能—器体製作における技術的特性とその意義について—」[沖島岡大遺跡4] 沖島岡人学埋蔵文化財調査研究センター
- 荒木ヨシ 1968 「縄文時代の網代編み」[物質文化] 12 物質文化研究会
- 荒木ヨシ 1970 「東日本縄文時代後・晚期の網代編みについて」[物質文化] 15 物質文化研究会

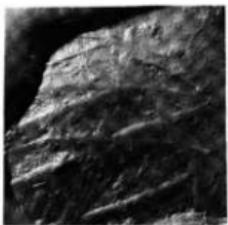
- 荒木ヨシ 1971 「縄文式時代の網代編み」『物質文化』17 物質文化研究会
- 荒木ヨシ 1995 「縄文時代に於ける分業の一考察・編物の分析を通して」『物質文化』58 物質文化研究会
- 植松なおみ 1981 「東北型網代土底について—鳥取市桂見遺跡出土資料の再検討を中心に—」『古代文化』33 財団法人古代学研究会
- 梅咲直照 1983 「底部土底について」『佐倉市吉見台遺跡発掘調査報告II』佐倉市遺跡調査会・東邦大学付属高等学校考古学研究会
- 上羽明美 1975 「底部圧痕」『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 江坂輝弥他 1955 「吹浦遺跡」
- 愛媛大学法文学部考古学研究室 1994 「江口貝塚II 縄文後続期編一」
- 大迫町教育委員会 1986 「櫛音堂遺跡」
- 大野市教育委員会 1985 「右近次郎遺跡II」
- 岡元満子 1986 「底部に圧痕を有する縄文式土器について—南九州におけるいわゆる網代底とその背景—」『鹿大考古』5 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 小野山節・清水芳裕 1979 「神峨山県北山村下尾井遺跡。和歌山県東牟婁郡北山村教育委員会・北山村下尾井遺跡調査会」
- 形原遺跡(袋川流域)発掘調査会 1982 「愛媛県蒲郡市形原遺跡発掘調査報告書」蒲郡市教育委員会
- 可見通宏 1970 「網代底について」『神明貝塚』庄和町教育委員会
- 高知県教育委員会 1986 「田村遺跡群 第1分冊」
- 小林行雄 1964 「統古代の技術」堀書房
- 朝日手帳文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 「馬立II遺跡発掘調査報告書」
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1986 「仏並遺跡発掘調査報告書」
- 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1985 「下古山遺跡」
- 塙谷孝正編 1979 「青森市黄沢遺跡発掘調査報告書」青森市黄沢遺跡発掘調査会
- 須賀博子 1996 「縄文土器における精製・粗製深鉢成立過程の地城差と共通性—縄文時代後期前半の関東南部を中心にして—」『駿台史学』97 駿台史学会
- 鈴木加津子 1981 「編み物圧痕などのある底部について」『取手と先史文化』下
- 鈴木保彦 1972 「網代底について」『東正院遺跡調査報告』神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査会
- 鈴木保彦 1977 「網代底について」『下北原遺跡』神奈川県教育委員会
- 鈴木優子 1974 「底部」『崎山弁天遺跡』大迫町教育委員会
- 仙台市教育委員会 1981 「山口遺跡発掘調査報告書」
- 高木厚史 1984 「土器底部について」『相原遺跡』八王子バイパス町山地区遺跡発掘調査会
- 高橋重貴子 1988 「外久保I遺跡出土縄文時代土器底部について」『外久保I遺跡』滝沢村教育委員会
- 山中(松岡)敏子 1984 「山口遺跡出土縄文土器の底部」「山口II遺跡II」仙台市教育委員会
- 田野町教育委員会 1990 「火野第2遺跡」
- 坪井正五郎 1899 「日本石器時代の網代形縄み物」『東京人類学会雑誌』14-161
- 長沢宏昌 1988 「山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について」『研究記要』4 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 南郷町教育委員会 1992 「加野II遺跡II」

- 八王子市門田遺跡調査会 1982 「神谷原II」八王子資料刊行会
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター 1988 『鳴鹿手島遺跡』
- 藤山 亮一 1988 「土器底部の圧痕文」「田舎木平(II)」八戸市教育委員会
- 松岡 敏子 1981 「六反山遺跡出土繩文土器の底部」「六反山遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会
- 宮沢 公雄 1986 「土器底部」「清水端遺跡」明野村教育委員会・候北土地改良事務所
- E.S.モース著 近藤義郎・佐原真次 1983 「大森貝塚」岩波書店
- 森浩一・松澤和人 1990 「印木力遺跡」同志社大学文学部文化学科考古学研究室
- 山内幹大 1985 「底部網代痕について」「母畠地区遺跡発掘調査報告書」19 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 山本直人 1986 「底部正直」「真駒遺跡」能都町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団
- 吉川國男 1984 「編み物遺存体」「宍能泥炭層遺跡発掘調査報告書——人工遺物・総括編——」埼玉県教育委員会



1類(1, 2) 2類(3) 3類(4) 4類(5) 5類(6, 7) 6類(8) 7類(第5図9)

第4図 池之元遺跡の網代の種類(粘土による型おこし) S \approx 1/1



a. 創代痕→ナデ
b. 創代痕→木葉模
c. ミガキ
d. ナデのみ

第5図 底面の整形 (a ~ d) 縮尺不同

第5節 池之元遺跡の堀之内2式土器の胎土分析

河西 学

1.はじめに

縄文時代の精製土器と粗製土器との区別は後期前葉にはほぼ全般的に完成され、以降の土器群の構成原理は一貫したものとなるとされている。縄文時代後期堀之内2式～加曾利B式土器の時代は、各地の精製土器がきわめて類似した特徴をもつようになるとともに、粗製土器は各地で独自の特徴を有しそれらの特徴は地域間で互いに傾頗であるとされる。ここでは富士吉田市池之元遺跡から出土した堀之内2式土器における精製土器と粗製土器との違い、および精製土器・粗製土器内のいくつかの型式間の相違などについて、薄片による岩石学的手法の胎土分析を行い、これらの問題の解明を試みた。

2.周辺地質

本遺跡は、富士火山に面した御坂山地の南側斜面最下部に位置し、富士山麓の劍丸尾溶岩との接点に近い。付近の斜面は富士火山テフラ層によっておおわれ、さらに斜面上部からの土石流堆積物などもあって厚い斜面堆積物で構成されている。周辺の御坂山地には、緑色に変質したデイサイト質凝灰岩や玄武岩～安山岩質火山疊凝灰岩、砂岩、礫岩、ひん岩などからなる新第三系が分布している。甲府盆地および丹沢山地には花崗岩質岩体が分布する。

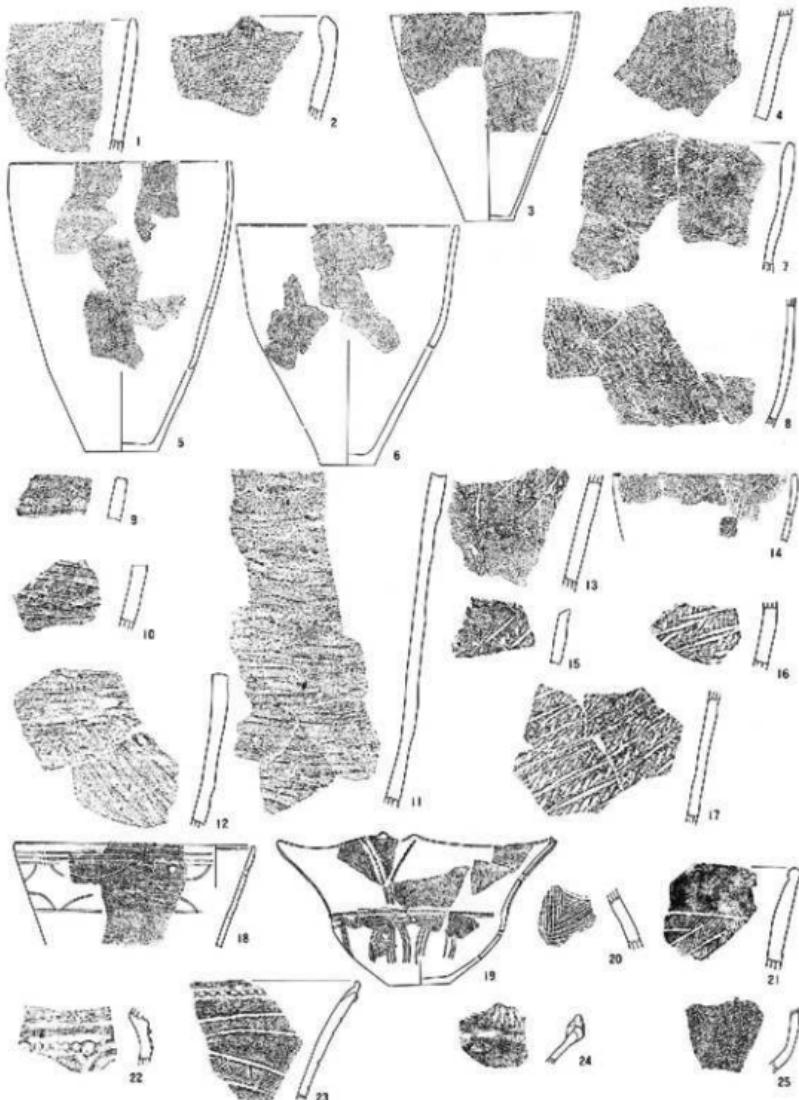
3.試料

第1表 胎土分析試料表

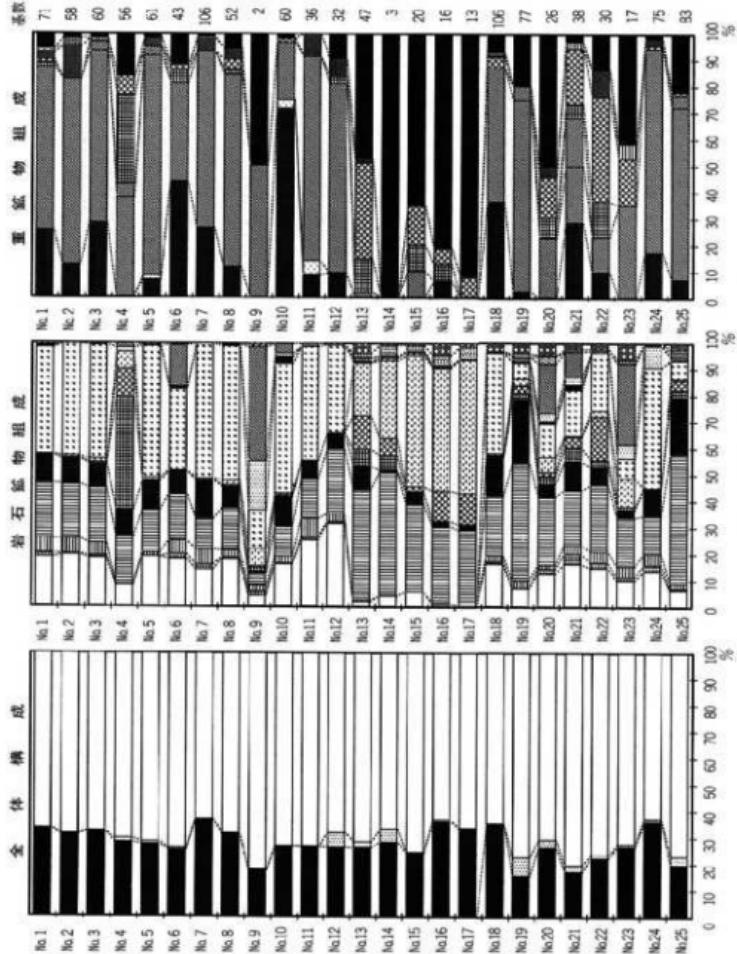
試料番号	注記	組成	器種	内蒙量 十分量*	整形技法
1	池2トレー2	粗製		B	ヘラ削り無文土器
2	池52トレー6層	粗製		B	ヘラ削り無文土器
3	池2トレー6	粗製		B	ヘラ削り無文土器
4	IK7.1住,333	粗製		D	ヘラ削り無文土器
5	IK7.2住,2-8	粗製		C	ヘラ削り無文土器
6	IK7,FIG.1,7,8,16	粗製		C	ヘラ削り無文土器
7	IK7.2住,A6-8	粗製		B	ヘラ削り無文土器
8		粗製		C	ヘラ削り無文土器
9	東,2層	粗製		A	指ナデ
10	IK7.3住,土器44	粗製		A	指ナデ
11	IK7.3住	粗製		A	指ナデ
12	IK7.C2	粗製		A	指ナデ
13	IK7.3住,66	粗製		E	付加条繩文
14	IK7.3住東2層	粗製		E	付加条繩文
15	IK7.3住東	粗製		E	付加条繩文
16	IK7.1住南	粗製		E	付加条繩文
17	IK3住,126	粗製		E	付加条繩文
18	2号配7上面	精製	深鉢A類	A	
19	7E-2G-VII層	精製	深鉢B類	A	
20	7A-A1G	精製	洼口土器	A	
21	IK7.1住87,8,13	精製	深鉢A類	B	
22	IK7.1住,324	精製	深鉢B類	B	
23	池S1トレー7層	精製	深鉢A類	C	
24	IK7.1住北VII層	精製	深鉢B類	C	
25	IK7.1住北VIII層	精製	洼口土器	C	

分析した土器試料を第1表・第1図

*分類基準は本文参照。



第1図 胎土分析試料



溶液に浸してカリ長石を黄色に染色し、次の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。100倍の偏光顕微鏡下において、オートマチックポイントカウンタを用い各薄片で2,000ポイントを計測した。ステージの移動ピッチはプレパラートの長辺方向に0.33mm、同短辺方向に0.40mmである。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリックス（“粘土”）部分とする。植物珪酸体はすべてマトリックスに含めた。

5. 土器の岩石鉱物組成

分析結果を第2表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの全体構成図、および砂粒子の岩石鉱物組成・重鉱物組成などを第2図に示す。なお重鉱物組成では右側に基数を表示した。
粗製土器

全体構成では砂粒子が15.8%~36%、マトリックスが62.7~80.5%を占める。試料ごとに數値が異なり肉眼的胎土分類および器種ごとの傾向性はあまり顯著ではないが、胎土Bでややマトリックスが多い。赤褐色粒子は、No.19で6.8%、No.20, 25で3.2~3.3%含まれる。

岩石鉱物組成は、どの試料においても花崗岩類・斜長石・石英・カリ長石・重鉱物などを伴うことで共通性がある。花崗岩類の含有率は6.0~45.8%の値を示す。それ以外の岩石としては、泥岩・砂岩・デイサイト・安山岩・変質火山岩類・凝灰岩などが検出されるが試料によって含有率が異なる。No.23では泥岩が30.8%と多い。

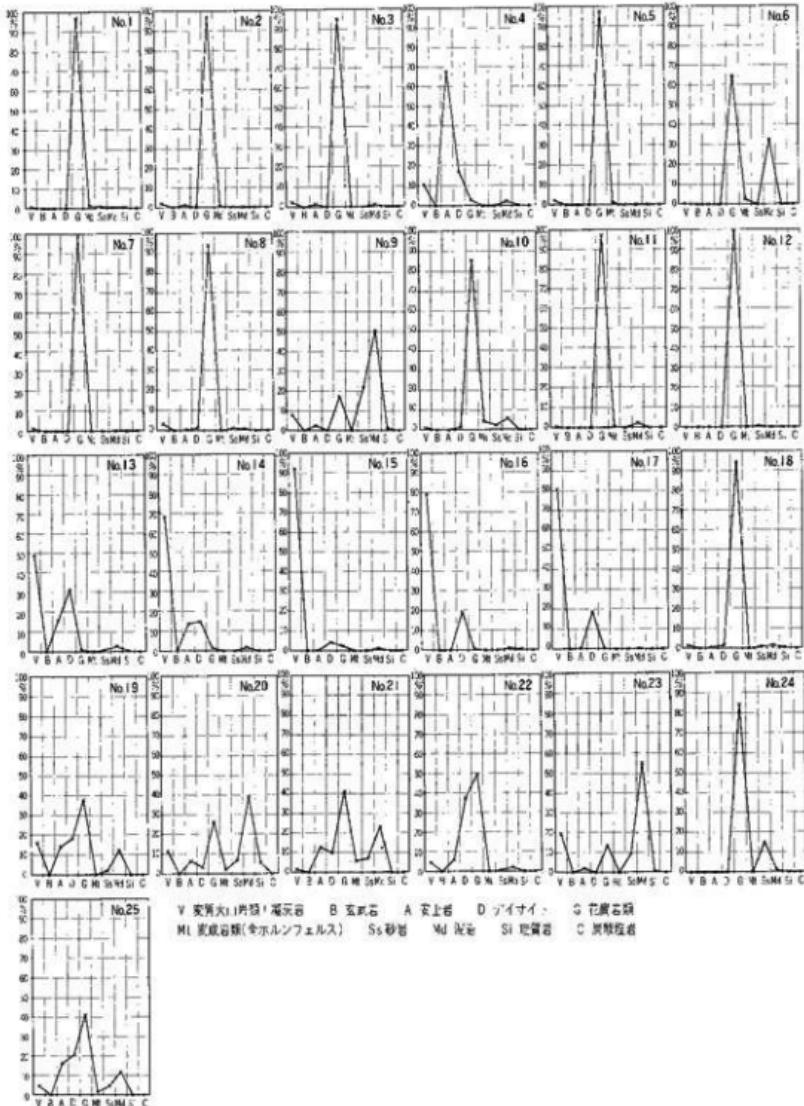
重鉱物組成では、No.18, 19, 24, 25では角閃石・黒雲母・不透明鉱物から主として構成されるに対し、No.20, 21, 22, 23では上記鉱物とともに斜方輝石・單斜輝石が多く含まれている。またNo.19, 21, 22, 25において酸化角閃石が検出された。

粗製土器

ヘラ削り無文土器 全体構成では砂粒子が25.4~36.9%、マトリックスが62.9~74.0%を占める。赤褐色粒子は0.1~1.4%と極めて少ない。

岩石鉱物組成では、No.4を除くNo.1, 2, 3, 5, 6, 7, 8では、花崗岩類が30.9~51.2%ともっとも多く、石英・斜長石・カリ長石・重鉱物などから主として構成される。またNo.6では泥岩が15.6%含まれる。これに対しNo.4では、安山岩が42.7%と優勢で、デイサイト・斜長石・石英・変質火山岩類・重鉱物などから主として構成され、花崗岩類は極めて少ない。またNo.4には β 型外形を示す石英が検出された。

重鉱物組成では、No.4を除くNo.1, 2, 3, 5, 6, 7, 8においては角閃石(37.2~83.6%)と黒雲母(6.6~44.2%)を主体とし、不透明鉱物・綠簾石・酸化角閃石・輝石などをわずかに伴う。これに対しNo.4は角閃石(37.5%)と單斜輝石(33.9%)が多く、不透明鉱物・斜方輝石・酸化角閃石などを伴うが、雲母は計数されない。以上のように重鉱物組成の特徴は、岩石鉱物組成の特徴と対応している。



第3図 岩石組成折れ線グラフ

指ナデ土器 全体構成では砂粒子が17.7~26.8%，マトリックスが67.7~82.3%を占める。赤褐色粒子はNo.12で5.9%含まれるが、他は微量である。

岩石鉱物組成では、No.9を除くNos.10, 11, 12において花崗岩類が33.3~49.4%と優勢で、石英・斜長石・カリ長石・重鉱物などから主として構成される。これに対しNo.9では、泥岩(43.3%)・砂岩(18.4%)・花崗岩類(14.7%)・変質火山岩類などから主に構成され、石英・斜長石・カリ長石・重鉱物などは少ない。

重鉱物組成は、Nos.10, 11, 12において角閃石・黒雲母・不透明鉱物などから構成され、Nos.10, 11では無色雲母も検出される。No.9では角閃石と不透明鉱物がわずかに1ポイントずつ計数されているにすぎない。

付加条縄文土器 全体構成では砂粒子が24.3~36.5%，マトリックスが63.1~75.5%を占める。赤褐色粒子はNo.14で4.9%，No.13で2.1%含まれるが、他は微量である。

岩石鉱物組成では、変質火山岩類+凝灰岩が20.2~51.0%と多産することで特徴づけられる。さらにデイサイト・安山岩・火山ガラスを伴う。ヘラ削り無文および指ナデ土器と比較して斜長石が多い傾向にあるが石英・重鉱物は少ない。

重鉱物組成では不透明鉱物が極めて多く、斜方輝石・單斜輝石・角閃石などを伴う。

6. 岩石組成折れ線グラフによる土器の分類

岩石粒子は地域的・地質的特徴を示すと考えられる。そこで変質火山岩類+凝灰岩・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類(含ホルンフェルス)・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基準とし、それぞれの岩石の構成比を折れ線グラフに示した(第3図)。折れ線グラフの類似性は土器胎土の類似性を示していると考えられる。折れ線グラフの類似性から以下のように便宜的に分類される。

I群 花崗岩類の第1ピーク

(I a) 横著な第1ピーク	Nos.1, 2, 3, 5, 7, 8, 10, 11, 12, 13
(I b) 泥岩の第2ピーク	No.6
(I c) 砂岩の第2ピーク	No.24
(I d) デイサイトの第2ピーク	No.22
(I e) デイサイト・安山岩・泥岩・変質火山岩類などの小ピーク	
	Nos.19, 21, 25

II群 泥岩の第1ピーク

Nos.9, 20, 23

III群 安山岩の第1ピーク

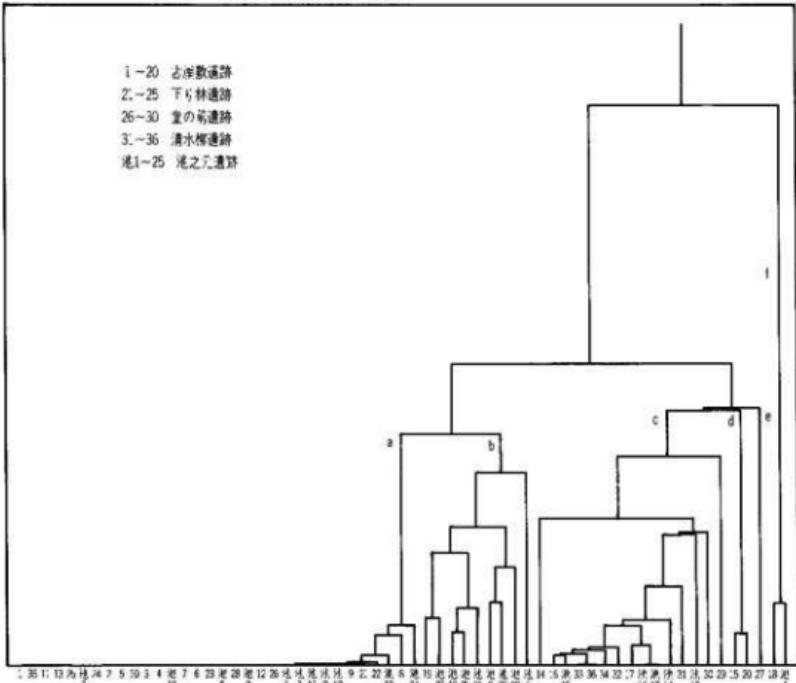
No.4

IV群 変質火山岩類+凝灰岩の第1ピーク、デイサイトの低い第2ピーク

以上の分類は、前述の岩石鉱物組成のうち岩石のみを基準にしている。したがって石英・長石・重鉱物などの造岩鉱物量は考慮されていない。しかし、今回の実際の組成を見ると花崗岩類の多い試料では鉱物である石英・長石・黒雲母・角閃石などが多く含まれ、また安山岩の多い試料では同様に斜長石・单斜輝石・斜方輝石などが含有されている。したがってこれらの分類は胎土の鉱物組成をもある程度まで代表していると考えられる。

この分類において、精製土器は I a・I c・I d・I e・II群の複雑な分類群の集合によって構成される。大局的には花崗岩類の第1ビーグにもつ I 群が精製土器において優勢であるという傾向が認められるが、肉眼的胎土分類や器種別の顕著な傾向性はみいだせない。

粗製土器ではヘラ削り無文土器・指ナデ土器が主として I a 群によって構成されたのに対し、付加条縄文土器はすべてIV群に属している。このように粗製土器では分類群（型式）と胎土組成とのあいだに良好な対応関係がみられる。しかし分類群（型式）が異なるヘラ削り無文土器と指ナデ土器とは、胎土の区別が困難である。



第4図 各遺跡出土土器との比較

7. クラスター分析による土器の分類

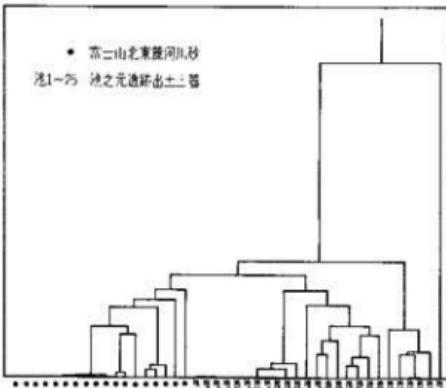
前項で折れ線グラフに用いた10岩石種のデータを用いてクラスター分析を行ない試料間の類似性を検討する。クラスター分析における非類似度はユークリッドの平均距離を用い、最短距離法によって算出した(第4図)。ここでは本遺跡の分析試料ばかりでなく古屋敷遺跡で分析した縄文時代早期土器(古屋敷・下り林・堂の前・清水柳遺跡)の胎土データ(河西・中村, 1990)とも比較する。これは他遺跡出土の土器胎土間の比較が有効であるとの考え方からであるが、他に適切な分析例がないので、時間的隔たりが存在するという問題はあるがあえて縄文早期土器との比較を試みた。樹形図から便宜的にa~f群に分類した。

a群は、池之元遺跡Nos.1, 2, 3, 5, 7, 8, 10, 11, 12, 18, 24が含まれる。また古屋敷遺跡Nos.1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 下り林遺跡Nos.21, 22, 23, 24, 25, 堂の前遺跡Nos.26, 28清水柳遺跡No.35など古屋敷遺跡でのA群に属する試料がそのままa群に含まれている。古屋敷遺跡A群は花崗岩類の卓越で特徴づけられている。a群に含まれる池之元遺跡試料も同様に、No.24が折れ線グラフによる分類I c群、および他はすべてI a群とともに花崗岩類の卓越で特徴づけられる。

b群は、池之元遺跡Nos.6, 9, 19, 20, 21, 22, 23, 25、および古屋敷遺跡No.19が含まれる。池之元遺跡では、折れ線グラフによる分類I b・I d・I e・II群に属する試料がb群に含まれるが、これらは花崗岩類の含有と泥岩・デイサイト・安山岩などの共伴が特徴である。古屋敷遺跡No.19は、デイサイトと花崗岩類と共に古屋敷遺跡C群とも類似性がある。

c群は、池之元遺跡Nos.13, 14, 15, 16, 17、古屋敷遺跡Nos.14, 16, 17、堂の前遺跡Nos.29, 30、および清水柳遺跡Nos.31, 32, 33, 34, 36を含む。池之元遺跡の5試料は変質火山岩類+凝灰岩が優勢ですべて折れ線グラフによる分類IV群に属している。またc群に含まれる古屋敷・堂の前・清水柳遺跡試料のうち堂の前遺跡No.29をのぞく9試料は、変質火山岩類が第1ビーグをもつ古屋敷遺跡B群に属している。堂の前遺跡No.29は、古屋敷遺跡C群に属していくてデイサイトと変質火山岩類が多い。

d群は、古屋敷遺跡C群に属するNos.15, 20が含まれる。デイサイトが卓越する。



第5図 富士山北東麓河川砂と土器との比較

e群は、古屋敷遺跡B群に属するNo27が含まれる。変質火山岩類が優勢で珪質岩を伴う。

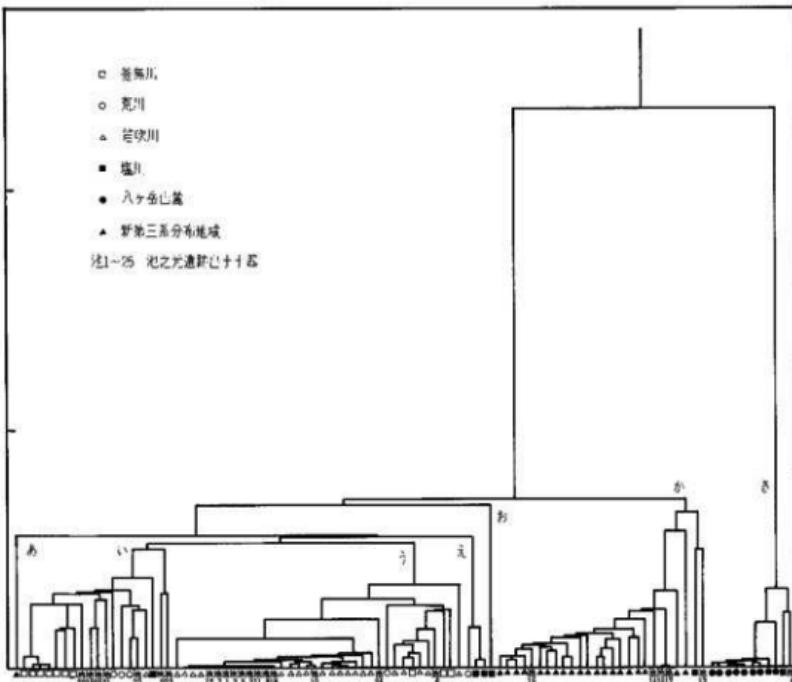
f群は、池之元遺跡No.4と古屋敷遺跡No.18が含まれる。安山岩が優勢である。

以上の分類は、折れ線グラフによる分類および古屋敷遺跡でのクラスター分析による分類とかなりよく対応している。

8. 土器の产地推定

古屋敷遺跡土器試料と池之元遺跡試料を前項で比較した。同一の分類群に属している土器は互いに产地が類似している可能性が高いと考えられる。また自然堆積物を主原料としている土器胎土によって产地を推定する場合、地質図から得られ情報だけよりも自然堆積物の組成と比較するほうがより有効と考えられる。

そこでまず富士山北東麓地域の河川砂（河西・中村、1990）との比較を前項と同様のクラスター分析で行った（第5図）。富士山北東麓の河川砂は、富士火山テラフおよび溶岩を構成する玄武岩を



第6図 甲府盆地河川砂と土器の比較

多く含んでいるため、池之元遺跡土器とは別のクラスターを形成し両者は明らかに区別される。古層遺跡の土器と同様に、池之元の土器も周辺地域の河川堆積物をそのまま原料とした可能性は低いと推定される。

次に甲府盆地（河西、1989）および八ヶ岳南麓周辺地域（河西ほか、1989）の河川砂との比較によって土器産地の推定を試みる。クラスター分析による樹形図から便宜的にあべき群の7群に分類した（第6図）。土器が属する分類群について以下に概略を述べ、産地を推定する。

い群は、Nos.9, 19, 20, 21, 22, 23, 25が含まれる。これらの試料は、前項の土器分類ではすべてがb群に、また折れ線グラフの分類ではI d・I e・II群に属している。い群には河川砂として釜無川および荒川の河川砂試料が多く含まれ、塩川の河川砂も1試料含まれる。どれも花崗岩類を含み、それ以外に泥岩・砂岩・変質火山岩類・デイサイト・安山岩など多様な岩石類を伴う。釜無川・荒川試料の多くは、甲府盆地底部西半部に広がる冲積地に位置するものである。また上流域の河川砂でも複雑な後背地質をもつ地点のものが含まれる。このように多様な岩石の混合からなる複雑な組成は、甲府盆地に限らず上流域に複雑な地質をもつ下流域の冲積層などにおいて同様な組成が予想される。い群に属する池之元遺跡試料の産地の候補のひとつとして甲府盆地西半部が考えられるが、同様の組成の堆積物が予想される他地域の検討が必要である。本遺跡付近は新第三系が分布しているが花崗岩類の分布から離れていることから、い群の土器は搬入された可能性が高い。

う群は、Nos.1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 18, 24が含まれる。これらの試料は、前項の土器分類においてもb群とされたNo.6を除くと他の11試料すべてがa群に属している。また折れ線グラフの分類ではI a・I b・I c群に属している。Nos.1, 2, 3, 5, 7, 8, 11, 12, 18はそれぞれきわめて類似性が高い。またこれらはNo.10とともに笛吹川地域の河川砂のみで構成されるクラスター中に含有される。さらにNo.24がこのクラスターに融合している。これらの河川砂は、花崗岩類の卓越と他の岩石の混入が少ないと特徴づけられており、花崗岩体からあまり大きく離れていない地点の堆積物であることがわかる。したがってNos.1, 2, 3, 5, 7, 8, 10, 11, 12, 18, 24は、花崗岩類の分布地域の周辺で製作された可能性が強く、産地の有力候補のひとつとして甲府盆地東半部笛吹川流域をあげることができる。しかし他の花崗岩体周辺地域でも同様の組成が期待されることから限定はできない。No.6は、花崗岩類に泥岩・砂岩・ホルンフェルスなどを伴っている笛吹川・釜無川河川砂試料と融合している。堆積岩層に花崗岩類が接触して分布している地域周辺が産地として想定され、また花崗岩体との距離はさほど大きなものでないと推定される。

指ナデ土器のほとんどが（Nos.10, 11, 12）がう群に含まれる。この型式土器の主体的分布は群馬県にあるようだが、胎土と土器分布について資料不足である。

Nos.1, 2, 3, 5, 7, 8は、ヘラ削り無文土器であり、本遺跡での出現率の高い主体的土器

とされている。ヘラ削り無文土器は、諏訪盆地、佐久～小諸付近の千曲川沿い、八ヶ岳南麓など八ヶ岳を周辺地域に分布するほか、本遺跡を含む桂川上流域にも認められる。特に諏訪盆地付近に濃密に分布する傾向があるようだ。桂川上流域は、同時期の下北原系土器や付加条縄文土器の分布圏との境界領域に近く、いわばヘラ削り無文土器分布域の縁辺部に位置していると考えられる。遺跡に主体的な土器を在地的と考えられるならば、Nos.1, 2, 3, 5, 7, 8は池之元遺跡に近い花崗岩体である甲府岩体や丹沢岩体地域が産地の可能性が高くなる。また同型式土器が濃密に分布する諏訪盆地にも花崗岩体が分布すること、および諏訪盆地内にある下り林遺跡出土縄文早期土器すべてが花崗岩類を多く含み同一クラスター（第4図a群）中に属していることなどから、Nos.1, 2, 3, 5, 7, 8の産地を諏訪盆地に推定することも可能である。しかし花崗岩類の細分については現在のところ困難である。どちらの場合でも遺跡地点の地質と土器胎土組成との不一致から今回の分析ではこれらの土器の在地性を証明できない。したがって群土器は本遺跡に搬入された可能性が高い。

か群は、Nos.13, 14, 15, 16, 17が含まれる。それらはすべて粗製の付加条縄文土器試料で、前項土器分類ではc群に、折れ線グラフの分類ではIV群に属している。変質火山岩類+凝灰岩で特徴づけられる。か群はまた、甲府盆地新第三系分布地域のはとんどの河川砂、および塩川（須玉町東向）の河川砂とから構成される。塩川試料の変質火山岩類は、黒富士・茅ヶ岳火山を形成している第四系の安山岩・デイサイトが風化した粒子であり、新第三系の変質火山岩類および池之元遺跡Nos.13, 14, 15, 16, 17に含まれる変質火山岩類とは異なる。したがって、土器の比較で第三系分布地域に産地が推定された古屋敷遺跡B群と類似性が高いこと、および甲府盆地新第三系分布地域の河川堆積物と同一のクラスター中に含まれることから、か群に属する土器の産地は変質火山岩類を伴う新第三系分布地域に推定される。本遺跡が新第三系地域に位置することから地質的にはこれらの土器を在地的と考えることも可能である。しかし、付加条縄文土器は本遺跡で客体的な出土状況をもち型式学的には伊豆半島に分布の中心をもつ搬入土器と推定されている。伊豆地域にも新第三系の分布が知られている。池之元遺跡よりも伊豆地域に近い愛鷹山麓の清水柳遺跡からも、変質火山岩類やデイサイトを多く含むか群と類似する土器（第4図c群）が出土しており、それらの土器も新第三系地域に産地が推定されている。また伊豆地域に分布する狩野川・河津川河川砂の重鉱物組成は、輝石・角閃石の割合において斜方輝石・单斜輝石が多く角閃石がわずかである特徴が指摘されている（増島、1990）。池之元遺跡か群土器は、不透明鉱物が優勢だが両輝石が多く角閃石がわずかである傾向が他試料と比較して顕著である。このように今回の分析結果は考古学的な推定と調和的であることから、付加条縄文土器の伊豆地域からの搬入を支持する。

き群は、No.4が含まれる。No.4は、前項土器分類f群に、折れ線グラフ分類III群に、さらに考古学的肉眼胎土分類D類に属し、分析試料中において特異な存在である。き群には、八ヶ岳南麓の河

川砂が集中し、さらに塩川上流の須玉川河川砂を含んでいる。安山岩を主体としたデイサイトを伴う点でNo.4は、塩川上流須玉川河川砂ともっとも類似性が高く、八ヶ岳南麓河川砂の組成とはやや異なる。安山岩は、新鮮で班晶として单斜輝石・斜方輝石を主体とし、ときに角閃石・カンラン石などを含む。さらに変質火山岩類および花崗岩類も伴う。河川砂のみで比較すると第6図のように明瞭に分類されるが、実際の土器で比較すると八ヶ岳南麓から茅ヶ岳山麓の遺跡において池之元遺跡No.4と類似した土器が出土している。河西ほか(1989)の分析例では、姥神遺跡Nos.10, 14, 清水端遺跡No.56, 板井南遺跡Nos.75, 76, 頭無遺跡Nos.85, 105などの縄文中期土器である。これらの土器は八ヶ岳南麓から塩川流域にかけて在地的土器と考えられている。以上のことから池之元遺跡No.4の産地の有力候補のひとつとして八ヶ岳南麓地域および塩川地域が考えられる。しかし同様な組成が予想される他の地域(例えば愛鷹山麓地域や箱根山麓地域など)の可能性も十分考慮される必要がある。

精製土器

以上の胎土分析結果から肉眼的胎土分類と岩石鉱物組成において明瞭な対応関係は認められなかった。すなわち考古学的観点から肉眼的に分類した胎土A・B・Cにおいて、同一の肉眼的胎土分類中のなかで異なる岩石組成が存在し、また異なる肉眼的胎土分類に属する土器でも例えばNo.19とNo.25、あるいはNo.18とNo.24などのように類似性が高い土器が存在するためである。また肉眼的胎土分類ごとに縄之内2式深鉢A・深鉢Bおよび注口土器を分析したが、器種と胎土の岩石組成に関して顕著な傾向性は見出せなかった。これは分析試料が各胎土分類ごとの各器種ごとに1点であることから、各分類の特徴を1試料で代表させることができて困難であるためと考えられる。

しかし精製土器の産地においては地域差があることがわかった。大きくは第4図a群・第6図でう群に分類されたNos.18, 24(以下a型)と、第4図b群・第6図c群に分類されたNos.19, 20, 21, 22, 23, 25(b型)に区別される。したがって本遺跡の他の精製土器の多くもb型の胎土をもつと推定されるが、いずれの土器も本遺跡にとっては搬入土器の可能性が強い。

また型式的に見るとNo.18が東海系土器と関係があり、他のNos.19~25は中部・東海・関東の広域に分布する土器群で型式内での形態の地域差が非常に少ないとされている。この点に関しては、No.18がa型に、No.24を除く他の精製土器がb型に属して区分されることから、土器型式と胎土との対応関係を見出せる。

粗製土器

粗製土器の型式分類と胎土の岩石鉱物組成との対応関係はかなり明瞭にとらえられる。すなわち、ヘラ削り無文土器・指ナデ土器が主として折れ線グラフによる分類のIa群によって構成されるのに対し、付加条縄文土器はすべてIV群に属している。このような粗製土器にみられる型式と胎土組成との対応関係は、粗製土器が地域的特徴を反映していることを暗示する。またあるいは単純

な地質的特徴をもち得るような局地的な産地を想定できるかもしれない。しかしヘラ削り無文土器でのNo.4(III群)No.6(Ib群)および指ナデ土器でのNo.9(II群)のように、同一型式内で胎土組成の異なる土器も存在する。同一型式を産する地域が実際は多様な後背地質をもっていると考えられる。ヘラ削り無文土器と指ナデ土器とは、胎土の区別が岩石鉱物組成からは困難である。しかし両者は型式的に明らかに異なり主体的に分布する地域も異なっていることから、おそらく異なる地域に分布する花崗岩類周辺地域において製作されたものと推定される。

精製土器と粗製土器とを比較すると、本遺跡で主体的とされるヘラ削り無文粗製土器の大部分がaう型であり、精製土器の主体を占めるbい型はヘラ削り無文土器には認められない。しかし aう型精製土器No.24は、aう型粗製土器と同じ産地から搬入された可能性も考えられる。また精製土器の主体をなすbい型は、指ナデ土器・付加条縄文土器中にはほとんど認められず、わずかに指ナデ土器No.9に認められるのみである。したがってほとんどが搬入土器から構成される池之元遺跡においては、精製土器と粗製土器との胎土は区別される傾向にあり、それぞれの産地が異なる可能性がある。

西田(1984)は市原市紙瀬原貝塚出土加曾利B2式の精製・粗製土器について胎土分析をし、肉眼・顕微鏡観察において含有岩石鉱物の差を認めるることは困難であるが、両者胎土間に粒度の差が存在することを指摘している。今回は粒度分析をしていないので粒度の相違は明らかではないが、本遺跡の精製土器の砂分含有量は粗製土器より若干少ない傾向がある。

なお八ヶ岳南麓の縄文中期遺跡において胎土からみた搬入土器の割合は約40~60%であり(河西, 1990), 本遺跡の状況と異なる。遺跡における搬入土器の占有率は、胎土分析試料の抽出法、遺跡立地地点の地質分布範囲、土器製作技法、縄文社会の変化、遺跡の性格などの要因が複雑に関与しているものと推定される。古屋敷遺跡早期第IV群土器は花崗岩類の卓越で特徴づけられ本遺跡の結果と類似する。しかし古屋敷遺跡の野島式土器は変質火山岩類を伴い在地的と考えられることから、本遺跡掘之内2式土器・古屋敷早期第IV群土器の花崗岩類卓越をもって富士山北麓地域の地域性とはいえない。搬入土器卓越が意味するところが何かは現在のところ不明であり、今後の課題である。

ま と め

池之元遺跡出土の縄文時代後期掘之内2式の精製土器。粗製土器について岩石学的手法で胎土分析を行った。その結果、池之元遺跡においてこれらの土器の多くが搬入品である可能性が高いこと、粗製土器と精製土器の胎土の違いがあること、粗製土器では型式と胎土の岩石鉱物組成とが対応がみられること、したがっていくつかの異なる産地から土器が搬入されたものと推定できることなどが明らかになった。

(1991年6月 脱稿)

追記

脱稿後、神奈川県綾瀬市上土棚遺跡から出土した壺之内2式土器と比較する機会を得た（阿部・河西、1994）。それによると池之元遺跡のNos.9, 23は、上土棚遺跡の折線グラフによる分類Vb群および桂川・笹子川との類似性が高く、池之元遺跡No.20は上土棚遺跡IV・Vc1群および笹子川との類似性が高く、それぞれ相模川以東の地域において在地的土器と予想される一群のクラスターを形成している。また池之元遺跡Nos.14, 15, 16, 17は、上土棚遺跡III群土器および新第三系が分布する丹沢山地周辺地域河川砂と類似性が高く、今回の結果と調和的である。前述の本報告では、Nos.9, 20, 23を含む一群土器の産地鉱物として甲府盆地西半部が挙げられていたが、新たに相模川以東の地域が追加されることになる。特に相模川上流の大月市内で採取した笹子川・桂川試料との類似性が高いことから、池之元遺跡とは同一水系内に属するこれらの地域からは搬入の可能性が高いことが予想される。なお相模川以東の地域には、その後の河川砂の分析により相模野台地や多摩丘陵を含めた広範な地域を含んでいる（河西、1995）。現在のところ河川砂組成かつ在地的土器胎土組成との類似性から相模川以東地域からの搬入の可能性がより高いと考えられるが、さらに甲府盆地西半部地域および大月地域での同型式土器の分析をすることで、池之元遺跡への搬入経路についての議論が今後深まることを期待したい。

引用・参考文献

- 阿部 秀郎・河西 学（1994）綾瀬市上土棚遺跡出土の縄文時代後期土器の胎土分析。綾瀬市史研究、1, 21-52。
- 河西 学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成—土器胎土分析のための基礎データー。山梨県考古学論集、II, 505-523。
- 河西 学（1990）大和田第3遺跡出土縄文土器の胎土分析。大泉村埋蔵文化財調査報告、8、「人和山第3遺跡」、19-29。
- 河西 学（1995）市兵衛谷II群土器の胎土分析。綾瀬市埋蔵文化財調査報告、4, 「市兵衛谷遺跡・新道遺跡」、89-108。
- 河西 学・樋原 功一・大村 昭三（1989）八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、1, 1-64。
- 河西 学・中村 哲也（1990）古屋敷遺跡早期第IV群土器の胎土・製作技法の特徴。富士吉田市史資料叢書、8, 98-124。
- 増島 淳（1990）静岡県東部地域における縄文土器の作製地について。沼津市博物館紀要、14, 21-47。
- 西田 泰民（1984）精製土器と粗製土器・胎土からの検討－。東京大学文学部考古学研究室研究紀要、3, 1-23。

第6節 池之元遺跡第1号住居址の施設構造

—焼失住居の調査所見からみた居住施設の「痕跡化」の過程と工法の復元—

阿部芳郎

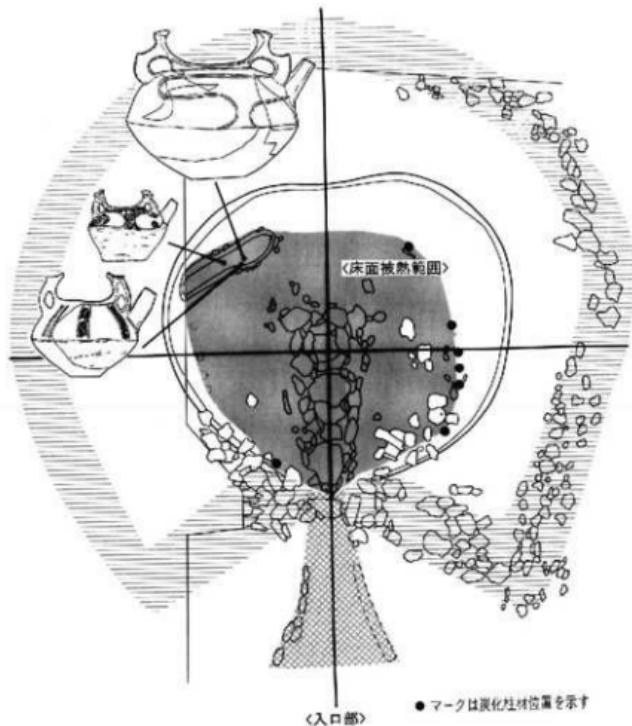
はじめに

本遺跡では縄文時代後期の生活面が火山灰に厚く覆われ、また後世の搅乱も少なく遺存の良好な状況で検出された。そうした状況の中で2軒の竪穴住居址が発見され、そのうちの第1号住居址としたものは、内側に一部の未調査部分を残すものの、全体のプランや構造が推測できる程度の面積が調査できた。またこの住居の構造について豊富な情報が得られたのは、その内部の大半が焼失した状態で遺存していたからである。住居の床面付近は多くの木炭を含む層により覆われており、なかには炭化材がそのままの形状をとどめて検出された部分もあった。こうした状況が察知されたのは、1次調査で住居の炉址を中心とした床面が検出できたからである。この住居の完全な調査を目的的ひとつとした2次調査では、焼失の状況や住居施設の構造を明らかにする目的で、覆土の分層発掘を行い床面の炭化材の状況や敷石の詳細な記録を残した。

その結果、本住居が柄鏡形敷石住居と呼ばれる中期末葉から後期中葉の時期にみられる特徴的な住居施設であること、そして今までにあまり知られていなかった施設を併せもつことが明らかになった。この事実はより慎重な言い方をするならば、通常の腐朽・埋没状態では殆ど残ることのない情報が、住居の焼失とその後の良好な埋没状態のなかで「痕跡化」していた、といった方が適切かもしれない。小論では調査の時点で得られた記録や所見をもとにして住居施設を構成する諸構造の復元をおこない、この時期の住居施設の特徴について検討を加えてみたい。

1 池之元遺跡第1号住居址の調査所見

本住居址は一部の貼り床の掘り下げにより、床下に2基の炉址を検出している。そのうちの1基は堀之内2式の深鉢の胸部下半を埋設したものであって、この地点に反復して住居が構築された事實を示している。^(註1) 今回は調査の性格上、遺構の保存が計画されていたため、床下の炉址にともなう調査を実施していない。したがって本論で分析の対象とするのは、3度目に構築された住居の検討にのみ限定されることになる。



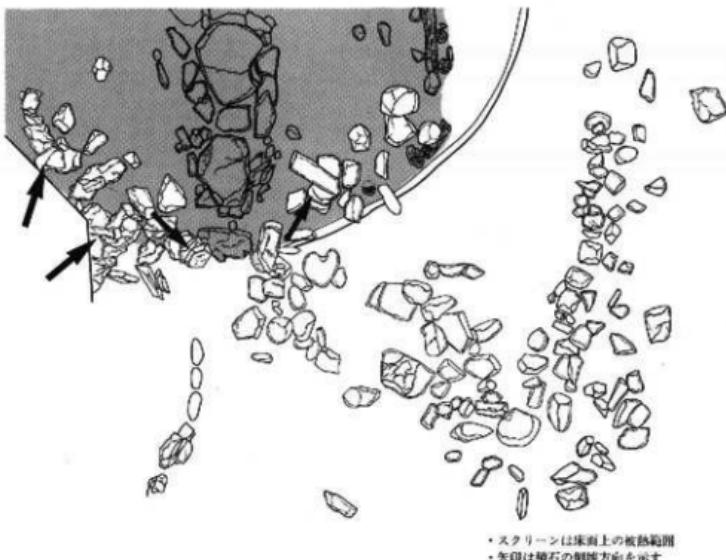
第1図 池之元遺跡第1号住居実測図(1/80)

(1) 住居焼失面の状態(第1図)

本住居が焼失住居であることが確認されたのは、住居内の覆土を掘り下げて、床面に達した時点であった。また住居の入口部から炉址を結ぶ位置には平板な平石が敷かれていたが、上面の所々には被熱により板状に剥落している部分がある。そして剝離した石はほぼ原位置を保ち、周辺に散在していた。住居の覆土の土層の乱れは殆ど認められず、自然堆積の状況を示しており、覆土には木炭や焼土等は全くといって良いほど含まれていなかった。こうしたことから、本住居址は焼失後に床面が殆ど乱されることなく埋没したということがわかる。

石敷部分以外は汚れた褐色の粘質土で床面が作られており、最上面には大粒の炭化物や木材の一部が飛散したと思われる炭化材片が検出された。こうした炭化物の接する土の床面は赤く焼けている部分が多いが、それは意外に薄く、数ミリ程度のものであった。

またこの焼けた面は、炉址を中心とした径3mほどの範囲に限られていた。そして特に東側の焼



第2図 入口部付近における積石の倒壊状態

失面の限界付近には、計6本の炭化した木材が床面から約10cmほど樹立した状態で発見された。また炭化した柱材の遺存しない部分の柱穴の検出は、暗褐色を呈する床面の色調や性状から、充分に明らかにし得なかった。

このことは後述するように、本住居址が度重なる床面の作り替えによって貼り床をおこなったため、全体の床面の土質が乱れることとも関係している。ただ炭化材の遺存の良好な東側の柱の配列から、約40~60cmの間隔で柱が配置されたものと推測される。この推測は、堀之内2式の時期^(註3)の住居の柱穴の配列状況と良く一致している点からも支持できる。各々の柱材の間には板材が横に渡されており、床面の焼失面のひろがりは、この柱列の内側にはほぼ限定されるものであった。

焼失面の上には住居の入口部分から、南側にかけて板石や角礫が積み上げられたものが住居内部に倒れ込む状況で検出された。これらの石材は焼失面との間に約5cmほどの間層をはさみ、また石材の表面には被熱の痕跡が認められないから、焼失後に内部に転落したものと判断できる(第3図)。

(2) 遺物の出土状況

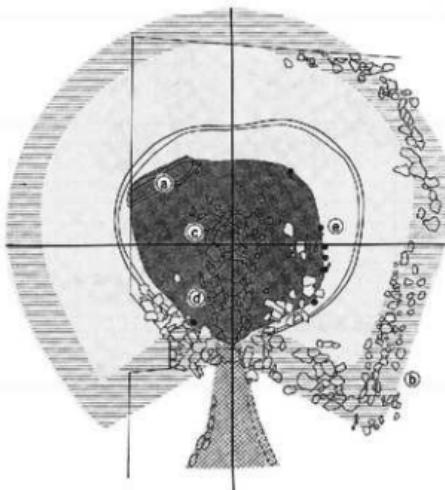
床面から出土した遺物は、焼失時点で存在した位置関係をそのままに残したものと考えられる。住居の奥壁付近に掘り込まれた浅い溝状の施設の中には3点の注口土器が発見された(第3図)。もっとも小形の1点はほぼ完形で出土し、大形の1点は破片になっていたが、土圧で潰れた状態で



④奥壁付近における注口土器の出土状況



⑤東側屋外の周堤樋検出状況



⑥炉址の発掘状況

(礫岩地によって石画炉を作り、周囲に平石を敷いた
表面を作りだしている。炉邊の平石の上面には、右
斜面と同様の溝を作り出して作業台としている。)



⑦入口部敷石脇における遺物出土状況
(磨石と石棒および磨礫石原石の出土状況。いずれ
も被熱している。)



⑧炭化した柱材と板材の検出状況
(約90cm間隔で柱材が嵌立し、さらに相互を板材によって連結
している。)

第3図 遺物の出土状況と各施設の検出状況

はなく、大形の破片となったものが、内面を上にして折り重なる状況が観察できた。他の1点は縦に割れたもので、完形には復元できなかった。大形の個体は破片の一部が二次焼成のために赤化していた。このほかに有段部分に小形の輪形土器が1点発見された。口縁部は一部破損しているが、被熱の痕跡は不明瞭である。

土器以外の遺物は入口付近の敷石脇から磨石4点と黒曜石原石2点が浅い掘り込みの中にまとまって発見されたもので、磨石はいずれも床面に接した部分に煤が付着して黒色を呈している。

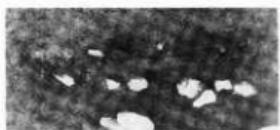
これらの遺物のなかで、3点の注口土器と、磨石と黒曜石原石は焼失部分の中に位置し部分的に被熱痕が認められるので、焼失時点での同時性を示す状況と捉えられる。また有段部分の輪形土器は段部施設の直上に発見された。

2 施設の遺存状況とその構造

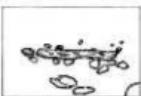
通常の縄文時代の住居は、居住活動の主体的空間としての床や炉址を含む内部構造と、それを覆う上屋構造に区分できる。そして上屋や壁が地上に接触する部分に、それらを補強、保護する施設^(註4)の存在が考えられる。これを「屋外付帯施設」と呼称して調査所見を整理してみよう。

(1) 屋内施設の構造

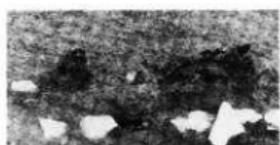
a 炭化材の遺存状況と配置 住居の床面で検出された炭化材は、壁の立ち上がりよりも80~



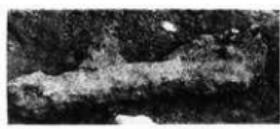
④炭化した柱穴と板材および捕獲網検出状況



100cmほど内側の部分に配列された柱材と、それを結ぶようにして横に渡された板材であった。またその位置はちょうど床面の焼失範囲の限界に対応している(第3図)。



⑤樹立した柱材と横に渡された板材



⑥柱材と板材の振り下げ状況



この他には奥壁の溝状施設に近接して約40cm四方の分厚い板材が床面に接して検出された。柱材と板材の遺存状況は比較的良好で、柱材は床面から10cmほど樹立した状況で検出されたものであり、焼失時点における上屋の倒壊方向を示すものか、それらはいずれも西側に若干傾いていた。

住居プランのなかで、柱材の検出された位置は、この時期の多くの堅穴住居に見られるような、壁際に柱穴が配置される構造(壁柱穴)とは異なるものである。またこの柱穴にはそれぞれを結ぶようにして板材

第4図 柱材と板材の検出状況

が巡らされており、焼失した床面と板材の残存部上端とのあいだに約10cmほどの段差を作り出している。板材の下面や柱材と板材の連結部分の各所には土器破片や礫などが込められており、一部には被熱痕跡を顯著に残すものも見られた。これらの炭化材は膠着材を浸透させて取り上げたが板材と柱材は相互に接触し殆ど間隙が認められなかった(第4図C)。こうした状況から、本住居址は壁際よりいくぶん内側に柱列を配し、その柱を連結するようにして板材を渡して、意図的に有段部を作るという特徴的な構造が復元できる。

また同時にこの有段部分に複数の土層セクションを残して、その断面を観察したが、覆土に乱れではなく各所で自然堆積の状況を確認した。床面の焼失部分には薄い焼土が堆積していたが、各所とともに板材の立てられた部分から立ち上がって、次第にその厚さを減じて消失していた。これは焼失の時点での部分が一段高くなっていた事実を示すとともに、有段部分が焼失時点では被熱を受けなかったことを暗示している(第3図)。

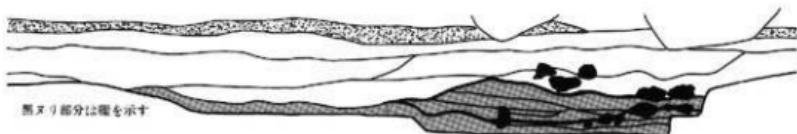
b 磁石の状態 床面の構造は石敷部分と土床部分に区分される。調査時点で貼り床の存在に気付かず、石敷のレベルよりも掘り下げてしまった部分が若干あるが、本来は石敷のレベルと同一の土床であった。炉址は耐熱性の高い4個の滑岩塊を使用しており、他は偏平な平石を利用している。また炉址と入口をつなぐ石敷の両端には小形の自然石を直線状に配し、区画を明瞭にしており、規格性が高い。

そして炉址の南側に近接した大形の平石には、石皿様の窓みが設けられており、敷石自体が石皿の機能を果たしていたものと考えられる。この他に奥壁付近の施設としては、西寄りの奥壁部に浅い溝状の掘り込みが確認され、とくに溝の東端には小礫を溝の縁に配していた。溝の内部には炭化物を多く含む薄層が堆積しており、その上またはこの層に入り込む状態で3個体の注口土器が出土した。前述した出土状況から、おそらくこの溝は注口土器を保管・収納する施設であったものと考えられるが、浅い溝の周間に小礫を巡らせるのみでは区画の機能に乏しい。おそらく本来は板材等の有機質の素材によって区画された施設であったものと想像され、そうであるならば、小礫は有段部分と同様に補強材として用いられたと考えるのが妥当であろう。

(2) 屋外付帯施設の問題

本住居址の調査の際に、住居の掘り込みの周囲を取り巻くようにして、大小の礫が巡らされている状況が観察された。しかも注意されるのは第1号住居址の西側に発見された第3号住居址にも同様の礫帯が認められ、両者は調査区の北側付近で重複しており、その重複部分に間層が存在し、そこには第1号住居址から3号住居址という時間的な前後関係が認められたことである。

これらの配石列はともに第1・3号住居址の床面よりも高く、またいずれも住居の背面である北側に向かって最も高く巡る状態が想定できた。これはこの地点の地形が南北に傾斜をもつ状況と一致しており、ほぼ水平に構築された住居址の床面と対照的である。この配石列の機能を問題とするとき、



第5図 調査区北壁における周堤部分セクション（スクリーン部分）

これが住居と同時に存在したものか、あるいは時間を異にした施設であるのかが重要な問題となる。調査区北面の土層堆積の観察によると、この疊帶の下の盛り上がりは、黒色土と褐色土の互層によるもので、人工的な堆積状況が観察できた（第5図）。疊帶はその上部付近から、当時の盛り上がりのある地表付近に一部が露出していたことが想定される。住居内の埋没土に亂れが観察できなかったので、この疊帶をもつ盛土は、少なくとも、この住居を埋めた覆土の掘りあげによるものではない。決定的な根拠は調査所見からは得られなかったが、この施設が第1号住居址と第3号住居址のそれぞれに設けられていたことや、この重複状況が住居の新旧関係（第1号→第3号）に対応していることを考え併せると、2軒の住居には本来は疊帶を伴う土手状の高まりが周間に巡らされていた状況が想定され、土手の外縁を巡る疊帶は、土留め等の役割を果たした周堤施設の一部であったものと推察される。こうした推測からこれらの配石を「周堤疊」（註5）と呼称しておこう。

3 住居施設の工法と施設の「痕跡化」

池之元遺跡の住居址の調査記録で確認した屋内および周囲の付帯施設は、検出された状態や素材のみからでは、当時の施設そのものの構造や特質を判断するのは難しい。また縄文時代の遺構の性格論のなかには、石を用いると特殊性が付与されるという奇妙な傾向がある。たしかに配石遺構などは、腐朽することもなく当時の状態をほぼそのままに伝える情報を多くもつが、調査者の視覚に映るもののみで配石遺構等に、ことさら特殊性を指摘するのは客観的な論議とはいえない。むしろ山岳地帯では石材自体の確保は、加工材などよりもはるかに容易であるし、また逆に同様の構造をもつ施設も石材の乏しい地域では、木材などによる用材を用いることによって容易に構築が可能であつただろう。重要なのは仮説の提出と運動した仮説の検証あるいは反証であろう。

事実今まで検討してきたように、池之元遺跡では疊の利用とともに木材を用いた施設が焼失によって痕跡化していた。ここではこうした諸施設の痕跡をもとにして、本来の施設の構造を推測してゆく。その際に、ここで扱ういくつかの「痕跡」の中には住居施設とは別の構築時期と機能をもつ遺構として把握されているものも含んでいる。ここでは、そうした「痕跡」の理解にはそこから復元される施設の「材質」と「工法」という観点から検討を加えることにする。

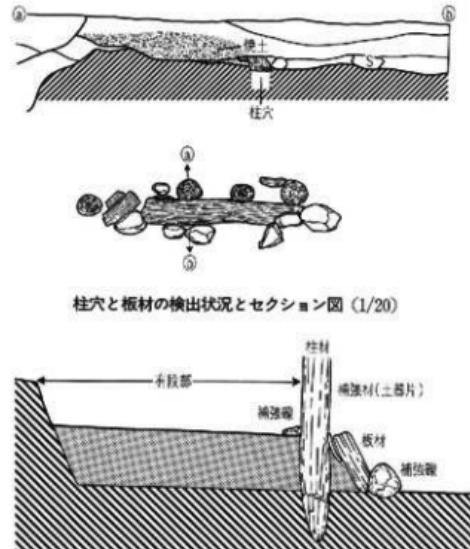
(1) 「有段施設」の痕跡と工法の諸例

小論で有段施設と呼称する遺構は、住居内の壁に沿って設けられた床面よりも高い段状の施設の

痕跡で、主に入口を除いた周囲の壁を巡るものである。池之元遺跡第1号住居址では住居の掘り込みよりも約80cmほど内側に入って円形に配された柱穴列の間を結ぶようにして板材を巡らせて床面との区画を行っている。板材によって区画された有段部には、おそらく黒色土が充填されていたものと思われる。また有段部の補強のために床と板との間や、板と柱の裏込め等に拳大の礫や土器破片を用いている。これを当該施設の「補強材」と呼称しよう。

池之元遺跡の有段施設の痕跡は、焼失によって柱材や板材の一部が残存したために、こうした構造が復元できたわけであるが、この様な痕跡化の過程を示す事例はむしろ例外的であり、通常は板材や柱材は抜き取られるか腐朽してしまうものである。そうした際に「モノ」として残るのは、むしろこの施設の主体的な構築材ではなく、補強材とした礫や土器片のみとなるはずである。

第6図に池之元遺跡の有段施設の復元断面図を示したが、とくに床面と補強材としての土器片や礫の位置に注意すべきであろう。この施設の木材が腐朽すると、一部の補強材と床面の位置関係は垂直レベルに差をもつことになり、これを不用意に〔礫は床面よりも浮いている〕＝〔礫は住居よりも新しい〕と図式的に理解することが誤りであることは明白である。池之元遺跡第1号住居址では、有段施設内部の土質と覆土のそれに殆ど区別がつけられなかったという事実からみても、板材が腐朽した場合、有段施設の存在を土層セクションのみから判断するのは、後に指摘するやや特殊



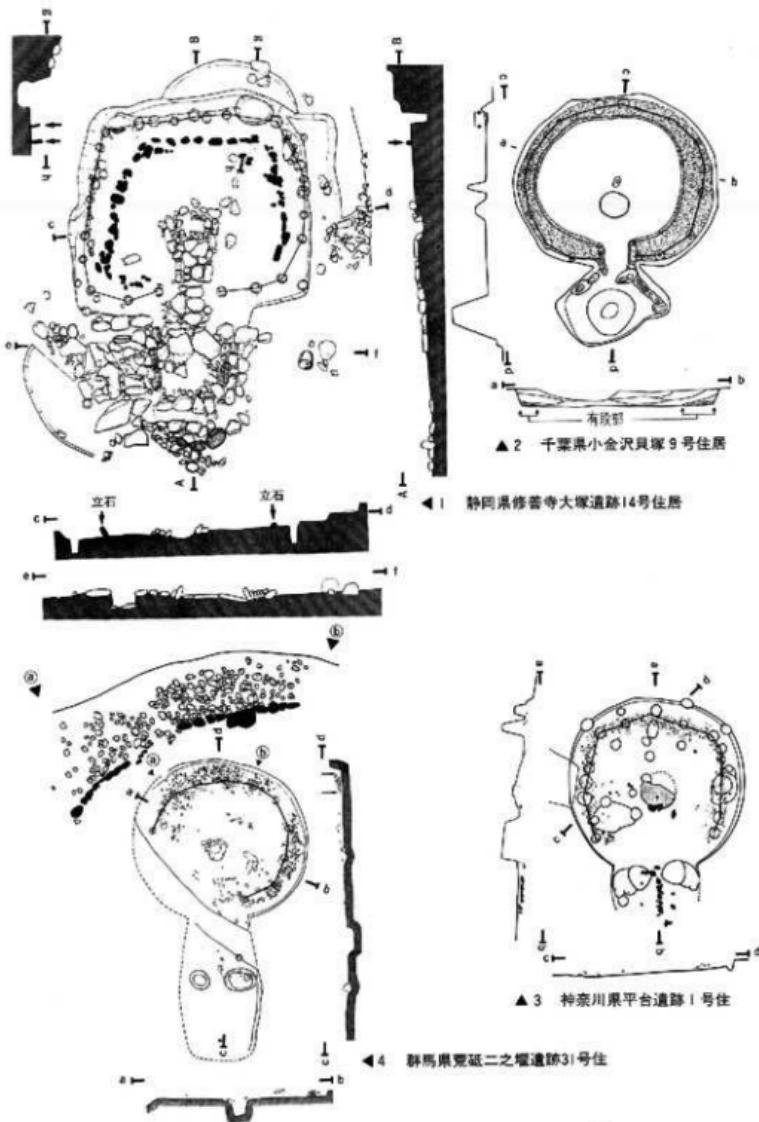
柱穴と板材の検出状況とセクション図(1/20)

第6図 有段施設の構造模式

な例を除くと難しいと思われる。

しかし反対に、こうした施設の構造と「痕跡化」のシステムを理解することによって、同様の施設が各地の縄文時代住居のなかに存在した可能性を、住居埋没過程における儀礼的な痕跡とされるある種の遺構の存在を再検討するかたちで指摘すること^(註6)ともできる。ここでは縄文時代後期前葉の住居の構造を理解するためにいくつかの類例について検討してみよう。

図示した4例はいずれも後期前葉の住居であるとともに、それぞれ特徴ある「有段施設」の痕跡が観察されるものである。しかし、それぞれの工法や用いられる用材は異なる。



第7図 後期前葉における有段施設の諸例（各報文に加筆）

とくに工法の面で注意されるのは、池之元遺跡第1号住居址では有段部を区画する板材と上屋を支える柱が一体となる構造上の特徴が指摘できる。これを「柱列一体型有段部」と呼称しよう。これに対して第7図1の修善寺大塚遺跡第14号住居址や同図2の千葉県小金沢貝塚9号住居址などでは柱列が壁際に並ぶようにして配列されており、その内部に約50cmの間隔をおいて有段施設の区画部分が設けられている。この有段施設は柱列を結ぶラインよりも内側に有段部の区画ラインが設定され、柱列とは明らかに分離した工法をとるもので「独立型有段部」と呼称できるものである。

つぎに有段施設の用材について観察すると、1は板状または大形の礫を床面に接して立てて設置している点から補強材よりも、むしろ板材と同様にして石材を用いたものと推測できる。

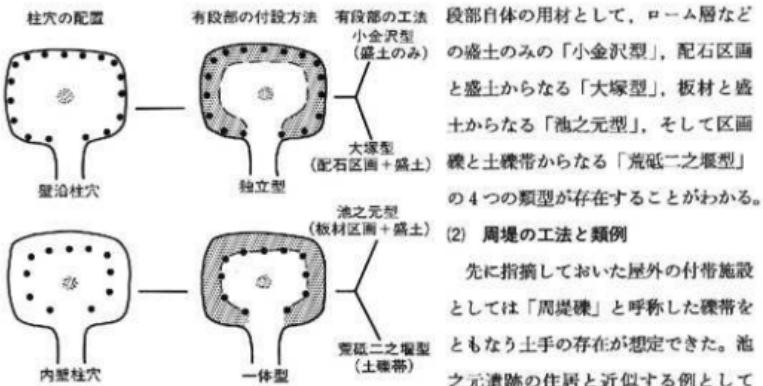
2の小金沢貝塚例はローム層を盛り土して設けられたもので、有段部の住居内での位置関係は他例と良く一致しており、柱列と有段部との関係は、1の修善寺大塚例と同様に「独立型有段部」の工法に分類されるものである。

3の神奈川県平台遺跡例は加曾利B1式期のもので、柱列を結ぶライン上を中心に小礫が配され、柱列一体型有段部の工法で小礫を補強材として用いたものと考えられる。しかし報告者は小礫が床面よりも浮上した位置にあることなどから、埋没後の施設として「方形配礫遺構」として報告^(註5)している。これは後述する荒砥二之瀬遺跡例と同様の構造のものと考えられる。

4は群馬県荒砥二之瀬遺跡第31号住居址である。後期初頭の称名寺I式期のものである。柱列のラインより外側に小礫が密集しており、「径5cm前後の小礫（土器片や石器を含む）と土とを混合して、床面から高さ20~40cm、幅50cm前後の規模で盛り上げられ、各柱穴の配列とはほぼ同一の位置を帯状にめぐるもの」、これを周縁部環礫（周礫）と呼称して住居施設の一部と指摘している（石坂1985）。図示した住居の周礫は段の区画部分に礫を規則的に配しているので、正確にはこれを「区画礫」と区分した方が良いであろう。またこの時期の住居構造を研究している都築忠美子氏も住居との同時性を住居内の位置関係や検出状態の検討から総合的に検証し、同様の見解を示している（都築1990他）。ここでは、その用材が小礫と土を混合した特徴から「土礫帯」と呼称し、有段施設の用材のバラエティーの一例として理解してみたい。

以上の諸例を比較整理すると、第8図に示したように、有段部のあり方は、まず柱列の配置によって二分される。これは一般に指摘される主柱穴：壁柱穴といった漠然とした区分では捕捉できない類型であり、ここでは壁に密着または近接して巡るものを「壁沿柱穴」と仮称する。この柱穴配置をもつものは、有段施設の工法が「独立型有段部」になる。これに対して、壁よりも幾分（おそらくは有段部の幅だけ）内部に柱列が配置されるものがある。これには池之元遺跡第1号住居址をはじめとして、荒砥二之瀬遺跡第31号住居址例などがある。

以上をまとめると有段部の工法には柱列との位置関係より、「独立型有段部」と「柱列一体型有段部」の構造上の差異が指摘できる。そしてその工法を例示した遺跡名を代表させて類型化すると有



第8図 柱穴配置と有段部構造の諸類型

参考になる（第9図）。報告書ではこの配石を含めて「配石圍繞円形堅穴家屋址」と呼称されている。入口部分には5本の立石をともなう配石があり、石列はここに連結している。また壁を取り巻くようにして巡らされた石列は「共に先端が内側を向いて主体部を取り囲んで」おり、「主体部掘り込み面との高低差は20cmほどで」あったという（小野1982）。そして住居断面図を見るかぎり、明らかにこの部分の地表が高くなっていることに気づく。おそらく列石が住居を取り囲むように傾くのは、土盛の崩壊を防ぐ目的で意図的に配したものと考えられる。

修善寺大塚遺跡では中期後半から後期前葉までの住居址が検出されているが、周堤礎をもつものは第9号住居址の一軒のみであった。こうした事実から、この時期の集落を構成するすべての住居に付帯する施設ではなかったようである。またこれと同様の施設の存在を想像させるために、住居の周囲を巡る屋外柱穴がある。おそらく石材の乏しい地域で、木材を主に用い、杭列とそれを結ぶようにして板材などで土留めをおこなって周堤を構築したことが推測できるが、そのことを積極的に証明することのできる遺構や調査所見はいまのところ無いようであり、今後こうした視点からの（註6）目的をもった精査と検証が必要である。第9号住居内の配石は入口部から炉址を結んだラインに限られる一方で、入口部を取り込んだ前庭部分に平坦な敷石面が用意されている。さらにここに連結するかたちで住居プランを囲む様にして「周堤礎」が巡る。とくに入口部には向かって左3本、右には2本の石柱が樹立しており、さながら門柱状を呈する。さらにこのうちの1本の下から逆位の埋甕（堀之内式）が出土している。

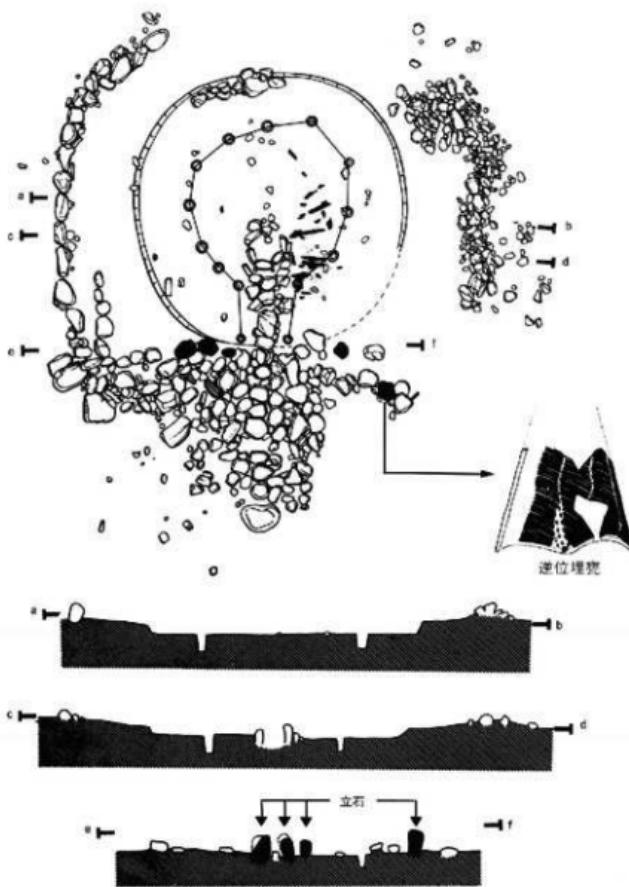
4 池之元遺跡の「住居址」における石材利用の施設と性格

今回の調査により検出された「住居址」とそれに関係をもつ石材利用は、大きく分けて住居自体

段部自体の用材として、ローム層などの盛土のみの「小金沢型」、配石区画と盛土からなる「大塚型」、板材と盛土からなる「池之元型」、そして区画縁と土礎帶からなる「荒砥二之堀型」の4つの類型が存在することがわかる。

(2) 周堤の工法と類例

先に指摘しておいた屋外の付帯施設としては「周堤礎」と呼称した礎帶とともになう土手の存在が想定できた。池之元遺跡の住居と近似する例としては、修善寺大塚遺跡の第9号住居址が



第9図 静岡県修善寺大塚遺跡第9号住居

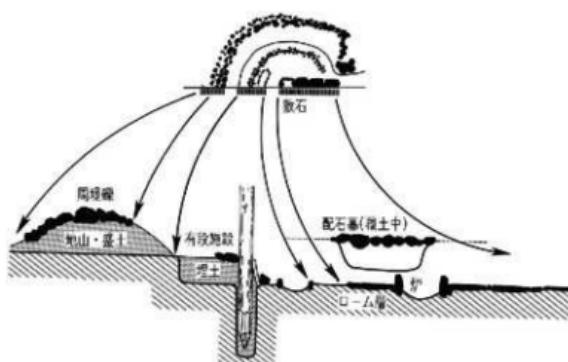
の施設の一部に用いられたものと、住居が廃絶された後の住居の凹地（意図的な占地と思われる）を利用した施設に大別できる。後者は本論で取り上げることはなかったが、事実記載で詳細を記した第3号住居址の覆土中の配石墓などである。

前者については、床面の一部に敷きつめられた敷石や「有段施設」の補強材と区画礫以外にも注口土器を収納する溝状造構の補強材や住居内の「周堤礫」など、実に多様な施設の構築に石材が用いられている状況が復元できた。

第10図にそうした諸施設の位置関係を模式化した。重要な点はこうした位置関係は、実際の調査

の時点で検出レベルの差として現れるのであるが、そのことのみで住居の床面から浮上した石材やそれに伴う施設が、住居の使用時よりも後出することを示してはいないということである。とくに本論でその検出状況から復元した「有段施設」や周堤とともに「周堤礎」などは、大半が住居の周囲の土をそのまま用いて構築した施設であるために、土質の判別のみからでは施設の構造やその存在自体を知ることは難しい。床面から浮上した石の配列のみを評価点とした場合、廃屋を利用した配石遺構と誤認する危険性が十分に予測できる。また各施設における石材の利用方法や石材の石質や形状は、それぞれに特徴をもつもので、それは諸施設の構造と工法および、用材調達方法の個性を反映したものといえよう。

5 住居構造からみた池之元遺跡第1号住居址の性格



第10図 池之元遺跡の「住居址」における石材利用の施設と性格

今までの検討によつて、調査時点での記録や所見をもとに復元できた住居の構造は後期前業に屋内いわゆる「ベッド状遺構」と呼称される有段施設をもち、住居の周辺に礎による土壠を施した周堤をもつというものであった。

宮本長二郎によれば、縄文時代のベッド状遺構は北海道の南部～東北地方北部から北陸地方にかけての前期から中期に存在し、後・晩期の例は無いという（宮本1990）。すくなくとも宮本の定義による「周壁に沿って幅50～100cm、高さ10～20cmほどの上面水平な土壠状の遺構をいう」（宮本、前掲）という定義に従うならば、本論で「有段施設」とした施設はベッド状遺構の範疇で捉えられる条件を十分に満たしている。

ところが、それらはいくつかの類似例の検討を通して明らかにしたように、その大半が通常の状態では、遺構として痕跡化しにくい材質や構造をもつものであった。有段施設の多くは有機質の木材等を用いたもので作られていたため、その多くは土中に柱材などとともに腐朽し、また土壠は埋没上と多くは区分が難しいのである（第10図）。

そして通常の調査の段階でもっとも確認されやすい痕跡は、礎や不要となった土器破片や石器片を用いた補強材であった。しかしそうした中でも各地の住居址のなかには、ローム層を盛り上げ、

礎で土壇を区画・補強したりして有段部を作るものがあった。こうした状況は、少なくともこの時期の関東から中部地方にかけて有段施設をもつ住居が分布していたことを示すばかりでなく、そうした施設を作る際にいくつかの工法の違いがあったことを示唆するのである。

さて、池之元遺跡第1号住居址はこうした有段施設をもつ特徴的な構造であるということが、調査の所見や記録から推測されたわけであるが、住居の周囲には周堤礎を巡らせるという特徴を併せもつものであった。しかもこの周堤礎は入口部の敷石と連結し、入口部の両側に積み石をもつ構造に復元できた。同様の構造をもつ類例として掲げた静岡県修善寺大塚遺跡第9号住居址では、入口の両側に立石をもつ。おそらく住居の周囲を巡る周堤が入口の張出部分の石組に連結し、その部分に大形の石を門柱のようにして配したのであろう。こうした「住居付帯施設」は居住活動における合理性や利便性という点よりも、集落内部における集団構成において、この住居の社会的な側面を表徴する施設であると考える必要もある。修善寺大塚遺跡では、このうちの1個の立石の下に逆位の埋甕を埋置していた点から、この部分が単なる周堤の延長ではなく、集落内部における住居施設や住人の性格を象徴した門柱のような施設(シンボル)^(註7)のひとつであった、を考えることもできる。

従来より住居の構造といえば、床面の平面プランや柱の配置、上屋の形状等が問題とされてきた。これらの研究の成果は、確実に縄文時代住居の分類の体系を形づくりつつあるが、そうした認識を前提にして、これに住居内の諸施設の分析を加え、さらに一集落内における住居構造の構成状態などの検討を経ることにより、居住集団の社会的な機能の復元にまで居住施設研究を昇華し得る展望が開かれるであろう。

後期の堅穴住居の特徴は、中期に主流であった「主柱穴」から「壁柱穴」へと変遷するという指摘がなされてから久しい。しかし本論で指摘した「柱列一体型有段部」の住居の柱の配置は、仮に「内壁柱穴」と呼称したように決して壁柱穴という定義にそぐわしいものとはいえない。中期の主柱穴よりも柱が細く、代わりに本数が増加するという流れのなかにありながらも、柱の位置は有段部の構造と一体化するために、壁際よりもかなり内側に配置される結果となっている。柱の配置が住居型式の分類で重要視されるのであれば、「内壁柱穴」は住居型式の区分の指標としても無視できない特徴である。そして修善寺大塚遺跡などでは、「内壁柱穴」の住居と「壁沿柱穴」の住居が、遺跡内においても共存している状況が捉えられる。とくに「内壁柱穴」には先述の周堤礎と入口部に立石を併せもっている点は構造を界にする住居の併存を示唆し、さらに両者の差異の示すところに集団構造上の特質が潜むするかのようである。

しかしそれとても、ある期間にわたる集落の難統性のなかで様々な様相の変化が伴うであろう。「内壁柱穴」は有段施設を当初より計画的に配する意図が推測できるし、これと反対に柱列と分離した「独立型有段部」は内壁柱穴構造に新たに有段部施設を増築する際に生じる可能性がもっとも高い構造である。やや踏み込んだ想像をすると、通常の住居が居住活動の経過のなかで有段部を必

要とする性格に変化したことさえ推測させる。集落の内部における居住者の役割や性格の移り変わりに伴って、居住施設の構造や規模、さらには所持品が変化することは、それほど事実とかけ離れた推測ではないだろう。

遺跡内における複数の住居型式の共存という現象には、たとえば異なる地域からの伝播や集団の移住や、こまかに時間的な変化の累積、同一の集団内の居住施設の機能や性格の違いなど、いくつかの要因が考えられる。修善寺大塚遺跡では時間的な差異よりは、ことなる構造の住居の共存の可能性が有力であるし、加えて「内壁柱穴」のみから構成される集落や地域はいまのところ認められない点は、こうした推測を支持するであろう。より多くの資料の分析を経なくてはならないが、筆者は同一の地域伝統のなかで構成される縄文時代集落のなかにも、構造の異なる住居が共存する可能性は高いものと考えている。

施設の構造や住居単位での生活用具の保有形態の違いが、集落内の個々の住居の機能や性格をある程度反映するものと考えれば、そこには当然、集落を営む集団の構成が反映されるはずである。住居の型式やその編成には、個々の居住者の出自の違い、集団内における性格や役割の変化等にもなう改築や増築等の多様な要因が深く関係する。こうした現象を痕跡化した「住居址」からいかに復元してゆくか、池之元遺跡第1号住居址の構造復元作業の継続と、経験的な判断の前提条件からは開放され、想定される状況を感知する視点と調査方法の開拓が今後のもうひとつの課題となる。

なお本論は調査の記録と所見から池之元遺跡第1号住居址の構造を復元することが第一の目的で、それに付随する諸々の施設の痕跡化の過程や検出状況に注目した。本論で指摘したいくつかの施設の構造や痕跡のなかには、住居とは別の施設として認識されている「環状方形配石遺構」や、廐屋儀礼などに含めて扱われている痕跡もある。本来ならばこうした痕跡に対する研究や指摘を十分に吟味した総合的な検討と解釈が必要であるが、今回は敢えて割愛した。別論にてこうした観点の研究を準備し、そのなかで池之元遺跡で得られた成果について再び検討する計画をもつからである。

なお、本論であつかった事象の理解や資料分析については整理作業の時点でも中村哲也、佐藤啓の両氏からの助言が参考になった。文末に記すとともに感謝申し上げたい。
(1992年11月)

追記

小論を執筆してから5年あまりの時間が経過し、その間に敷石住居址に関する発見や研究も進展^(註a)がみられた。筆者がかつて分析した当初、池之元遺跡第1号住居址において予見したものは、縄文集落における集団構成が単純・平板ではないという点を、生業の特殊化や特定遺物の集中的な保有^(註b)形態などから導き、それらが集落内部での住居施設の配置や構成といかにかかわるかという場合、居住施設の構造や構築技術等の詳細な検討がその前提的な作業になるという、ごく当たり前の〈遺

構-施設構造復元〉への道程であった。

しかしながら、こうした視点に立った場合、敷石住居址などにおける「特殊性-日常性」や、同年代の住居群における「住居型式の同質性」などの判断や評価がいかに観念的であったかということを痛感したし、共有されるべき科学的認識や、論点を欠いた「縄文集落觀」がそこに横たわることに気がついた。

池之元遺跡第1号住居址の復元の目的は、一集落を構成する堅穴住居に見える「異構造施設群の年代的共存」を前提にした単純ではない縄文集団の復元であり、ひとり堅穴住居の個別的分析ではなかった。そうした観点から想定した住居構造については、1992年に筆者の基本設計による模型復元の計画が総トータルメディアにより実施され、1993年に富士吉田市歴史民俗博物館に復元模型として展示されることになった（巻頭写真1、2）。

「付帯施設」「周堤礎」「有段施設」「独立型有段部」「柱列一体型有段部」等の鍵語的な用語も1991年に実施した遺構の分析と復元作業の際に命名したものであることを明記しておきたい。

なお筆者の縄文時代集落の認識は、遺跡に残された動産、不動産の復元を基礎とした前提をもち、例えば住居や住居群、さらに貯蔵穴などの規模や形態、分布という現象の表面的な側面ではない。具体的には「集落の大きさや、居住施設の痕跡といった現象面の理解にのみ論点が置かれている限り、集落研究から生業研究へ光をあてる新たな展望をもつ研究の進展には、なおいくらかの時間を必要とするであろう。すくなくともそこに居住した集団の生産活動が、そこ（集落）で營まれた生業活動の実態の復元を通して施設や道具の構成と、生業活動の関係においても合理性を求め得るかという点が最大の問題であろう」（カッコ内筆者補足）と指摘したように、生産と消費という運動法則の上に位置づけられるべき社会的装置としての「縄文集落」の意義の解明に第一の目的を置いていたことを記憶しておきたい。

（1997年2月）

=追記部分註=

- 註a 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』第5号 縄文時代文化研究会
註b 阿部芳郎 1987 「縄文中期における石器の集中保有化と集団狩猟編成について」『貝塚博物館紀要』14号 千葉市加曾利貝塚博物館、1991「狩猟具としての石器」『季刊考古学』35号 雄山閣
註c 阿部芳郎 1995 「縄文時代の生業-生産組織と社会構造-」『展望考古学』考古学研究会40周年記念論集

本文中註

註1 第1号住居址は屢々の上部に殆ど遺物を含まず、大形のスコリアを主体にした土層が堆積していた。当該地域の火山性堆積物で「デカスコ」と俗称されるスコリアに相当する。またさらに上位では大室スコリアの堆積が良好な状況で確認でき、その状況によるならば、住居内部が未だ凹地の段階で降下していることが観察できた。これらの層を乱す部分は確認できなかった点からも、本遺構の遺存状況の良好な状態が確

認できる。

- 註2 貼床下の2基の炉址の周囲には石畳などの施設は認められず、また「石抜き」の痕跡を確認できなかった。
- 註3 柱の本数と配列は一般に中期終末から後期にかけて指摘される主柱穴から壁柱穴への変遷と運動しており、後期ではその本数を多くして、30~50cm程の間隔をおいて壁の付近をめぐるように配置される。池之元遺跡第1号住居址の柱材の間隔も遺存の良好な部分では50~60cmの間隔で巡らされている。
- 註4 小説で「屋外付帯施設」と呼称する施設は基本的に住居の構造上、屋外における構造物の支持を目的とする施設と、そうした建築物としての住居構造には直接的には係わらない入口部の門などの施設やある主の作業空間や、埋蔵などを配置、埋納、安置する儀礼的空間における諸施設、装置等の二者を含む。
- 註5 壁穴住居の埋没過程における遺物の理解には廃棄や埋納、安置などの諸行為が関係することが予測されているが、その議論のなかには住居施設の構造上で遺構という痕跡化の過程のなかで、木米は住居施設の一部であったという視点や検証の過程を示したものも管見の限り皆無である。住居に共伴する遺物、痕跡を把握する際ににおいて「床面直上」という固定概念が、ある種の実行性をもつ認識を束縛している様にも見える。
- 註6 中期末葉から後期の住居のなかには、壁外に柱穴が巡らされるものが散見されるが、これらは床面上の柱穴をもつものがあるから、単に上塗構造との関係は認めにくい。また「周堤礎」の範囲に一致した配列のものもあるので、杭列を連結して周堤の土留めとした可能性が考えられる。神奈川県新戸遺跡第J-4号住居では、柱穴と大形の礎を配したものがある。(『新戸遺跡』神奈川県文化財センター、1990)
- 註7 石材という材質・色調・形状等から、施設としての視覚的な効果をもっていたことも予測できる。

引用・参考文献

- 赤山 容道 1982 「住居 壁穴住居」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 石坂 茂 1985 「荒砥二之堰遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 真一 1982 「修善寺大塔」修善寺町教育委員会
- 金井 安子 1984 「縄文時代の周縁を有する住居について」『青山考古通信』第4号
- 可見 通宏 1986 「敷石住居址を復元する」『東京の遺跡』13
- 小杉 康 1986 「配石遺構に関する問題」利島村大石山遺跡範囲確認調査報告IV 利島村大石山遺跡調査委員会
- 鶴田 良一 1982 「千葉東南部ニュータウン10 小金沢貝塚」千葉県埋蔵文化財センター
- 皆谷 通保 1985 「壁穴住居の型式学的研究」『奈和』23
- 鈴木 保彦 1976 「環濠方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』62-1
- 都築恵美子 1990 「壁穴住居址の系統について—中期後半から後期初頭の住居変遷と時刻的動態—」東京考古
- 戸田 者也 1984 「平台北遺跡発掘調査報告書」玉川文化財研究所
- 村田 文夫 1975 「柄鏡形住居址考」『古代文化』27!
- 村田 文夫 1979 「続柄鏡形住居址考」『考古学ジャーナル』170
- 村田 文夫 1985 「縄文集落」考古学ライブラリー-36 ニューサイエンス社
- 宮下 健司 1990 「敷石住居・祭祀建物の構造と性格」『季刊 考古学』第32号
- 宮本長一郎 1990 「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊 考古学』第32号
- 都築恵美子 1988 「柄鏡形住居址における問題点」『東京の遺跡』No20
- 山本 雄久 1976 「敷石住居址のもつ意味」(付)『古代文化』28-2,3
- 1985 「いわゆる『環濠方形配石遺構』の性格をめぐって」『神奈川考古』20

総 括

今回の池之元遺跡の調査では、縄文時代後期の竪穴住居址や配石遺構とそれらにともなう豊富な生活用具が発見された。いまから約3500年前、富士山の火山活動が活発であった時代に、その裾野ともいえるこの地域に、豊かな生活が営まれた。

その生活址は火山性の堆積物によってパックされたようにして発見され、竪穴住居址の凹地に堆積したそれらの在り方は、火山活動と遺跡の形成が無関係ではないことさえ想像させた。厚く堆積した土層中に確認されたスコリア層は、この縄文後期を前後する時期の火山活動を示唆するとともに、富士山北東麓地域における縄文時代文化の展開と火山活動の関係を示す良好なデータを提供してくれた。

厚い火山灰層にうもれた遺物包含層から出土した遺物は豊富な土器と石器類であり、その主体は後期前葉の堀之内2式期であった。縄文土器の分析研究の主眼とされたこれらの資料は、すでに市内の古屋敷遺跡（早期後半）において実施していた型式学的分析と製作技術論的な分析を運動させる試みを追試し、さらに胎土分析から産地を推定するなど、理化学的手法を積極的に導入した多角的な分析を実施した。

こうした分析から、池之元遺跡の堀之内2式土器は複数の産地からなる散入品から構成されており、さらに主体をしめるのは甲府盆地の西部と東部という結果がもたらされた。この成果は從来の自給自足的な縄文時代の土器の生産と消費という考え方自体に再検討を加える必要性を喚起するとともに、粘土の産出の予測できない火山地帯の縄文遺跡のあり方を考える上で貴重な事例となった。

池之元遺跡では堀之内2式土器に分類された土器の全ての口縁部の器種認定作業から、この時期の器種組成率が明らかにされたことも大きな成果であった。その組成率によるならば精製土器（意匠文系土器）と粗製土器（粗文系土器）の作り分けがみとめられるこの時期において、未だ粗製土器の比率は過半数を越えることがない。いわゆる後期中葉以降に粗製土器が7割近くを占める特徴とはことなる点が興味深い。無文が主体を成す堀之内2式土器の粗製土器の示す地域性の指摘からは、中部高地と共通した特徴をもつ点が指摘され、産地推定と調和的な成果が型式学的な分析から得られた点も重要であろう。さらに土器底部に残された網代痕の分析から、この時期の土器製作の特徴と地域性が論じられたことも、今後の比較検討によってさらに大きな成果に結びつく可能性がある。

いくつかの視点と方法から組み立てられた縄文土器の分析研究は、単に文様や装飾といった土器のもつ外的な特徴のみでは捉えきれない、多くの情報が存在することを我々に教えたし、一片の

土器のもつ情報量の多さに未だ解明され得ない未知の歴史があることさえ感じさせた。しかし今回の分析も堀之内2式土器の未だ体系的な理解には及ばないし、全体の理解のための切り口のひとつでしかあり得ないという、苦い経験といくつかの次へ結びつけるための課題が残されたことになった。

調査後の分析は、発見された遺構や遺物の、それぞれの資料の特性に応じた分析方法が考案された。そしてまた相互の分析成果をもとに池之元遺跡の歴史的な背景やその特性について、現時点での総合的な理解を計画した。しかし、こうした分析を終えてみて、目の前におかれたレポートを検討するにつけ、やはり成果として提出できたことに倍する、なお多くの課題が山積する状況を意識せずにはいられないし、また研究の個別性のみが日立つ結果となってしまったことも事実である。

今はこうした課題を共通のものとして素直に受け止め、さらに将来的な研究の展望につなげる機運と共通の意識を深めることができた、という認識はささやかな成果のひとつといえるかもしれない。

(阿部)

卷末写真図版

- 写真1 堀之内1式文様集成
- 写真2 堀之内2式文様集成
- 写真3 堀之内2式文様集成
- 写真4 堀之内2式文様集成
- 写真5 堀之内2式・加曾利B1式文様集成
- 写真6 素文系深鉢・文様・成形痕集成
- 写真7 素文系深鉢・成形痕集成

写真 I



1 口縁部文様



2 口縁部文様



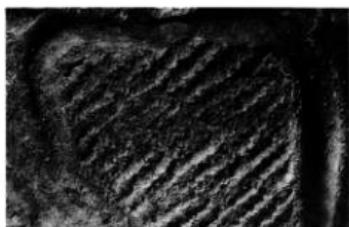
3 口縁部文様



4 口縁部文様（剥落部分）



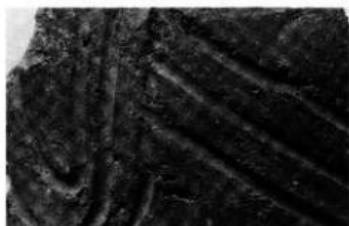
5 口縁部文様



6 胸部文様（先環範文）



7 胸部文様



8 胸部文様

堀之内 I 式文様集成



1 深鉢 A 類口縁部文様



2 深鉢 A 類口縁部文様



3 深鉢 A 類口縁部文様



4 深鉢 A 類口縁部文様



5 深鉢 A 類口縁部文様



6 深鉢 A 類口縁部文様



7 深鉢 A 類口縁部文様



8 深鉢 A 類口縁部文様

堀之内 2式文様集成

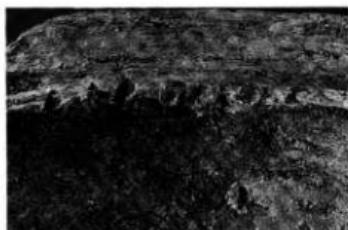
写真 3



1 深鉢 A 類口縁部文様



2 深鉢 A 類口縁部文様



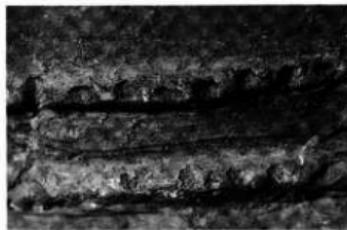
3 深鉢 A 類口縁部文様



4 深鉢 A 類口縁部文様



5 深鉢 A 類口縁部文様



6 深鉢 B 類頸部紐線



7 深鉢 B 類頸部紐線



8 深鉢 B 類頸部紐線



1 深鉢 B 類胴部文様（光塗繩文）



2 深鉢 B 類胴部文様（光塗繩文）



3 深鉢 A 類胴部文様（光塗繩文）



4 深鉢 A 類胴部文様（光塗繩文）



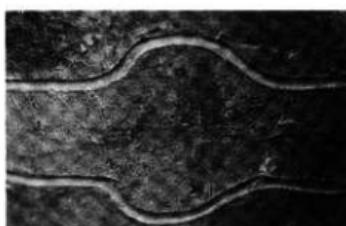
5 注口土器胴部文様（光塗繩文）



6 注口土器胴部文様（光塗繩文）



7 深鉢 A 類胴部文様



8 深鉢 A 類胴部文様

堀之内 2 式文様集成

写真 5



1 深鉢 A 類胴部文様 (加曾利 B 1 式)



2 深鉢 A 類胴部文様



3 深鉢 A 類胴部文様 (充填圓文)



4 素文系土器 (縦文)



5 深鉢 A 類口縁部内文



6 素文系深鉢 (附加条縦文)



7 素文系深鉢 (附加条縦文)



8 素文系深鉢 (附加条縦文)

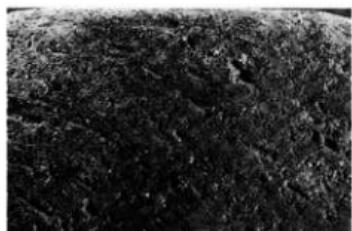
堀之内 2 式・加曾利 B 1 式文様集成



1 素文系深鉢（附加条縦文）



2 素文系深鉢（附加条縦文）



3 素文系深鉢（ケズリ）



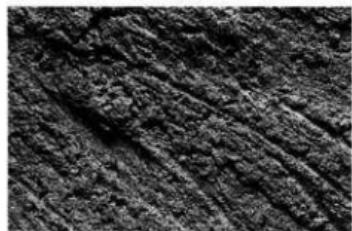
4 素文系深鉢（ケズリ→ナテ）



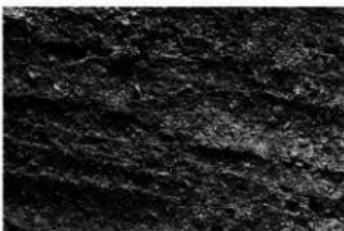
5 素文系深鉢（ナテ）



6 素文系深鉢（ナテ）



7 素文系深鉢（ナテ）



8 素文系深鉢（ナテ）

素文系深鉢・文様・成形痕集成

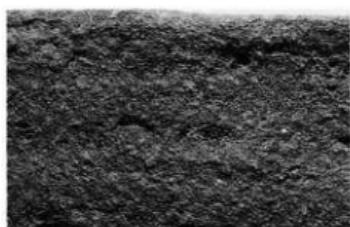
写真 7



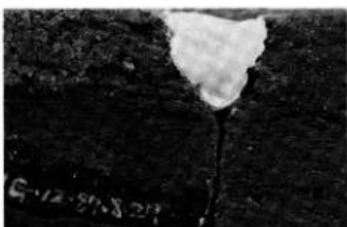
1 素文系深鉢 (ナデ: 口縁外面)



2 素文系深鉢 (ナデ: 口縁内面)



3 素文系深鉢 (ナデ: 口縁外面)



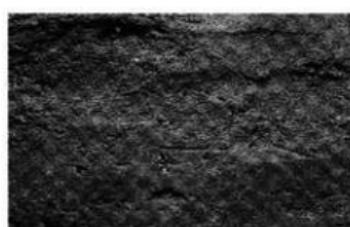
4 素文系深鉢 (ナデ: 口縁内面)



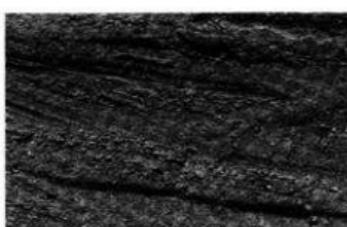
5 素文系深鉢 (ナデ→ミガキ: 口縁内面)



6 深鉢 A 類 (ナデ→ミガキ: 口縁内面)



7 素文系深鉢 (ナデ→ミガキ: 胸部内面)



8 素文系深鉢 (ケズリ→ナデ: 胸部内面)

素文系深鉢・成形痕集成

富士吉田市史資料叢書14
池之元遺跡発掘調査研究報告書

平成9年3月31日 発行

編集 富士吉田市史編さん委員会
発行 富士吉田市教育委員会市史編さん室

〒403 富士吉田市下吉田1904

電話(0555)23-1765

印刷 株式会社きょうせい

